
クロムワイズ物語～アルカディアの光と影～

藤田文人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロムワイズ物語〜アルカディアの光と影〜

【Nコード】

N2216A

【作者名】

藤田文人

【あらすじ】

剣と魔法が支配する世界クロムワイズ。この世界には七つの大陸があり、様々な種族が時には争い、時には共存しながらりそめの平和を維持し続けていた。だが、時は流れ平安の世を飽食し尽くした人類は再びクロムワイズを争いに導く……そのひとつがアルカディア大陸で起こった征服戦争。多くの英雄を生み、古の秘術“魔導”を世に知らしめたこの戦争の影で歴史の闇に葬られた者達がいた。その歴史の裏側を駆け抜けた冒険者達の物語――。

プロローグ

アルカディア大陸。

過去に起きた“魔導大戦”の際にもっとも甚大な被害を受けたこの大陸は、クロムワイズと呼ばれるこの世界でもっとも戦乱の少ない大陸である。

アルカディア大陸には六つの国があるが各国々の国境―地形―が人智を越えた“力”により、あるところは広大な底なしの沼地、あるところは地面が寸断され、またあるところでは険しい山脈に変えられており、そのため大規模な遠征ができなくされ、少数精鋭の奇襲攻撃ぐらいしかできないために戦争が起きる事はなかった。

これは“魔導大戦”で暴走し大陸を支配しようとした魔導士達が国を寸断し国家間での連携をとるのを防ぐために行った狂気の所業によるものだった。

過去、魔法の真理を追求した魔術師達が手に入れた理……それが“魔導”と呼ばれる人智を越えた力だった。

その“魔導”を手にした者達は魔導士と呼ばれ、人々の尊敬と畏怖を受ける存在となる。

魔導士と魔術師では魔法の使用方法がまったく違う。

魔術師は内なる魔力を『想像↓精神制御↓魔力収束↓魔力制御』を呪文詠唱と共にを行い魔法を発動する。

しかし魔導士は『想像↓精神制御↓魔力収束↓魔力制御』を意志力でを行い“魔力を消費しないで”魔法を発動する事ができるという。

つまり、魔術師は呪文詠唱によりある程度決まった事象しか引き起こせないのに対し、魔導士は意志力（発想力）によって無限の可能性を手に入れた。

強力な意志によりそれを実行できる魔導士は、まさに恐怖の存在と

言えたのだ。

“魔導大戦”は、その“魔導”に溺れた一部の魔導士が行った秘術の失敗により、異界の魔王を召喚してしまった事から始まった。そして、自ら招いた災厄を治めようと魔導士達は人智を越えた力“魔導”を使い異界の魔王を倒すが、破壊の意志を持ち続けたために多くの魔導士達が負の思念に支配され、今度は逆に魔導士達がクロムワイズ支配に乗り出したのだ。

その戦いでアルカディア大陸は地形をねじ曲げられ、戦争とは無縁の大陸へとその姿を変えていった。

ちなみに負の思念に支配された魔導士達は、負の思念に屈しなかった魔導士達により倒されたり封じられた。

そして負の思念に屈しなかった魔導士達は“魔導”の力の危険性を重くみて自らを封じてこの地から姿を消していった……。

しかし今、このアルカディア大陸を支配しようとする者が現れた。希代の魔術師ジード・バロム。その類稀な知識と膨大な魔力をもったこの魔術師が、封じられていた魔導士を復活させたのだ。それにより、アルカディア大陸は未曾有の大混乱に陥った。

アルカディア大陸北部にある宗教国家マルク・ケラーノ神聖王国。過去の“魔導大戦”の際、この地で異界の軍勢を迎え討った魔導士達の拠点。

故にこの地には多くの魔導士が封じられていると言われていた。そして――。

魔術師ジード・バロムはこの地で《古の魔導士》が封印された遺跡を発見、その封印を解き契約を持ち掛けた――『クロムワイズを支配し、共に知を極めよう』――と。

本来なら、希代の魔術師と謳われていようと魔術師に過ぎないジード・バロムのこの言葉などに、超越した力を持つ魔導士が耳を傾けるはずはなかった。

だが、復活した《古の魔導士》は“魔導大戦”で負の思念に支配されており、その話に乗ったのだった……。

《古の魔導士》はジード・バロムに魔導の理を授け、自身はその超越した破壊力を実行する。理解の範疇を越えたその破壊現象にマルク・ケラーノ神聖王国は一夜にして滅ぼされ、強力な思念を各国に飛ばしアルカディア支配を宣言した――。

……この事件は、アルカディアを震撼させた。

各国は軍備を整え、自国防衛および魔導士討伐を開始する。

だが“魔導大戦”により地形がねじ曲げられたアルカディアの地では大規模な国外遠征ができない事が災いした上、人智を遙かに越えた“魔導”の力に戦局は絶望的なものとなっていった……。

そして戦いが起きてから三ヶ月が過ぎる頃――《古の魔導士》の超越した魔導力によりアルカディアにある国はことごとく敗戦、ついにはアルカディア中央部にあるノーマンケル王国、南東部に位置する自由都市トルネ・パロが滅ぼされてしまう……。

中央を引き裂く様に侵略された事により残った国々は、連携を取る事ができず《古の魔導士》の脅威に晒された。

この事によりアルカディアの残された国々は自国防衛に専念せざるを得なくなり、ついには各大陸の冒険者ギルドに《魔導士討伐》の依頼を出す事態にまでなった。

……この《魔導士討伐》の依頼により、アルカディア大陸には名を上げようと各地から冒険者が集まり、クロムワイズ史上類のない壮絶な戦いが繰り広げられる事となる――。

長い戦いの始まり

ジータ・バロムが引き起こしたアルカディア征服の戦争は、この大陸に甚大な被害を巻き起こした。

アルカディア大陸東部に位置するローラント王国でも《古の魔導士》による破壊行為で自国防衛すら困難な状況に立たされている。

それでも国がいまだに健在しているのは、アルカディア大陸から東に海を渡って半日ほど離れたところにあるリンデン大陸の援軍や冒険者達の助けがあったためである。

ローラント王国は数年前にリンデン大陸を統一したナム・ラマ聖王国と同盟を結んでいたため、なんとか滅びずに体制を保ち、現在冒険者達の《魔導士討伐》の拠点となっていた……。

ローラント王国南部の港町パール。

《魔導士討伐》により各施設を冒険者達に全面解放されたこの街では、各地から冒険者達が集まり戦いに備えて仲間探しや訓練などに勤しんでいる。

ここ、酒場兼宿屋の“そよ風の吹く丘”亭にも《魔導士討伐》を果たし名を上げようとする冒険者達で賑わっていた。

「——現在“魔導士”はリズレン皇国で皇軍と交戦中、か……よく持ちこたえられてるなあ」

壁に貼られた近況情報を見ながら、戦士風の装備で身を固めた青年は目の前に座る法衣を身にまとった男に視線を向けた。

「——きつとりズレンには魔導に対抗する特殊な力でもあるのです」
「よう」

法衣を身にまとった男は青年の疑問にそう答えるとコップに入った水を口にする。

……魔導士がリズレン皇国を攻め入って一ヶ月近く経っている。

しかし、リズレン皇国はこれまで瞬く間に国を滅ぼしてきた魔導士の超絶的な魔導力にさらされながらも、自国の戦力のみで魔導士の侵略を防いでいた。

リズレン皇国は、クロムワイズにある七大陸の中で唯一リザードマンが治めている国で、アルカディア大陸のどの国よりもその歴史が長い巨大国家であり、クロムワイズ全土を巻き込んだ“魔導大戦”前からアルカディア大陸に存在し続けた千年王国である。

リズレン皇国はリザードマン達の守護神である龍神の教えに従い古来より自国領のみの支配を守り続け、自国への侵略に対してのみその軍事力を行使しない宗教国家の一面もあり、また他国との交流なども極力控え徹底した秘密主義で建国して千年以上経った現在でも多くの謎に包まれている。

「……たしかに“魔導大戦”を乗り切ったあの国なら、魔導士の力に対抗できる手段を持つていてもおかしくないよな……」

青年は納得した様に呟いた。そして料理に手をつけながら男に話しかける。

「……アルベリヒさん、これからどうします？ リズレンに行っても今からじゃ間に合わないし……このままローラントにいた方がいいですかね？」

アルベリヒと呼ばれた男は青年の食べっぷりに頬を弛ませ、食べ終わるまでその健啖ぶりを眺める。

青年に出された料理はみるみるうちに無くなり、最後に水を飲み干して一息ついてから口を開いた。

「……しばらくはここにいた方がいいでしょう。それに噂によれば、アルカディアの勇者ジークフリート・ラークスが冒険者達に呼びかけて討伐軍を結成しようとしているらしいので、ラムダさえ良ければそれに参加してみるのもいいでしょう。私は神に仕えているとはいえ魔法が使えないただの説法家ですし、二人だけではとても魔導士にかないませんからね……」

アルベリヒは青年―ラムダ―にそう言うと周りを指さした。

「——彼等も討伐軍に参加するためにここに留まっていますし、我々も冒険者らしく生存率の高い集団に加わるのが良いかと思います」

ラムダも周りを見渡しアルベリヒの言葉に頷く。

単独で魔導士に挑む愚かさは、滅び去った三つの国の惨状を知っているアルカディアの者からすれば子供でもわかる。

冒険者としては少し思慮に欠ける性格のラムダも、その事は熟知しているつもりだった。

「……じゃあ、そうしましょう——やっぱり俺は考えが短絡的過ぎるなあ……」

照れ笑いをしながらラムダは頭を掻いた。

アルベリヒはそんなラムダを心地よさげに眺める。

「気に病む事はありませんよ？ その真っ直ぐで純粋なところが、貴方の良さですから」

「……そ、そうですか？」

「そうです。さすがは元騎士だと感心させられますよ。今の騎士達の低落ぶりをみれば……ね」

そう言う二人は揃ってため息をついた。

現在のローラントの騎士達は、魔導士の脅威により自国防衛のみに腐心し、本来の義務である民を守る事を放棄した。

その上戦える者を強制的に徴収、なおかつ重い税をかけて魔導士討伐を冒険者達に丸投げしたのだ。よって、ここローラントでは、いまや騎士は尊敬を受ける存在では無くなっている……。

「——アルカディアの勇者ジークフリート・ラークスが立ち上がり、ローラント騎士団はさらにその名を落とすのか……ちょっと複雑だなあ」

ラムダは、冒険者になる前はローラント王国に仕える騎士だった。だが、ジータ・バロムが起こしたアルカディア支配の戦争による混乱に乗じてローラントで反乱が起こり、その鎮圧戦でラムダの所属していた部隊が壊滅、わずかに生き残った騎士達はその敗戦の責任を押し付けられて騎士の称号を剥奪されたのだった。

反乱自体はその後、魔導士の脅威的な破壊力を危惧した両者の代表が和解して収まったが、ラムダ達の汚名を晴らす事はしなかった。それでもラムダは、そんなローラント王国を愛していた。

今は滅んで無くなってしまったが、騎士を廃業した際にノーマンケル王国の騎士団に誘いを受けたがそれを固辞し、この地に留まり冒険者としてローラントの民のために戦い続けている。

騎士を廃業したとはいえ、ラムダは騎士の誇りを無くしてはいない。だから、討伐軍の結成を素直に喜べないでいた。

「……ラムダ」

アルベリヒはラムダの気持ちを察して心を痛めた。

彼にとって騎士達は兄弟みたいな存在である事を失念した事にアルベリヒは心の中で懺悔した。

「……アルベリヒさん、討伐軍に参加しましょう。心苦しいけど騎士団はあてにできないし、俺だけではアルベリヒさんを守り切る事はできませんから。それにアルカディアの勇者が討伐軍を結成すれば、意外に早く魔導士と戦う事になるかもしれないですね……」

ラムダはそう言うたさっそく装備を整えて出発の準備をする。

ここは冒険者達に解放された酒場ゆえ武器・防具の類をテーブルに出しても咎められる事はない。

剣を腰に吊し盾を立てかける。そして兜を手に持つと席を立った。

「アルベリヒさん、善は急げです。勇者のいる屋敷へ行きましょう！」

ラムダの勢いに圧され、アルベリヒは苦笑しながら静かに席を立った。そして彼の後に続いて酒場を出て行く……。

かりそめの平和を維持しているローラント王国。

そこにアルカディアの勇者ジークフリート・ラークスの魔導士討伐軍が結成されようとしている。

魔導士を刺激するこの動きに、ローラント王国は民の信頼を失い、さらに国の存亡に関わる災厄に見舞われる事となる……。

討伐軍、結成

アルカディアの勇者ジークフリート・ラークスの滞在している屋敷は、ローラント王国の首都マドラの郊外にあった。

ジークフリートによる魔導士討伐軍結成の噂はローラントの国王にも伝わっており、実を言えばあまり面白く思っていなかった。

しかし民の手前、公に妨害するわけにもいかない上にジークフリートは“アルカディアの勇者”の称号の名に恥じぬ強さを誇っていたので、その行動をただ傍観するしかなかったりする。

ローラントの民はジークフリートを真の英雄と崇め、全面的な支援をし、冒険者達もまた勇者の元に集まれば得する事を知っているの
で、ジークフリートの滞在する屋敷には多くの冒険者で賑わいを見せていた。

ラムダとアルベリヒの二人は、首都マドラに入り冒険者ギルドに顔出しして魔導士の情報を得てからジークフリートのいる屋敷へと向かった。

「——ジークフリートは、リンデンの剣匠“舞姫”の編み出した超絶剣技《神速剣》の使い手だそうです……現在、魔導士を倒すのは彼だと言われていますね……」

息を切らせながら、アルベリヒはそのジークフリートの屋敷に着くまでにラムダにアルカディアの勇者に関する情報を伝える。

これから勇者の下で戦う以上、その素性くらいは知っておかなければ何かと不便になると考えたためである。

ラムダはアルベリヒの言葉に頷きながら、重装備にも関わらず早足で歩き続ける。

その早さは法衣のみのアルベリヒでさえ疲労するほどだった。

「……ラムダ、もう少しスピードをゆるめて下さい……さすがに、

疲れますよ……」

アルベリヒはこれまで我慢してラムダの後について歩いていたが、その差が広がったのでついに根をあげた。

「……あ、す、すいません！ ついに浮き足立ってしまいました……」

ラムダは振り返ると、息を切らしているアルベリヒを見て驚き、何度も頭を下げた。

「……大丈夫ですか？ なんなら屋敷までおぶって行きます！ 俺としたことが……アルベリヒさんは冒険者じゃないのに……本当にすいません！」

ラムダはすまなそうに何度も頭を下げるとアルベリヒに近づき、背を向けたと思うとアルベリヒの体を引き寄せて背負いだした。

「——え？」

その行動の早さにアルベリヒはあっさりとラムダの背中に背負われる。そしてラムダは先ほどと変わらないスピードで再び歩き出した……。

「——ラムダ、ちょっと恥ずかしいですよ……降ろして下さい」

背負われたアルベリヒは困惑の表情でラムダに抗議する。

「何言ってるんですか？ 遠慮せずにしっかり捕まっけて下さい」

ラムダはその抗議に耳を貸さずそのまま歩き続ける。

アルベリヒはすれ違う人達の好奇の目に晒されながらラムダの背中で天を仰いだ。

（……遠慮じゃないんですよ……）

アルベリヒの気持ちを知らず、ラムダは意気揚々と鼻歌まで披露しながら目的の場所まで歩き切った。

——ローラント王国の首都マドラ郊外の集落に辿り着いたラムダとアルベリヒ。

人ひとり背負ってかなりの距離を歩いたのにも関わらず、ラムダは平然とした態度で多くの冒険者達の姿に興奮していた。
アルベリヒはその人並み外れた体力に半ば呆れていた。

「……ラムダ……今度からは、背負うのは無しにして下さいね……」
アルベリヒは道中、何度も道行く人達の好奇の目に晒された事を思い出しては苦笑する。

（……あんな恥ずかしい思いをするくらいなら、疲れを我慢しての方がまだマシです……）

これを機に少し体力をつけなければ……。アルベリヒは真剣に体を鍛える事を考えた。

ジークフリートの滞在する屋敷はすぐに見つかった。

周囲にそれに見合う建物がなかった事、冒険者達が皆同じ場所を目指していた事から二人は迷う事無く屋敷に辿り着く。

「――面会はお断りだよ」

門番は二人を見るなりそう切り出した。

「明日の夜、広場で討伐軍結成の集会があるから、それまで勇者様には誰も近づけない様に命令されているんだよ」

門番は二人にそう言うと言った手にした槍をトントンと地面に叩き立ち去る様に促した。

「わかった。明日、広場に行けばいいんだね？　ありがとう、門番の任務頑張ってくれ」

ラムダは門番に頭を下げて屋敷に背を向けた。

「……この人の数じゃあ、宿は取れそうもないですね？　アルベリヒさんは、野宿でも大丈夫ですか？　もしなんでしたら、マドラに戻っても構いませんが？」

歩きながらラムダは今後の行動を思案する。アルベリヒは首を振ると静かに答えた。

「私は野宿でも平気です。それにまた背負われたりしたら、今度こそ恥ずかしくて死んでしまいますよ……」

苦笑しながら冗談混じりでそう答えて手を合わせる。

ラムダはその言葉の意味がわからず不思議そうに神父の顔を見ると、立ち並ぶ屋台に目を向けお腹を押さえた。

「アルベリヒさん、腹がへったんで、食事でもしませんか？」

「……そうですね。ラムダは私を背負って歩き続けたんですし、少し休みましょうか」

二人は適度に空いた屋台に向かい、早めの夕食をとる事にした……。

街と呼ぶには小さく、村と呼ぶには大きなこの土地は、名も無き集落として存在している。

店も少ないために急遽商人達が集い賑わいを見せてはいるが、実のところこの土地は難民用に開拓された簡易的な集落のため基本的に何も無い。

昔から住んでいる者―主に貴族―達の別荘や首都に移住できなかった者などの家があるだけで、宿屋は小さなものが二件あるだけだった。

食事を終えたラムダとアルベリヒの二人は、適当な場所を見つけると荷袋から毛布とマントを取り出して、毛布を地面に敷いてマントを羽織る。

季節は真夏の盛り。

それでも夜になれば多少は冷える。

ましてや地面にそのまま寝ようものなら体温を奪われ、体調を崩す事は間違いない。

この手の旅の知識、一日だけなら、と軽くみる者達が意外に多い……それは、国境が分断され長旅をする冒険者―アルカディアには元々その数が少ない―が減ったためだ。

アルベリヒは布教のためアルカディアの各地を旅してまわった経験から、こういった基本知識を身をもって学び、何も知らないラムダに教えていた。

「夏なのに防寒対策……野宿するのも楽ではないんですね……」

アルベリヒの指示に従い着々と野宿の準備をするラムダ。

彼は元騎士故に野宿の経験など無い。

以前、反乱の鎮圧戦で野営した事があったが、その時は騎士の元に

つく従者達がその準備をするため、簡単に野宿といっても意外に気をつけねばならない注意点が多い事に旅の厳しさを知った。

眠るにはまだ少し時間が早い。だが、娯楽施設が整っているわけでもなく……いや、そもそも二人は娯楽などを興じるだけの路銀はもって来ていない。

二人は薪を集め、小さな焚き火を起こすとマントを羽織ったまま、夜空に散らばる星を眺めて疲れを癒した。

これが束の間の休息である事を二人共知っていたので、眠るまでの時間お互い何も語らず、それぞれに思いを巡らせていた……。

明くる日――。

さらに冒険者達は集まり、夕方になる頃には広場は人で埋まっていた。

皆、討伐軍の結成を今か今かと待ちわびている。

これまでの歴史上、クロムウィズでは冒険者達が自由軍を結成した時、その戦いは常に勝利に終わっていたので、集まった冒険者達の顔はそれぞれに勝利を確信し未来への希望に満ちていた。

……予想以上の集まりに討伐軍結成の集会は予定を早めて行われる事となった。

広場の中央に設置された特設の台の上に精悍な顔つきの青年が立つと、広場に集まった者達の歓声が響き渡った。

「――わざわざこの地へ足を運んでいただき、誠に感謝する！ この混乱に満ちたアルカディアを救おうと集まった勇者達よ！ あなた達の勇気がきつとこの混乱を鎮めるだろう！ 共に邪悪なる魔導士を打ち倒し、再び平和なアルカディアを取り戻そうではないか！」
青年――アルカディアの勇者――の声は広場中埋まった冒険者達の心に響いた。

「――我々は無力ではない！ 戦う術を持った冒険者だ！ いかにか古の力を持った魔導士といえども、不死の存在ではない！ 剣で斬られれば必ず死ぬ！ 力に惑わされるな！ 対峙すれば必ず倒せる

！ 自信をもって戦いに臨んでほしい！」

勇者は拳を振り上げ、熱のこもった演説を繰り広げた。その内容はお世辞にもうまいとは言えなかったが、聞く者の心に訴えかける情熱に満ちている。

その演説を聞いたラムダとアルベリヒも、勇者の言葉に魂が熱くなるものを感じていた……。

——こうして、アルカディア史上歴史に残るであろう魔導士に対する二度目の拳兵は、冷めやらぬ興奮の中幕を開けた。

そして、超絶的な“力”を持つ魔導士を倒すべく討伐軍は組織化され、いくつかの部隊を組んでアルカディア各地に派遣する事になった。この動きはアルカディアは元より、クロムワイズ全土に大きな影響を与える事となる。

特にすぐ近くにあるリンデン大陸の対応は顕著で、討伐軍に対して無償の各種援助を宣言、さらに冒険者達で構成された義勇軍の派遣を決定した。

……今、風向きは変わろうとしている——。

北方探索隊

“アルカディアの勇者” ジークフリート・ラークス率いる魔導士討伐軍。

この冒険者集団の自由軍の結成により、これまで各地で暴威を奮っていた魔導士の動きが止まった。

アルカディアの人々はそれをジークフリートの威光の賜物だと喜び、誰もが早期解決を夢見る様になっていた……。

魔導士討伐軍に参加したラムダとアルベリヒは、いくつかに分けられた部隊に組み込まれ、さっそく出発の準備に取り掛かっている。

北方探索隊——それがラムダ達が所属した部隊である。

北方探索隊はマルク・ケラーノ神聖王国での偵察を兼ねた部隊で、魔術師ジダ・バロムと復活した魔導士が拠点としているという噂もある非常に危険な場所で探索するという無謀ともいえる任務が与えられていた。

冒険者達もさすがにこの部隊に入るのを敬遠していたが、考えなしに参加を決めたラムダの独断により、数ある部隊の中で一番過酷な任務を遂行する事になった。

北方探索隊のメンバーは六人いる。

隊長が魔法剣の使い手マーク、戦士のフォート、魔術師のリッシュ、僧侶のダーバにラムダとアルベリヒ。

いずれも名のある冒険者ではなかったが、それでも任務に対する情熱だけは他の部隊に負けず劣らずの勇氣ある者達である。

一行は準備を終えるとローラント王国とマルク・ケラーノ神聖王国の国境に位置する小さな村へと旅立って行った……。

未確認情報ではあるが、国が滅びたとはいえずすべてが破壊されたわけではなく、王都スノーバード以外は比較的その被害から免れていると言われている。

よって北方探索隊は、その真偽の確認とジード・バロムや魔導士の情報を入手するのが任務と言えよう。

——国境の村・サラム。

今や無人の村と化したこの地に着いた一行は、皆が泊まれる広さをもつ村長の家で明日の国境越えに備えて体を休めていた……。

「——この村から国境を越えるには、“魔物の巣”と言われている森を通らねばならない。だが魔導士が復活して以来、魔物が出現したという目撃情報はないと退去した村人達は口を揃えて言っている……」

北方探索隊の隊長マークは、出発前に入手していた情報の確認をする。皆、危険な旅である事を知っているので真剣な表情でマークの話に耳を傾けていた。

ラムダは鎧の手入れをしながらマークの話を反芻する。

他の者達も各々自分の装備の点検を怠らない。

「……問題は、森を抜けてから目的地まで身を隠せるものが無くなるという点だ。考えたくはないが、難民の数が少ない事からマーク「ケラー」は完全にジード・バロム達の支配化にあると見て間違いないだろうな」

それは、マーク「ケラー」に潜入してからの探索が非常に困難である事を意味している。

つまり生きて帰れる可能性がかなり低い、と。

それでも皆、覚悟の上で討伐軍に参加していたので、今さら潜入を迷う者はいなかった。

しかし、先の事で行き詰まり沈みそうな雰囲気が出始めに漂いはじめる……。

そんな雰囲気を出拭すべく、道中無言を貫いてきたアルベリヒが口を開いた。

「——そう悲観的にならなくてもいいと思います……あくまで噂ですけど、滅ぼされる前に城を離れていたアル王女がマーク「ケラー」に潜伏しているといえます。彼女は武芸に秀でた上に魔法にもか

なり精通したお人だとか……しかも私設の部隊を引き連れていると
いますから、運が良ければ共に行動できるかもしれません。かの
地に詳しいアルル王女の行方を探してみた方が生存の確率が上がる
のではないでしょうか？」

その言葉に皆、一斉にアルベリヒの方に視線を向ける。

「……我々はかの地に詳しくありません。その状態で闇雲に進んで
も任務を達成する事はおろか、下手をすれば無駄死になってしま
うでしょう。遠回りになる上に遭遇する確率もかなり低いでしょう
が、まずは王女が潜伏してそんな場所を目指してみてはどうでしょ
う？」

皆、アルベリヒの提案に感心して頷いた。

ラムダにいたっては驚きの表情のまま固まっている。

「それでいこう。あんた、なかなか頭が回るじゃないか。それにア
ルル王女の噂は俺も聞いていたが、私兵をもった武闘派とは知らな
かったよ。よくそんな情報を仕入れられたな？ 感心するぜ」

マークはアルベリヒの肩に手を乗せてポンポンと軽く叩くとその提
案を受け入れた。

「——どうやら、彼がこの中で一番マルク・ケラーノに詳しいとみ
た。そこで、今後は彼の意見を考慮して行動しようと思う。皆、そ
れで良いかな？」

マークはそう言って皆の顔を見回す。彼は隊長としての体裁より、
全員の生存率を考え自分よりも情報をもっていると思われるアルベ
リヒに今後の行動の決定権を与える旨を伝えた。

その姿勢に皆、賛同する。

「……では、今後はそうするのでよろしく頼む。明日からは“魔物
の森”を抜けてマルク・ケラーノへ潜入する。各自、装備の点検を
終えたら今夜は早めに寝よう……」

マークはそう言って横になった。

皆、装備の点検はほぼ終えていたので、それぞれの場所に横になっ
て体を休めはじめる。

そんな中、ラムダは外に出て行く。アルベリヒもそれに続いた……。

ここはもうアルカディア大陸の北部にあたる。

よって夜は冷える。外に出たラムダは身を震わせながら手頃な石に座った。

「……不安ですか？」

後ろから来たアルベリヒが声を掛けた。ラムダは振り返り首を振る。

「——不安はあまり感じないです。俺は目先の事だけで手一杯ですから……」

そう言つて空を見上げるラムダ。

空気が澄んでいるせいか、手を伸ばせば空に散らばる星達がつかめそうな気がした。

「アルベリヒさん……何故、身を守る術が無いのに、この探索隊に参加したんです？ 無理に俺に合わせる必要なんて……なかったんじゃないですか？」

ラムダは申し訳なさそうな表情でアルベリヒの方を向く。

「何を言ってるんですか……ラムダが気に病む事なんてありませんよ。今のアルカディアはどこへ行っても危険です。それならラムダと一緒にいた方が安全ですよ」

アルベリヒは微笑みを返す。その言葉にラムダは頷き、星の瞬きを眺めた。

「……不謹慎かもしれませんが……俺、私情でこの探索に参加したんです。あの国に一人、知り合いがいます……」

アルベリヒは黙ってラムダの話を聞いた。

彼の言いたい事はわかる。

おそらく自らの私情で仲間を危険な旅につき合わせた事が心に引っかかっているのだろう。

「……目的があつていいではありませんか。どうせ危険を冒すなら、目的があつた方が生きる希望が出て良いと思います。ちなみに、その方は騎士の方ですか？」

アルベリヒは優しい笑みを浮かべながらラムダの顔を見た。ラムダは静かに頷く。

「騎士ではなかったと思いますが、剣の腕はかなり持ち主です。あの腕なら、もしかしたら生きているかもしれない……そう思うとその生死を確かめたくありません」

ラムダはまっすぐな目でアルベリヒの顔を見つめ返した。

「……もし彼女が見つかれば、頼もしい味方になってくれるでしょう。あの人なら、きっとアルカディアのために力を貸してくれると思います」

ラムダは力強く語る。その確信めいた言葉にアルベリヒは疑問を感じた。

「……彼女？ その人はマルク・ケラーノでも有名な剣士なのですか？ あの国で有名な女剣士などいなかったはずですが……」

アルカディアでもその名を知られた女剣士は、マルク・ケラーノの王女“魔法剣士”アルルとグランディノ帝国の“黒き烈風”シーレンの二人しかいない。

隠れた人材がいるともいうのだろうか？

アルベリヒの知る限りでは他の名は浮かんでこなかった。

「……興味深いですね。私の耳に入らない凄腕の女剣士……」

布教活動でアルカディア全土を旅してまわったアルベリヒは、その博識に強い自信を持っていた。

全土で知られてなくとも、各地にいる有名人なら地域限定の者でもすべて把握していると自負していただけに、アルベリヒはその人物に興味を覚える。

「ラムダ、その人の名前はなんというんです？」

「……彼女ですか？ 彼女の名は、リーファといいます。三年前にノーマンケル王国に使者の任で行った時に知り合いました。俺と同じ年です」

アルベリヒは記憶の底に眠る知識を掘り起こす。

だが、ラムダと同じ年で思い当たる人物は浮かんでこなかった。

「……リーファ……聞いた事ありませんね……」

かすかな屈辱感を味わうアルベリヒ。

やはり寸断された土地アルカディアには自分の知り得ないものがたくさんある事を再認識する。

「……アルベリヒさん、これ以上外にしていると体が冷えます。もう戻りましょう……」

熟考しはじめたアルベリヒを見て、ラムダは話を切り上げる事にした。

「言葉ではうまく伝えられません。きっと彼女に会えると思います。明日に備えて寝ましょう」

ラムダは腕を組み思案に耽るアルベリヒの腕を引っ張り、皆のいる村長の家に戻っていった。

……寒さが身に染みる北の大地。

過酷な運命に向けて、時間はゆっくりと流れていく――。

魔物の森

——森の中は、鬱蒼としていた。

生き物の気配などはまったく感じられず、生い茂る木々に住まう精霊達も身を潜めている。

それなのに、血の匂いや肉の腐臭が遠くの方から漂ってきていた。

ローラントの“魔物の森”は冒険者達の間でも有名な危険地域なのに、それらしき危険に遭遇するどころか、死に絶えた土地に足を踏み入れたかの様な静けさに包まれている。

魔導士の仕業か？

侵入者に対するジード・バロムの罠か？

あくまで噂だが、マルク・ケラーノはジード・バロム達の拠点といわれている。

歩きながら最悪の事態を想定する一行。

北方探索隊の誰もが危険を予期し、その行軍の歩みは次第に遅くなっている……。

昔は“魔物の森”しか北へ抜ける道がなかったために、森の中はいくらも整備されている。

だが、今となっては冒険者くらいしか足を踏み入れないので、大型の獣が通れる程の道と化していた。

先頭を歩くマークとラムダの二人が剣先で目の前の草木をかき分けて道を作り、辺りを警戒しながら進んでゆく。

「……静かですね？ この静けさが、逆に危険の様な気がします……」

……

後方を歩くアルベリヒは、重苦しい雰囲気の中で土気が下がってゆくを感じていた。

特に魔術師のリッシュと僧侶のダーバの二人は、精霊達の“気”を

感知できるだけに精神的な負担が大きく、その歩みはどうしても重くなっていく。

森に入ってから、目に見えない緊張を強いられているせいで皆、普段よりも疲労の度合いが増している。

これなら何かしらの奇襲を受け、戦っていた方がまだ状況は良いかもしれない。

そう思ってしまう程、今の一行の士気は低下していた。

「……皆さん。もしかしたら、今の状況が罠なのかもしれません。精神的に疲弊させてからの奇襲——これほど戦いにくい状況はありません。ここはひとつ、一度休憩を挟みこの精神状態を変えましょう……」

アルベリヒはこの状態の危険性を訴え、休憩する様に促す。皆、アルベリヒの方を向くと静かに頷く。

そんな中、唯一足取りの軽いラムダが口を開いた。

「……心配がない、って事は敵もいないって事でしょう？　あまり悲観的に考えないで行った方がいいと思います。この先、今の様な状況が続くかと思えますし、今のうちに慣れておきましょう」

そう言つて笑顔を見せるラムダ。その緊張感の感じられない表情に、一行は驚きとともにその胆力に思わず破顔する。

「——ラムダ、といったか？　この状況でよく笑えるもんだ。若いのにたいしたものだな」

これまで無言で歩いてきた戦士のフォートがラムダに笑いかけてきた。

フォートは中年の戦士で、頬に刃物による切り傷があった。

身にまとった鎧にも傷跡が無数にあり、見るからに歴戦の戦士である事が見て取れた。

「だがラムダの言う事はもつともだ。この状態で奇襲など受けたら、ひとたまりもないだろう。それに思ったんだが、敵は我々よりもはるかに強い力を持っている。それなのにわざわざ小細工を使う必要もないのではないか？　何せ、一夜にして一国を攻め滅ぼしたんだ。

もし我々の存在に気付いたとしても、直接叩きに来れば済むだろう。ここはアルベリヒとラムダの言う通りにしようじゃないか……」
フォートはラムダの頭に手を置き、髪をくしゃくしゃにして先頭に立った。

「そうだな。少し考え過ぎかもしれない。休める場所を見つけて休憩しよう」

マークもそう言うのとフォートの隣に来て道を作る。

(……とりあえず最悪の状況は免れましたね……)

アルベリヒは内心ホツと息をつくと黙って一行についていく。

旅はまだ始まったばかりだ。

見えない不安に無駄な神経を使っている余裕などない。

一行は適当な場所を見つけると腰を下ろし、消耗した体力と精神力の回復に努めた……。

——“魔物の森”を抜けた先に広がる草原。

そこにある街道から“魔物の森”へ向かう複数の者達が見えた。

皆、憔悴しきった表情で森を目指し歩く。

それぞれの鎧は泥や返り血であろろ血痕で元の色がわからない状態になっている。

おそらく戦闘があつたのだろう。皆戦士のように全員抜き身の剣を杖代わりにしていた。

「——皆の者、もうすぐ“魔物の森”だ。あそこに入れば、追っ手も諦めるだろう。森に入ったら治療するから、もう少しだけ我慢してくれ……」

先頭を歩く女が後ろを振り返り櫛を飛ばす。彼女の顔は返り血で染まっている。鎧や剣も血で真っ赤に染まっていて、まるで神話などに出てくる残忍な戦神のようだった。

「……皆、すまない……私の剣が及ばぬせいで、いらぬ傷を増やしてしまった。それにあの時、魔導士を倒せたら……国も民も守れたのに。本当にすまない……」

女は頭を下げると再び前を向いて歩きだした。

血で見えにくいのが、彼女の鎧にはマルク・ケラーノの紋章が刻まれている。

「……アルル様……」

後ろを歩く戦士達は、そんな女の苦痛を読みとり返す言葉を失う……。

——彼等はマルク・ケラーノの宮殿騎士団の生き残りである。

魔導士の襲撃の際、彼等は首都を離れていたため難を逃れ、王女アルルと共に一度は魔導士を倒しに王城へ乗り込んだものの超絶的な魔導力の前に返り討ちに遭い、命からがら首都から逃れて来たのだ。その戦いで王女の下に集結した何十人もの騎士達が命を失い、わずかに生き残った騎士達は王女に付き従いローラント王国へ向かう途中だった。

彼等は魔導士の圧倒的な力の前に一度は生きる事を諦めた。

しかし、そんな彼等にアルルは叱咤激励し生きる希望を与えていた。彼等はローラントの騎士達とは違い、国を想い民の苦しみを理解できる高潔な精神の持ち主であり、気丈に振る舞う王女アルルの勇氣に応えようと恐怖を乗り越え苦難の道を選んだのだった。

アルルを危険視したジータ・バロムに追っ手を差し向けられ、ここに来るまでの道のりは決してたやすいものではなかったが、森を目前にしていくらか緊張がほぐれた頃合いを見計らって謝罪する王女の気遣いが彼等の苦勞を和らげてくれた……。

騎士達は王女の後ろ姿をただ見つめた。

言葉は無くとも雰囲気で察してくれる。

そう思うと騎士達は疲れた体にむち打って黙々と歩き続けた。

しばらく歩くと目の前に森が見えた。

マルク・ケラーノとローラントを跨るこの森を越えれば、とりあえず安全だけは保障される。

騎士達の表情は自然と明るくなっていった。

——その時、どこからともなく声が聞こえてきた。

「……やはり、ここに来ましたか」

森の中から碧色のローブを身にまとった者が現れた。深々とフードを被っていてその表情は見えないが、少なくとも味方ではなさそうだった。

「……愚かな抵抗はやめなさい。おとなしく投降すれば、命だけは助けてあげてもいいですよ？ あ、王女以外の方には死んでもらいますけどね」

そう言うのとゆつくりと近付いて来た。

近づくにつれて禍々しいオーラが強くなる。

「——貴様、悪魔だな!？」

アルルは剣を構えると地を蹴った。それを合図に騎士達もアルルの後に続く。

「……やれやれ、この私を悪魔だなんて、ひどい言いばかりですね

……」

振り下ろされたアルルの渾身の一撃を素手で受け止めた。

「——くっ!」

剣を握られたアルルは、すかさず脇腹めがけて蹴りを入れる。

ダメージはたいしたものではなかったが、剣を放した隙に後ろに跳び退く。続けて騎士達の剣が襲いかかる。

「……言っておきますが、私は強いですよ」

そう言った瞬間、騎士達の目の前から姿を消した。

「——ぐわっ!」

「——うっ!」

騎士達は次々と倒れていく。

その鎧には大きな穴が開いており、それが致命傷になっていた。姿を消した敵に戸惑うアルルと騎士達。

「——ぐわあああつつつ!!」

また一人、胸板を貫かれて絶命する。

「——王女アルル、力の差はわかったでしょう？ この私、リゾットに投降しなさい」

アルルの真後ろに現れ肩に手を乗せ、耳元に顔を近付けると小さく囁いた。そして軽く息を吹きかける。

その瞬間、アルルの背筋に寒気が走った。

「……汚らわしい！ 私の体に触るな！」

アルルは振り向き様にリゾットの顔面に肘打ちする。

しかし、それを避けようとしなかった。

アルルの肘打ちをまともに受け、フードが取れて顔が露わになる。

「！！！！！」

リゾットの顔を見た途端、アルルの顔は驚愕の表情に変わる。

驚きのあまり声も出せず、半ば放心状態でリゾットの顔を見つめた。

「……お、お前は……フィリップじゃないか！ 生きていたのか！

？ ……な、何故……敵に寝返ったのか！？」

アルルは絞り出す様にリゾットに問いかけた。しかし、リゾットは冷めた目でアルルを一瞥すると騎士達の方に向き直った。

手をかざし、魔力を収束させる。

凝縮された魔力が強い光と化してゆく。そして、その魔法弾を騎士達に投げつけた……。

——光が弾け、アルルは一瞬視界を奪われた。

目が慣れて見えてくると、騎士達の姿が消えて無くなっている事に気付く。

「……な、なんて事……」

アルルは唇を噛みしめリゾットを睨み付ける。

凝縮した魔法弾によって騎士達は消えてしまった。残るはアルルのみ。

「……無駄な抵抗はやめなさい。それとも、一人で私と戦いますか？」

リゾットはゆつくりとアルルに近付く。

アルルは右手に剣を構え、左手に魔力を集中する。

「……私は最後まで戦う！ 仲間の仇を討たずして、のうのうと生きていられるものか！」

アルルは近づくリゾットから距離を置き、魔力が収束した左手を剣に添える。すると、剣に魔力が宿り光を発した。光の剣と化したアルルの剣がリゾットに向けられる。

「——フィリップ・ランダース！ マルク・ケラーノ宮殿騎士団の長たるお前が、何故敵に寝返ったのかはもはや問わない！ お前はこのアルル・フォン・ナリス・ケラーノが、聖剣エスペランサーの名にかけて斬る！」

アルルの気合いが剣に伝わり、光の強さが増していく。

目映い光を発した剣を握るアルルの体にも光のオーラが発せられる。

「……困った王女様だ。私はもうフィリップではない。偉大なる魔術師ジード・バロム様の配下リゾットだ。愚かな姫よ、やはり貴女は死を選ぶのだな……」

リゾットは両手をかざし魔力を収束させる。

やがて二人は光で覆われた。

そして、光と化した二人が激突した――。

……その激突の余波は、休憩中の北方探索隊のところまで影響を及ぼしていた。

木々は揺れ、精霊達は怯える。闘気と殺気が気配無き静寂にさざ波を立てた。

——森の向こうで何かが起きている。

北方探索隊の全員は立ち上がると、一斉に現場へと走り出した……。

開かれた運命の扉

——ラムダは全力で森の中を駆け抜けた。

そのスピードは他の者を圧倒しており、その差はみるみると広がっていく。

アルベリヒや魔法系の二人はもとより、戦士であるマークやフォー
トでさえラムダのスピードについていく事ができなかった。

ラムダは走りながら妙な胸騒ぎを感じていた。

その事がよりラムダを急がせる。

剣を抜き、盾を構えた状態で全速力で森を抜けていった……。

——光が爆発し、地響きが起こる。

二人の一撃が交差した場所には、大きな穴が開きその衝撃の凄まじさを物語っていた。

光が消え、アルルとリゾットの二人は間合いを取っては再び構える。

……見ると、アルルの鎧が無くなっていた。

衝撃により鎧の留め金が弾け飛んだためである。

少し離れたところにその壊れた鎧が落ちている。

アルルの上半身は胸部に取り付けられた急所止めだけになっている。

小手も吹き飛び、すね当ても留め金が外れていた。

アルルはすね当てを外す。

胸部の急所止めの具合を確かめ、それも外す。

もはや防具は意味を為さない。アルルは次の攻撃を先に当てようと身を軽くする。

アルルの剣に光が灯り、ひとつ深い息をつく。

「……おや？ まだ戦うつもりですか？」

リゾットは余裕の表情でアルルに話しかけた。

「……下らぬ誇りなど捨てなさい。そうすれば、私の様に素敵な力

を授けられますよ……」

リゾットはそう言うのと両手に魔力を収束させる。

「……わかりますか？ 私は呪文詠唱なしに魔法が放てるのです。人の身にして悪魔の力を宿した私に死角などありません。無駄な抵抗は止めて、おとなしく降参しなさい」

そして、さらに魔力を収束させ圧縮する。

当たれば、ひとたまりもないだろう。

それでもアルルは構えを解かず、リゾットを睨み付けた。

「……防具も無く、あるのはその剣のみ……もはや貴女に残された道はひとつしかないのですよ」

「……ずいぶんとお喋りだな？ 勝負は、最後までわからぬものだぞ」

アルルは腰を落とし剣を水平に寝かせる。剣先をリゾットに向けて突きの体勢になる。両手で柄をしっかりと握りしめ、剣に闘気を送り込んだ。

刀身の光が強くなる。

アルルの血で汚れた顔が光に照らされる。

アルルの双眸に力が宿り、射抜く様な鋭い眼光をリゾットに浴びせた。

（……迷うな。

狙いは胴体、貫いたら気を送り込み妖気を遮断する……それで奴は倒せる）

悪魔の力を持っても、肉体は人間のままならそれで倒せる。

アルルは自分の腕ならそれができると言い聞かせた。

リゾットはゆっくりと間合いを詰めてアルルの攻撃を待つ。

後から仕掛けても十分だ。それだけ戦力に差がある。

どのようにいたぶろうか。

アルルの苦悶の表情や絶望に浸る様子を思い浮かべると、リゾットは内に潜む歪んだ感情を剥き出しにした。

その目は狂気に満ちていく――。

その目を見てアルルはリゾットが力に支配されている事を感じた。

「——その魂、私が救ってやる……いくぞ！」

アルルはリゾットに真っ向から突っ込んでいく！

それは、防御も何もない突撃。

これがマルク・ケラーノ、いや、アルカディアで名を馳せた者の戦い方なのか？

リゾットは軽い失望を覚え、それならせめて、いたぶる事で狂気を満たそうとアルルに向かって両手を突き出した。

アルルの突きがリゾットの胴体に突き刺さる直前——両手に圧縮された魔法弾が至近距離から放たれる。

避けようもない一撃が、アルルに襲いかかった……。

全力で森を駆けるラムダ。

だが、出口はまだまだ先のようだ。

それでも森の向こう側で何が起こっているのが気になり、ラムダはその速度をゆるめようとはしなかった。

(……胸騒ぎがする……)

ラムダは心の内に潜む“何か”に急かされるのを強く感じていた。

……仲間とはだいたい距離がついてしまい、辿り着いた先に何が待ち受けるのかわからない不安を感じながらもラムダはわき目も逸らさずただ走り続ける。

元来、先の先を読む思慮深さとは無縁の彼にとって、今は自分の身よりも胸騒ぎの原因を知る事の方が重要に思えたのだ。
なる様になる。

そんな成り行きまかせの行動に、後からきつとアルベリヒの小言がくるな、などと思いつつ自分の直感を信じる事にした。

——走るラムダの少し先に、突如光が現れた。突然の事だったがラムダは立ち止まり、剣と盾を構えて警戒する。

(……そう言えばここは“魔物の森”だったな)

ラムダは目の前の光を見つめながら戦闘体勢に入る。

…… 光は人の形に集束していく。ラムダはそれを注意深く見て攻撃の構えを取った。

光が完全に人の形になると、弾ける様に霧散していった。そして、その場に“人”が現れる。

（…… 何者だ？）

現れたのは、純白のローブを身にまとった女性だった。

その身から発せられる神々しいオーラはとても魔物には思えない。

そう感じたラムダは警戒を解き、剣と盾を下ろした。

「…… あなたにお願いがあつて来ました……」

女性はラムダの目をまっすぐに見つめ、心の奥に響く様な凜とした声で話しかけてきた。

普通の者なら不信に思う突然のお願い。しかし、ラムダはその言葉に耳を傾ける。

「…… ありがとう。聞いて下さるのですね……」

ラムダの態度を察して女性は言葉が続けた。

「…… 今、この先で聖剣の所持者が悪しき者と戦っています。しかし、彼女はまだ聖剣の真の力を知りません。このままでは悪しき者に敗れてしまいます。そこであなたに彼女の加勢をお願いしたいのです」

女性は用件を言うとラムダの答えを待った。

よくわからないが善なる者が悪い者に敗れる。そう思ったラムダは間髪入れずに頷いた。

「悪をのさばらせるわけにはいかない！ すぐに加勢に行きましょう！」

ラムダはそう言ったかと思うと女性の脇を走り抜けようとした。

その行動に女性は少し驚きの表情を浮かべる。

「…… お待ち下さい。この森を抜けるまで時間がかかります。私が送りますので、慌てないで少しお待ち下さい」

女性は走り抜けようとするラムダを引き留める。

端から見てもその姿は滑稽なもので、女性の顔に笑みがこぼれた。

「……あなたは、疑う事を知らないのですね……」
そう言つて女性はラムダに微笑みかける。ラムダは慌てて立ち止まると頭を掻く。

「……す、すいません。では、一刻も早くお願いします!」
ラムダは女性に向かって頭を下げる。その気迫というか真剣な態度に女性は静かに頷く。

女性はラムダの体に触れる。すると、ラムダの体が淡い光に包まれていく。

「……森の出口まで送ります。突然の願いを聞き入れてくれた事に感謝します。お礼に、何かあつた時は私をお呼び下さい……その時は私があなたを救います。私はマリス……この地に眠る魔導士マリ
ス——」

光に包まれたラムダは次の瞬間、その場から消えていった……。

——魔法弾がアルルに襲いかかる!

避けようもないその一撃がアルルの体を吹き飛ばした。

「……何!?」

騎士達を消滅させた一撃を浴びせたのにも関わらず、吹き飛ばされただけのアルルを見てリゾットの表情が変わった。

——それは、避けられないと瞬時に判断したアルルが、魔法弾に対して必殺の一撃を放ち威力を軽減させたためだった。

その天才的ともいえる対応能力と反射神経にリゾットは目を見開いた。

……だが、アルルも無事では済まされなかった。

吹き飛ばされた衝撃を逃がす事ができず、立ち上がる事ができなくなっていたのだ。

剣を地面に刺して起きあがろうとするが体が言う事を聞かない。

(……届かなかったか……)

アルルは顔だけを上げて敵の状態を見て自身の敗北を悟った。

(……回復するまでに時間がかかる……次は避けられんな……)

最期の時を覚悟する。

国が滅ぼされてから、とうに覚悟はできている。

アルルはここで朽ち果てても悔いはなかった。

——リゾットは満身創痍のアルルの姿に勝利を確信する。

もはやアルルは抵抗できない。そう思うと再び歪んだ思念が沸き上がってきた。

リゾットは念のためアルルの反撃を警戒して、ゆっくりと間合いを詰めていく。

そして身じろぎひとつ見せないアルルにリゾットは警戒を解いた。

——その時、後ろから迫りくる気配を感じた。

「——待て！ この俺が相手だ！」

森から飛び出してきたラムダが叫びながら一直線にリゾットへ向かって突っ込んできた！

盾を構え剣が見えない様にして突撃するラムダに向かって、リゾットは魔法弾を放つ。

しかし、とつさの一撃だったのでその威力は弱かった。

「でえええいやあああつつつ！！！」

ラムダは魔法弾を盾で受け止める様にして弾き飛ばし、リゾットの胸めがけて剣を横にないだ。

「はあああつつつ！！！」

その一撃はかわされたものの、リゾットはアルルから離れる。ラムダは続けざまに剣を振るい、リゾットに反撃の隙を与えない。

（——な、なんだ、この男は！？）

魔法弾に真っ向から突っ込み盾で弾き飛ばす、という非常識な防ぎ方にリゾットは驚愕した。

普通、魔法は盾で受け止められてもその衝撃で相手の動きは止まるものだ。少なくとも攻撃はできない。

それなのにこの男は、とつさの反撃で弱くなったとはいえ悪魔の力を宿した魔法弾を矢か何かを防ぐ様に弾き飛ばした上に、何事もなかったかの様に攻撃を続けている。

(……この男、一体何者なんだ!?)

リゾットはその非常識さに戸惑い、ラムダの攻撃に押されていく。ラムダはそれほど剣技に長けているわけではない。

その攻撃は滅茶苦茶で端から見ても二流の域は出ていないのだが、息をつかさぬ攻撃と相手の動揺により、互角以上に渡り合っていた……。

ラムダは一心不乱に剣を振り続ける。

敵は邪悪なる者。

ラムダは危機に瀕した善なる者を救うべく、ただひたすら攻め続けた。

「——き、貴様、何者だ! な、何故……魔法が利かない!？」

リゾットは、自身の常識の範疇を越えたラムダに混乱していた。

騎士だったリゾットはラムダの剣技がたいしたものではない事にはすでに気付いている。

しかし、心の動揺により自分を見失ってしまったため、リゾットは反撃する隙が掴めずにラムダの攻撃に押される一方だった。

その攻防にアルルは驚愕とともに再び希望を抱いた。

剣を杖代わりになんとか立ち上がり、わずかに残った魔力を集めて回復魔法を唱える。

端から見てもリゾットの動揺は相当のものだった。

おそらく、自分の事など頭にはないはず。

アルルはそれに勝機を感じ、フラフラになりながらも剣を構えた。

(……聖剣よ、今一度だけ、私に力を与えたまえ……)

アルルは祈る様に両手で剣の柄を握りしめると、背中を見せたリゾットめがけて走り出した――。

ラムダの攻撃がリゾットの体に当たり始める。ダメージ自体は浅い。だが、続けざまに襲いかかる攻撃がリゾットに絶望を与えた。

(——まずい! この男とは戦いの相性が悪過ぎる! 意志力が強

くて魔法の干渉力が弱くなる！——この男、もしや魔導力を持っている！？）

リゾットは完全にラムダの力を見誤り、後ろから来る必殺の一撃をまともに受ける事となった……。

「——ぐあっ！」

アルルの剣が背中から貫かれる。

リゾットの動きが止まった瞬間、ラムダは剣を大きく振りかぶり、渾身の一撃を頭に振り下ろした——。

……リゾットは絶命し崩れ落ちた。

そして悪魔の力を得たためだろう、その体は徐々に灰になっていく。ラムダはそれを黙って見つめ、すべてが灰になるまで剣を構え続けた。

ボロボロになった碧色のローブだけが最後に残り、そこでラムダはようやく構えを解いた。

「……大丈夫ですか？」

戦いが終わった事で初めてアルルの方を向く。

防具も無く、血と泥で汚れたアルルを見たラムダは、その顔を見て不思議そうに首を傾げた。

「……も、もしかして、リーファ？」

ラムダの言葉にアルルは目を見開く。

「——な、何故、私の真名を！……お、お前、ラムダか！？」

アルルはラムダの顔を見て表情が明るくなった。そして安堵のため息をついた。

「リーファ！ やっぱり無事だったんだ！ よかった、また会えて嬉しいよ」

思いもよらない偶然にラムダは興奮を覚えた。

まさか、こんなにも早く再会できるとは……。

ラムダは、思わずアルルの体を抱き締めると背中を叩き再会を喜んだ。

アルルも生きてラムダと再会できるとは思っていなかったため、痛いのを我慢して熱烈な抱擁を受ける。

——二人は、以前ノーマンケル王国で出会っていた。

ラムダは使者の任務、アルルはお忍びの武者修行の途中、酒場で知り合い、意気投合して剣や正義について熱く語る仲になった。

その時、アルルは自分の真名をラムダに教えたのである。

そして、短い付き合いだった二人は互いを讃え合い、固い友情を結ぶ仲になっていたのだった——。

——二人の再会は、何を意味するのだろうか？

単なる偶然？

それとも……。

戦いを終え、疲れ果てた二人にその意味はわからない。

この先に待ち受けるものさえも、今の二人には意味を為さないのだから——。

魔導士の戯れ

旧マルク＝ケラーノ神聖王国。

アルカディア大陸北部に位置するこの国は、一年を通して雪が降る冬の都として知られている。

その王城スノーキャッスル。ここに、アルカディアの平和を乱した者達がいた――。

「――リズレンは手強いのか？」

漆黒の杖を手にした老魔術師は、広げられたアルカディア大陸の地図にあるリズレン皇国の場所を杖の先で指した。

「……“魔導”に対抗できるモノでもあるのか？」

老魔術師は目の前で悠然とした態度で地図を眺める男に目を向ける。漆黒のローブに身を包んだ男は面白そうに小さく笑う。

「何がおかしい？ アルカディアを征服するには、あの“リズレンの秘宝”が必要なんだろう？ 笑って済まされるものではないぞ」男の態度に老魔術師は不快な表情を露わにする。

何年もの時間と労力を費やし復活させたのに、この魔導士は破壊衝動を発散するためだけに無駄に国を滅ぼしたりとさっぱりアルカディア征服に本腰を入れない。

その事が老魔術師――ジード・バロム――の心に苛立ちを与えていた。

「……リズレン皇国は、私だけでは落とせん。あの国は“魔導”に対抗する秘儀がある……挨拶代わりに攻めてみたが、あの爬虫類共はなかなか侮れん……くっくっく……」

男――封じられていた古の魔導士――は、さも面白そうに言っていると肩を揺らして笑いだした。

ジード・バロムは魔導士の態度に慥然とした表情で話を聞く。

「……そう言えば、私達を倒そうと愚か者共が手を組んだらしいな

？」

魔導士はジード・バロムの反応を楽しむかの様にわざと軽口を叩く。
「……アルル姫の様に、私を楽しませてくれる者が現れれば、少しはやりがいも出るのだがな……」

その口調は明らかにジード・バロムを挑発していた。

何故なら、それがジード・バロムが散々な目に遭った事を暗に示したからだ。実はジード・バロムは一度、絶体絶命の危機に遭遇し危うく命を落とす寸前まで追い詰められた事があったのだ。

それは、少し前に王女アルルが王族のみが知る秘密の抜け道を通り、ジード・バロムがいる王の間に騎士を引き連れて乗り込んだためである。

完全なる奇襲を受けたジード・バロムは王女アルルや騎士達の前に思わぬ苦戦を強いられ、魔導士が加勢しなければ討ち取られるところだった。

その苦い出来事を魔導士はなんの臆面もなくジード・バロムに向かって言い放ったのである。

「……アルル姫に差し向けた追っ手が倒されたらしいな？ どうするつもりだ、ジード・バロム？ アルル姫が勇者とか名乗る奴と手を組んだら、さぞ楽しい展開になりそうだが？」

まるで、自身の破滅を望む様に嬉しそうな声で語る魔導士。

ジード・バロムは魔導士の真意が読めずに困惑した。

（やはり、この魔導士は危険だな……何を考えているのか、まったく読めん……）

これまでの魔導士の行動から、その思惑がまったく読めない事に老魔術師は警戒を強める。

負の思念に捕らわれたこの男は、もしかしたら混沌とした今の状況を楽しんでいるだけなのかもしれない。

——魔導とは、矛盾の果てに辿り着く真理——

魔導の理を授けられた際に魔導士が語った言葉が、ジード・バロムの心に甦る。

常識や倫理の枠を越えた先に存在する無限の発想、それが魔導の力の源であるという。

魔術という理路整然とした学問を極めたジード・バロムをしても——いや、だからだろう——理解に苦しむその理論を、おそらく魔導士は地でいっている様に見える。

魔導士にとって、アルカディア征服は魔導の真理へ近づくための些細なきっかけに過ぎないのかもしれない。

そう思うとジード・バロムは、自分が利用されているだけの様な気がして寒気を覚えた。

「……ジード・バロム、私はこれからこの地に潜むマルクゥケラーノの王子を捕獲に向かうかと思う。よろしいかな？」

魔導士はジード・バロムの不安をよそに皮肉めいた口調で話しかけた。

「……………」

ジード・バロムは黙って頷く。自身の思惑とは違うが魔導士は役に立つ。魔導の力を完全に手中に入れるまでの間だ。

それまで出来る限り有効に魔導士を使わなければ。

自身の野望のため、貴重な人材を失うわけにはいかない。

……そんな老魔術師の思惑を知ってか知らずか、魔導士は低く笑うと颯爽と部屋を出て行く。

（……好き勝手できるのも今のうちだ。時が来るまでは自由にさせてやる……）

老魔術師はアルカディアの地図を眺めながら心の中で呟くと、次なる行動の準備に取りかかるべく漆黒の杖を掲げて呪文を唱える。

淡い光に包まれた次の瞬間、ジード・バロムの姿は忽然と消えた——。

夏とは思えない厳しい寒さが猛威を奮う北の大地。

……その地に領土を持つマルク・ケラーノ神聖王国の西部にある小さな村が、ある晩灼熱の炎に包まれた。

その炎はリスレン皇国側からも見えたという。

その情報はすぐ様各地に広まり、アルカディアに住む人々の心に新たな悲劇の到来を予感させた。

——希望と絶望が交錯するアルカディア。

人々は底知れぬ不安と恐怖に苛まされながらも、わずかな希望を奮い立たせその思いを勇者に託した。

そして――。

“アルカディアの勇者”ジークフリート・ラークスが部隊を率いて行動を開始する事を宣言した……。

北の夜更け

旧マルクⅡケラーノ神聖王国西部にある小さな村。

そこは今、生ける者すべてを焼き尽くそうと紅連の炎が舞い踊っていた――。

灼熱地獄と化したこの村の中心部。

漆黒のローブを身にまとった魔導士が炎に包まれて燃え上がる騎士の姿を見て高らかに哄笑を上げている。

目の前には、生き残った者達がいた。

その鎧にはマルクⅡケラーノの紋章が刻まれているのが見て取れる。

「……アルル姫の奮闘に触発されて戻って来たのか？ おとなしくリズレンで余生を過ごせばよいものを……」

魔導士は嘲笑う様に騎士達を見渡し、殺気立った視線を真っ向から受け止める。

騎士達は剣を抜き放ち、今にも飛び掛かろうと魔導士の隙を窺っていた。

「……ところで、アルバート王子はどこにいる？ 聞けばアルル姫と並ぶ剣技の持ち主というではないか？ この地にはもう入ったのか？」

強烈な殺意を受け流し、平然と騎士達に質問を浴びせる魔導士。

「どうした？ 熱くて喋れんのか？ なら――その体、冷やしてやるわ」

そう言っつて悪戯っぽい視線をで一人の騎士に向けた。

その瞬間、騎士の体が氷漬けにされる。

一瞬にして氷像と化した騎士を見て魔導士は声をあげて笑いだした。仲間が氷漬けにされ、騎士達に緊張が走る。

魔法とは明らかに違う現象に戸惑いの色が露わになる――。

そんな騎士達の動揺を尻目に魔導士はゆっくりとした足取りで氷像と化した騎士に近付く。

氷像に軽く手を当てる。騎士達に向き直った。

「——王子はどこにいる？ 言わぬと……この様になるぞ——」

次の瞬間、氷像は粉々に砕け散った。

そして、周りの熱気で騎士だったものが溶けて無くなる。

あまりにも現実離れた光景に言葉を失う騎士達。

「——どうした？ 言葉を失ったか？ お前達は、つまらんな。それでも騎士か？ ……どうやら無駄な時間を過ごしたようだ」

魔導士は騎士達の戦意が薄れるのを感じ取り、これ以上彼等と向き合う事に飽きてつまらなそうに呟いた。

「消えろ」

そう言った瞬間、騎士達の体が激しく燃え上がった。

火柱と化した騎士達は叫ぶ間もなく燃え尽きて灰に変わる。

その光景を見ても魔導士は何事もなかった様にその場に佇み、燃え盛る炎を静かに眺めて高らかに哄笑をあげた。

——それにも飽きた魔導士は、手をかざし炎を生み出すと……それを地面に叩きつけた。村は炎に飲み込まれ、火柱が天高く舞い上がる。

炎はすべてを灰にすべく猛烈な勢いで闇夜を煌々とした明かりで染めていった——。

……その明かりは遠く離れた魔物の森からもはっきりと見えた。

その明かりにただならぬ不安を感じたアルルは、遠く西の空を神妙な面持ちで眺めている。

しかし、今は騎士達の亡骸を埋葬する事の方が先だ。

二人は騎士達の亡骸を森の中へ運び、土を掘り起こして埋めると祈りを捧げる。

一連の作業の間、二人は言葉を発さず黙々と体を動かす。

北の地は寒い。

祈りを捧げひと段落ついた二人は、森で薪となる木の枝や枯れ葉を集めると火を起こし暖をとった。

「……ラムダは、一人でここまで来たのか？」

アルルは無事だった荷袋から取り出したマントを羽織り、凍えそうな体をさすりながらラムダに声をかけた。

焚き火の炎に照らされたその表情には、先程の緊迫した固さはない。ラムダは木の枝を焚き火に放り、首を横に振った。

「まさか。仲間と一緒にだよ。森の中を歩いていたら戦気を感じたんで一人で突っ走って来たんだ」

その返事にアルルは納得した様に頷く。

「……そうか。して、その目的はなんだ？ まさか冒険とは言うまい。噂に聞く討伐軍に関係する事か？」

真剣な眼差しを向けるアルル。ラムダは頷くと詳しい事情を説明した。

討伐軍が結成された事。

自分も軍に参加した事。

自分達が任務でマルク・ケラーノへ向かっている事。

自分が知るすべての情報を話した。

その話を聞いたアルルは、眉をひそめて疑問を口にする。

「——なんて無謀な事を……この国はあやつ等の本拠地だぞ！ そんな危険な地にたった六人で行くなど、まるで捨て駒ではないか！？」

アルルはラムダ達に無謀な探索を命じた討伐軍に憤慨した。

「お前達は、この国がどういう目に遭ったのか、まったく知らないのか！？ それとも、一夜にして王都スノーバードを壊滅させたあの凄まじい力を……まさか見くびっているのか？」

アルルは討伐軍のやり方に疑問を抱き、不信任を露わにする。そして義勇の志と思い、頼ろうとした自分を恥じた。

「……私は一度魔導士達と戦ったが、あれは個人の力でどうこうできるものではない。だから勇者の元へ行き、力を借りて共に戦おう

と思ったのに……」

言葉の最後の方はか細くなる。失望に似た思いに駆られ、アルルの表情は曇った。

……沈黙が流れる。

ラムダはアルルの言葉の真意を理解しきれないでいたが、その深刻そうな表情を見ると声をかける事ができなかった。

……長い沈黙に耐えられなくなったラムダは、ふと思った疑問を口にする。

「……そう言えば、リーファは魔導士と戦った事があるとか言ってたね？ マルク＝ケラーノの出身なのは聞いていたが……騎士になつてたんだ？　じゃあ、噂に聞くアルル姫と一緒にだったってわけかい？　魔導士と戦って生き残るなんて、やっぱりリーファはすごいね？」

ラムダは、アルルとリーファが同一人物である事にまったく気付いていなかった。

真顔で聞いてくるそんなラムダを見てアルルは拍子抜けする。

（……本気で聞いているのか？）

たしかに出会った時は、お忍びの旅だったので素性は隠していた。だが、話の流れから察してもいい様な気がする。

冗談なのか本気なのか、その表情からは見て取れない。

（あえて言う必要もないか？）

気付かないなら気付かないでもいいかもしれない。

余計な心配や同情を受けるよりも、一介の剣士として接してもらった方が気分は楽である。

だが、アルルは少し迷った。

真名を教えた大切な友に対して、それはあまりにも礼を欠いた行為に思えたから。

（……ラムダはそんな小さな人間ではない……私の考え過ぎだろう。どのみち彼の仲間が来たらバレてしまうだろうし、それでラムダの

信頼を失いたくはないな。素性を明らかにするか……)

焚き火に木の枝を放るラムダを見る。

その表情には戦いを終えた疲労よりも、自分との再会を喜ぶ嬉々とした感情が見て取れた。

(……変わらないな)

アルルは自分の迷いが誤りである事を悟る。

「……ラムダ、思い違いをしている様だから、本当の事を話そう……」

そう言つて少し自嘲的な笑みを浮かべると、自分の素性について詳しく話し始めた……。

勇者、発つ

“アルカディアの勇者”ジークフリート・ラークス率いる部隊は、諸悪の根源である魔術師ジード・バロムがアルカディア大陸南東部に位置する自由都市トルネ・パロに潜伏している、という情報を得て行軍を開始した。

超絶剣技と称されるほど修得難易度の高い絶技《神速剣》の使い手として名を知られたジークフリートの出陣に、アルカディアの人々は過剰とも言える盛り上がりを見せ、討伐軍の士気はもとよりローラント王国全体が異様な空気に包まれた。あくまで冒険者ギルドの要請に従って施設の開放はしていたものの、個人の集まりである討伐軍に対してあまり協力的でなかった王国側もその異様な空気に飲み込まれ、ついに全面的な支援を表明する事となる。

戦後のアルカディア支配をもくろむローラント王国側にしてみればジード・バロムもジークフリートも厄介者に過ぎなかったが、アルカディアの平和を掲げ民衆の支持を得たジークフリートをこれ以上野放しにできなくなったのだ。しかし、結局のところはジークフリートに恩を売り、平和になった後のアルカディアの盟主の座を得るために討伐軍に便乗しようという政治的な決断に過ぎなかったりする……。

自由都市トルネ・パロ。

約三十年前にアルカディア南部を支配するグランディノ帝国から独立したこの自由都市は、各組織の代表による評議会制度によって国家運営が行われていた。

トルネ・パロは東部のローラント王国と同盟を結び、冒険者による自治警護団がグランディノ帝国を牽制して領土を守ってきたがマルク・ケラーノ、ノーマンケルという大国が次々と滅ぼされるとその

士気は一気に低下し、魔導士が現れた時にはすでに“国”としての機能は瓦解していた。そんなトルネ・パロに対して魔導士はその破壊力を行使、トルネ・パロは壊滅状態にされる。しかもローラント王国とグランディノ帝国の連携を妨害するため、都市の至る所に召喚魔法陣を配置して“悪魔”を次々と呼び寄せ、トルネ・パロを地獄の都へと変貌させた……。

そのトルネ・パロにジータ・バロムが現れたという。この情報を受けジークフリートは部隊を率いてトルネ・パロへ乗り込み、自らジータ・バロムを討つ事にしたのである。

——部隊は国境を越えてトルネ・パロに入っていた。地獄の都とはよく言ったもので、トルネ・パロに入った途端に部隊は悪魔と遭遇し激しい戦いを繰り広げる事となる……。

ジークフリートの部隊の前に現れた悪魔は全部で五体。そのうち三体は“霧の悪魔”——ミスト・デーモン——と呼ばれる中級クラスの悪魔で、残る二体は“紅連の悪魔”——フレア・デーモン——と呼ばれる上級クラスの悪魔だった。

ジークフリートの率いる部隊は総勢二十人もの大部隊だったが、この悪魔達の襲撃によりその数は半減している。

「——踊れ、踊れ、舞い踊れ！ 炎とともに燃え上がり、真紅の舞いに身を焦がせ！」

生み出された炎が悪魔を包み込む。その火力は凄まじく、周囲にいた悪魔にも燃え広がっていた。

だが、炎に包まれた悪魔は動きを止めるものの魔力を集中させると無差別に魔法弾を放った。魔法弾は部隊の密集した場所で爆発し、その衝撃波で他の魔法弾も次々に爆発を起こす。

「——早く負傷者に回復魔法を！」

ジークフリートはそう叫ぶと魔法の光を発した剣を構えて“紅連の悪魔”に斬りかかっていく。その凄まじい踏み込みに“紅連の悪魔”は避ける事もできず、いともたやすく斬り裂かれる。

「——グオオオツツ!!」

ジークフリートの一撃で“紅連の悪魔”は膝をつく。

その光景に悪魔達は危険を察知して距離を置いた。

——あの人間は危険だ。

悪魔達は本能的にジークフリートの力量を見抜き、魔力を収束させるとジークフリートに向けて一斉に解き放った。

ジークフリートのいた場所が爆発する。爆風と土煙でその姿が見えなくなる。

悪魔達が魔法弾を放った瞬間に隙を見た魔術師が呪文を唱えた。

「——紅連の炎よ、聖なる光となりて、すべてを焼き尽くせ!」

魔術師の突き出した両手から一筋の紅い光が出現し、悪魔達に向けて放たれる。紅い光が触れた途端に悪魔達は炎に包まれた。魔法の炎は爆発的に燃え上がり、もがき苦しむ悪魔の姿が映し出され断末魔の叫びが辺りにこだまする。“紅連の悪魔”と名付けられたフレア・デーモンすら、この聖なる炎に身悶えしている。

「——みんな、今だ!」

魔術師は悪魔達がダメージを受けている事を見て取り戦士達に攻撃を促す。戦士達はその指示に従い悪魔に斬りかかる。消えない炎により動きが制限されている悪魔達は、戦士達の攻撃に反撃ができずに斬り刻まれていく。

その様子を見て魔術師は、煙で見えなくなったジークフリートのいた場所に目を向けて安否を確認した。

……煙の向こう側から人影が見える。

「——ジークフリート、大丈夫か!」

魔術師は人影に向かって声を上げ、その影が手を振るのを見て取り安堵のため息をついた。

そして悪魔の方に振り返ると再び呪文を唱え始めた——。

「——凍れ、凍れ、すべてよ凍れ、触れるものすべてを凍らす風よ——最小にて舞い降りよ!」

次の瞬間、悪魔達の真上の空間に曇の固まりが現れる。そこから白

い風が猛烈な勢いで吹き出て悪魔達のいる場所を包み込んだ。白い風は悪魔達を包む様にまわり始め吹雪と化す。

脱出が不可能である事を悟った悪魔達は、戦士達を道連れにしようと苦しまぎれに吹雪の中へ引きずり込もうとした。

腕を掴まれた戦士達は、引き離そうと必死にもがくが吹雪の中に引きずり込まれる。そして、完全に飲み込まれると吹雪は激しさを増していった……。

——吹雪が止むと巻き込まれた戦士達が雪で覆われた状態で倒れているのが見えた。

悪魔の姿は無い。

戦いに勝利したのだ。だが、生き残った者達は半数にまで減り、あ
る者は膝をつきある者は立っているので精一杯の状況だった。対悪
魔戦の経験の乏しさが彼等の精神力を大幅に消耗させたのだ。

魔法弾の集中砲火を浴びたジークフリートは、外見的には無傷の状
態で部隊へ戻っていった。しかし、魔法弾を防御するためにかなり
の体力を消耗していて、その表情は厳しいものであった。

……生き残りは十名に満たなかった。

「……まさか、こんなところにここまでの戦力が徘徊してるとは思
わなかった。このまま先へ進軍するわけにはいくまい……ここは一
時撤退し、精鋭部隊を投入せねばならない」

初戦での思わぬ苦戦にジークフリートは一時撤退を考え始める。

敵は油断している。このところの戦況からそう推測していたジーク
フリートは、本拠地と思われるマルク・ケラーノから遠く離れたト
ルネ・パロにこれだけの戦力を集めていた事に己の読みの甘さを痛
感した。

「……皆、すまない。今回の苦戦は、対悪魔戦を想定してなかった
私の責だ。このままトルネ・パロで戦うのは危険過ぎる。撤退しよ
う……」

ジークフリートの言葉に皆頷く。初戦の予想外の苦戦に皆、この戦

いの厳しさを改めて思い知らされていた。

魔導士に固執した部隊編成……戦士系で固めた討伐軍の認識の甘さが悪魔戦において裏目に出た。しかも通常の戦闘においては人間もしくは亜人や魔獣の類との戦いが主であるため、今回は対悪魔戦における基本戦術『意表をついた』連携を取る事ができずに後手にまわってしまった。

「……では、撤退するか」

戦士の一人が呟く様に言うと言葉が皆帰り支度を始める。悪魔達との戦闘で皆、疲労が残っていたが決断するとその行動は早かった。

部隊の動きは迅速で、あっという間にローラント領へ撤退する。しかもその撤退の報が広まる前にジークフリートは手際良く部隊の編成を整え、再びトルネ・パロへ向けて部隊を率いて行った。

『トルネ・パロへの潜入に成功！』

後日、人々にはこの事実のみが伝わった……。

逃げ口実は『新たな使命』

時は戻る。

アルカディアの平和実現に向けて結成された討伐軍の命を受け、今や危険地帯と噂される旧マルク・ケラーノ神聖王国へ探索に来た北方探索隊。その探索隊に所属したラムダはひよんな事から旧友である女剣士と再会する事となる。北の大地で再び出会った二人は再会を喜び、それぞれの現在に至るまでの経緯を語り合い、遅れて来た北方探索隊のメンバーと合流、これからの事について話し合っていた。

「——痛々しいお姿になられて……ここはさっそくローラントへ帰還し、傷ついたお体を癒すのが先決かと思います」

やけに恭しく意見するマーク。いかに名誉ある討伐軍・北方探索隊の隊長とはいえ、一国の姫君相手ではその口調は丁重にならざるを得ない。その身から滲み出る威厳に歴戦の強者であるマークもさすがに圧倒されたのだ。ラムダも仲間の反応を見て“違い”というものを認識する。

（……さっきとは雰囲気全然違う。戦闘中じゃなかったら、リーファだと気付かなかったかもしれないな……）

まさか優れた剣技を持った敬愛する女剣士が、マルク・ケラーノのお姫様だったなんて……ラムダは正直、己の無礼を恥じていた。

（……他国とはいえ、元騎士とはいえ、騎士が姫君に対して友情を抱いてはならない……）

騎士時代に叩き込まれた騎士道精神がラムダの心を責める。騎士を廃業したとはいえ、その精神はいまだに騎士そのもののラムダにとって、身分の違いとは絶対的なものだったから。北方探索隊の態度はそれを物語っていた。

「……アルル姫、差し障りなければマルク・ケラーノの現状をお教えいただけませんか？ 我々の与えられた任務は、マルク・ケラーノの現状を知り討伐軍に報告するというものですので、よろしければ何卒ご協力願いたい所存であります……」

言い慣れないせいか、どこかたどたどしい物言いでマークはアルルに質問する。雰囲気の違いに若干飲まれている様にも見える。だが、アルルは気にした様子もなく苦笑しながら答えた。

「——そんなに恭しくせずとも良い。私の事は一介の剣士として扱ってくれ」

そう言つて北方探索隊のメンバーに向かって笑顔を見せる。その言葉に少しだけ場の雰囲気が和む。

さすがに重苦しい雰囲気の中では話も進まない。アルルは内心、そう思いながら言葉を続けた。

「——現状か……結論から言つとマルク・ケラーノはジータ・バロムによつて完全に支配されている。王都に駐在していた騎士団は見せしめのために殺害、その後地方にいた騎士団に降伏を呼びかけた。恥ずかしながら騎士団のほとんどがジータ・バロムの軍門に下つた……」

アルルは言葉を切り目を閉じる。身内の恥をさらす事に少なからずためらいがあつたのだ。それでも隠さずに真実だけを語ろうと言葉を繋げる。

「……私はわずかな手勢を率いて王城に乗り込み、魔導士やジータ・バロムと戦つたが返り討ちに遭つた。しかも追つ手に宮廷騎士団が派遣され、騎士達の尊い犠牲によつて私は命からここまで逃げてきた……この事からもわかる様に、軍に関しては完全に支配されていると言えよう。反乱の類も無いところから、おそらく民も奴等の支配下に置かれているはず。もはやマルク・ケラーノは完全に敵地と化しているだろう……」

ほとんど無抵抗状態で国を支配された事に失望を隠せなかった。アルルは目を閉じたままため息をつく。

「……王族のほとんどは処刑された。逃げ出せたのは私と兄アルバートだけで、その兄も行方知れず……王族に対する追撃は執拗で、もしラムダが加勢してくれなければ私は今頃冥府にいた事だろう……」

アルルはそう言うラムダに視線を向けた。

（……しかし、よく倒せたものだ。魔法に対する耐性が強いのか？）魔法を盾で弾き飛ばし、平然と剣を振るラムダの姿が脳裏に浮かぶ。常識を覆すその光景に、アルルはいまだにその事実を信じきれずにいた。

ラムダはアルルの視線に気づき無邪気な顔で見つめ返す。アルルは一瞬、その目に引き込まれそうになり慌てて視線を逸らした。

——沈黙のまま話に耳を傾けていたアルベリヒは、注意深く情報をまとめて今後の行動について頭を回転させていた。

予想される最悪の事態。マルク・ケラーノの完全征服……アルカデア大陸の東に位置するローラント王国にとっては避けたかった現実だった。

（……マルク・ケラーノの現状を見れば、ノーマンケルも怪しいですね。南西にあるトルネ・パロはすでに支配下に置かれているし、ローラントは完全に包囲されているとって間違いないでしょうね……）

アルベリヒの頭の中では北と西、そして南西部からのローラントへの侵攻という最悪の事態が思い描かれていた。

ジークフリート率いる精鋭部隊がトルネ・パロ解放に向けて遠征に出る噂もあるが、アルベリヒ自身トルネ・パロ解放は難しいと考えている。東のローラント、南のグランディノに挟まれたこの地の守りは予想以上に堅いと見ていたのだ。

（……ここでローラントに引き返すのは得策ではない。それなら、このままマルク・ケラーノ経由でリスレンに身を置き情勢を見るべきだろう……）

この探索隊にできる最良の選択を熟考する。不確定要素が多いこの

戦争では、わずかな情報が自分達の運命を大きく左右する事をアルベリヒは感じていた。

（……こんなに早い段階で王女アルルと会えたのは、我々にとって非常に大きな利点だ。彼女の存在によって我々の行動範囲が広く持てる様になった……）

討伐軍に与えられた任務――マルク・ケラーノの情勢視察――は現地にいた彼女の証言で達成される。

討伐軍にその報告さえしてしまえば、後は王女アルルの指示を名目に自由な行動する事ができる。これにより探索隊は無謀な選択を選ばなくてすむ。

正直、アルベリヒはここで犬死にする気など更々ない。アルカディアの平和は願えどそのために仲間を捨て駒扱いする討伐軍に忠誠なと抱けなかった。

（……彼等にはこの真意は伝えられない。だが、わざわざ危険を冒してまでローラントへ戻るなんてできない……）

アルベリヒは少し迷ったが意を決して考えを口にする事にした。

「――ここはリズレンやグランディノにもこの情報を伝えるべきだと思います。つきましてはアルル姫には我々に同行していただいかの国々へ忠告を促していただきたいと存じます……」

アルベリヒはそう言って皆を見回した。一介の神父が滅びたとはいえ、一国の王女に対して意見した事にラムダをはじめとする探索隊のメンバーは目を丸くする。

皆、アルルの反応を待つ。その視線を平然と受け流しながらもアルルはアルベリヒの言葉を重く受け止める。そして射抜く様な視線をアルベリヒに向けた。

（……なるほど。そういうわけか……）

アルルはその言葉の真意を見抜く。だが、それを不快とは思わない。アルル自身も無駄に命を散らす必要はないと思っていたから。

（……彼の思惑も討伐軍のやり方も非難すべき事じゃない。どちらの考えもある意味正しい……）

討伐軍に身を置き安穩と行く末を眺めるくらいなら、たとえ危険であろうが各地を回り前線で剣を振るっている方が自分の性に合っている。ならば答えはひとつしかない。

「……良いだろう、共に行こう。それでは討伐軍に書状をしたためよう。して、誰が書状を討伐軍に届けるのだ？」

「……………」

アルルの返答もさることながら、パーティーが二手に分かれる事に皆言葉を失う。書状を届けるという事は探索隊から離れる事を意味する。そして、残った者達がアルルを守りながら各地を巡らなければならぬ。どちらを選ぶか、それぞれの思惑が静かにぶつかり合う。

——ローラントへ戻り安全を取るか、それともアルルと共に危険を覚悟で名を取るか……アルベリヒ以外はローラントに迫る危機など想像もしていなかったが、冒険者として『命の安全』と『名を上げる事』の選択に探索隊の面々は苦悩した——。

アルベリヒの提案で探索隊は二手に分かれる事になった。

アルルのしたためた書状を討伐軍へ届ける役目を選択したのは、隊長のマークに戦士のフォート、それに僧侶のダーバの三人。ラムダとアルベリヒ、魔術師のリッシュはアルルと共にリズレンへ向かう事となった。

話が決まれば即時行動が冒険者の鉄則。マーク達はアルルの書いた書状を手にとると魔物の森に再び足を踏み入れて行った。

……彼等を見送ったラムダ達はアルル追撃の敵兵を避けるため、追っ手が手薄と思われるノーマンケル領経由で西部のリズレン皇国へ行く事にして、進路を南に向けて歩き出した——。

——歩くラムダ達を上空から見下ろす“者”がいた。

その者は純白のローブを身にまとい、神々しいオーラを発している。その視線の先には、黙々と先頭を歩くラムダの姿があった。

（……彼なら、あの者の狂気を止められるかもしれない。ならば彼の“運命”を見届けよう……）

浮遊する者はしばらくラムダを眺めると、後ろを歩くアルベリヒ、リツシュに視線を移す。そして、最後にアルルの姿を確認すると静かに下降していった。

……それをラムダ達は知る由もない。今や敵地と化したマルク＝ケラーノ領を無事抜ける事しか頭になかったのだから――。

敵地横断の旅〜出会い〜

アルカディア大陸西部にあるグランディノ帝国を目指すラムダ達は、敵地と化した北のマルク・ケラーノ神聖王国と中央のノーマンケル王国の国境沿いを西に向かって進んでいた。

パーティーはローラントの元騎士の冒険者ラムダ、神父のアルベリヒ、魔術師のリッシュ、そしてマルク・ケラーノの王女にして魔法剣士であるアルルの四人。平時における旅なら充分な構成だが、戦時において敵地を横断するには少し心許ない……というより人員の数が足りないので無謀かもしれない。

しかし、アルカディア支配を掲げ戦乱を起こした魔術師ジータ・バロムと復活した《古の魔導士》に関する情報が不足している状況において、実際に彼等と戦い生き残ったアルルの持つ情報が戦乱を鎮める鍵となるかもしれない事、また敵地に囲まれたローラント王国に戻るのには危険である事から、同じ危険に遭遇するなら平和のためになり、また生き残る確率の高い方を取ったというのがこの旅の実態だった。

——ジータ・バロムの軍勢に蹂躪され、軍や民を完全に掌握されて今や敵地と化したマルク・ケラーノ。アルルは自国の現状に失意を覚えるも、国を守りきれなかった自分達の非も痛いほど感じていたので、その現実を真摯に受け止め己のすべき事をやり遂げようと自国への思いを心に秘め歩き続けた。

「……アルル姫、この辺に民家の類はあるのでしょうか？」
後ろを歩くアルベリヒは殺風景な山道に少し息を切らせながらアルルに質問をした。

マルク・ケラーノとノーマンケルの境には横にまたがる様に山脈があり、それが国境の役目を果たしている。両国の関係は比較的良好

ではあったが、国境地帯の交通整備や国による事務管理などはあまりされておらず、この辺りの詳しい情報は無きに等しかった。よって集落の数がどれだけあるのか、またジード・バロム等の支配力がどの程度影響を与えているのかさえ他国の者には見当もつかない。「さすがに山中で野宿するわけにはいきません。獣の類も出る事でしょうし……」

アルベリヒは鬱蒼とした中の険しい行軍に疲労し切っていた。できればどこかで一息つけたい、非戦闘員であるアルベリヒにとってこの山中行軍はかなり体に堪えていたのだった。

アルルはアルベリヒに振り返るとさらっと返答する。

「この周辺は大型の獣が出没するので集落はないはず。もう少し先に行かないと体を休める様な場所はないぞ。つらいのか？」
見るからに疲れ切った表情のアルベリヒを見てアルルはラムダに向き直った。

「……彼はいつもこうなのか？」

剣士として鍛えたアルルからしてみれば、アルベリヒの情けない姿は軟弱にしか映らない。何故、そんな者がこの危険極まりない旅に進んで行こうとするのか？

アルルは疲労困憊状態のアルベリヒを見て内心呆れ果てていた。

そんな空気を察してか知らずか、道中一言も言葉を発さずにいたりツシュが歩みを止めて口を開いた。

「……精霊の声が聞こえなくなったので、休憩を挟んで進んだ方が良いかも知れません。この先に進むなら、少し体力を回復してからの方が何かと良いでしょう……」

深々とフードを被っているため表情は見えなかったが、その声から緊迫したものが伝わる。自己主張の強い雑多の精霊の声が聞こえないという事は、精霊達が危険を察知して身を隠したか、あるいは何者かに支配を受けた事を意味するからだった。

「……敵か獣か、どっちかがいるって事か？」

ラムダは剣を抜きながらリツシュに振り向く。

「まさか俺達の動きがバレたって事はないだろうな？」

ラムダは自分に問いかける様に呟くと盾を構えて先頭に立った。

……目に見えぬ何かが見えぬのか、いくら目を凝らして見ても同じ風景しか見えない。だが、敵が獣かわからないが、この先に精霊を脅かす存在があるのは間違いない。

ラムダとアルルは後ろの二人に気を配りながら慎重に歩を進める。

「……な、なんだ……ありや？」

前方からズシン、ズシンと重い音とともにラムダの視界に奇妙なものが飛び込んできた。

異様なもの。

大型の二足獣よりも二回りほど大きな石の巨人が、のしのしと近づいて来る。

敵意は無いが、明らかに自分達に向かって来ている。ラムダとアルルは剣を構え、リツシュはいつでも魔法が放てる様に石の巨人の動きを注意深く観察した。

「……あれは、ストーンゴーレム……何者かの命令でこの辺を徘徊しているようですね……」

アルベリヒは戦闘の邪魔にならない位置に後退しながら分析する。ゆつくりと近づく石の巨人。ラムダは身をかがめ、盾を出して攻撃態勢に入った。

「——ラムダ、待つて。相手に我々を排除しようとする動きが見えない。間合いに入るまでもう少し様子を見よう」

気を察してアルルは今にも突撃しそうなラムダを制止する。その視線は石の巨人から離さずに向いたままだ。

チラッとアルルの方を見て少し前に出すぎている事に気づき、はやる気持ちを抑えるラムダ。

（……いけない、いけない。まだ間合いに入っていないのに、危うく突進しそうだった）

どうやら、あの異様な姿に冷静さを失っていたようだ。アルルの制止がなければ飛びかかっていったかもしれない。ラムダは気を引き

締め、石の巨人の動きを凝視した。
ズシン、ズシン。

かすかな地響きとともに接近する石の巨人。いくら敵意が無くとも、その異様な姿は見る者に圧迫感を与える。

石の巨人はラムダとアルルの目の前で止まった。そして、ゆっくりと首を動かして皆に視線を向ける。

「……どうした？」

ラムダはその仕草に攻撃の意志が無い事を察して声を掛けた。

「俺達に何か用か？」

石の巨人に対して疑問をぶつけるラムダ。返事などくるはずもないのに、である。だが、その声に反応したのか、石の巨人はラムダの方に顔を向けると、大きな地響きとともに膝をついた。その意外な動作に皆の動きが止まる。

「——ゴーレムに話しかけるなんて……あんた、面白い男だねえ？」

この子はただ、私を出迎えに来ただけよ」

石の巨人の代わりに女の声がラムダに答える。その声は後方から聞こえ、振り返るとそこにはローブを身にまとった長身の女が悪戯っぽい笑みを浮かべながら立っていた。

「……あんた達、この混乱時に冒険かしら？ この先は危険だから、とつと引き返した方が身のためよ」

女はそう言つて無造作に近づいて来る。その無防備極まりない態度に、ラムダ達は警戒しながらも構えを解いた。

女はラムダ達の横を通り過ぎ、ひざまづくゴーレムのそばまで行くとラムダ達の方に振り返る。

「ここを通り抜けようなんてさあ、ひよっとして訳ありなの？」

にこやかな表情で問いかける。だが、その目は笑っていない。あくまで友好的だったが次の行動に移れる態勢に入っていた。

目的も無く、人気のない険しい山中をわざわざ冒険する者なんていないのだからそれは当たり前前の対応だろう。

アルルは女の警戒を解くため剣を鞘に収めて一歩前に出ると、女の

目を真っ向から見つめ静かに口を開いた。

「……そうだ。だが、我々は決して怪しい者ではない。故あってリズレン皇国に向かっている。この道を通るのは、街道よりは安全だと思っただけだ」

正直に返答するアルル。その意外なまでに素直な答えに女の頬は弛んだ。

（……ほう、素性も知れぬ者にも素直に返すか。まっすぐな娘だ……）

この娘の言葉に嘘は無い。きっと深い訳でもあるのだろう。

女はとりあえずその言葉を信じる事にした。

「……その言葉を信じよう。そう言えば名乗ってなかったわね。私はメレイでこの子はシーマ。最近山もすっかり荒れてしまい、魔物が頻繁に現れる様になってしまったわ。特にこの先は魔物達の巣窟と化しているから、リズレンに行くなら迂回した方がいいわよ？」メレイと名乗った女はひざまづく石の巨人の肩に乗る。石の巨人は首をほんの少しメレイに向けるとちゃんと乗ったのを確認してから静かに立ち上がった。

「おお……」

なんて賢いんだ。ラムダは石の巨人の主人に対する気配りに感嘆の声を漏らした。

「……メレイ殿、助言ありがたく頂戴する。私はアルル、隣にいるのがラムダで後ろの二人がリッシュにアルベリヒ。詳しくは話せないが、一刻も早くリズレン皇国に行きたい。初対面で差し出がましいとは思いますが、もし良ければ迂回ルートを教えて頂けないだろうか？」

アルルはメレイに一礼してから名を名乗り迂回ルートの場所を聞いた。その態度に皆、驚きの表情に変わる。特にラムダの反応は顕著だった。

（……いくらなんでも素性もよくわからない者に頭を下げるなんて……）

元騎士のラムダにとってアルルの対応はとても信じ難いものだった。王女たる者が素性もわからぬ身分の低い者に頭を下げるなんて、どのような事態になってもあり得ないと思っただけにラムダは愕然とする。そして本来なら自分達が聞かねばならない事をアルルにさせてしまった事に己の気配りの無さを責めた。

（……あの石の巨人にも劣っているじゃないか……）

ラムダは自嘲気味にため息をつくと言わずに二人のやりとりを見つめた。

……アルベリヒの方は逆にアルルの対応に感心していた。

状況が状況なだけに、身分の上下に囚われていては話は進まない。しかし、理屈でわかっていてもそれが出来る者などほとんどいない。昨今において、アルルのメレイに対する姿勢は称賛に値するものといえたからだ。

（……なかなかできたお人だ。普通なら誇りが邪魔して威圧的になっってしまうものを……）

さすがはアルカディアにその名を知られるだけあって、その精神性も優れているとアルベリヒは率直に思った。

その間にもアルルとメレイのやりとりは続き、結果迂回ルートを案内してもらう事になる。ただ、そのルートもまったく安全では無く、十分な休息を取ってから行った方がいいという事になり、メレイの勧めもあり一行はメレイの住まいに案内される事となった。

敵地横断の旅〜隠れ里〜

ズシン、ズシン。

軽い地響きとともに揺れる景色を眺めながら、アルベリヒはこれまでの冒険について考えを巡らせていた。

（……我々は運に恵まれている。探そうとしていたアルル姫には都合良く出会い、それにより絶望的な探索からは免れ、さらには危険地帯に足を踏み入れる前に土地勘のある者に遭遇した……まるで運命に導かれるかの様に何かが我々の行く手を後押ししてくれている様だ……）

少し出来すぎているといってもいいくらいの幸運の連続に、アルベリヒは“運命”を感じてならなかった。

（……もしかしたら、この混乱極まるアルカディアを鎮めるのは我々なのかもしれない……そう思えてしまうほど、こちらに都合良く物事が進んでいる……）

考えれば考えるほど、その思いは強くなる。そう思うとこうして頭を悩ましている事が無意味に思えてならなかった。

ズシン、ズシン。

険しい道を通るという事もあり、体力的な面からアルベリヒとリツシユは石の巨人の肩に乗っていた。一歩進むごとに大きく揺れて思わず振り落とされそうになったりするが、これからの旅に向けて無駄な体力の消耗を避けるためにメレイの好意で乗せてもらっている。常識はずれの体力を持つラムダはいいとして、女であるアルルとメレイが徒歩で歩いている事に少し気が引けたが、背に腹は代えられないと自分に言い聞かせてアルベリヒは石の巨人の肩に必死に捕まっていた。

……道なき道を突き進むと拓けた場所に出た。山の中にある集落にしては広く、村と呼ぶには少し抵抗がある。隠れ里の類なのだろう

か？

石の巨人は広場の中央で歩を止め、ゆつくりと膝をついてアルベリヒとリツシュを降ろす。二人ともまだ体が揺れる感覚が抜けずに少しゆらゆらしていた。

辺りにある家屋を指さしメレイは口を開く。

「——ここには私以外の人間は誰もいないわ。皆、魔物を恐れて山を下りたの。だから、好きな場所で体を休めるといいわ」

言われてみると人の気配がまったくない。里を捨てるほどに魔物の脅威がすごいのか？

「……メレイさんは何故山を下りないんですか？」

ラムダはそんな危険なところに一人で住んでいるメレイに疑問を持った。

「……何故？ あんたは生まれ育った場所を簡単に捨てられるの？」
メレイはラムダの質問に即答する。その口調は至って平然としたものだった。だがラムダは失言である事を悟り頭を下げる。

「……すいません、失言でした。そう簡単に故郷は捨てられませんよね？」

そう言つてラムダは己の浅はかさに苦笑いした。

「気にしないでいいわ。たしかに一人でこんなトコにいたら危険過ぎるわよね？ でも私、これでも魔術師の端くれなの。自分の身くらいなら守り切る自信はあるのよ」

メレイは特に気分を害した様子も無く笑顔で答える。その表情にラムダは少し救われた。

「……メレイ殿は魔術師なのか？ では、もしかしてそのゴーレムは自分で造られたとか？」

アルルは静かに佇むゴーレムを見ながら疑問を口にする。

クロムワイズ世界において、ゴーレムの様な疑似生命体の創造というのは古代文明の遺産であり、現在の魔法製造技術では完全な疑似生命体を造り上げる事は極めて困難であった。その製造方法を記し

た資料も大半は失われており、現存するものは皆、古代遺跡から発見されたものを再稼働したものであり、知識としてはその存在は知ってはいても実際に目にする事は極めて少ないのだ。

その事から、非常に貴重な古代の産物を発見しただけでも優れた魔術師と言えよう。アルルはどちらにしてもメレイを優れた魔術師だと感心しつつゴーレムに見入っていた。

「まさか！ 彼は遺跡から発掘したのよ。現在の魔法技術では、生き物を変質させて“別な生き物”は造れても命無きものに魂を吹き込む事は極めて難しいのよ。過去の魔導士でもなきやゴーレムの製造なんてとても無理よ……」

そう言いながらメレイは手を振る。

「……ちなみに発見したのは私の父よ。私は彼を譲り受けただけで実はそこまで優等生ってわけじゃないわ」

「——でも、それを使役できるのも凄い事では？」

興味を持ったのだろう、アルベリヒが横から口を挟んでくる。

（……この展開は……しばらくは話が続くな）

あとの展開が読めるラムダはその場からスッと離れる。

（……それにしてもゴーレムって凄いなあ。もし戦ったとしたら勝てたか？）

物言わぬゴーレムを見つめ、ラムダは話が終わるまでその辺を散歩しようと歩きだした。

家屋が立ち並ぶ路地を散歩するラムダ。山中にあるだけあって空気が少し冷たい。

——この集落に魔物が出没した形跡はない。

（……この集落にいる限りは安全って事か。歩いてみるとけっこ広いのにな、結界でも張られているのか？）

ラムダは適当な家屋の前に立ち、念のためノックしてから扉を静かに開いた。

中には小さなテーブルと椅子、それとベッドしかなかった。山を下

りるときに持つていけるものをすべて持つていったのだろうか？

しかし、この家には生活の匂いはまったく感じられない。元々誰も住んでいなかったのかもしれない。ラムダはあまり深く考えずに椅子に座ると、剣と盾をテーブルの上に置いて鎧の留め金を外しはじめた。

(……しかしメレイさんはどうやって生活しているんだ？ 自分で農耕しているとはとても思えないし、仮にそうだとしてもロクな作物は育てられないだろうなあ……)

ラムダは山奥に一人で生活しているメレイに疑問を抱く。たとえ優秀な魔術師でも、魔法で食べ物を作る事ができるわけじゃない。故に自然と共に生きるレンジャーでもなければ、人間が山奥にたった一人で生活する事は非常に困難である。

(……魔物が徘徊する地域を通って麓の村にでも行っているのか？ でも、お金は？ まさか魔法で商売している？)

ラムダの疑問はあらぬ方向へ飛んでいく。

(……なんか視点がズレてきたな。メレイさんの暮らしぶりを詮索してどうするっていうんだ？)

いくら頭を回転させても見当がつかないのでラムダは別の事を考えようと今までの旅を振り返ってみる事にした。

——やけに盛り上がっている三人の話に入っていけず、一人蚊帳の外状態のリッシュは静かに佇むゴーレムを眺め、同じ魔術師としてメレイに尊敬と同時に妬みを感じていた。

(……古代の産物がこんな山奥にあったなんて……もしかすると、この辺にはまだ手つかずの古代遺跡があるのではないか？)

疑似生命体の中でもその発見例が少ないゴーレムが発見されたという事は、まだ他にも“何か”が隠されている可能性が高い。何故なら、古代においてゴーレムは大事なものを護るために番人として作られたからだ。つまり、ゴーレム以上に価値のある魔法の品が存在する事を暗に示しているともいえた。

(……この地はマルク＝ケラーノとノーマンケルの二国間協定で魔術師ギルドの介入ができなくなっている。ゴーレムしか見つけていないという事は、その他は手つかずのまま残っているに違いない……)

古代の宝庫に自分がある……そう思うとリツシュは興奮を覚えた。この地に来たのは運命の導きに違いない。偉大なる古代遺産を手にする自分を思い描くと、リツシュは話に盛り上がる三人からそっと離れた。

(……古代遺産を独り占めするまたとない機会だ。魔物が徘徊するって事は遺跡が近い証拠。危険だが遺産を手にする試練だと思えば恐怖もない。この機会を逃すわけにはいかない……)

魔術師としての欲望が、リツシュの頭の中で膨れあがる。その歩みは早く、あつという間に集落の外へ導いた。

陽が沈みかけ、辺りが薄暗くなっている。だがリツシュの頭の中には危険を察知するだけの冷静さは微塵もなく、故に遠くからリツシュを見つめる視線に気づく事もなかった……。

敵地横断の旅〜友情〜

ギラギラと光る双眸がローブ姿の男を捉えている。ローブ姿の男―リツシュ―はその視線に気づかず、興奮冷めやらぬ表情で辺りを見回すと短く呪文を唱え、目の前に小さな明かりを出現させて足早に歩きはじめる。

リツシュはメレイのゴーレムの性能からこの辺りの遺跡が魔導士の時代のものだと推測していた。

知の理を極めた魔導士の遺産……そう思うとリツシュは心の底から笑いがこみ上げそうになる。それは、魔導士の力“魔導”が魔術とは異なった体系を持っているため『魔術的才能に左右される事なく扱える』といった特殊な性質があったからだった。

リツシュ自身、己を優秀な魔術師とは思っていない。

たしかに魔術師ギルドで専門的に魔術を学んだが、並のレベルの魔法しか修得できなかったのだ。故にギルドの幹部にも導師―魔術の教師―になる事も叶わず、冒険者に身をやつして細々と生きてきた。そんな魔術師として将来の見通しも立てられなかった自分に巡ってきたこの機会、運が自分に向いてきたと思うのも無理はなかった。

……リツシュは草木をかき分け、道無き道を歩く。魔法の力を感じる方向に向かってまっすぐ歩き続けた。

(……魔術を学んだ者として、この機会は絶対に逃せない。みんなには悪いが、魔術師の性だと思って許してほしいものだ……)

リツシュは心の中で軽く懺悔するとさらにその足を早めた……。

――いつの間にか眠っていたラムダは、寒さを感じて目を覚ました。
(……いけない。寝てしまったようだ……)

部屋の中はすでに暗くなっている。皆、心配しているだろう。ラムダはすぐ様装備を整えて広場へ向かった。

広場にはゴーレムが先程の体勢のまま佇んでいる。その前にロープ姿のメレイ、アルル、それにアルベリヒの三人が焚き火を囲んでいた。

「——ラムダ、いったいどこに行つてたんですか？」

開口一番、アルベリヒの小言が飛んでくる。

「この地は安全ではないのですよ。それを一人でフラフラと……アルル姫の時もそうでしたが、もう少し自重して下さい」

アルベリヒの口調は少し厳しいものだったが、その言葉の裏側に彼の優しさが見えた。

「……すいません」

ラムダは頭を下げてから焚き火のそばに近寄る。アルルはそのやりとりを見て表情を綻ばす。

「……メレイ殿、この辺に静かな場所はないか？」

そして薪を足すメレイに声をかけた。

「そっちの方に空き地があるわよ」

メレイはラムダの来た方向を木の枝で指し示す。それから木の枝を焚き火の中へ放り込んだ。

「かたじけない。ラムダ、すまんがちょっと付き合ってくれないか？」

アルルはラムダに声をかけるとメレイが指し示した方向に向かって歩きだした。ラムダはその後に続いて行く。

「……あの二人、デキてるの？」

二人が離れていくのを見て、メレイはアルベリヒに尋ねる。いかにも主君と配下の様に見えるのだが……二人の關係にそんな印象を持つていただけにメレイは不思議に思ったのだった。

「……さあ、どうでしょう。私にはわかりませんね……」

色恋沙汰に疎そうなラムダと見るからに真面目一辺倒のアルル姫。組み合わせとしては面白そうだが、とても恋愛關係に発展するとは思えない。アルベリヒは両手を上げる仕草をする。

「……あの二人は、どちらかというと恋の語らいよりも剣を交える

方が似合う様な気がします……」

「私もそんな気がするわ」

そう言つてメレイは笑つた。それにつられてアルベリヒも口元が弛む。

まだ旅の途中。心休まる時は必要だ。恋にせよ何にせよ、時間のあ
る時くらい好きにさせても問題はないだろう。特に一国の王女とし
て自由な交流をあまり持てないアルル姫にとっては。

（……こんなにまつたりとした時間を過ごせるとは……神に感謝し
なければなりませんね）

アルベリヒは目を閉じると印を切り、静かに自身の崇める神に祈り
はじめた。

…… 集落の隅にある空き地に辿り着いたラムダとアルル。

陽が沈むと空気がより一層冷たく感じる。山中にあるだけあつて辺
りはどんどん暗くなり、互いの表情さえはつきりとは見えなくなつ
ていた。

「——ラムダ、我々の選択は正しいと思うか？」

振り返りもせずアルルは話し始めた。

「……ジータ・バロム達の目をかいくぐり、無事リズレンまで辿り
着く事ができるだろうか？」

心なしかアルルの口調が固く聞こえる。ラムダは考えてみた。

（……正しいか、正しくないか……）

リズレンに行つてマルク・ケラーノの現状や魔導士の情報を伝える
事。

ローラントに行つて勇者と共に魔導士達と戦う事。

どちらも正しい気がする。

「……俺には正しい答えはわかりません。そういう話はアルベリヒ
さんの方が得意ですよ。ただ、俺はこの旅が正しいと思うからここ
にいます。国家間の情報網が遮断された今、危険でも誰かが直接伝
えなければならぬし、それが俺達の使命だと思つてますから……」

ラムダは思った事をありのままに話した。正義のためとか平和のためとかじゃない、敢えて言うならば使命感の様なものが自分をこの旅に駆り立てていると思っっている。

戦争が始まり、内乱の鎮圧戦の責で騎士の称号と家名を剥奪され、冒険者となった自分。そんな自分に芽生えた使命感。振り返ってみるとすべての事がこの旅のために起きたんじゃないかと思えるほど運命的な“何か”をラムダは強く感じていた。

その言葉を聞いてアルルはラムダに振り返る。わずかに迷いの色はあったが、力強く頷くと表情に笑みが浮かんだ。

「……ラムダは強いな。迷いがまったく感じられない。それにひきかえ私は迷っていたよ……国を再興するため、民のため、そしてアルカディアの未来のため。私はそんな重圧に飲まれ、いったい何のために戦っているのか見失っていたよ……」

アルルは自嘲気味に笑うとラムダの目をまっすぐ見据えた。

「……本当にまっすぐで曇りのない目をしているな。どうだろう、私の目は曇ってないか？」

ラムダは見つめ返す。

（……綺麗な目をしている）

果てのない青空を彷彿させる様な青い瞳。その目にラムダは清らかさを感じる。

（……とても剣士とは思えない優しい光を宿している）

ラムダは思わず見とれそうになり、息をひとつ吐いた。

「……リーファ、いや、す、すいません——」

ラムダはアルルの真名を口にした事を猛省する。

王族にとって真名とはごく限られた親しい者の間でしか使わない真実の名前であるという。それを口にする事は大変な不敬行為だ。王制社会において、王族に対する不敬行為は即死刑。ラムダは己の不明を恥じてひざまづき、深々と頭を垂れた。

「……ラムダ、二人でいる時は今まで通りリーファと呼んで。私達はある時に深い絆で結ばれたはず……そう、身分を越えた熱き友情

でだ。だから気にするな。それに敬語もいらん、私達の仲はそんなに浅いものではないだろう？」

アルルはそう言ってラムダの肩に軽く手を乗せた。顔を上げれば、優しい笑みを浮かべるアルルがいる。ラムダはその眼差しにあの時かわした友情を思い出し、アルルの手を取ると立ち上がった。

「——リーファの目は綺麗だよ。曇ってたのは俺の心の方だ……身分に惑わされ、大切な事を忘れそうになったよ……」

ラムダは頭を掻いて苦笑いした。それにつられてアルルの頬も弛む。

（……やっぱり、ラムダは変わらないな……）

無邪気に笑うラムダを見て、アルルは心が安らぐのを感じた。

アルルはラムダに言葉にはできない“何か”を感じ、その“何か”に強く惹かれていくのを不思議と心地よく思っていた。

（……この不思議な感覚が“運命を感じる”という事なのか？）

もしかしたら、そうなのかもしれない。そう思う自分に少し戸惑う。しかし、それを否定する気にはならなかった。

目を向ければ、いつの間にかラムダは別の方向に視線を向けていた。何かを見つけたのか、その表情は真剣なものに変化している。

「どうした？」

アルルも同じ方向を見る。そこには特に何もなかったが、何故か妙な胸騒ぎを感じた。

（……何もないが、悪い予感がする）

そう思った瞬間、ラムダは広場の方へ駆け出す。それを見てアルルも後に続く事にした。

……魔法の明かりが道無き道を照らす。かすかな魔力を辿り、リッシュは黙々と歩いている。

（どこだ、そろそろ出てきても良さそうだが……）

すでに暗くなっているせいか、木々のざわめきが不安を煽る。しばらくの間歩き続けたのに、まったく遺跡らしきものが現れない事に苛立ちと焦燥感を感じていた。

（おかしい。魔力の波動は強く感じているのに、それらしきものが全然見当たらない……もしか、この地に施された仕掛けに誘導されたか？）

リツシュはここにきてようやく冷静さを取り戻す。そして、感知している波動が魔物のものである事に気付けなかった自分の不明を恥じた。

——音も無く迫り来る影。精霊達は息をひそめ、その影をやり過ぐす。影はゆっくりとだが、確実にリツシュに近づく。だが、その影の波動を感知できないのかリツシュはまったくその事に気付けなかった——。

敵地横断の旅〜走る！〜

陽も沈み、焚き火の炎が辺りを照らしている。

そこに揺らめく影が二つ……アルベリヒとメレイの二人が暖をとっていた。

「……そういえばメレイさん、この辺りに出る魔物はこういったものが多いのでしょうか？」

住人達が皆、山を下りなければならぬほどの脅威。この一帯に出没する魔物の正体とはいったい何なのか？

この先に進むためには知っておかなければならない。アルベリヒは木の枝で地面に何かを書いているメレイに聞いてみる事にした。メレイはアルベリヒの方を振り向かず口を開く。

「……遺跡の番人によって異形と化した獣達よ。遺跡の番人とは、父が遺跡探索に行った際に目覚めた過去の亡霊で、強力な魔法を使う古代の魔術師……」

メレイはそう言う自嘲気味な笑みを浮かべ話を続ける。

「……この子、シーマを手に入れるまでは何事もなかったの。しかし、シーマが“魔導”の産物である事を知った父は遺跡の奥へ足を踏み入れ、誤って封印された過去の亡霊を放ってしまったのよ……解放された魔術師は獣を異形の生物に変え、この一帯を地獄に変えようとした。私達はそれを防ごうと過去の亡霊を封じるために戦った。しかし戦いに敗れ、父をはじめ多くの者が犠牲になり生き残った者達は故郷を捨てて山を下りる事にしたの……」

その口調は淡々としたもので聞いてて重さを感じさせなかった。だが、滲み出る苦悩は隠し切れない。焚き火の炎を見ながら木の枝を弄ぶメレイの手は落ち着きを無くしていた。

アルベリヒはそんなメレイに掛ける言葉が見つけられず、揺れ動く焚き火の炎を眺める。そして無言のまま情報を整理しはじめた。

遺跡。それも魔導士の造った遺跡。この山脈地帯にそんなものが隠されていようとは……アルベリヒは軽い目眩を覚えた。

（魔導、ですか……つくづく魔導と縁があるようですね……）

魔導が関わるなら、今後のためにも遺跡に立ち寄るべきか。それとも避けるべきか。

（……いや、ラムダがこの事を知れば迷わず遺跡に向かうでしょうね……）

考えるまでもない。ラムダは己の安全よりも正義を選ぶ男だ。どんなに困難でも、何の得にならない事でも、ラムダは苦しむ人達を見捨てたりしない。そして、正義に燃えるラムダを止められない事をアルベリヒは知っている。

（……また厄介事に巻き込まれそうですね……）

事情を知ったからには見捨てる事はできない。二人が戻って来たら本格的な魔導対策を考えなければならない、アルベリヒは数少ない魔導に関する情報を思い起こし、その対抗策を練る事にした。

ハイペースで走るラムダに引き離される事なく後に続くアルル。息ひとつ乱さずその背を見ながら走っていた。

アルルは向かっている場所の空気が微妙に変化している事に気付き、気を引き締める。異質な感覚とでもいうのか、魔法力とは少し違う感覚を感じたからだった。この付近で“何か”が起ころうとしている……そんな予感めいた考えが頭に浮かぶ。

（……ラムダはそれをいち早く気付き駆け出したのか？ 私ですら気付けなかった微妙な変化に……）

魔法が使えないラムダに、かすかな魔法力を感知する術など無いはず。それなのに何故、自分よりも先に気付けたのか……アルルはラムダの勘の鋭さに驚きを感じていた。

走る二人はアルベリヒとメレイのいる広場に駆け寄る。焚き火で暖をとる二人は駆け込んできたラムダ達の方に振り返った。

「――どうしました？」

何かあったのか、それとも事前に危険を察知したのか、アルベリヒはラムダのただならぬ雰囲気を感じ取り声を掛ける。

「何かあったんですか？」

ラムダは頷くと外の方を指さしまくし立てる様に喋りだした。

「あっちの森の方で一瞬、殺気めいたものを感じたんです！ 気のせいかもしれないけど、なんか悪い予感がするんで見に行こうと思っただんですが、森にどんな危険があるのかわからないのでメレイさんに聞こうと思い立ち寄りました」

よほど焦っていたのか、少し早口気味に事情を説明する。そのラムダの切迫した様子にメレイの表情が厳しいものに変わった。

「……あっちは遺跡がある……まさか……」

ラムダが指さした方を睨みつける様にして凝視するメレイ。その目はまるで、その場所が見えているかの様な鋭い眼光を放っている。

「……そう言えば、リツシュ殿はどこにいる？ 彼もこの気配を感じてないのか？」

リツシュがこの場にいない事にアルルは気付いた。

「もしかして、リツシュ殿の身に何かあったとか？」

ふと口にした言葉だったがメレイの反応は過敏になる。体が一瞬ビクツと震え目を見開く。その様子は明らかにおかしい。

「いけない！ 遺跡の番人が動き始めたかも！」

そして、手にした木の枝を放り捨てて叫ぶ。

「この近くには古代遺跡があつて、そこには封印を解かれた番人がいるのよ。リツシュって言ったっけ？ その魔術師の魔力を感知して番人が動き出したかもしれない……もしそうだったら急いでリツシュを見つけないきゃまずい事になるわ！」

メレイは切迫した表情でみんなを見渡した。事前に話を聞いていたアルベリヒは神妙な顔付きに変わる。しかし、遺跡の話が聞かされていないラムダとアルルの二人はメレイの話をすぐに理解できなかった。

「……後で話そうと思ってたんだけどちょっと遅かったわ……詳しく話してる暇なんてないから簡単に言うわよ。この近くの遺跡に邪悪な亡霊がいるの。そいつは生き物を変質させる力を持っていて非常に危険なの。もしそいつが動き出したのなら一人でいるリツシュが危ないのよ！」

いまいち事情を飲み込めなかったが、ラムダはリツシュの身に危険が迫っている事を知ると駆け出した！

「ラムダ！」

その行動の早さにアルベリヒもアルルも反応できずに止める事ができなかった。メレイだけはすぐさま石の巨人に指示を出すとその肩に乗り込む。

「——シーマ、アルベリヒも肩に乗せて。アルル、あんたはシーマの左手に乗って……全力で行くからしっかり捕まってなさいよ！」
そう言うともレイは石の巨人に命令を出した。

「シーマ、遺跡まで全力疾走よ！ 途中、ラムダを拾うのを忘れないで！」

石の巨人は身を少し屈めたかと思うと勢いよく走り出した。そのスピードは大きさからは想像もできないほど速い。アルベリヒとアルルは落とされない様に風を切って駆ける石の巨人に必死に捕まった。

敵地横断の旅〜遺跡へ〜

——そこは、宝の山だった。

目の前に映る光景は、今まで見たどの遺跡よりも保存状態が良く当時の面影を色濃く残していた。

見慣れない形状の魔法陣、特殊な魔法言語で刻まれた石碑、各所に貼り付けられた劣化防止の護符など、自然災害により傷んだ箇所以外のほとんどが手つかずの状態で置かれている。

「……この遺跡の存在を伝えるだけで、魔術師ギルドでの地位は不動のものにできるだろう……」

リツシュの声はわずかに震え、沸き上がる興奮を覚えていた。思わず叫びたくなる衝動に駆られる。

……それもそのはず魔導士に関する資料は極めて少ない。

“魔導大戦”以降、魔導に触れる事は長い間禁忌とされ、魔術師ギルドが再び魔導に関心を寄せた時には、すでに貴重な文献や資料のほとんどは灰となってしまうていた。よって残された情報はわずか、しかも言い伝えによる不確定なものばかりが多いので、リツシュが眼前の光景に思わず熱くなるのも当然といえよう。

見るものすべてに貴重な価値を見いだせる。魔導の知識が少なくとも、遺跡の状態から見て現在の魔法技術を遙かに越えている事は明白なのだ。

遺跡から発せられる魔法の力にリツシュの感覚は完全に麻痺してしまふ……自身の精神状態が極度に高揚している事にさえ気付かず、リツシュは無謀にも何の警戒も抱く事なく遺跡の奥に足を踏み入れてしまった！

リツシュの姿が遺跡の中に消え、再び静寂を取り戻した空間。

そこに、音も無く影が現れた。人型の“それ”は、全体が黒い霧で包まれており、その姿をはつきりと晒していない。

唯一見て取れるのは妖しく光る瞳のみ。その視線は遺跡の入り口に向けられると、ゆっくりとした足取りでリッシュの後を追って行った……。

——三人の人を乗せて荒れた道をひたすら走る石の巨人。そのスピードは馬の走る速度を軽く上回っていた。

石の巨人は前方を走る戦士の姿を捉える。そして速度を落とす事なく空いている手で戦士——ラムダ——を掴み上げると一直線に駆け抜けた。

後ろから掴まれたラムダは、急に体が持ち上げられた事に驚きの声を上げて振り返る。それにより石の巨人が自分を拾い上げた事を知り、固かった表情が安堵のものに変わる。

「ラムダ、体の方は大丈夫？」

石の巨人の肩に乗っているメレイが声を掛ける。走りながら掴み上げたので、その衝撃を心配しての言葉だった。

「大丈夫です！」

ラムダは気合いのこもった大きな声で答える。

どうやら衝撃による痛みはない。石の巨人は見た目とは裏腹にラムダの体を優しく拾い上げてくれた様だ。

ラムダの答えにメレイはホッと胸をなで下ろす。これでダメージがあつたら笑い話ではすまされないから。

——石の巨人は速度を弛める事なく走り続けた。そのおかげで目的地まであっという間に辿り着く事ができた……。

「——これは、魔導士の遺跡！？」

目立った損傷もない遺跡を見てアルルは驚きの声をあげる。剣技とともに魔法も学んでいたアルルは、この遺跡の正体を一目で看破したのだった。

「……やはり……」

アルルの声にアルベリヒは小さなため息をつく。

やはり魔導とは縁がある様だ。

『運命』というものをまざまざと感じさせられ、思わず天を仰ぎたくなったのでアルベリヒは小さく聖印を切って気持ちを落ち着ける。

「……どうやら、遺跡の中に誰が入ったようね……」

地面に残る足跡が遺跡の入り口に続いているのを見つけ、アルルは緊張した面持ちで口を開いた。

「……足跡から判別すると、これはついさっき付けられたもの。しかも足の大きさ・歩幅・圧力の掛かり方からして性別は男性、歩き方から見て魔術師か僧侶ね。おそらく、リツシュ殿である可能性が高いわ……」

みんなの表情に緊張が走る。恐れていた事が現実味を帯びてきたからだった。

アルルは、不意に腰に差した剣を抜くとほのかに光る刀身に手を当てた。その不可解な行動に皆、疑問の目を向ける。

アルルはその視線の意味に気づき、剣を指さし説明した。

「……この聖剣の光には、心の動揺を鎮めてくれる力がある。リツシュが遺跡内にいるという状況の中、これからリツシュを連れ戻しに遺跡に入るのだろう？ おそらく古代の魔導士が造った遺跡であるうこの遺跡に入る上で、平常心を強く保たねばならないため剣を抜いたのだ……」

そう言つて光を放つ聖剣を皆にかざす。刀身から発せられる柔らかな光に照らされると、不思議と心の動揺が薄れてゆくを感じた。リツシュを放つて置くわけにはいかない。皆、遺跡に入る覚悟はできている。

「——よし、行くか！」

ラムダはまっすぐに遺跡の入り口に目を向けて一声あげる。そして剣を抜き、盾を構えると先頭に立って歩き出した。

アルルはそのすぐ後ろにつく。

アルベリヒは少し離れた位置取りで、メレイは石の巨人をその場に待機させると最後方について遺跡に向かって歩き出した。

見えない重圧

遺跡内に侵入したラムダ達。先陣を切って通路に足を踏み入れたラムダは、想像もなかった光景に息を飲んだ。

通路には白い石が敷き詰められており、その石は淡い光を発していた。しかも明かりが無くとも不自由しない程度の光度を保っていたのだった。

現在の魔法技術では恒久的に光を発する石など生み出せない。石に魔法の光を付与しても、その持続性はたかが知れている。魔法の知識に疎いラムダでさえ、この遺跡の魔法技術の高さが瞬時に理解できた。

「……凄い、としか言えないな……」

ラムダはそう呟くと隣に立つアルルを見た。

魔法剣士と謳われ、その魔法使いとしても高い能力を持つといわれる彼女の目には、この遺跡はどの様に映っているのか？

不謹慎と知りつつもラムダはアルルの反応が気になっていた。

「……この石は……たしか《白鉱石》という魔法技術により精錬される魔法鉱物の一種で、主に室内を照らすために使用される光を宿した魔法石……」

アルルは特に驚いた様子も見せずに淡々とした口調で遺跡を分析し始めた。

「……過去の遺跡において、この《白鉱石》はそんなに珍しいものではない。マルク・ケラーノにある古代遺跡でも《白鉱石》は多数発見されており、魔術師達による研究によりその製造理論もすでに解明され……ん？」

アルルは不意に淡く光る通路にしゃがみ込んだ。

「——これは足跡……この跡はブーツではないな。この跡から見

て材質は革製、しかも踵部分がない……サンダルか？ サンダルは僧侶か魔術師が履く物だから、リッシュ殿はここを通った事になるな……」

その足跡に触れながらアルルは呟いた。

——通常、冒険者の装備する靴は二種類しかない。

ひとつは戦士達が装備するブーツタイプの靴だ。

ブーツタイプの靴の主な特徴は、靴底に堅くなめした革の板が付いており、つま先と踵部分に鉄などの金属で補強を施した耐久性に優れたものである。だが金属を使用しているため若干の重量感があるので長時間の歩行には適していない。靴としては機能性が無いのだ。その事から完全な防具、戦士の装備と言えよう。

一方のサンダルタイプの靴は、比較的柔らかな革で作られており、靴底に薄い革の板を敷いた歩行を重視した軽量型の靴である。耐久面でブーツに劣るサンダルだが、靴としての機能性はブーツよりも優れている。そのため、サンダルは主に僧侶や魔術師が履くものとされている——。

通路に微かに残る足跡……よほど注意深く観察しなければ見逃してしまいそうなわずかな痕跡。この足跡からリッシュが遺跡の奥へまっすぐ向かっている事が伺い知れる。

「なるほど、この跡を辿ればリッシュさんに近づけそうですね」
アルベリヒはアルルのもとへ進み出る。そしてアルルの見つけた足跡を観察する。

「踏み込みが軽い。リッシュさんはあまり周りを警戒せずに先へと進んでいる様ですね……」

アルベリヒの言葉にアルルも頷く。

通常、探索などで遺跡や迷宮に入る場合、周囲を警戒しながら進むので自然とその歩みは遅くなる。畏や敵の出現に対して迅速に対応できる様、無意識のうちにしっかりと地を踏んでいるものだ。無

論、例外はあるのだが少なくとも未知の場所を探索する時に軽い足取りになる事はない。

この事からリツシュの遺跡内での行動に不自然さが見えてくる。しかも冒険者として身につけているはずの警戒心や危険に対する勘が働いていない事から、リツシュに何らかの変化が起きていると見て間違いない。

「……いくら手つかずの古代遺産が目の前にあったとしても、欲に目が眩んで危機意識を無くすとは思えませんね。やはり、何かしらの力によって心理操作を受けたと見るべきでしょう……」

おそらくメレイが話していた過去の亡霊の仕業に違いない。アルベリヒはリツシュが亡霊の魔力に囚われ、遺跡の奥に誘導されていると推測した。

亡霊は古代の魔術師、その魔力は極めて強力なはず。リツシュは精神支配を受けている可能性が高い。

「——つまり、操られているって事ですか？」

ラムダは誰もが言うのを避けていた言葉を口にした。

「……おそらく、ね」

メレイは静かに頷く。

それぞれの胸中によぎる不安。果たして、リツシュと戦う事ができるのか？

淡く光る白鉱石の通路の先——遺跡の深部——に、最悪の事態が待ち受けている事も考えなければならなくなった。重い空気が漂いはじめる……。

「——ちよつと待て。急げばまだ間に合うでは？ こうしてる間にもリツシュ殿の身に何が起こるかかわからぬではないか？」

そう言うところアルルは勢いよく立ち上がった。

「迷ってる時間など無い。先へ急ごうじゃないか」

アルルは三人に振り返り、重い空気を払拭するかの如く力強い口調で言うところ先頭に立った。

「……そうですね。まだ決まったわけじゃないですし、急げば

間に合うかもしれないですね！　行きましょう！」

憶測に捕らわれ戦気を乱しては、いざという時に力を発揮する事もできない。アルルの言葉にラムダは奮起する。

盾を構え直し、剣の柄も握り返す。

「まだまだ先は長い。こんなところで時間を潰してる暇はない！」
ラムダは己に言い聞かせる様に気合いを込めた。

戦士二人の勢いに押されるアルベリヒとメレイ。だが、そう簡単に気持ちを切り替えられるほど事態を樂觀視する事はなかった。

（……ずいぶん単純ね。あの恐ろしい力を知らないから？　この遺跡を見れば、脅威を感じ取れると思ったんだけど……まあ、いいわ。知ったところで士気が下がるだけだし、無駄に不安を煽る必要なんてないわね……）

あくまでも前向きな姿勢で臨む二人にメレイは冒険者の姿を垣間見た気がした。しかし、自分にとつては遺跡の存在が村の存亡に関わるが故に慎重にならざるを得ない。その精神の強さが続く事を願わずにはいられなかった。

もう一方のアルベリヒの方は、俄然やる気を出したラムダを見て啞然としていた。

（……事の深刻さが全然わかっていない……）

なんて単純なんだ。リツシュが敵対するかもしれないというのに、あくまでも前向きな思考で臨む二人にアルベリヒは思わず嘆息した。

（……百戦錬磨のアルル姫ならまだ納得できる部分もある。魔法にも精通しているあの方ならリツシュを救う何かしらの手立てを持っているに違いない。それに魔導士と戦って生き残ったくらいだ、その戦闘力も我々の想像以上のものだろう。しかし、ラムダには確たる根拠も手段も無いはず……まさか、信念さえあれば切り抜かれるとも思っているのか？）

それは十分に考えられる……ラムダは己の信ずる道はとことん突き進む男だ。それ故に騎士の称号を失い、あまつさえ家名を名乗る事も許されぬ身になったくらいだ。

信じる事で道を切り開く。どんな困難に遭遇しようともラムダは愚直なまでにその気持ちを持ち続けるのだろう。

（……相手が誰であろうと関係ないのでしょね。ラムダはただ単にリツシュを助けただけなのでしょう……）

この事態においても単純明快な思考を持つラムダに、アルベリヒはもしかしたら彼のような強い意志を持った者が運命を切り開くのではないか、と思わずにはいられなかった。

——《白鉱石》が敷き詰められた通路は、奥の方までまっすぐと伸びている。しかも両脇の壁が普通の石のため、奥の方は《白鉱石》の淡い光で少しばやけて見える。まだ探索は始まったばかり。果たしてリツシュを見つ出す事はできるのだろうか？

この先に待ち受ける“何か”に先の見えない不安とかすかな希望をそれぞれの胸に抱き、四人は再び歩き出した――。

立ちはだかる壁

白鉱石の通路はまっすぐに伸びている。その単調な造りに皆、一抹の不安がよぎる。

魔導の栄えた時代に造られた古代遺跡にしては、その構造があまりにも単調すぎるから――。

「……明らかに侵入者に対する仕掛けがある。それが何なのかはわからないが、この先に何かしらの“罠”があると見て間違いないでしょう……」

奥へ進んでいるのにも関わらず何も起きない事にアルベリヒは“罠の存在”を確信する。

通常、遺跡や迷宮などには所々に罠が設置されているのが常だ。それは警告や脅しの効果を狙った罠を仕掛け、侵入者が奥へ入らない様、または時間を浪費させ気力・体力を消耗させる目的のもの――サブ・トラップと呼ばれる――も含めて、である。

通常はそれらの罠を仕掛ける事により、侵入者を撤退させやすい状況を作り出したり致命的な罠に掛かりやすくするはずなのに、この遺跡には今現在その類の罠が全くなかった。

この状況、他のそれなら既に侵入を許し罠を解除されていると見て良いのだが、通路上で争った形跡も罠が発動した痕跡は見当たらない事から少なくとも初めから罠は無く、この先に侵入者を必ず仕留めるに足る致命的な罠があると見た方が妥当であると言えた。

「……この先、何があっても不思議では無いでしょう。もしかすれば魔導による罠があるかもしれません……」

罠が無いという事は、侵入者を確実に仕留められる場所へおびき寄せるためだ。アルベリヒの言葉に皆頷く。

「……“番人”がいるから、罠を設置する必要が無いのよ……」
遺跡に侵入してから緊張した面持ちでいたメレイが口を開いた。

「……時間が無くてラムダ達には詳しく話ができなかったけど、この遺跡には私達が“番人”と呼ぶ遺跡を護る者がいるの。“番人”は古代の魔術師の亡霊で、現代の魔術師よりも遙かに超越した力を持っているの。おそらく魔導の力だと思うけど、不可思議な力を使う“番人”の前に私達は成す術も無く破れている……」

厳しい表情で語るメレイ。

超越した力を持つ番人。その存在が罠の設置を施さない理由なのかもしれない。今までのメレイの話や遺跡に入ってから態度を見ると、そう結論付ける事ができる。

ラムダとアルルは、魔物の森で戦ったりゾットを思い浮かべて気を引き締めた。

——不気味な静けさが漂う中、遺跡の奥へと進んで行く一行。進むにつれて白鉱石の光が靄の様に床を包み込んでいく。現在、その淡い光は足首の辺りまで靄状に広がっていた。

「……足元が白鉱石の光で見えなくなっている、という事は白鉱石の純度が高くなってきているのか？」

アルルは白鉱石の輝きが強くなってきている事に怪訝な表情を浮かべる。

並んで歩くラムダの方はそれに対して特に気にした様子も見せず、ただまっすぐ前を見つめていた。

「……何かある。行き止まりか？」

ラムダが不意に口を開いた。皆その呟きに反応して奥の方を見る。だが、白鉱石の光のせいではよく見えない。ラムダは目を細めると今度ははつきりと言った。

「行き止まりだ。いや、壁があるって事は曲がれるのか？」

白鉱石の光で通路の先が霞む中、ラムダだけはそれをはつきりと認識できている様だった。

アルルも目を細めるが光ではやけてさっぱり見えない。

「ラムダ、はつきりと見えるのか？ では、距離はどうだ？ 光

のせいで距離間がつかめない。近いのか？」

曲がり角なら、敵が潜伏している可能性もある。アルルは剣の柄を握りしめ、前方に集中するとラムダの答えを待った。

「……距離は、長弓の射程範囲ギリギリです。魔法はもう少し近づかないと効果が無いかもしれません」

ラムダは、ざっと距離を換算するとメレイの方に振り返った。

「メレイさん、もうすぐ魔法の効果射程範囲に入ります。対応の方、お願いします」

そう言ってラムダは盾を構えて歩行速度を上げた。アルルもそれに併せる。

「メレイ殿、私達が先行して行くから、距離を置いて来てくれ」

二人はその速度を上げて奥へ突き進んで行く。メレイは少し間隔が開いたのを確認すると、アルベリヒに合図してゆっくりと前進した……。

「——行き止まりじゃないか！ 仕掛け扉でもあるのか？」

辿り着いた先は行き止まり。ラムダは壁に剣先を当ててみる。

「びくともしない。リッシュさんはどうやってこの先に進んだんだ？」

「……ラムダ、この壁には仕掛けがあるぞ。これを見る……」

アルルはそう言って壁に手をそっと触れる。
すると――。

「えっ」

ラムダは驚きの声を上げた。アルルの手が飲み込まれる様に壁の中に入ってしまったのだ。

アルルは壁から手を抜くと今度はラムダの手を取って壁に押し当てる。だがラムダの手は壁の表面を撫でるだけだった。

「……私の手は何の抵抗も無く壁を突き抜ける。しかしラムダの手は壁を通らない…… 罠が無い理由がわかったぞ。この遺跡、魔法力の無い者には侵入できない造りになっている。たとえば、この壁

は魔法力のある者しか通さない仕掛けが施されているという事。この遺跡、魔術師のための遺跡とでもいうのか？」

武者修行の旅でアルカディアの様々な迷宮や遺跡を冒険した経験を持つアルルだったが“魔術師を選別する”という特異な仕掛けが施されたこの遺跡には驚きを隠し切れなかった。

「……つまり、魔法力の無い者はこの先に進む事ができない。考えようによってはこれ以上の罠は無いな。魔法力の無い者、戦士を拒絶する遺跡か……」

アルルは腕組みをし、後ろから来るメレイとアルベリヒに目を向ける。

（……私とメレイ殿は通る事ができるから問題ない。しかし、ラムダとアルベリヒはどうする？ 魔術師しか通さないなら、それ以外の者を排除する仕掛けだってあるはず。おそらく、今まで何もなかったのは私達魔法力を持つ者と一緒だったからだろう……）

戦士を特定して造った遺跡。この遺跡を造った者は、おそらく“戦いの相性”というものを熟知した者だ。

同じ魔法の使い手には後れを取る事はまず無い。取るとすれば魔法を持たぬ者―戦士―という事を遺跡の製作者は知っているのだ。

魔法は人類が神より授かった偉大な英知だ。その力は極めて強力な力を持ち、時に神や悪魔を役するにいたる無限の可能性を持つ。その偉大なる魔法を打ち破る術など限られている。

それが、己のすべてを掛けた時の戦士の一撃だ。遺跡の製作者はそれを考慮し、この様な仕掛けを施したのだろう。

仲間―魔術師―だけを通し、侵入者―敵対者でもある戦士―を排除する。しかも遺跡荒らしの侵入をも防ぐ……この遺跡を造った者は、恐ろしく頭の回る者の様だ。

そう思えるほどの高度な造りにアルルは、この遺跡に何かとてつもないモノがあると思えて背筋に冷たいものが走った――。

崩壊

「……魔法力の有無を選別する壁……メレイさん、この遺跡にはこの様な仕掛けが他にもあるのですか？」

先行して行ったラムダ達の後からやって来たアルベリヒは、目の前を防ぐ不思議な壁に目を見開いた。

「……もし所々にこの様な仕掛けがあるとしたら、外敵の侵入の跡が見られないのも納得できます。戦士達をその場に足止めし前衛を守る者を排除、おそらくはこの先に敵を潜めて魔力を持つ侵入者を迎え討つ……これ以上の罠は無いですね。メレイさん、この遺跡ではどの様な敵が現れるのですか？」

そして、隣で立ちかはだかる壁を凝視するメレイに声をかける。

メレイは驚きの表情を浮かべ、全身を震わせていた。おそらくアルベリヒの言葉は耳に入っていないだろう。

メレイは声を震わせて誰に言うわけでもなく呟いた。

「——前に来た時は、こんな行き止まりなど無かった……な、何故、壁があるの？」

血の気が引いた様に青ざめている。目の前の壁にメレイの心は恐慌しそうになっていたのだ。

入る度に構造が変化するともいうの？

これまで一本道を辿っている。他の通路に迷い込むなんて事は無い。

メレイは以前見た状態との違いに別の遺跡に迷い込んだのではないかと錯覚しそうになる。そして、その変化に“力”の差を感じずにはいらなかった。

「メレイ殿、どうかしたのか？ この仕掛けに……」

怯えた様に体を震わす彼女を見て、アルルは二の句が浮かばなかった。

（やはり、この遺跡には何かある。メレイ殿のあの動揺はそれを如実に物語っている……）

アルルは言葉を切り壁を見やる。

（……ここまで罾も無ければ敵も出てこない。これだけの魔法技術があるなら、罾だけでも侵入者を排除するのはたやすいのではないか？ 何故、我々の侵入をここまで許すのだ。それにリツシュ殿の足取りが消えているのにも疑問を感じる……）

考えれば考えるほど、謎は深まるばかり。

メレイの事も心配だが、今はこの壁をどう越えていくかの方が重要だ。ここでラムダとアルベリヒと離れるわけにはいかない。

視線の先には剣先で壁をつつくラムダがいる。彼は彼なりにこの状況を打破しようとしている様に見えた。

（……破壊して行くしかないか。だが、壁に魔法は効かないだろうな。かといって物理攻撃で壊せる代物だろうか？ 試してみる価値はありそうだが、敵を呼び寄せはしないか？）

いつまでもこの場に留まっているわけにもいかない。先を行っているリツシュの安否も気になるし、まだ遺跡の謎も解けていない。

前に進まねば事態の進展はあり得ない。

ここは、多少の危険を覚悟で壁を破壊してみるか。まさかこれだけの魔法技術を持つ者がこの周辺に壁を開く仕掛けを施すとは思えないし、もし仕掛けを施すなら壁の向こう側に設置するはず。

（ここまで何事も無く無傷で来ただけでも運が良かったのだ。

試してみるか……）

アルベリヒは思案に耽っているし、メレイは動揺を隠し切れずにいる。ラムダにいたっては意味無く壁を剣でつついている始末。とても先に進める見込みなどない。

「……ラムダ、これから壁を破壊しようと思う。少し壁から離れてくれないか」

アルルは剣先でひたすら壁をつつくラムダに声をかけた。

「え？」

ラムダは手を止めてアルルに振り返る。

「壁を壊す？」

額面通りに受け取って良いのかわからなかったが、ラムダはとりあえずアルルの言葉に従い壁から離れる。

「……アルル姫、この壁を破壊する術でもあるのですか？」

アルルの言葉にアルベリヒは耳を疑う。現代の魔法技術を遙かに超越しているであろうこの代物を破壊するというのだから。

いくら“魔法剣士”として名の知られたアルルとはいえ、この壁を破壊する事などできるのだろうか？

「このままでは立ち往生するわけにもいくまい。魔法は効かなくとも打撃は効きそうだし、それに試してみたい技がある。うまく行けば、もし壁の向こう側に何者かが潜んでいたとしても対処できるだろう、私の技を信じてみてはくれまいか？」

そう言ってアルルは皆を見回し答えを待った。

アルカディアでも名の知れたアルルの剣技。その技量を信じないわけではないが、魔導の産物かもしれないこの壁にその技が通じるのか？

剣を知らないアルベリヒだったが、剣が魔導に勝つ事は余程の技量が無くばあり得ないという事は知っている。彼からして見れば、下手な刺激を与えて状況を悪化させる事態だけはなんとしても避けたいと思っている。その不安がアルベリヒの返答を鈍らせた。

「……どうやって、あの壁を破壊するというの？」

なんとか震えを抑えたメレイは、アルルの言葉に疑問を抱き聞き返す。

「その壁は魔法力を持つものを通す仕掛けが施されているんですよ？ という事は、魔法は貫通してしまうから効かない。だからといってここは魔導の遺跡よ。とても打撃が通じるとは思えないわ……」

魔術師のメレイとしては、アルルの行おうとする行動はまったく無謀としか思えなかった。

——途中から知り合ったメレイは、ラムダやアルベリヒと違いアルルの正体がマルク・ケラーノの王女にしてアルカディアでも名の知られた“魔法剣士”である事を知らないのだから、その不安はある意味仕方の無い事である——。

だが、そんな不安を抱く二人を余所にラムダはアルルの言葉に黙って頷いていた。

三人の中で唯一アルルの剣技を実際に見た事のあるラムダ。彼はアルルならきつとなんとかしてくれる、と信じて疑わなかった。

そのラムダの無言の同意を感じ取り、アルルは再び二人に声をかけた。

「……私は幼少の頃よりマルク・ケラーノの伝統剣技《空剣》を学んできた。

それに《神速剣》の使い手であるリンデンの“舞姫”に師事し剣道を磨いた事もある。

さすがに“舞姫”の様に魔法を斬る事はできないが、岩や金属を打ち砕く技をいくつか修得している。たとえこの壁が“魔導”の産物だとしても、岩である壁自体を破壊する事はできる。それにこの先に進むからには、多少の危険は覚悟してほしい。何故なら、一刻も早く先を進むリッシュ殿を見つけなければならぬからだ。今、この間もリッシュ殿の身に何か起こるかもしれないのだから……」

アルルは不安を抱く二人を諭す様にゆっくりと丁寧言葉をかけた。

恐るべき“魔導”に関わる遺跡だけに恐れる気持ちは理解できるが、仲間を救う目的のために勇気を出してほしい。

アルルはその思いを込めて二人を見つめた……。

——不意に、白鉱石の輝きが増した。そして、石の擦れる音が聞こえてくる。どこかで何かしらの仕掛けが作動したのか。

「——な、何？ いったい何が起きるっていうの？」

辺りを見渡し不安を露わにするメレイ。

（……やはり、この遺跡は危険すぎるわ。我々の理解の範疇を越えている……）

メレイはまだ、以前来た時との違いに冷静さを取り戻せていなかった。

初めからそう造られたかの様な何の違和感も無い構造の変化。まるで遺跡そのものが生きており、自らを造り変えているのではないかと思うほどだ。

同じ魔術の使い手であるが故にこの遺跡の恐ろしさが身に染みる。生粋の魔術師である事が彼女の心に恐怖を刻むのだ。

「……メレイ殿、あなたの不安はわかる。私も魔術を学んできたから、この遺跡に隠された“力”はよく理解できる。だが、決して絶望的な差は感じない……そう、マルク・ケラーノを滅ぼしたあの魔導士の魔導力に比べれば——」

「——え？」

メレイはアルルの言葉に耳を疑った。

（……マルク・ケラーノを滅ぼした魔導士？ あのアルカディアを支配しようと戦争を仕掛けてきた《古の魔導士》の事を言ってるの？ ……あの恐ろしい魔導士の力を目の当たりにしたとでもいうわけ？ 彼女はいつたい……）

アルルの言う魔導士が誰を指しているのかはすぐにわかった。この大陸の者で魔導士と言えば、一人しか思い浮かばないのだから。

「——あ、あなたは何者なの？ 魔術と剣技の両方を使いこなすなんて……まるで魔法剣士じゃない。ま、まさかマルク・ケラーノの……“魔法剣士”なの！？」

アルルという名で魔法剣士と言えば、アルカディアではマルク・ケラーノのアルル王女しかない。やけに堅苦しい話し方をするから身分の高い者とは思っていたが、まさか王女だったとは。

（そう言えばアルベリヒがアルル姫と呼んでいた。ただのあだ名か何かと思ってたなら、どうやら本物だったのね……）

それなら彼女の言葉も信用できる。なんと言っても彼女は実際に《古の魔導士》と戦ったのだから。

(……あの《古の魔導士》と戦って生き延びているのだ。その力量は私達の比ではないはず……)

その彼女ができると言うなら、本当にできるのかもしれない。そう思うと不思議と不安が薄らいできた。

「……わかったわ。あなたが“魔法剣士”なら、この壁を壊す事ができるかもしれないわね」

メレイはそう言ってアルルに向かって頷いてみせる。

「——そうですね。アルル姫の剣技に期待しましょう」

思案に耽っていたアルベリヒも口を開く。彼もまた《古の魔導士》と戦って生き延びた彼女の力を信じる事にしたのだ。

「有り難い。ではさっそく実行に移したい。少々手荒な技を出すので、少し下がってくれないか」

アルルは剣を抜き放ち壁との距離を取る。皆も壁から離れた位置でアルルの行動を静かに見守った……。

アルルは片手で剣を中段に構え、力を抜いた状態で剣先だけをわずかに上げた。そして、かすかに剣先が揺れたかと思った刹那、空を斬る様に剣を振り抜く。

次の瞬間、見えないはずの剣圧が真空の刃と化して壁に向かって一直線に放出されるのが見て取れた。

——真空の刃が壁に縦に亀裂を入れた。そこから碎ける鈍い音とともに壁全体にヒビが入る。剣圧の衝撃により亀裂は大きくなっていき、みるみるうちに壁は崩壊していく……。

アルルはゆっくり剣を鞘に戻すと、大きな音を立てて崩れる壁を無言のまま見つめた。

壁は完全に崩れ、向こう側の景色が姿を現す。そこには白鉱石の輝きの無い、普通の石畳の通路がまっすぐに伸びており、奥には階段らしき大きな穴が見えた。

心理操作

瓦礫と化した“壁”の残骸を越えて行くと、再び石の擦れる様な音が鳴り響いた。その音は先の方から聞こえてくる。少しこもる様な音からして、おそらくは地下辺りからだろうか。

——何か起きている。

「通路の先に何か見えます。行ってみましょう」

音を気にする三人を余所にラムダは先頭に立ち歩き出した。

「ラムダ、ちょっと待って下さい」

アルベリヒは、通路の先に何かあるかまだわからないのに歩き始めたラムダに向かって声をかけたが、ラムダは柄に手を添え無造作に進んで行った——。

……薄暗い通路を歩く一人の男がいた。ローブを身にまとっている事から“彼”は僧侶か魔術師と思われる。

“彼”の少し前——しかも空中——にほのかに光る明かりがあり、辺りを照らしている。どうやら魔術師の様だ。

“彼”は休む事なく歩き続けていた。まるで、何者かに導かれるかの様に。

（……古代遺産を我が手に……）

心の中で囁く欲望の声。それが“彼”から冷静さを奪っていた。

（……その力を手に入れば、地位も名誉もすべて得られる……）

一介の魔術師である自分が、偉大な“魔導”の遺産を受け継ぐのだ。

その思いに、彼——リツシュ——は完全に支配されていたのだった。進んで行くと通路の奥に扉が見えた。リツシュは直感でその向こう側に“遺産”が眠っているものだを理解する。

(……いよいよ、古代の力を手にする時が来た……ここまで何事も無く来れた。それも運命によって導かれて来たからだ。大丈夫、私は遺跡に選ばれたのだから、偉大な“力”を手に入れる事ができる……)

すでに冷静さを見失っているリツシュは、扉を前にして高揚した感情を抑えられず高らかと声を上げて笑い出した。

ひとしきり悦に浸り笑い終えると、リツシュは扉の取っ手に手をかけてゆつくりと扉を開いた。

——そこは、広い造りになっていた。部屋全体が銀色の鈍い輝きを放っている。見たところ部屋全体を覆っているのは金属質のもの様だ。

少しに奥にある床には魔法陣らしき紋様が刻まれている。おそらく、そこが部屋の中央と思われる。

リツシュは興奮した面持ちで魔法陣らしき紋様のところまで歩を進めた。

(……これは、転移魔法陣か……)

部屋にこの魔法陣しか無いことから、リツシュは“それ”を別の場所に移動させる転移用の魔法陣と推測した。

(……この部屋もそうだが、遺跡自体あまり魔法力を感じない。やはり“魔導”と魔法には何か大きな違いがある様だ。しかも魔法力を感じない代わりに強い意志の力を感じる……この事は文献に記載される通り『意志の具現化と魔法力には関連性が無い』という事が証明されるもので、これをギルドに報告するだけでも相当の地位を得る事ができよう。だが、魔法陣の先に行けばさらなる“遺産”を手にする事ができる……)

魔法陣だけでなく室内の状態も分析しようと試みるが、高揚した状態で冷静な分析などできるわけもなく目の前の魔法陣にばかり意識が向かっていた。リツシュが意識を魔法陣に向けるとそれに反応

したのか、まるで誘うかの様に淡い光が静かに点滅しはじめた。

逸る気持ちが抑えられない。

リッシュは点滅を繰り返し、誘いかけてくる魔法陣に足を踏み入れる。次の瞬間、魔法陣の光がリッシュの体を包み込み、その姿をどこかへ消し去った。

——光が止み、魔法陣は元の状態に戻る。部屋は無機質な銀色の光を発しながら何もなかったかの様に再び静寂を取り戻した——。

異形

通路の奥に下り階段があった。

ラムダは構えたまま階段の目の前まで進む。そして、暗くてよく見えない階段の先を目を凝らして見る。

その後ろからアルル、アルベリヒ、少し遅れてメレイがやって来た。

「ラムダ、何があるかわからないのに、無闇に進まないで下さいよ。危ないじゃないですか」

ゆっくりと辺りを警戒しながらラムダの元へ来たアルベリヒは、ラムダの無鉄砲とも言える行動に抗議する。

「ここは何が起こるかわからない遺跡なんですから、慎重に慎重を重ねても足りないですよ。もう少し置かれている状況を見て行動しないと……」

アルベリヒは心底心配そうな表情でラムダに詰め寄る。

ラムダはその気迫に押される様に少し身を引いた。

「アルベリヒさん、すいませんでした。少し迂闊だったかもしれないね。以後、気をつける様にします」

不安気な表情を見せるアルベリヒに頭を下げる。それからアルルとメレイにも軽く謝罪した。

「軽率な行動でしたね。すいません」

だが、アルルはラムダの肩に手を乗せてポンポンと叩き、首を横に振った。

「……何故謝る？ 特に問題ある行動とは思えないが。そもそもその行動自体間違ったものではない。迷宮探索においてはむしろ必要不可欠なものではないか。もしラムダが率先して行わなければ、私が同じ事をしていただろう。アルベリヒ殿は、少しラムダを心配しすぎではないか？」

アルルはラムダに対するアルベリヒの過保護に近い扱いに疑問を抱く。

何故そこまで心配する必要があるのだろうか？

「……ラムダはあなたが思う以上に強い男だぞ。もっと信頼しても良いと思うのだが？」

端から見てアルベリヒのラムダに対する態度は、まるで恋人か子供に對してのものの様に思えてしょうがない。もしや、アルベリヒは男色家なのか？

アルルは大陸南部の一部地域でその様な性癖を持つ一族がいる事を思い出し、さらにその光景を思い浮かべ顔を歪めた。

（……あれは、私には理解できぬ風習だったな……）

アルルは頭を振ってその光景を打ち消し、意識を現実に戻した。

「……たしかにその通りだと思いますが、もっと危機感を持つてほしいと言いたいのですよ」

そのアルベリヒの気持ちは複雑だった。何故なら、現在人々が失いつつある純真さを持つラムダに深い愛情と尊敬を抱いているからそれにラムダとは知り合って一年近く経つ間柄ではあったが、彼の後先考えない行動は一向に解消される気配を見せずにいる。それもアルベリヒを心配にさせるのだ。

つまらないところで命に関わる様な怪我などしてほしくない。それがアルベリヒの本音なのだ。

「——今は、そんな事言ってる場合じゃないわ。無事に行けるのなら、さっさと行ってしまえようよ」

こんなところで悠長に会話を交わしてる方が危険だ。メレイは二人の意味の無い会話に横槍を入れ、遺跡にいる事を思い出させる。

「……そうでしたね。早く先に進みましょうか」

メレイの言葉にアルベリヒは苦笑した。

「行きましょう。俺が先頭に立ちます」

話が終わった事を確認し、再び構えを取って下り階段に目を向けるラムダ。

気配は感じない。降りても問題なさそうだ。

ラムダは念のため盾を上げて前方からの攻撃に備え、ゆつくりと階段を降りて行った……。

降りた先はさらに暗く、通路になっているのか部屋になっているのか、人間の中では目が利く方のラムダでさえ判別する事が出来なかった。

ここでも気配は感じない。しかし、ラムダの原始的な部分が警鐘を鳴らし始めた。

（何かいる。人の気配は感じないが、何故かそんな気がする。もしかして、メレイさんの言っていた遺跡の番人というやつか？）

暗さに慣れるまで何事もなければいいが。ラムダは張りつめた空気に盾を持つ手に力が入る。そして即座に反撃できる様、剣を中段の位置に構え一歩前に出る。

後に続いてアルルが降りラムダの隣へ来た。

「ラムダ、気配が無いのに何故そんなに警戒する？ 何か察知したのか？」

アルルは何度かラムダの感知能力の高さを目の当たりにしている。もしかすると、今も何かを察知しているのかもしれない。

ここは古代の遺跡だ。我々に感知できない“何か”があってもおかしくはない。アルルは気を引き締め、わずかな物音をも聞き逃すまいと集中した。

オオオオオ

オオオオオ

小さな、ほんの微かな音が聞こえた――。

オオオオオ

オオオオオ

低い呻きにも似た声。

近くに何者かがいる。ラムダはその声を聞き逃す事無く反応した。一歩前に前進し前方からの衝撃に耐えるためか、少し前屈みの体勢になる。

その声はアルルの耳にも入った。意識を集中させると剣に光が生じる。

「この先に、何者かいます——」

そう言った瞬間、甲高い金属音が響くと同時にラムダの盾に衝撃が走った。

「くっ！」

盾を持つ手に衝撃が伝わる。その威力は、腕を軽い麻痺状態にするくらいのものであった。

「——光よ！」

アルルはとつさに魔法の明かりを灯し、敵の姿を露わにする。そこには、異様な姿があった。

オオオオオ……

オオオオオ……

低い呻き声を上げる“それ”は、ボロボロになったローブを身にまとい、上半身を左右に揺らしていた。

その目は虚ろで焦点は定まっていない。ふらふらと揺れ動くその姿からは敵意も殺意も感じられなかった。

ブンッ！

力無く垂れ下がった腕が消えた刹那、ラムダの盾に再び衝撃が走る。

「くっ！」

ラムダの顔が苦痛に歪む。

「……なんて、力だ……」

盾を持つ手が痺れ、ラムダは思わず盾を落としてしまう。

“それ”は少し離れたところにいた。間合いから外れた距離。それなのにラムダに攻撃が届いている。

（……あの攻撃は投擲の類じゃない。しかし、打撃だとしたら……いや、たとえ深く踏み込んだとしてもここまで届くわけがない）
“それ”は、その場から移動する事なく上半身を左右に揺らしながら低い呻きを上げている。

オオオオオ……

オオオオオ……

焦点の定まらない虚ろな目はラムダ達をとても認識している様には見えない。だが、タイミングを取るかの如く両腕を振り子の様に揺らし、ラムダの動きを観察している様に見えた。

（……な、なんだ、あれは……）

後から降りて来たメレイは“それ”の異様な姿に眉を潜める。ゾンビの様にも見て取れる“それ”は、人間とは明らかに異なる空虚な雰囲気漂わせていた。

……力無く振り子の様に揺れる腕が振り上げられる！

ブンッ！

次の瞬間、空気を切る音とともに“それ”の腕は異様な長さに伸びラムダの胴体へ一直線に向かった。

盾を失い片腕が麻痺状態のラムダだったが体勢を崩しながらも辛うじてその攻撃をかわす。

「——光よ、弱きを癒せ！」

アルルの言葉と同時にラムダの麻痺した腕が光に包まれる。ラムダは痺れた左腕を振って回復の度合いをみた。

（剣は握れる）

ラムダは盾を無視し、剣を両手で持つて体勢を低くする。面積を小さくする事と一気に間合いを詰めるためだ。

“それ”はその場から微動だにせず体を揺らす。

「――灼熱の光よ！ 矢となりて敵を打ち抜け！」

右手を高く上げたメレイは呪文と同時に腕を振り下ろし魔法の矢を出現させた。

「行け！」

合図とともに煌々とした魔法の矢は“それ”に向かい放たれる。

矢は“それ”に命中すると勢いよく燃え上がった。

――しかし、“それ”は何事なかったかの様に体を揺らしていた。

「魔法が効かない！？」

メレイは見た目とは裏腹にたいしてダメージを受けていない事に驚きの声を上げた。

“それ”は腕を振り上げ、メレイに向けて攻撃を仕掛けてきた。

ブンッ！

空気を切る音がした。

「――うっ」

メレイは急激に伸びる腕をかわしきれずに壁に体を強く打ちつける。直撃はなんとか避けたものの、腕がローブに引っかかりその威力に吹き飛ばされたのだった。

「危ない！」

ラムダは“それ”に向かって突撃を仕掛ける。最悪、メレイの体勢が整うまでの盾になるつもりで“それ”とメレイの間に身を投げ出す様に突きを放つ。

オオオオオ……
オオオオオ……

“それ”はその突きを払い、返す腕で反撃する。ラムダは身を屈め、腕をかわすと後ろに跳んで間合いを取った。

「……なんなんだ、こいつは……」

体勢を立て直し“それ”に剣を向けて構えを取る。

魔法の明かりに照らされた“それ”はその場を動かず、ただ体を揺らしラムダ達の侵入を阻む。

不気味な呻き声を上げる“それ”は、振り子の様に腕を振り続けた。

傀儡のなれ果て

——遺跡の地下に足を踏み入れたラムダ達は、異様な者と遭遇し戦闘になった。

ボロボロのロープをまといし貧相な姿。おそらく過去に侵入した魔術師か何かのなれ果てだろう。その異様な者は戦闘能力の高さを見せつけ、ラムダ達に苦戦を強いていた。

（敵意も殺意も無く戦う操り人形。“あれ”からは一切の気を感じない……つまり、死人という事か。この場を護るにはふさわしい怪物だな）

アルルは死してなお、この世に縛られている異様な姿を冷静に見つめる。だが、同情するつもりは無い。危険を覚悟で侵入してきたのだ、その末路は自業自得だと言えよう。

その姿に不快な気分になったが感情を抑え、ゆつくりと間合いを詰める。

柄を強く握りしめ、ゆつくりと抜き放った。そして気を込める。すると刀身に淡い光が発生した。

（……相手はこれが聖剣である事を知らぬ。死者なら、この聖剣の一撃でかなりのダメージを与えられるだろう……）

振り子の様に腕を振りながらその場に留まる“それ”に近づくアルル。焦点の定まらない虚ろな目はラムダ達に向けられる事は無い。アルルは間合いに入ると剣先をわずかに上げ“それ”の反応を見た。

アルルの動きに反応する様に“それ”は、ゆらゆらと揺れ動く腕を振り上げる。

ブンッ！

空気を切り裂き、異常な長さに伸びた腕が凄まじいスピードで女剣士の胴体へ伸びていく――。

アルルはその動きを見切り、腕を剣先で弾く。そして腕が伸びきったところで“それ”に向かって突っ込んで行く。

――光が一閃する。

光を放つ剣が異様な者の胴体を捉えた。

オオオオオ……

苦悶の呻きを上げ身を擦る。しかし、何故かその場から離れようとはしない。

ラムダはその隙を見逃さず、体勢を崩した“それ”に斬りかかる。防御が間に合わず鈍い音とともにラムダの一撃をまともに受けた。オオオオオ……

さすがにダメージが大きいのか、激しく身を擦り苦悶する。“それ”の動きが鈍くなり、虚ろな表情に変化が出た。

グモオオオ……

腹の底から響く“それ”の唸り声。焦点の定まらない目に光が宿る――。

「……い、で、よ……ほ、の、お……」

口から言葉がこぼれ、“それ”の目の前に無数の火の玉が出現する。

「魔法か!？」

至近距離にいたラムダは叫ぶと同時に横へ跳んだ。次の瞬間、ラムダのいた場所を無数の火の玉が勢いよく通過する。

火の玉は壁に直撃すると炎をまき散らし凄まじい熱を放った――。

(……死してなお生前の知識を残すか……)

アルルは剣を構え直すと呪文詠唱の暇を与えぬ様“それ”に向かって攻撃を仕掛ける。

その威力を身を持って知った“それ”は、剣をなぎ払おうと腕を振るう。だが、アルルの鋭い攻撃を止めらずに防戦一方になっていく。

「……す、凄い……」

アルルの“それ”に対する息もつかさぬ連続攻撃にメレイは目を疑う。

果敢に攻め続けるその姿にメレイは起き上がるのを忘れて見入っていた。

（……なんて凄まじい。一撃一撃が、必殺の威力を持っている……さすが魔導士相手に戦い抜いただけの事はある……）

アルルが剣を振るう度に“それ”の動きは鈍くなっていく。その攻撃の速さと正確さに反撃する暇も得ずに“それ”は攻撃に晒される。

致命的な一撃を避けてはいるものの、もはや勝負は決したかに見えた。頑なにその場を移動しない事が勝敗を分けたのだ。

グモオオオ……

“それ”はひとつ低く唸ると膝をつき、崩れる様に倒れる。

……あまりにも呆気なく勝負をつけた圧倒的な戦闘力、わずかな時間で決着がついた事にメレイは啞然とした。

（……あれだけの戦闘力を持つているなんて……強いなんてものじゃない。まるで次元が違うじゃないの……）

そのアルルはというと、疲れた様子も見せず剣を収め“それ”が完全に動きを止めた事を確認している。

（……彼女なら、遺跡の番人とも互角に渡り合えるかもしれないわね……）

大陸でも名が知られるくらいだから相応の強さを秘めている事は予測できたが、その予想をはるかに上回る戦闘力にメレイは驚きとともに恐怖をも感じた。

魔法をなんとかかわして体勢を整えたラムダ。崩れ落ちる“それ”を見て勝負が決した事を知り、剣を収めたアルルの元へ近付いた。
「——えっ？ 倒した？ いつの間に……」

対峙してみても手強い相手だと思っただけに信じられない気分になったが、動かなくなっただけその姿は完全に事切れている。それを疑う余地はなかった。

（……剣の冴えはさすがだな……いや、以前よりもさらに磨きがかかっているか……）

倒した異形の者を見下ろすアルルに、ラムダはさらなる尊敬を抱いた。

（この程度の敵なら良いのだが……それはないか。古代遺跡というからには、我々の想像をはるかに越えた“何か”がきつとあるはずだ……）

まだ先は長い。この先、このような敵と遭遇する事によって遺跡の秘密が明らかになっていくのだろうか。

異形の者を見下ろしながらもアルルはこの先に待つ“何か”の脅威を薄々と感じていた。

——階段を降りる途中、爆発音とともに熱気が立ちこめたため、アルベリヒは危険を察し下へは降りず下の様子を伺っていた。戦力にならない自分が足手まといになるのを重々承知している彼は、下手に飛び出す事はせずにおとなしく身を潜めていたのだ。

熱気はすぐに冷め、剣戟の音と人ならぬ声がしばらく響き、やがて静寂が訪れる。

戦闘が終わったのか。

アルベリヒは恐る恐る下へ降りると倒れた“何か”の前に立つアルルと、彼女に近づくラムダの姿を見つけた。

見た感じは二人とも無傷のようだ。

アルベリヒは安堵のため息を漏らすと警戒を解いてゆっくりと二人に向かっていった……。

不毛な軍義

——“アルカディアの勇者”ジークフリート・ラークス率いる討伐隊の精鋭部隊がトルネ・パロ解放に乗り出してから、《古の魔導士》は忌まわしき破壊を行わなくなった。人々はそれが討伐隊の活躍によるものだと思い、ある者は大陸脱出を止め、またある者は魔導士に対する恐れを堪えて討伐隊に身を投じる様になる。

討伐隊の本拠地にはジークフリートがトルネ・パロ解放のため不在にも関わらず入隊希望者が後を絶たなかった。

そんな本拠地にアルルからの書状を携えた北方探索隊のマーク達は無事に戻って来た。

魔物の森からの旅は領内という事もあり、それほど危険なものではなかった。しかも自分達の任務が達成される事、またアルルからの貴重な情報を託された事により、通常よりも短い日程で帰還するに至る。

「……ずいぶん人が増えたな」

増設された野営所や簡易施設に討伐隊の士気の高さを知る。マークは行き交う人々の姿に、アルルの語った魔導士の脅威が薄れてゆくを感じてしまう。

だが、この雰囲気には飲まれ気を弛めてはならない。マークは首を激しく振って己を律した。

——アルルが出発前に語ったマルク・ケラーノでの魔導士の話。それを聞いたマークは今まで感じた事の無い戦慄を覚え、その脅威を一刻も早く討伐隊に報告せねばならないと思っている。何故なら、それは到底信じ難い荒唐無稽なものだったからだ——。

《……実際に戦ってみてわかった事なんだが、魔導士は想像するだけで意志の力を具現化させ呪文詠唱などを行う事無く様々な現象

を引き起こす事ができる。

それはある程度決まった現象しか発現させられない魔法とは明らかに違うもので、極めて強烈な意志力により、ありとあらゆる事象を思いのままに具現化させるのだ。自然の摂理すら意志の力でねじ曲げる悪魔……いや、神のごとき力、それが私の感じた“魔導”のすべてだ。魔導士と戦うという事は、まさしく神と戦うと言っても過言ではない……」

耳を疑う話だった。もしこれがアルルの言葉でなかったら、マークは一笑に付し相手にしなかっただろう。

膠着した戦況、冷静に見ればそれはただ単に魔導士が動きを止めただけ。勇者の部隊がトルネ・パロに潜入したとはいえ、実際には解放されたわけでも無いのにこの異様ともいえる士気の高さ。皆、相手の脅威を忘れているのではないか？

そう思えてしまうほど街の雰囲気は明るかった。

マークはこの状況は危険だと思う。共にしたフォートとダーバも気持ちは同じだった。

討伐隊の本部はジークフリートが滞在していた屋敷をそのまま使用している。この地で一番大きな建物であり、周囲に様々な簡易施設があるためだ。屋敷に面した通りは一段と賑わっている。人の行き来がこの地を発展させていたのだ。

急激な変貌を遂げた拠点。マーク達は行き交う人々の群れを縫う様にして本部である屋敷へ向かった――。

魔導士討伐の自由軍は、入隊者の増加により大規模な組織となった。その軍勢力だけを見ればアルカディア大陸でも最大の勢力と化している。

冒険者の集まりであるこの集団に確たる統制機関など無かったのだが、規模が大きくなりすぎたために部隊の編成・派遣、情報収集や物資の輸送・配給などの組織運営を確立させなければならぬ状況に至り、現在では各役割ごとに役職を設けて組織運営を行っている

た。

ジークフリート不在の現在、この拡大し続ける組織を取りまとめているのは旧王国の騎士団や宮廷などに所屬し組織運営に詳しい者達である。また討伐軍を経済・人材と全面的に支援しているリンデン大陸「ナム・ラマ聖王国」の各部隊の代表者達も組織運営に協力している。

これは討伐軍による支援部隊の私物化を防ぐ意味合いもあり、この事はリンデンの義勇軍代表がジークフリートの剣の師匠“舞姫”リリト・ステイグマイヤーである事からも十分推測されるものであった。

屋敷で一番広い部屋に会議室がある。そこに各代表者が集まり今後の展開について議論が為されていた。

議題は遅々として進まぬ領土奪回について。

過去の魔導大戦の負債により領土が分断されている事が遠征の妨げになっていたため、戦うに十分な戦力はあるものの部隊編成がうまくまとめられないでいたのだった。そのため少数の部隊を各地に派遣し、局地戦に持ち込むぐらいしかできないでいる。さらに肝心の魔導士の消息が掴めないで動くに動けないのが現状だった。

これらは領土が分断されているために情報の収集が困難である事が原因であった。

「——魔導士がおとなしくなったのは有り難い話だが、逆に情報源が無くなったのに等しい。神出鬼没の魔導士の消息など掴めないし、部隊を派遣しようにもそもそも情報が少なすぎるのだ。しかもジークフリートはジード・バロムの情報を得た矢先、先陣切って飛び出す始末……あやつ、自分が討伐軍の頭である事を忘れてるのではないのか？」

指でテーブルを叩きながら法衣の老人が顔をしかめて愚痴をこぼす。老人は眉間に皺をよせてさらに言葉を続ける。

「たしかにグランディノと連携を取るためには、トルネ・パロの

奪回は必要不可欠だ。しかもジークフリート本人が直接前線に立てば士気も上がるだろう。しかしだ、ジークフリートに万が一の事があつては元も子もないではないか」

老人はそう言うのとテーブルを囲む各代表者達を見回した。

会議室には老人も含め五名いる。

ゆつたりとしたローブの青年にプレートメイルを身につけた騎士風の男が二人。それぞれ鎧に刻印されている紋様が違う。ひとつはノーマンケル騎士団のもの、もうひとつはナム・ラマ聖王国の紋様である。それとまるで織物の様な変わった衣装を身にまとった女がテーブルを囲んでいた。

皆、老人の言葉に思い思いの表情を浮かべる。

「すまん。愚痴をこぼしたところで事態が変わるわけでもないのにな」

老人はため息を漏らし膠着した現状を嘆く。

——討伐軍が結成されて以来、アルカディア各地で暴威を奮っていた魔導士が鳴りを潜めたため、一見すると優勢にも見える状況ではあったが実際のところ魔導士とは関係のない局地戦に何度か勝利したにすぎなかった。その事実を知らないアルカディアの人々が勝手に解釈し、異様な空気を作り上げていただけなのである。それが老人、いや、討伐軍の上層部を悩ましていた。

「……ジークフリートの奴、自分の師や同志が来るというのに……リリト殿、ウィンザム殿には申し訳なく思っている」

老人はナム・ラマの騎士と風変わりの衣装を身につけた女に頭を下げた。ナム・ラマの騎士は老人の言葉に苦笑する。

「フレマー殿、気になさるな。ジークフリートはああ見えて熱い男ですから、膠着した状況に居ても立ってもいられなくなったのでしよう。状況が状況だけに致し方ない事です。もし我々が同じ状況に立たされたら……私も、特に師匠なら単独で戦地へ向かう事でしょう。なので気遣いは無用ですよ」

ナム・ラマの騎士はそう言うのと豪快に笑う。隣に座る女も頷き笑

みをこぼす。

「ウインザムの言う通りじゃ。わらわなら、人ひとり斬るために隊など結成せず単独で向かうぞよ……ほほほっ」

女は口元を袖で押さえて軽い冗談を交えて答える。

「……さて、冗談はこのくらいにして話を戻そうではないか。

あくまでも憶測の域は出ない様だが、魔導士は北方に潜伏してる可能性が高いのだろう？ いずれ北方も解放せねばならぬのなら、思い切って部隊を派遣してみてもどうだろうか？ いくら憶測の域を出ないとはいえ、その様な場所に少数の探索隊のみでは、まるで捨て駒扱いで印象も悪いし危険が多すぎるから情報の収集も困難になるう……」

リリトは頬杖をつき言葉を続ける。

「……無論、言い出したからには人選はこちらで募る。危険が伴う故、魔導士の脅威を直に知る討伐隊からでは志願する者がいないだろうし、義勇軍の者達は皆ただ安穩と情勢を見るのが不得手なのでな。悪い様にはせぬ。我等の部隊を派遣せぬか？」

言葉を切るとリリトは、フレマーの目を見据えて反応を待つ。

討伐隊としては、マルク・ケラーノ領に部隊を派遣するのを躊躇する節があつた。確たる情報の無い事に加え、国の惨状を鑑みると解放するにあたり得るものが少ないためである。しかも元々マルク・ケラーノは厳しい自然環境故に領土の維持・防衛が困難なため、自軍の消耗を抑えられるその申し出は正直有り難いものだった。

しかし、それを単純に好意だと受け取れるほどフレマーは若くない。

何故ならナム・ラマ聖王国によるリンデン大陸の統一戦争が記憶にあつたからだつた。

——大小合わせて十数国あつたリンデン大陸。その中でもナム・ラマ聖王国は東方にある貧しい小国に過ぎなかった。

その小国が十年に満たないわずかな時間で大陸の統一を成し遂げたのには、確立された諜報機関の構築による正確な情報収集・伝達機能が大きなき要因に挙げられている。ナム・ラム聖王国は、各地に派遣していた諜報員からの現地情報を細かに分析し、クロムワイズ史上類を見ない鬼謀神算の策略によって絶対的な兵力の差を補い、強大な軍事力を持った国々を次々と撃破、瞬く間に大陸を統一したのである――。

その事実を知るフレマーからすれば、この申し出がリンデンによる情報収集の策かもしれないと思うのも無理はなかった。この戦乱の世に純粋な善意で他国を支援する愚かな者などいないのだから、それが将来におけるアルカディア侵攻への足掛かりにされる恐れも十分に考えられるため、この申し出をただ単純にリリトの好意と受け取る事などできない。

アルカディア側から見れば極力リンデンの援軍を各地に派遣しないで済むなら、それに越した事はないのだから。

フレマーはリリトの申し出の真意を見極めようと熟考する。言葉の“裏側”を見なければ、アルカディア解放どころかリンデンの謀略にはまる恐れがある。

「……リリト殿の申し出は大変有り難いものだが、マルク＝ケラーノは極寒の地。慣れぬ者では思う様に動けまい。それに危険な場所に援軍を派遣し我等が安穩とするのは、アルカディアの民が許してくれまい。行くなら我等討伐隊が先陣切って行かねばならぬでしょう……」

フレマーは言葉を選び、リリトの反応を見た。だが、その表情は変わらない。頬杖をつき何の感情も見せずに老人を見つめる。

一見、無礼にも映るその態度。部下がそのような態度を取れば烈火の如く怒りを露わにしただろう。だが、リリトのそれを咎める気にはならなかった。

リンデンの統一戦争における彼女の鬼神の如き活躍ぶりを知るフ

レマーはリリトを恐れていたのだ。

沈黙が痛い。

（この“化け物”をどう対処しろというのだ）

フレマーは心の中でジークフリートの不在を呪った。

「……たしかにフレマー殿の言う通りかもしれぬ。討伐隊の体裁もあるし、我々が出しゃばるのは……正直面白くないじやろ。それに――」

不敵な笑みを浮かべながらリリトは核心を突く。

「――リンデンによるアルカディア侵攻の諜報活動と受け取られても仕方あるまいてな。ウィンザム、アルカディアの民は敵に情報をくれる愚かさは持ち合わせていないようじゃ……」

その言葉に皆、顔色が変わった。特に討伐隊の面々は顔面蒼白である。

「――師匠！」

ナム・ラマの騎士ウィンザムは冷や汗を浮かべてリリトの言葉に反応する。

「なんという事を言うのです！ それではまるで、我等がアルカディア侵攻に向けて軍事視察に来たと思われるではありませんか！」
たとえ公然の秘密だとしても、正面切って公言して良い言葉ではない。しかもリリトのこの言葉はナム・ラマ聖王国からの命とは明らかに違っていたから尚更だった。

「どうせ本国へ戻ればアルカディアでの情報を分析するのだ、似た様なものじやろ。それに、わらわ達がどう言おうと相手はリンデンの策略としか思わん。わらわは余計な腹の探り合いは好かぬ。腹を割って話さねば事態は進展せぬのに、下らぬ読み合いなどに無駄に時間を裂く趣味はないのじゃ」

リリトはそう言うと言いつと勢いよく席を立った。フレマーをはじめとする討伐隊の面々はその勢いに押され、返す言葉を失い彼女の挙動を見守る。

リリトはその燃え上がる様に真っ赤な髪をかきあげ、テーブルに

立て掛けてあった二振りの刀を手にする。そしてウィンザムに向き直り、声を大にして言い放った。

「下らぬ政治話には付き合い切れん。今後ナム・ラマ義勇軍はウィンザム、お主に一任する。わらは別働の遊撃隊を編成し、助けを求める地でアルカディア解放の助太刀をするぞよ」

リリトは刀を腰に差すと軍議の途中にも関わらず会議室を後にする。

フレマーら討伐隊の者達は、リリトの放つ威圧感が無くなった事で我に返り、事態の進展のない現状に頭を抱えた。

「……申し訳ありません」

師匠は根っからの剣士、後方でいたずらに戦況を眺めるよりも、前線に立ち直に民を守るのが役目と心得ております。無論、私も剣を持ち、民のために戦いたいと思っております。あなた達は権力者でも何でも無い、アルカディア解放の志士ではありませんか。政治の話よりも大切なものがあります。今一度討伐隊結成時の気持ちになって下さい。私も失礼します」

ウィンザムは静かな口調でそう言うと、呆然と佇むフレマー達に一礼して部屋を後にした……。

マークの選択

討伐隊の拠点となっている屋敷の前に着いたマーク達北方探索隊のメンバーは掛け合った衛兵に不当な扱いをされ、門前払いを受けていた。

「おい、話を聞いてくれ。重要な情報を入手したのだ。中に入れてくれ」

マークは怒気をはらんだ声で衛兵に詰め寄る。用件も聞かず追いつめられた事に怒りがこみ上げたのだった。

衛兵はマークの胸元に槍を突きつけ、負けじと声を上げる。

「不審者め、そう言えば通るとでも思ったか。お前達のような怪しい者などこの隊にはおらぬ。おとなしく下がれ！」

衛兵はそう言うマークの鎧を小突く。

「——貴様！」

あまりにも存外な扱いにマークは思わず腰に吊した剣に手をかけた。

それを見た衛兵は槍を両手で構える。

「賊め、本性を現したか！　ここは通さぬ！」

衛兵は一步も引かず攻撃体勢に入った。

一触即発の状況。戦闘になるのも時間の問題に見えた。

だが、両者斬りかかろうとした瞬間、屋敷から凄まじい威圧感が発生し二人の動きを止めた。離れた場所にあるこの門まではっきりと伝わる。二人はその威圧感を放つ場所に視線を向けた。

そこには、燃え上がる様に真っ赤な瞳と髪を持ちかなり長身の女がいた。まるで織物の様に鮮やかな色彩と細やかな装飾を施された衣装を身にまとい、腰にはその格好に似合わぬ二振りの刀が差してある。明らかに異国の剣士である事が見て取れた。

「——いったい何事じゃ、こんなところで物騒なものを振り回す

でない」

長身の女剣士は凄まじい気を抑えようとせす近付いて来る。マーク達は金縛りにあった様に身動きひとつ出来ずにいた。

門まで来た女は、武器を構えたまま身動きできずに固まっている二人の前で立ち止まる。そして、紅い瞳で射抜く様に二人を交互に見た。

「……とりあえず武器を収めたらどうじゃ？ それとも気の済むまでやり合うつもりかえ？」

女の言葉には有無を言わさぬ迫力があり、二人とも呪縛を解かれた様に武器を収める。その様子を見て女は頷き、マーク達に目を向けた。

「お主等は何用でここへ来た？ まさか襲撃に来たわけではあるまい？」

女はいかにも冒険者風の三人を興味深げに見回し、その訪問の理由を訪ねた。

「リリト様、この様な者達に会話は一切無用ですぞ。直ちに追いつ返す故、しばしお待ちを」

衛兵は直立不動の姿勢で女に答えるとマーク達に向き直った。そして威勢の良い声を張り上げてマーク達を罵倒する。

「ここはお前達みたいな不埒な輩が来て良い場所ではないわ！ さっさと立ち去るがいい！」

「……わらわはこの者達に問うておる。お主は持ち場の警備を続けよ」

女は冷やかな眼差しで衛兵を一瞥し、袖をヒラヒラと振って下がる様に促す。

「はっ！ かしこまりました！」

衛兵は女の言葉に即答するとその場を後にした。その衛兵の態度の豹変ぶりに、マーク達は目の前の女がただの冒険者ではなく討伐隊の重要人物であると知る。

衛兵が立ち去ると、女はため息をひとつ漏らしマーク達に向き直

る。

「……さて、話を戻そう。見たところお主等は冒険者の様じゃが、いったい何用でここへ来たのじゃ？」

よく見ると三人は所々薄汚れている。おそらく遠くから来たのだろう。

何か聞けるかもしれない。女の直感はそう告げていた。

一方のマーク達は互いに顔を見合わせる。

この異国の出で立ちの女は明らかにアルカディアの者ではない。

屋敷から出て来たからには討伐隊と何かしらの関係があるのは間違いないだろうが、相手が何者かわからぬ以上、アルルから得た情報は伝えられないとマーク達は判断する。

「自分は魔導士討伐軍・北方探索隊の隊長マークと申します。この者達はその隊員です。我々は重要な任務を受けているので、失礼ながら素性の知れぬ者には答えられません。まずはお名前を伺いたい。話はそれからにして下さい」

マークは臆する事なく女の目をまっすぐに見た。

事は重大だ。故に外部に情報を漏らしてはならない、とマークは自分に言い聞かせる。

女はマークの視線を真っ向から受けても平然とした表情をしていた。

まっすぐに見つめ返す。その燃える様に紅い瞳はまるで心の中をのぞき込むかの様にマークの目を捉える。

(……あの目は、まるでラムダやアルル姫のようだ……)

マークはそのまっすぐな目にラムダ達を思い出す。

あの目を持つ者は信用できる。しかし、明らかに異国の者にこの情報を伝えて良いものだろうか。

マークは迷った。何も言わずに見つめ返すこの異国の女を信じて良いのかを。

その時だった。

「——思い出したぞ！ この女、リンデンの“舞姫”だ！」

後ろでマークと女のやり取りを黙って見ていたフォートが突然声を上げた。

「ナム・ラマの着物を身にまとう二刀の剣士は、リンデンの“舞姫”しかない！ 隊長、この女、ジークフリート・ラークスの師で《神速剣》の開祖リリト・ステイグマイヤーだ！」

フォートは興奮した面持ちでマークの肩を叩いた。

マークはフォートに振り返る。フォートの興奮ぶりに目を見開く。その戦いぶりから“舞姫”と称される女剣士。リンデンの統一戦争で鬼神の活躍を見せ、生きる伝説となったリンデンの剣匠だ。

マークは女に向き直るとまじまじと見つめた。

たしかにその放たれるオーラは、並の戦士と比べものにならない。しかし、まさか目の前にいる女が生きる伝説となった剣豪だとはにわかに信じられなかった。

「……リリト？ あなたは、あのリリト・ステイグマイヤーなのか？」

マークは恐る恐る女に訪ねる。

女は袖口を口元に当てて低く笑って答えた。

「……ほほほ。そこな戦士の言う通り、わらわはリリト・ステイグマイヤーじゃ。しかし、よくわかったのお」

女―リリト―はフォートの洞察力に関心を抱く。

そのフォートと言えば、興奮冷めやらぬ状態で顔を真っ赤にしている。

「我々戦士の中で“舞姫”は目標だからな。まさか、この地で会うとは！ 隊長、“舞姫”は信用できるぞ！ 例の話をしても大丈夫だ。もしかしたら力を貸してくれるかもしれんぞ」

そう言っただけでマークの体を叩き、上機嫌になる。加減を知らぬフォートの興奮ぶりに打たれた箇所をさすりながらマークは呟いた。

「……たしかにそうだな。その剣の腕はジークフリートやアルル姫を上回るし、弟子の戦いに手を貸しに来たのだらうから信じても良いかもしれん……」

マークは腕を組み考え込む。

このままの状態では勇者不在の討伐軍に報告しても、上層部の者達が聞き入れてくれるとは限らない。というよりも、この話をそう簡単に信じてくれるとは到底思えない。

直接報告できるならまだしも、門でのやり取りを見る限りそれは期待する事はできないだろう。下手をすれば任務放棄の罪で投獄される恐れもある。

(……組織化の、悪いところが出てしまったな……)

組織化による伝達の弊害。機密の保持・漏洩防止のための措置が裏目に出ている。

必要以上の警戒心が、様々な情報の流れを止めている。

マークは組織化の弊害を見抜き、リリトの義に賭けてみる事を決めた。

「……わかった。この場で話せる内容ではないので、どこか別のところで伝えよう。リリト殿、それで良いかな？」

マークはそう言うってからフォート達に振り返り反応を見る。

二人は頷く。その目はすべてを任せると語っていた。

それに頷くと、マークはリリトに向き直る。

「うむ。では、わらわの宿舎で話をしようかえ。ほれ、すぐそこにある建物じゃ。あそこなら誰も来ん」

リリトはマークの後ろを指して笑みを浮かべる。そして、口元に手を当てて笑うと門を出た。

「——では、参ろうか。ほほほっ」

先程までと打って変わってご機嫌な表情で揚々と袖を振りながら颯爽と進んで行く。

マーク達はその陽気な姿に拍子抜けしながらも後に続いて歩き出した――。

勇者の進撃

苦い初戦を教訓に編成し直し、再びトルネ・パロに向かったジークフリート率いる精鋭部隊は、その名に恥じぬ活躍ぶりをみせた。

初戦で敵側の巡回している部隊構成が悪魔だけだった事から、指揮系統の不備を見抜いたジークフリート。“力”によって強制的に召喚された彼等に統制の取れた戦いなど出来ず、ただ本能のままに獲物を求めて徘徊しているだけのワンダリング・モンスターに過ぎない事を知ったのだ。

つまり、遭遇したからといってジークフリート達の所在が敵側に伝達される心配が無い事を意味する。それにより解放部隊は包囲されるわけでも待ち伏せされるわけでもなく遭遇する敵を次々と撃破、敵が解放部隊の快進撃を知る頃には相当な被害を受けていたのだった。

これは、敵が討伐軍の力を完全に見誤ったせいだ。もし部隊に悪魔達を統制する者がいたなら、いくら精鋭を集めたからとはいえ、これほどまでに被害を出さずに済んだのだから。この事はジークフリート達にとって幸運と言えた。

ジークフリート率いる精鋭部隊は一箇所に留まらずに各地を移動、敵に所在を特定させない様にしてトルネ・パロ各所に配置された召喚魔法陣を次々と破壊していった。これにより無尽蔵に召喚されていた悪魔の数は激減、それに頼る形のトルネ・パロ駐留兵が少数だった事からその防衛線は後退し、戦況はより解放部隊に有利な展開となる。

ジークフリートはこの事を本部に書簡で伝え後軍の派遣を要請、その返事が届くのを待たずトルネ・パロ各地で戦闘を続け敵側に甚大な被害をもたらした。

その情報を知った本部は急ぎ部隊を編成、大がかりな遠征計画をアルカディア全土に公表し、そのうえで危うくなりかけたリンデンとの共闘を持ち直すためリンデン義勇軍にその先陣を任せ、全軍の士気を大いに盛り上げる。

新たに代表となったリンデン義勇軍の長ウインザム・マルドゥークはその要請に応え少数精鋭の部隊を次々と編成、複数のルートからトルネ・パロへの進軍を開始した。

剥き出しの地面に描かれた円形。その円の中にびっしりと埋め尽くされている奇怪な紋様があった。

魔術を多少知る者が見れば、これが魔法陣である事はすぐに理解できよう。詳しい者なら、これが“召喚”のための魔法陣であると一目で看破できる。ただ、通常のそれとは違う事にも気づくはずだ。

——これは、復活した《古の魔導士》がトルネ・パロを蹂躪した際に領地防衛のため、各所に配置した召喚魔法陣のひとつである。

常人では及びも付かぬ高度な魔法原理と理解の範疇を逸脱した無限の発想を持つ魔導士が造り上げた魔法陣……それ故、この召喚魔法陣は通常の“それ”とは異なり、術者がいなくとも無制限に召喚を行う事ができるという現在の魔法技術では到底不可能な代物となっている——。

その魔法陣に光が発生し、凶々しい妖気とともに異形の姿が出現する。

「……遅かったか」

魔法陣からゆっくりと浮上してくる異形の姿を険しい表情で眺める者がいた。

頭部のみを覆う白い兜、白銀の鎧に身を包み腰には剣を差している。身なりからしてその者は騎士の様だ。

見るからに精悍な顔つき、強い意志を宿した双眸は異形の姿を捉えている。

「ここにもあったとは……いったい幾つあるんだ。魔導士は本気でこの地を地獄へ変えるつもりなのか」

その呟きは怒気を含んでいた。このアルカディアに混乱を招いた邪悪な魔術師と復活した魔導士に対する感情がこもっている。

……魔法陣から浮上するその異形の姿は、見る者に恐怖と絶望を与える存在だった。

ほのかに青白い光を発する巨体は大柄の戦士の二回りは優にある。背中には一對の巨大な翼があり、丸太の様に太い腕や脚、全身は鋼を思わせる硬質な皮膚で覆われていた。

「召喚する種類は無差別か……こんなものまで無造作に呼ぶとは、まさに迷惑極まり無いな」

男はそう言うのと静かに剣を抜き放ち、悪魔の動きを観察する。

召喚されたばかりの悪魔は、まだ男に気づいていない。いや、それとも人間などに歯牙をかけないだけなのかもしれない。

悪魔が召喚された事で魔法陣の放つ光は消える。地上に具現化したそれは、自身の自由を知るとその巨体を揺らし、宙に浮いたままの状態で魔法陣から歩み出た。

グオオオ……。

地獄の底から強制的に喚び出された怒りに満ちた唸りを上げると、悪魔は目の前に立つ人間を初めて認識する。

刹那、その凶暴な本能が解放され、周囲に無数の球体を出現させると男に向けて解き放った。

圧縮された魔力の塊、ひとつだけでも致命的な破壊力を持つそれが男に襲いかかる。

球体は凄まじい轟音とともに次々と男に炸裂し、その空間を一瞬にして魔力の渦で覆い隠す。それでも破壊衝動が抑えられないのか、悪魔は次々と圧縮した魔力弾を生み出すと執拗なまでに男に向けて

放つ。

グオオオ！！

男のいた空間は魔力の渦に完全に覆われている。しかし、その中の生命反応は消える事なく逆に強くなっていた……。

——次の瞬間、凄まじい風圧を辺りにまき散らし、突如として魔力の渦がかき消された。

そこには、在ってはならぬ男の姿があった。その鎧や兜には傷らしきものは何ひとつ無く、剣を構え敢然と佇んでいる。

グオオオ！！

信じられない光景に悪魔の攻撃が止まった。そして、その本能に激しい警鐘が鳴り響く——。

男はその隙を見て取ると一瞬にして間合いを詰める。

光の如き速さ——悪魔の目には、男が一瞬消えた様にしか映らなかった。

男は、剣先を悪魔に突きつけると静かに口を開いた。

「……残念だったな。神速剣を極めた私に魔法弾は効かない。魔法だけに頼らず、その鋼の肉体も駆使して戦えば良いものを。戦術を誤ったな……」

そう言う男の目に宿る光の意志を感じた悪魔は、己の消滅を瞬間的に悟った……。

「——ジークフリート！ 魔法陣が見つかったのか！」

背後から声が響いた。複数の足音とともに男のいる場所に武装した者達が次々と駆け込んでくる。

男——ジークフリート——の前に灰と化していく異形の姿と破壊された召喚魔法陣があった。

武装した者達の間を縫って、ローブをまとった青年がジークフリートの元へ駆け寄る。

「ここにあつたのか……」

ローブをまとった青年は、腰まで伸びた銀色の長い髪をかき上げながら呟いた。その表情は堅く険しい。

青年は灰と化す悪魔の亡骸を見て、一瞬だけ顔を強ばらせジークフリートに向き直った。

「こいつは《蒼嵐の悪魔》じゃないか！ こんな凶悪なやつを一人で倒してのけるとは……相変わらず化け物だな……」

崩れゆく悪魔の亡骸を冷めた目で見ながらも緊張した面持ちで言葉が続けた。

「我々なら、遭遇した次の瞬間灰になっていただろう。発見したのがジークフリートで良かった。それにしても、こんなやつまで召喚できるとは……魔導士の力は恐ろしいな」

青年は改めて魔導士の脅威を実感する。

同じ魔術を志す者として、その実力がある程度は予測できるものだと思っていた。しかし、実際に魔導士の造った物や惨劇の跡を見ると、どれひとつ取っても想像の域を越えるものだった。

その尋常ではない超越した力を持つ魔導士を我々は討ち取る事ができるのだろうか。

各地で召喚された悪魔と戦えば戦うほどに歴然とした力の差を思い知らされ、青年の心に焦燥感と不安が広がっていく――。

だが、その心の内を吐露しては士気に関わる。青年はその思いが出ない様に気持ちを抑えてから振り返り、皆に任務の成功を伝える。

「この地の召喚魔法陣はすべて破壊された。皆、野営地へ戻り戦いの疲れを癒してくれ。我々はもう少し巡回してから戻る」

その言葉に、それぞれに武装した者達はそれまでの厳しい表情から安堵の表情へと変わる。

中にはその場にしゃがみ込む者まで現れた。安心したのか、これまでの連戦の疲れが一気に出たのだろう。

皆、野営地に戻り、ジークフリートと青年の二人だけがその場に残った。

青年はジークフリートの隣にしゃがみ、地面にわずかに残った灰を手に取りため息を漏らす。

「……ジークフリート、この破壊活動に果たして意味があるのか？　いくら召喚魔法陣を破壊しても、この数ではキリが無い。その上、肝心のジード・バロムの消息も掴めない。さらには魔導士の魔法技術の偉大さを思い知らされる始末。正直、魔術師達のほとんどは挫けそうになっている……」

青年はそう言って手のひらの灰に息を吹き付けて苦笑した。ジークフリートは表情を変えず黙ったまま青年の不安な思いに耳を傾ける。

「——ジークフリート、もう気づいていると思うが召喚される悪魔が高位のものへと変化している。

いくら対悪魔戦に有利な部隊編成で臨んでいるとはいえ……先ほどの《蒼嵐の悪魔》にしてもそうだが、すでに我々の戦力を越えるものまで現れはじめている。幸いまだ犠牲者は出ていないが、このまま突き進んでも大丈夫なのか……情けない話だが私には日々募っていく部下達の不安を解消できる確証が得られないのだ……」

青年は地面に指で線を引きはじめた。それは、トルネ・パロに配置された召喚魔法陣の分布図だった。

「……これを見ても。戦略的配慮も無く、半ば遊びで配置した様な魔法陣から出現するものに対して、現時点で戦力として通用する者はジークフリート……お前一人しかないのだ。言わば我々は、魔導士の遊びに付き合わされている状態と言えよう……」

分布図に印をつけながら青年は言葉を続ける。

「討伐軍がトルネ・パロ解放の部隊を派遣し、一見すると情勢は好転の兆しを見せている。だが、それはジード・バロムや魔導士がただ静観しているからに過ぎない。奴等が動き出したらと思うと、部下達はその事に不安を覚えている……」

その語尾は小さくか細いものになっていた。青年は一息つくと顔を上げてジークフリートの言葉を待った。

ジークフリートはその思いを重く受け止める。不安になる気持ちは痛いほど理解できる。ジークフリートは言葉に迷った。

下手な言葉はかえって事態を深刻にする。皆が自分の様にただ単純に前へ突き進む性分ではないのだから、ある程度の見通しや予測を伝えねばならない。

彼等は自らの運命を切り開く力に不安を抱いている。誰かが導いてやらねばならないのだ。

「――私は、うまく話せる男ではないので語弊を生むかもしれないが、不安になるのは良い事だと思う。この際、悩んで悩んで悩み抜いて、それぞれの不安を表に出そうじゃないか。それでみんなで話し合い、それぞれの不安を解消する術を講じるのだ。心にため込まず、ひとつずつでも問題を解決させていこう。言いたい事があつたら、皆に伝えればいい。我等は仲間なのだから、気持ちをひとつにして前に進めるよう協力していこうじゃないか」

ジークフリートは青年から目を逸らす事なく自分の気持ちを伝える。その顔には自然と笑みがこぼれていた。

「コリン殿、自分一人で考えずみんなにその気持ちを伝えるのだ。マルク・ケラーノを一夜で滅ぼした魔導士が、我々の想像を遙かに越えた力を持っている事など、はじめからわかっているではないか。その力の一端でも実感できるあなた達魔術師の意見、他の隊員達にも聞かせてあげて下さい」

開き直りにも似たジークフリートの言葉。青年―コリン―はその言葉に心を覆った雲が晴れた気がした。

「……そうだったな。魔導士が超越した力を持っているのははじめから知っていたではないか……元から絶望的な戦いだっただ、我々はいつたい何を血迷っていたんだ……」

魔導士の力の一端を見る度にその差を思い知らされ、いつの間にか心を曇らせていた様だ。

コリンは恥じた。自分を含めて魔術師達が己の力を過信していた事を。その慢心が不安を抱かせた事を。

コリンは立ち上がり、ジークフリートに頭を下げた。

「ジークフリート、すまなかった！ 我々魔術師は、とんでもない思い違いをしていた。ギルドから選ばれたという下らぬ誇りが邪魔をして真実が見えずにいた様だ。なんて愚かな……危うく自分を見失うところだったではないか……」

コリンは己の愚かさに関わりを感じ、顔を赤くして自身をなじる。

「部下を鼓舞する立場の私がこの様では、部下の士気を低下させるのも無理はない。こんな私に魔術師団の長を務める資格など無い！ アルカディア解放も到底成し得ぬ！」

血が出るほど拳を握り締め、全身を震わせながら己を叱責した。

コリンの己を責めるその姿にジークフリートの表情が変わる。

「コリン殿、自分を責めるのはお止めなさい！ 我々はアルカディア解放という重大な使命を持つています。アルカディアの民に成り代わって戦いに臨んでいるのです。反省するのは良い。だが、自分を卑下し使命を放棄する事はアルカディアの民を見捨てるに等しい！ 我々にそんな甘えは許されない。愚かしく思うのなら、気持ちを切り替えさらなる努力をするのだ！」

まるで雷鳴の様な怒声が響き渡った。ジークフリートの言葉がコリンの心に突き刺さる。

その表情は厳しい。まだ下らぬ誇りがある事を看破していたからだ。

ジークフリートの真摯な瞳に、コリンは結成した時の事を思い出した。

——そう、我々は戦う術を知らぬアルカディアの民に成り代わり立ち上がった。アルカディア解放という使命の前に、誇りや名誉、自尊心など何の意味があるというのだ。

過ちは正せば良い。我々はアルカディアの民にとってたったひとつの希望なのだから、アルカディア解放まで決して立ち止まる事は許されないのだ——。

コリンは、ジークフリートが本当に伝えたかった事を理解した。

アルカディアの希望を一身に背負っているジークフリート。そんな彼はいつだってその事を自覚している。だからこそ、彼の言葉はコリンの心の中に強く響いた。

「……コリン殿、大きな声を出してすまなかった。だが、わかってほしかったのだ。我々は、アルカディアの民の希望だという事を。その希望たる我々が挫けてはならないのだ」

ジークフリートは申し訳なさそうな表情で言葉が過ぎた事を謝罪した。その表情に先ほどのまでの厳しいものはない。

「謝らないでくれ。大切な事に気づかせてくれたのだ。こちらこそ謝らなければならないのに、お前が謝っては私は立つ瀬がないではないか」

コリンはジークフリートの肩に手を置いて表情を綻ばせる。二人は顔を見合わせると突然笑いだした。

「——コリン殿、そろそろ戻ろう」

ひとしきり笑った後、ジークフリートが口を開く。そして、屈託のない笑顔を見せながら歩き出した。

コリンは頷くとジークフリートの後続く。気持ちを引き締め、これからの行動計画を練りながら野営地まで無言で向かった……。

——ジークフリート率いる解放部隊は、その後めざましい活躍を見せた。

トルネ・パロに配置された召喚魔法陣はそのほとんどが破壊され、防衛線はさらに後退する事となる。

そして、ついにローラントから遠征部隊がトルネ・パロ入りした――。

底に眠りし者・前編

……戦いを終え、先を進む一行。上の階とは違い、通路は視界がほとんど無いに等しく、魔法の明かりを灯さねばならないほどだった。

魔法の光が一行の少し前を照らす。奇妙な敵との遭遇に皆、改めてここが気の抜けない場所であると気を引き締めて歩を進めていく。

「……この先に何か潜んでいます」

先頭を歩くラムダは異質な空気を感じた。前方から気配が近付いてくる。ラムダは盾を構え警戒を強めた。

「……なんだ、あれは？」

前から半透明な物体が床を這いずる様にして近付いて来る。その形状は球体を崩した様な奇妙な形状をしている。

気配はあるが敵意も殺意も感じられない。その歩みは非常に遅々としており、とても危険なものには見えなかった。

思わず警戒心が弛みそうになる。その奇妙な生き物は、ラムダ達にそんな印象を与えた。

「ずいぶん柔らかそうだな……剣で斬れるのか？」

ラムダは剣を抜き構えをとる。だが、どうしても緊張感の無い相手に斬りかかるべきか様子を見るべきか決めかねている。

「……スライムとは少し違う様に見える。遺跡にいるから通常のものとは違うのだろうか？ どちらにせよ、油断してはならない相手には違いないのだが……」

一行の中でも戦闘経験の豊富なアルルも不思議と張りつめた緊張感が薄れゆくのを感じていた。

遺跡の奥にいるもので危険性の低い敵などいるわけがない。理屈ではわかりきっているのだが、何故かその奇妙な生物に脅威も警戒心も感じられない。

これが作為的なものだとしたら、これほど恐ろしい“罠”は無いだろう。アルルは内心、己を叱咤し気を引き締めようと頭を振った。奇妙な生物は一行の前で停止するとウネウネと体を揺らしながら行く手を塞ぐ。

どうしたら良いのか。攻撃するわけでも無いその奇怪な動きに、ラムダ達は構えを取るものの対処できずにただ奇妙な生物を静観する事しかできなかった……。

—— 転移魔法陣により移動した先に現れたリツシュは、目の前の光景に我が目を疑った。

そこはまるで異界の空間。辺りを見渡してみると光輝く壁で覆われている。そこは、部屋と呼ぶにはかなり広い造りになっており、見た目の華やかさは無いものの荘厳な雰囲気にも包まれている。そう、それはまるで宮殿の広間を思わせるものだ。

一定の光度を保った壁が古代に使われた特殊な材質である事にリツシュは気づく。

この場所は、当時の状態を維持している——。

高揚感に満たされていくのを感じながら、リツシュは思わず我を忘れて叫びそうになる。過去の文献にも無い異質な空間は、リツシュの理性を蝕むほどの価値があったのだ。

《……汝、魔術を学びし者よ……》

—— 突如、強烈な意志を持った“声”がリツシュの頭の中に響いた。

「うつ」

興奮状態だったリツシュはその“声”を浴びせられ、呻き声を上げるとその場にうずくまった。

全身が痺れた様に麻痺し、思考も薄れていく。それでもリツシュ

は意識を強く持つて集中して周りを見渡す。だが、声の出所がわからない。

《……何故に我が眠りを妨げるか……我が問いに答えよ……》

再び“声”が頭の中に響き渡った。あまりの衝撃にリツシュは声も出せず地面に手をつく。

(……なんだ、この“声”は……)

頭の中に直接響く声。一種の思念伝達の術にも似たそれは、リツシュの精神に大きな負荷を与えた。

(……この“声”は、思念……もしや……魔導士なのか……)

強大な意志の力が脳内に直接侵入する。

リツシュは意識が途切れそうになりながらもその正体を判別、即座に意志の侵入を防ぐべく精神に防御壁を張り巡らす。しかし、その抵抗も意味を為さなかった。

《……言葉を知らぬか……》

“声”は精神に張り巡らした防御壁をやすやすと侵入してくる。強大な意志力がリツシュの精神に深く入り、無作為に心の中を覗き込む。

「うつっ」

異質なものが精神に侵入する耐え難き苦痛。意志の弱い者なら、間違いなく精神を崩壊させていただろう。

心の中を覗かれている、という行為にリツシュの魂は凍り付きそうになる。

ローブの袖から出る腕の筋肉は激しく痙攣し、フードからは大量の汗がこぼれる。それらが、その見えない死闘を物語っていた。

魔術師として鍛え上げた強靱な精神力のおかげで、なんとか意志の侵入による精神崩壊だけは免れる。だが、心の中を読み取られた

という苦痛は魂を激しく揺さぶり、大きな衝撃を与えた。

「――面を上げよ」

思念とまったく同じ声が室内に響く。

リツシュは氣力を振り絞り、全身を震わせながら頭を上げる。

苦痛に歪んだ顔。そこに、たったそれだけの行為に途方もない労力を必要としたかが伺い知れる。

……視界が定まり、それを認識した瞬間リツシュの目は大きく見開いた。驚愕に値する光景が眼前に広がっていたのだ。

光輝く壁には、鮮やかな色彩で描かれた絵画があり、室内の所々に今にも動き出しそうなほど細部まで彫り込まれた繊細な彫刻や透き通るほど高純度の白鉱石で造られた柱が置かれていた。

形容するならそこは宮廷の間といってもいいほどの荘厳さがある。劇的な変化に動揺を隠し切れない。

この時、リツシュは己の精神状態が異常なまでに高揚して普段の冷静さを失っていた事に気づいた。

――過去、一部の魔術師のみが“魔導”に対して探求し続けてきた。ギルドは、その成果を大いに評価し偉大な功績と讃えるも組織としては直接的な論理解析を一切行わず、個人研究の範囲でしか魔導の研究を認めなかった。

また国家による魔導探求に関しては厳しく制約を設け、それを守らぬ国家に対しては一切の学術的協力や支援を拒絶する、という一見ギルドにとって不利益を被るだけの無意味な方針を現在も守り続けている――。

その魔導に対する頑ななまでの姿勢の意味をリツシュは悟った。
（……魔導に触れるは意志を試される……意志無き者は力に魅了され、己が邪心に心を惑わされる……私は、乱りに触れてはならぬ

力に触れてしまい、魔に導かれてしまった様だ……)

魔導は魔を導く正道なる力、魔に導く破滅の力。

ごく限られた者のみが辿りつける境地。その危険極まりない理をギルドが警戒し、厳しい魔導探求の制限を設ける理由を身を持って知ったのだ。

……無意識の内に逸らしていた目を声の主に向ける。

そこには、悠久の時を越えて甦りし偉大な存在があった――。

底に眠りし者・後編

リツシュの目の前に佇む者……それは、内なる強大な“力”を身に付けた存在だった。

——まず目を引いたのは、長くまっすぐに伸びた白髪。それは年を重ねたためのものではなく、生命の息吹を感じさせる純真な白。青く光る双眸は、時の流れを見続けてきた悠久の重さを感じさせ、深淵なる知性と果てしなく広がる空を彷彿させる澄み切った青だった。

その双眸に映る自分の矮小さが際立つて見える。いかに己の心が歪んでいたかを思い知らされ、そしてその醜さを読み取られた事に血の気が引いていくのを感じた。

男はゆったりとした紫紺のローブに身を包み、胸には大きな星形の首飾りを下げている。その星形の首飾りに手を当てながら、リツシュの心の奥を見透かす様に見下していた。

「……汝は、意志疎通が出来ぬ故……言葉を以て対話せねばならぬ……」

男の声が魂を震わせる。

リツシュは金縛りにあったかの様に視線を逸らす事もできず、半ば放心状態でその場に固まっていた。

心の中に侵入された事でリツシュの精神力はかなり消耗し、男の言葉を聞くだけですでに限界の状態だったのだ。

「……愚かな……邪心につけ込まれ……魔を導くか……」

そう言う男は不意にリツシュの後方に視線を移した。

リツシュは精神力を激しく消耗し身動きできない状態だったが、意識を背後に向けそこにいる気配を感じ取る。

「……封印せし“出来損ない”が……汝の心につけ入り、我が領域への侵入を企んだか……」

男は再び視線をリツシュに戻す。刹那、リツシュの消耗した精神力は全快し、しかも男の真横に転移していた。

「——えっ？」

精神と肉体を襲っていた苦痛が一瞬にして無くなり、景色も一変した事にリツシュは戸惑いの声を上げる。

視線を先ほどまでうずくまっていた場所の少し後ろに向ける。そこには全身が黒い靄で包まれた人型の者が立っていた。

ギラギラと妖しく光る双眸からは、生命の欠片も感じさせない。その異様の姿に、リツシュはただただ驚愕の表情でその場に固まってしまう。

黒い靄で包まれた“それ”は宙に浮遊する。そして、両手を広げると凄まじい魔法力を放出させながら“それ”の周りに無数の光が次々と出現し、まるで嵐の如き勢いで魔力を収束させて圧縮した魔法球を造り上げていった。

「……“時”の重さに耐えきれず、正気を失うしたか……我が眠りを護る役目……放棄したと見なす……」

男がそう言った瞬間、無数の光が弾け飛ぶ様にして次々と破裂していく。

——魔導だ！

魔法力ではない、意志の力。リツシュはその不可思議な現象を“魔導”によって引き起こされたものであると瞬時に悟った。

一瞬のうちに黒い靄の周りにあった魔法の光球が消滅し、人型の“それ”のギラギラと光る双眸が恐怖の色に染まっていく。

（……完全に理解の範疇を逸脱している……あの光球に、上級悪魔をも葬る魔法力を感じたのに……）

その圧倒的な意志力にリツシュの表情から血の気が引く。

何故、魔導が歴史の闇に埋もれていたかが想像できたからだ。

この“力”は世界を滅ぼしかねない。リツシュは本能的に魔導の恐ろしさを悟ったのだ。

「……汝の推測は正しい……“真の魔導”とは、完全なる意志の具現……あの出来損ないの様な“魔導”は兎戯に等しい……」

男はリツシュの思考を読み取り、静かな口調で語りかけた。

「……それ故に、魔導を世に出してはならぬ……理を知つてもならぬ……故に我等は深き眠りに入り、悠久の時を以て魔導を越えるものを待つのだ……」

男は青い瞳を黒い靄に向け、言葉を続ける。

「……我が眠りを護るため……この地に番人を置いたが、時の重さに魂が歪められた様だ……」

次の瞬間、黒い靄はかき消される様に消えはじめた。身動きひとつ無く声も発せず空間にとけ込んでいく。

男は星形の首飾りに手を当ててリツシュを見下ろす。その目は凍る様に冷たく無機質なもので、リツシュの魂を鷲掴みにする。

「……汝はこの記憶を忘れねばならぬ……汝の仲間の元へ白紙のまま帰さねばならぬ……過ぎたる邪心の報い……汝はすべてを忘れ、我は再び眠りにつく……」

リツシュはその言葉の意味を悟り、己の身の破滅を知った。

触れてはならぬ禁忌に触れた報い。すべての記憶の消去……それは、死ぬ事と変わらない。

もはや逃れられぬ破滅に、リツシュの精神は脆くも崩れる……。

その目は虚ろ、力を無くした表情は白痴の様だ。迫り来る絶望にうなだれ、呆然と地面を見つめ裁きの瞬間を静かに迎えた。

——人形の様に身動きひとつしないリツシュ。かすかな生命の波動を漂わせてはいるが、もはやそこに意志の力は無い。

そのそばに佇む紫紺のローブをまといし男は、無害な赤子と化した魔術師を一瞥すると誰に言うわけでもなく呟きを漏らした。

「……魔導が魔導を呼び覚まし、再び世に蔓延るか……我が安息の時は、まだ先の様だ……やはり行かねばならぬ……」

男は前にかかる白髪を後ろに跳ね、物言わぬリツシュに背を向け

てローブの裾を上げた。

それを合図に光輝く壁はゆっくりと点滅をはじめ。

「……他の番人は放っておくか……侵入者達の試練となろう……越えてみよ……さすればこの者を復活させよう……」

そう言つと男は颯爽と歩き出した。転移魔法陣を通り抜け、壁に向かつてまっすぐに歩を進める。

壁にぶつかると思つた瞬間、男の体は何事もなかった様に壁をすり抜けていった……。

精神を蝕む脅威

行く手を塞ぐ丸みを帯びた半透明な物体。おそらく球体と思われる体をウネウネと揺れ動かし、こちらの様子を伺うかの様に静止していた。

ラムダ達は、いつ戦闘に突入しても対処できる様いつもより余分に間合いを取り、注意力が散漫しない様に意識を集中させる。それでも通路を塞ぐ物体に対してどう動くかをまだ決めかねていた。

その物体に敵意も殺意も感じられない。一見ただのスライムにも見て取れる。だが、あまり広いとはいえないこの通路を塞ぐだけの巨体の持ち主であり、またここが古代遺跡だった事により十分過ぎるほどの脅威はあるはず。しかし、その緊張感を著しく損ねる雰囲気醸し出す物体に対して、脅威を感じつつも何故か警戒心が薄れてゆく……。

「……いたい、何故？」

この状態で戦闘になったら、まず不利は免れない。対応が遅れ敵に先手を取られる危険が高いからだ。

それなのに張りつめた空気が、緊張と警戒により気が引き締めた心が萎えてゆく。

もし、これが魔導による畏だとしたら……これほど効果的なものは無いだろう。

「……あれに、火は通じるでしょうか」

後方に控えたアルベリヒが口を開く。

先の戦闘に加わっていなかった彼はこの不可思議な現象を体感するだけの緊張を持っていなかった。そのため、ラムダ達よりも冷静に状況を見る事ができた。

「——えっ」

アルベリヒの言葉にラムダは目を見開き、彼の方に振り向く。その隣のアルルも半透明な物体に目を向けつつ、アルベリヒの言葉にハッとする。

——今まで慣れない緊張の中で気が張りつめていたアルベリヒにとって、ウネウネと体を揺らす物体が気持ちに余裕を与えてくれた。戦闘経験の浅さゆえに、この異常な雰囲気の影響を受けずに済んだのだ。

「——どうしました？ 見たところ、あの生物はスライムの一種の様に思えるので炎の魔法で牽制してみてもどうでしょうか？」

アルベリヒは隣で呆然と佇むメレイに声をかける。

「えっ？ ああ……そうね……」

メレイはまるで夢から醒めた様な、他人事の様な反応をみせた。アルベリヒは彼女のその態度に、いまだに意識が虚ろっている様な、そんな印象を覚える。

何かがおかしい。あの生き物と対峙してから皆の様子が変だ。

敵意も殺意も感じないが、決して油断して良い相手ではないはずなのに……本能的に鋭い勘を持つラムダや幾多の戦いを経験したアルル、それに実際に遺跡の敵と戦った事のあるメレイのこの気の弛み様はどうしたというのか。あの生き物が彼等の精神に何らかの影響を及ぼしているともいうのか。

もしそうだとしたら、この生き物は魔導によって生み出された“魔導生物”とでもいうべき代物ではないかとアルベリヒは推測する。

魔法を遙かに超越する魔導ならば、彼等の状態も頷ける。戦意を鈍らせるだけでも戦況を不利にできるし、戦闘経験が多ければ多いほど異常を感じて術中に陥る。

直接的では無いものの……いや、間接的なものだからこそ、この不可思議な状況に相手が混乱するといえよう。

——つまり、手練であればあるほどこの精神状態の変化に気を取

られ、冷静さを失っていくという事だ。

(……この場に留まるだけの実力の無い私だけが、この精神状態の変化に気を取られずに済んだのでしょうか……)

アルベリヒはこの状況を変えるべく一歩前に出ると、ラムダの肩を掴み激しく体を揺さぶった。

「アルベリヒさん、どうしたんです？」

いまだに状況をわかっていないラムダはアルベリヒの行為に戸惑いの表情を浮かべる。

「ラムダ、あれは戦うべき敵ではありません。こちらの戦意を削るだけの……生きた罨です」

アルベリヒはそう断言するとアルルに向き直り、ウネウネと蠢く生物を指さした。

「アルル姫、おそらくあれはたやすく葬れるはずです。魔法で牽制してみてください」

生きた罨――。

その言葉がアルルの意識を現実に戻す。

(……そうか、生きた罨か。現れるものすべてが敵と思っていた。

ここは魔導の遺跡、生きた罨も十分あり得るではないか……危うく冷静さを失うところだった……)

アルルはアルベリヒの言わんとすべき事を理解した。

罨なら敵意も殺意も無いは当たり前だ。目に見える脅威を無くし、目に見えない敵の優位を得るための、相手の油断や慢心を誘い確実に弱体化させる策ならただそこにいるだけで良い。

ここまで進んで来た者ならば、それを勝手に脅威と認め、目の前にあるものすべてを排除しようとそれこそ全力で戦う。その様な精神状態でこの生きる罨は呆気なく倒される事により相手側に己の実力を錯覚させるのだ。

ここまで何事も無く来れたのは、確実に深部へ誘うための策略だろう。冷静な判断力を奪い、集中力を削ぐのが狙いなのだ。そして、

十分に気の弛んだところを一気に攻めれば……相手に絶望を与え、気を挫く事などたやすい。さらに気力の無い者を葬るのだから、戦力の消耗を抑えられるという利点も生まれるわけだ。

——このままの状態で先を進むのは危険すぎる。

わすがな気の変化を察知できるからこそ、この策に捕らわれる。

アルルは頭を振って、弛みそうになった気を引き締めた。

「……アルベリヒ殿のおかげで迷いが取れた。危うく術中にはまるところだった……ここが、危険極まりない場所である事を改めて痛感した。感謝する」

アルルはそう言ってアルベリヒに軽く礼をする。それから立ちふさがる生物に向き直り、手にした剣を鞘に戻すと両手を合わせて魔力を集中させた。

精神世界で構築した想像力が魔力によって両手に具現化する……。

「——炎よ来たれ！ 風と共に舞い上がり、眼前に立ちふさがるものを焼き尽くせ！」

力ある言葉が魔法の光を炎に変える。その炎は小さな竜巻と化して通路を塞ぐ物体に襲いかかっていく。

炎の竜巻はウネウネと蠢く“それ”を一瞬にして飲み込む。

逃げる事もできず炎に巻かれる。凄まじい勢いでその巨体を激しく燃え上がらせると、瞬きする間もなく身を縮ませ焼き尽くされていった……。

その光景にラムダとメレイはハツとする。魔法の一撃、しかも炎系魔法で中程度の威力しかない《炎風》の魔法であっさり倒せた事に二人の思考が止まったのだ。

《炎風》では、下級悪魔でさえ倒せない。しかも《炎風》の魔法にしては炎の勢いが強すぎる。たとえ炎に弱かったとしてもこの燃え方は異常であり、また古代遺跡に巣くうものが魔法の一撃で倒せたのだから、二人の反応は当然といえよう。

「……えっ、なんで？」

メレイは燃え尽きようとする物体を凝視し現実のものなのか、はたまた幻覚であるかを見極めようとした。

彼女も魔術師、《炎風》の魔法の威力は熟知している。故にこの光景が現実のものには到底思えなかったのだった。

一方のラムダは、困惑した表情で構えを解きアルルとアルベリヒの二人を交互に見やる。

（……二人は、何をしたんだ？ あの魔法はそんなに凄いものではなかったはず。それなのに、魔法の一撃で倒すなんて……）

ラムダはアルベリヒの言った“生きた罠”の意味を理解し切れずにいたので、このあまりにも呆気ない結末に疑問ばかりが募っていく。

もしアルルが剣で倒したのならまだ理解できただろう。だが、アルルは剣を振るわずに魔法―ラムダでも威力が弱いとわかる―を用いて倒した。それが、ラムダには不思議でなかったのだ……。

謎に満ちた生物を焼き尽くした炎は、すべてを灰にするとかき消す様に無くなる。熱を帯びた風が吹き抜け、塞がれていた通路の先にまっすぐに伸びているのが見えた。

一行は気を取り直して先に進む。

この状況をまだ理解していないラムダとメレイにアルベリヒが真相を伝える。

この先にこそ、本当の脅威が控えている事を――。

暗闇の先に

目に見える脅威に遭遇する事無く、一行は魔法の明かりだけを頼りに闇に包まれた通路を一步一步ゆっくりと進む。

彼等の表情は揃って険しく、その口は堅く閉じられている。肉体的というよりも精神的にかなりの負荷をかけられているのが、彼等の発する空気から感じ取れよう。

不意に先頭を歩く青年が剣と盾を構え一歩先に出る。

魔法の光の照らされた表情は厳しい。短く切り揃えられた茶色い髪は幾度かの戦闘で乱れ、額からは玉の様な汗が浮き出ている。その黒い双眸には強い意志が宿っているのが見て取れた。

魔法の光に照らされた闇の中で、その瞳は何かを捉えたのだ。

「——行き止まりか？」

青年はその正体を見極めようと目を細める。だが、距離が離れているせいか正確な判別ができない。

闇の中、それも魔法の明かりから離れた場所に見える“それ”を見つけただけでも良しと思えるのだが、彼は不満そうな表情ですぐ後ろを歩く女剣士に振り返った。

「……この先に何かあります。しかし、距離があるため判別する事はできません……」

青年はそう言うとともに目を細め、その正体を判別しよう意識を集中させた。

女剣士は青年の言葉を受けて先に視線を走らせる。しかし、彼女の目には深淵なる闇の他には何ひとつ映らない。

この闇を見通せたのか。女剣士は青年の視力になかならず驚きを覚えた。

「——ラムダ、無理に見なくとも良いぞ。エルフやドワーフと違

い、我々には暗視能力などないのだから――」

女剣士は真剣な表情でこの闇を見通そうとする青年に声をかけ、その隣へ歩を進めると魔法の光をさらに前に移動させる。

「――それにここでは何があっても不思議では無いのだから、皆常に不測の事態を想定している。無駄に精神力を消耗するだけだ、そこまで神経質になる事はないぞ」

責任感の現れか、青年の真摯な表情に強い意志を感じた女剣士――アルル―は肩に手をかけて優しく諭す。

集中するのと神経質になるのでは違う。その事を伝えようとアルルはラムダの緊張を解そうと微笑みかけた。

場違いとも取れる彼女のその笑顔にラムダは肩の力を抜く。

「そうですね、少し神経質になっていたかもしれませんが」

そう言つてラムダは肩を揺らして体を解した。張り詰めた空気漂う現状において、精神的な消耗はなかなか抑えられない。冷静に事態を見続けなければならないこの状況下では尚更だろう。

そんな中、笑顔を浮かべられるアルルの精神力の強さにラムダは気を取り直す事ができた。

その光景に後方を歩くアルベリヒとメレイも表情を綻ばせる。

「……アルル姫の言う通りです。決して警戒を怠つてはなりません。だからといって神経質になつてはいざという時に力を発揮できません。状況が状況だけに、判断が難しいですがね……」

白い法衣をまといし青年が穏やかな口調で言葉を発する。

後方にいるために魔法の明かりが届かずその表情を見る事はできないが、闇の支配するこの場では動く度に法衣の揺れがはっきりと見て取れた。

冒険を生業とする冒険者ではないアルベリヒ。だが、表情こそ見えないがそのしっかりとした口調と動きからは疲労を感じない。まだ体力はそんなに消耗していない様だ。

「本当にそうね。緊張感を弛ませるいやらしい罠を仕掛けられてさ、それで神経質にならないで警戒心を保つのは難しいわね……」

アルルの言葉を素直に聞き入れ、気持ちを入れ替えたラムダの姿にメレイも頬を弛ませた。

——直接的な脅威が無く、精神的な消耗を促す仕掛けの数々。

厳しい戦いに慣れている冒険者でもこの心理的圧力に対処するのは難しい。肉体的な苦しみや痛みには相応の耐性を持つ冒険者だが、心理的圧力に長時間耐えうる精神力を持つ者は少ないからだ。

魔術師、それも一定以上の鍛錬を積んだ者でなくば、この遺跡を進むのは困難であろう。まさしく“魔術師のための遺跡”と呼ぶにふさわしい。

その古代遺跡を臆する事なく一行は突き進む。通路はまっすぐな一本道になっており、魔法の明かりが照らす先には石畳と壁しか映らない。

未知なる敵との遭遇も無く、通路の奥まで無事に辿り着く一行。

——そこには、金属質の大きな扉が悠然と佇んでいた。

邪の会合

大陸南東部に位置するトルネ・パロ。

“アルカディアの勇者” ジークフリート・ラークス率いる精鋭部隊が潜入に成功した。

トルネ・パロ入りしてからの精鋭部隊の進撃は凄まじく、領土防衛のため各所に配置された召喚魔法陣は次々と破壊され、討伐軍の士気は大いに上がった。それは対悪魔戦を考慮した部隊編成で臨んだ結果ではあるが、敵軍に統制の取れる者がいなかった事が討伐軍にとって有利に働いたのである。

各所に配置された召喚魔法陣が破壊された事によりトルネ・パロの防衛線は後退、勢いに乗る様に討伐軍は大がかりな遠征に乗り出す。

グランディノ帝国に程近いトルネ・パロ西部の街・トーラ。

この街の郊外に古びた屋敷がある。

その敷地内を人とは異なる異形の生物が徘徊していた。周囲には人の姿は無く、身の毛がよだつ様な妖気に満ちたこの地に討伐軍——いや、アルカディアに住むすべての者達——が“諸悪の根源”と烙印を押す人物がこの地にいた。

——屋敷の中は日中であるにも関わらず薄暗くなっており、より一層不気味な雰囲気を漂わせている。暗い上に調度品もあまり置かれてないせいか、外観よりも広く感じられる廊下はまるで冥府に通じる境界を思わせる。

普通の者なら、一刻たりともこの場に留まる事はできないだろう。そんな邪気に満ちた屋敷内を小間使いの格好をした一人の女性が場違いな笑みを浮かべて歩いていった。

「——この地が落ちるのも時間の問題かしらね。いくら戦力になるとはいえ、本能の赴くままに動く悪魔だけでは統制の取れた軍隊に太刀打ちできない。やはり、それなりに人心掌握の術も講じなければアルカディア征服は成し得ない……」

小間使い風の女性は現状を分析し、遅々として進まぬ戦況に征服戦争の危うさを感じていた。だが、その言葉とは裏腹に女性の表情は明るい。まるで追い詰められていくのを楽しむかの様だ。

長い廊下を進み、下り階段を駆け足で降りていく。降った先は一層暗さを増し、一筋の光も差さない完全な闇に包まれていた。

手を伸ばせばもうその手は見えない。そんな闇の中を女は明かりも持たず早足で歩く。

廊下の突き当たりまで進むと立ち止まり、一息ついてから壁に向かって手を伸ばした。

「——闇から這い上がりし魔物よ、そのおぞましき姿を現し虚無の扉を開きたまえ——」

言葉が発せられた瞬間、闇に扉が浮かび上がる。そして、常人では耐え切れぬであろう濃厚な妖気を放出させながら扉はゆっくりと開いていった。

その妖気に身を晒されながらも女は平然と表情を変えずに立っている。

「——ジード・バロム様、入ります」

小間使いの格好をした女は、凜とした声で闇の扉に向かって軽く一礼すると闇に出現した暗黒の空間に足を踏み入れた……。

そこは、至って普通の部屋だった。おそらく異空間で廊下と部屋を仕切っただけなのだろう。

広い室内には調度品などは一切なく、質素というよりただの空き部屋の様な殺伐とした雰囲気にも包まれていた。窓から差し込む光で室内は明るくなっており、女は顔に手をかざして前に出る。

部屋の中央まで進むとかざした手を下げて眼前に佇むローブをまとった老人――おそらく魔術師だろう――に向かって一礼してから口を開いた。

「……ご報告に参りました。

侵入した少数部隊の消息は依然掴めておりません。

ですが召喚魔法陣の破壊工作は現在も続いており、悪魔による巡回警備の活動範囲はさらに縮小傾向にあります。またローラントからの遠征軍が領内に到達した模様、その規模は推定ですが二万で駐在軍の約三倍となっています。ノーマンケル領へ援軍の派遣を要請しましたが、到着までに時間が掛かる様です。このままですとトルネ・パロは討伐軍の手に落ちましょう……いかなさいますでしょうか？」

女は妖しい光を宿らせた紅い瞳を老魔術師に向ける。

――眼前に佇む老人こそが、このアルカディアに混乱を招いた元凶である魔術師ジード・バロムであった。

漆黒のローブを身にまとい、目深に被ったフードからはその表情を読み取る事はできない。

予想を覆す討伐軍の勢いに何を思うのか。女は老魔術師の心の底を探りたい気持ちになった。

ふとテーブルの上に視線を向ける。そこにはアルカディア全土を記した地図が広げられていた。

老魔術師は女に目を向ける事無く、その地図を凝視しながらおもむろに口を開く。

「……こうなる事は初めから想定していた。討伐軍がトルネ・パロ解放に大軍を向けた今、かの地の守りは騎士団と群れた無法者達のみ。両者の溝は深い……ここで攻めに転ずればローラントに大きな打撃を与える事ができるよう……」

その表情は見えないが、淡淡とした口調には特に動揺は見られない。どうやらこの事態をあらかじめ想定し、何かしらの策を講じている様な節が見受けられる。

(……この地をエサに本陣を攻めるつもりか……)

このトルネ・パロ奪還には、リンデンの義勇軍全軍に自軍の中核を担う部隊を中心に精鋭を差し向けた討伐軍。あえて規模を大きくする事により、トルネ・パロ防衛のためマルク・ケラーノやノーマンケルからの挟撃を避けるのが狙いの様だ。

だが、老魔術師はこの地を捨てて本陣を叩くという。アルカディア解放を掲げる討伐軍ならいざ知らず、得るものも少ない上、攻めるに易く守るに難いトルネ・パロを死守する理由はない。

たとえ奪還されてもローラントとグランディノの連絡が取れる様になるだけで、魔導士の暴虐により土地自体の利用価値はほとんど無くなっていた。

ともすれば老魔術師の言は的を射ている。

(……だが、征服をもくろむ者の発言とは思えないわね。理屈は正しいが、一度手に入れたものをあつさり敵に渡すとは……人間の割に所有物に対する執着が少ない……)

女は老魔術師の状況判断に感心した。

魔に属する者として、この野望高き老魔術師に仕えるだけの価値を見いだしたからだ。

「……ジード・バロム様、ならばノーマンケルに要請した援軍は取りやめた方がよろしいでしょうか？」

「構わぬ。その方が怪しまれなくて済む。それにローラントを攻めるといっても軍を派遣するつもりはない」

老魔術師はそう言う。地図に描かれたローラントとノーマンケルの国境付近を指さした。女はその意味が理解できず、返す言葉が見つからない。

「……ここ、ザインでお主達に暴れてもらおうと思っている。アークデビルの力、是非見せてもらいたい……」

老魔術師は地図から目を離すと女に顔を向けた。

フードのせいでその目を捉える事はできない。だが、女は何故か背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「……ローラントに骨のある者がいるか、見て来てほしい。でな

いと《魔導士》の気晴らしでまた無駄に荒廃な土地が増えてしまうのでな」

その言に女は眉をひそめる。

魔導士。

その名は魔界でも聞いていた。

意志の力を用いて思念を現実のものとする無限の可能性を秘めた脅威……魔導士は、それを身につけた恐るべき存在だ。

過去、魔界をも揺るがした絶技“無限の技―インフィニティ・スキル―”に匹敵するその脅威が再び地上に甦った。

彼女をこの世界に拘束するのも、すべては“魔導”の力によるもの。故に、その言葉に不快感と脅威を強く感じていた。

「……仰せのままに。かの地を混沌の渦に導きましょう……」

女は、沸き上がる負の感情に身を委ね、恭しく礼をすると老魔術師の言を待たずにきびきを返す。

その様子を老魔術師は静かに眺め、姿が闇に消えると小刻みに肩を震わせた。

——悲劇の扉は、開かれようとしている——

諍いの街

——ローラント王国とノーマンケル王国の国境近くの街・ザイン。敵領がすぐの距離にある事からローラント王国の前線基地も置かれていた大きな街だ。

この街には、ローラント軍はもとより魔導士討伐軍の解放志士も数多く駐留している。さらにこの前線には、クロムワイズ全大陸に発したアルカディア冒険者ギルドの《魔導士討伐》の依頼に乗った他大陸から来た多数の冒険者で賑わいをみせていた。

このような世界的規模とも呼べるほどの共闘が実現したのは、魔法技術の発展により魔法伝達機能が構築されたためである。確立された魔法による通信が短時間での情報の伝播を可能のものにし、現在の様な多民族・多人種による軍事拠点へと変貌させる。

無論、それは文化や考え方の違いによる諍いを引き起こす要因となる。そのため、この街では些細な事でもすぐに喧嘩に発展してしまう。

そして今、ザインの街ではローラント駐留軍と討伐の依頼を受けた冒険者達の間で一触即発の険悪な空気が漂っていた。

それは、討伐軍がトルネ・パロ遠征計画を公表し部隊が派遣される事を知ったザインの冒険者達が、功を上げる絶好の機会を得たばかりに敵地潜入の計画を練りはじめた事に端を発する。

討伐軍がトルネ・パロ解放に部隊を派遣する事により敵の注意はトルネ・パロに集中、また潜入したジークフリート率いる精鋭部隊が神出鬼没の電撃作戦を敢行しているため、敵が危機感を募らせ領土防衛のためにノーマンケル駐在の兵を援軍に出す事が確実であり、それによるノーマンケル領内の警戒が手薄になるのが明白だったからだ。

ノーマンケルに潜入するなら今をおいて他はない。

ザインの冒険者達はこの機を逃すまいと軍備を整えていた。しかし、ザイン駐留のローラント軍はその計画を中止する様勧告、しかも門を閉鎖しザイン防衛の任務を強制した事が冒険者達の反感を買ったのだった。

自国防衛にのみ腐心するローラント軍に対する冒険者達の怒りは凄まじく、気性の荒い者も多かった事から、その対立は深刻なものとなっていた――。

街の大通りでは、物資を求める多くの人々で賑わいをみせている。行き交う人々の表情はどれも活気に満ちており、戦時中とは思えぬ雰囲気醸し出していた。

だが、それは街の住人や商人などの食料や物資を扱う者――ザインに駐留しているローラント軍兵士やアルカディア解放に身を投じた冒険者達の恩恵を受けた一般の人々――だけのものであり、裏を返せばその活気に満ちた賑わいも表面的なものでしかなかった。

街はローラント兵士と冒険者達の対立が日々深刻になりつつあり、それぞれに集う場所も限定されている。万が一、足を踏み入れようものなら無事に済まされない。両者の間では、そんな険悪な空気が漂っていたのだ。

「――お引き取り願おう。我がローラント騎士団だけでザインの防衛は十分にできる。それ故、この街に冒険者などいらぬ。それに、ノーマンケルから来たお前達が敵の間者でないとも言い切れない。そんな怪しい者達を素通りさせるわけにはいかぬ」

ザインの門で冒険者の一団が衛兵に止められていた。

衛兵は、一団が冒険者パーティーである事を知るとあからさまに顔をしかめて有無を言わさぬ口調で通行を拒否する。

「我々はノーマンケル王国の生き残りの者で、決して怪しい者ではございません。今まで敵の目を逃れるため各地を転々とし、必死の思いでここまで来たのです。お願いです、我々にアルカディア解

放の手助けをさせて下さい」

一団のリーダーらしき男が衛兵に懇願する。後ろに控えた者達の表情は皆、焦燥し切っていた。

見るからに休息を必要としている。

しかし、衛兵は鼻を鳴らすと手にした槍を構えた。

「ふん、見るからに怪しいわ。このまま立ち去れば見逃そう。だが、どうしても通るといふならば我等ローラント騎士団を敵に回すと思え」

一方的に言い捨てる衛兵。

その言葉に互いの顔を見合わせる冒険者達。

長きに渡る逃亡の果てにこの心無い対応……体力的にも精神的にも限界に近い彼等に反論の余地などない。

——ローラント騎士団はここまで堕ちたのか。

命を賭けて辿り着いた矢先の冷酷な仕打ち。もはや何を言う気力もない。

「……承知した……」

一行は、衛兵に頭を下げると背を向けて疲れ果てた体に鞭を打って元来た道に戻る。

失意を禁じ得なかった。その足取りは重く、彼等の命運に陰りを漂わせる。

衛兵は彼等のうなだれた姿を見て鼻で笑う。見る者が見れば、その表情に邪気が宿っている事に気づいただろう。

——志無くした彼等の心には、無意識に悪意が芽生え始めていたのだ——。

災いの使者

国境に近いだけあって、ザインの街は多くの人で賑わいを見せている。

街行く人々の表情はどれも活気に満ち溢れ、とても前線基地が置かれた風には見えない。しかし、少し通りの外れに目を向ければ、この街の危うい側面が容易に垣間見る事ができた……。

「——貴様、冒険者だな？　ここがローラントの駐屯地と知って侵入して来たのか？　直ちに去らぬと痛い目に遭うぞ」

そう言つて銀色の鎧を身につけた男が冒険者風の女に侮蔑の眼差しを浴びせた。

鎧の胸には翼を広げた鷲の紋章。頭を覆う兜の両側には一對の羽が装飾されている。これは、アルカディア東部を支配するローラント王国の騎士の証。

——そう、彼はローラントの騎士なのだ。

その後ろには同じ鎧を身につけた男が三人控える様に立っていた。ただ、頭を覆う兜はない。

見た感じ、警護隊長とその部下といったところだろうか。

一方、女の方は一目で冒険者と言われただけあって騎士達のような重装備ではなく、胸元が金属で簡単に補強されたごく一般的な皮製の鎧を身に着けており、頭には兜をつけず髪止めのバンダナが巻かれているだけの軽装備。腰に吊された剣は騎士のそれより細く、この者が騎士でない事は容易に判断できた。

「……女、聞こえぬのか。ここはもうローラントの宿营地。貴様等冒険者の立ち入りは禁じられている。すぐに引き返せ、これは脅しではない！」

男は腰に吊した剣に手をかけるとドスの効いた声で再度忠告する。その剣の鞘には一際派手な装飾が施されていた。おそらくこの男が隊長であろう。

だが、目の前に佇む女は飄々とした態度で男の言葉を黙殺、頭を手を当てて乱れた髪を整えはじめた。艶のある漆黒の長髪に指が通ると流れる様に髪が踊る。

男達はその仕草に表情を険しくした。そして、後ろに控えた男達は女を取り囲む様に移動し、場に険悪な雰囲気をまき散らす。

女は余裕の表情で男達の様子を眺める。その不遜な態度に男は眉をひそめ、剣に当てた手に力を込めた。

「……どうやら、痛い目に遭いたいらしいな……よし、この場はお前達に任せよう。煮るなり焼くなり、好きにしてよい」

隊長らしき男は女を取り囲んだ三人にそう言うと、剣に当てた手を放して背を向ける。

「……私はこの場にいなかった。故にお前達が何をしてても咎める事はない……」

感情を抑えた低い声で吐き捨てる様に言い放つ。表情には出していないが、男の身から滲み出る怒りは相当のものがあつた。

負の感情をまき散らし、男は三人を置いて足早にその場を立ち去って行く。

その様子に女の頬がかすかに上がる。まき散らされた負の思念が辺りを包み、女を取り囲む様にして立ち塞ぐ男達の心に変化を与えたからだ。

残された三人は、男の姿が完全に見えなくなったのを確認するとニヤニヤと女に近寄る。その姿はとても騎士とは思えぬ風情を醸し出していた。

「——へへへへ、隊長も粋な計らいをしてくれるぜ。さあて、じっくり愉しませてもらおうか」

女の右手の位置する男が下品な笑い声を上げ、大股で詰め寄る。他の二人もそれに続き女との距離を詰めた。

「ぐへへっ、いい体してんじゃねえか……」

左手に位置する男は、雄の目で下から舐めまわす様に女の体を見つめる。鎧越しにも豊満である事が伺える胸元、すらりとした白く細い足に喉を鳴らし唾を飲み込む。

背後に位置した男は女のくびれた腰から視線を下げ、形の良い臀部や程良い筋肉で締まった太股に目を血走らせる。

悠然と佇む女に本能的に雌の匂いを感じ取った男達は、膨れ上がった情欲に久方ぶりの女の味を連想する。その雄の欲求を惜しげもなく放つその姿は、もはや騎士の風格など無くただのゴロツキといってもいい。

このまま無惨にも汚されてしまうのか。状況から見て、女の貞操は風前の灯火の様に見えた。

しかし、危機的状况にも思えるこの事態に女は動じる気配を微塵も見せず、逆に妖艶な笑みを浮かべると紅い双眸を光らせ男達を見回した。

立ち去った男の負の思念が自分を囲む男達の欲望のタガを外す。彼等の身から吹き出る情欲の炎が天に向かって燃え盛る様子を女の目ははつきりと捉える。

——常人には捉える事の出来ぬ負の感情。女は目に見えぬそれを心地よさげに眺める。その双眸に宿る魔性の輝きは、人間のものは似て非なる光を放っていた。

だが、男達は女の魅惑の肢体に目が眩んでは沸き上がる欲望に意識を奪われてしまい、その内なる本質を見極める事ができない。

……男達の様子からその事を察すると、女は漆黒の長髪をなびかせる様にしてゆっくりと振り返る。

ただそれだけの動作に男達はさらに負の感情を高ぶらせ、目に映る妖艶な微笑みにわずかに残る理性を消失させた。

目は虚ろ、その表情は恍惚に酔いしれている。

もし、彼等の中に“力”を視る能力を有した者がいたなら、この

場所に凶々しい邪気が渦巻いているのがはっきりと見て取れただろう。

男達は、完全に女の術中にはまったのだった。

「——お前達、人気の無いところへ案内しておくれ」

その言葉に男達は力無く頷く。そして、まるで操り人形の様なきこちない動作で歩きはじめた。

その後を女はゆっくりとついて行く。

彼女がこの地に災いをもたらすために来た邪気な者とは知らず、男達はその身から溢れる妖気に晒されて正気を失い、言われるがままに女を近くの納屋へと連れて行った……。

——薄暗い納屋に入った途端、男達は糸が切れた様に床に座り込む。

女は彼等の様子に満足げに目を細めて微笑みを浮かべた。そして、一人の男のもとに歩み寄り額に指を当てると耳元で囁きかける。

「……我と契約せよ。さすれば、その願望を満たす力を授けよう

……」

甘美な声が男の精神に入り込む。まるで呪詛の様な言霊の力にその魂は激しく揺さぶられる。

——抑圧してきた下劣な欲求を思いのままに満たせる。

その醜い願望が男の邪心を増大させ、操られるが如く首を縦に振らせる。

その反応に女は紅い目を光らせた。

「……では、果て無き快樂に耐え得る体にしてやろう。その願望、心の赴くままに満たし、快樂の果てに行き着くがよい。我が名はアゼリ……混沌を招く者なり……」

言葉とともに額に当てられた指が光り、男の全身を包み込んでいく。その光は男の体に吸収される様に染み込む。

「——おおおおお……」

男は全身から溢れんばかりに精力を漲らせ、目を見開くと腹の底から響く様な唸り声を上げる。

「……アゼリ様、何なりとご命令下さい……」

止めどなく沸き上がる精力に体を震わせながら、男は抑揚のない声でそう言つとアゼリに向かって片膝を付き首を垂れた。

「我が命は“汝、欲求を満たせ”だ。だが、その欲求を満たす相手はこの街に滞在する冒険者に限定する。この場に連れ込んで陵辱の限りを尽くし、そして生かして解放せよ……」

燃え上がる様な紅い瞳に邪悪な意志を宿らせ、アゼリは男の耳元に囁きかける。

男の表情は邪悪なものへと変化し、負の思念をまき散らしながら勢いよく立ち上がった。

「……御意。冒険者共に、耐え難き恥辱と果て無き快樂を与えましょう！ おおおおおつつつ！」

男は両手を天に突き出す様な格好になると凄まじい形相で吠えはじめた。

アゼリは男が堕ちたのを満足げに眺め、床に座り込む二人にも同様の契約を持ちかける。

——二人の魂も難なく邪悪な思念に侵食され、アゼリの下僕と化する。

「……人間は、大事なものを汚されれば、すぐ墮落してくれる……」

無限の可能性を秘めた人間の魂。だが、限らない可能性を持つ故に人間の魂は不安定である。

その魂の脆さにつけ込み、負の思念を植え付ける事により共倒れを狙うアゼリの企み。

アゼリは、納屋を飛び出して行った男達が振りまいた不浄の念を静かに見つめた。そして、これから巻き起こるであろうザインの惨

劇に思いを馳せる。

男達は、己の願望を満たすべく次々と冒険者達を汚していくだろう。その欲求は決して満たれぬとは知らず、精力が尽きるまで冒険者達を犯し続けるのだ。

冒険者の中には恋人同士、あるいは夫婦の冒険者もいよう。その最愛の者を汚され、怒りと憎しみで魂を墮落させる者も現れるはず。その憎しみは人の心を伝播する。負の思念は人々の心に連鎖するのだ。

憎しみは憎しみを呼び、その不和をさらに広げていくだろう。そして、人間達は互いに憎しみ合い魂を墮落させていく。

それにより人々はまとまりを失い、互いの足を引っ張りあつては負の感情を増大させ、悪魔の力を増幅させてくれる。

「——ふふふ、これで騎士団と冒険者達の対立は深刻なものとなる。そして、この地を中心にローラントは破滅へと向かつて行くのだ……その不和はアルカディア全土に広まり、人々の心に混沌をもたらすだろう……」

人間達の弱点。それは、いかに精神力が強く自身の苦痛に耐えられようと、最愛の者の苦痛に耐えられる強さがないところだ。

男達の行動がそれを証明してくれる。

アゼリは、それを連想すると思わず笑いがこみ上げてきそうになった。

「……直接手を下すよりも効果的かもしれないな」

そう呟くと目を瞑り、男達が帰って来るのを待つ事にした――。

負の伝播

漆黒の闇に包まれたザインの街。

人々はそれぞれの家に帰り、一日の疲れを癒す。

夜の通りを出歩く者といえば、ザインに駐留するローラントの騎士達と《魔導士討伐》の依頼にやって来た冒険者達しかない。

彼等はいつになるか知れぬ戦いに向け、毎夜の如く酒場で英気を養うのだ。

「——ごちそうさま、また来るわ」

女はカウンター越しにマスターに声をかける。

「そうか。でも、リークはどうする？ 酔い潰れて歩けんだろう

……ウチには寝る場所もないし、かといってマリア一人ではリークを運べんだろう？」

酒場のマスターは女―マリア―の隣で爆睡する男を指さす。

マリアはため息をひとつ漏らし、リークの頭を軽く小突いた。

「……マスター、悪いんだけどもう少しこのまま寝かせてあげられないかしら？ 彼、最近少し疲れてるみたいだから起こすのも悪いし、それにちょうどいいから部屋の片付けをするわ。だから、今日は先に帰るわ」

マリアはリークの頭を愛おしむ様に撫でながら言う。しかし、夢の中にいるリークは恋人の優しさに気づかず、安らかな寝息をたてていた。

「……ふふふっ」

マリアはその寝顔に微笑みを浮かべ、カウンターに立て掛けた細剣を手にとると腰に吊した。

「——じゃあ、お金は置いていくから。よろしくね」

マリアは腰に結わえた小袋の中から金貨を取り出してカウンター

に置く。そして、リークの頬に唇を軽く当てるとマスターに手を振って外へ出て行った。

マスターは金貨を手にしてリークに視線を向ける。

「……お前さんは幸せ者だなあ」

そう言ってマスターは自分の肩を揉みながらカウンターの奥に移動した。

ザインの夜は静かだ。

ノーマンケル王国との国境沿いにあるため、普段から夜間の外出は少ないのだ。

特に“アルカディアの勇者”ジークフリート率いる部隊がトルネ・パロ奪還の潜入作戦を始めてからというものの、冒険者と騎士団の対立が深刻化し、ザインの住人達はその煽りを受けるのを避けるために夜間の外出を極力控えていた。

——なので、人通りはほとんど皆無だった。そんな人気の無い通りを彼女は黙々と歩く。

マリアはリンデン大陸から来た冒険者で細剣の使い手である。

クロムワイズ七大陸の中でも《剣匠》の称号を持つ者が一番多いリンデンにおいてもその剣の腕は決して劣る事は無く、《聖王》の起こした“統一戦争”で恋人のリークとともにナム・ラマ聖王国の部隊に所属し、リンデン各地を飛び回り多くの戦果を上げてきた実力派の剣士で幾多の修羅場を潜り抜けてきた。

“統一戦争”では、敵の奇襲を受け瀕死の重傷を負った事も敵に捕らわれ捕虜の恥辱を味わった事もある。

そういった苦い経験もしてきた彼女にとって、現在ザインで問題になっている両者の争いは恐れる必要の無いものだった。冒険者達は騎士団の暴挙に拍車がかかるのを警戒し単独行動の自制を促してはいるものの、実際は両者の確執は深刻だが死者が出るほどの事件は起きていない。

故にマリアは比較的平穩の続く現状に知らず知らずのうちに気が弛んでいた。

生半可に実力がある故の失態。

マリアは、その慢心を後悔する事となる……。

酒場から宿まではそう離れていない。ただ裏通りを行かねばならないので一応警戒だけはしている。

——そんな中、マリアは闇に蠢く何かを察した。

今宵は星も見えない闇夜。

賊だろうか。マリアは後を尾けてくる何かに意識を集中させながら、万が一に備えて細剣を手につけ早く宿に戻ろうと早足で歩き出す。

「——えっ」

マリアは急にその場に立ち止まった。前からも気配を感じたからだ。

……不気味な気配が漂いはじめる。

マリアは何故か寒気を感じ、さらに意識を集中させて辺りを見渡した。

「——なかなか勘の鋭い人間だな」

突如、マリアの耳元で声が生じる。

——背後に何者かがいる！

マリアはその声に背筋が凍り付きそうになった。近付いてくる気配などまったく感じなかったからだ。

「……だ、誰……」

マリアは思わず声を震わせながら背後に立つ者に問いかける。

圧倒的なまでの邪気と魂を鷲掴みにされそうな声。

その声にマリアの体は金縛りにあったかの様に動けなくなっていた。

「——言ったところで私の事はすぐに忘れる……何故なら、これからお前の心に負の思念が深く刻まれるのだから……」

声はマリアにそう囁くと耳に息を吹きかける。その瞬間、全身に悪寒が走り吐き気を覚えた。

マリアはこの者が危険極まり無い人物であると本能的に察知した。

——逃げなければ！

マリアは声の主から離れようと駆け出そうとする。だが、体は麻痺したかの様に指一本動かなかった。

「……さて、そろそろ行こうか。お前が来るのを待ちわびている者がいるのでな……」

冷淡な口調で囁く声がマリアの心に絡みついてくる。すると、頭の中に靄がかかり意識が朦朧としてきた。

それに危険を感じたマリアは神経を集中し必死に抵抗を試みる。しかし、頭の中の靄は容赦無くマリアの意識を包み込んでいく。

「……り、り……く……」

あがなえない自分に絶望を覚え、マリアは愛しい人の名を漏らす。そして、意識が闇に飲み込まれ力無く倒れ込んだ……。

……頭の靄が晴れていく。それと同時にマリアの意識は少しずつ戻っていった。

（……ここは……どこ……）

目を開けば天井が見える。だが、見慣れた宿の天井ではなかった。

（……酒場を出て……私は……）

マリアは記憶を辿ってみる。だが、酒場を出てからの記憶がまったく無い事に気づく。

とりあえず自分の置かれた状況を見ようと身を起こそうとする。だが、身を起こす事ができない。

マリアは動く箇所がないか体中を動そうと身を擦ると、かろうじて首が動かせる事がわかった。

唯一動く首を横に傾ける。すると、見るに耐えない光景とともに両手で覆いたくなる様な声がマリアの耳に飛び込んできた——。

……そこには四つん這いになった裸の女を後ろから一心不乱に犯す男の姿があった。

女は涙を流しながらも激しく悶える。男はもの凄いい形相で女の腰を掴んでは狂った様に激しく腰を振っていた。

「……ああっ、ああんっ……いやっ、やめて、やめてえ……はあっ、やつ、ダメエ……いやあ、いやあああああっっっ！」

涙を流しながらも無理矢理快楽の果てに追いやられた女……マリアは、その女の顔に衝撃を覚えた。何故なら、その女は以前ザインの酒場で出会った女剣士だったのだ。

（……クレア……）

知り合いの女剣士が陵辱されている。

マリアは果てたクレアをなおも責め立てる男に飛びかかるうとするが、麻痺した様に体は動いてくれない。

「……ゆ、許してえ……もう、ダメエ……お、お願いっ、ああっ！ ああっ！ ああっ！ ——いや、いや、いやあああっっっ！」

執拗なまでに腰を打ち付ける男にクレアは狂った様な叫びを上げて再び果てる。

マリアは犯され続けるクレアに自分の無力さを感じ、涙を浮かべて心の中で何度も謝った。

——目を瞑り、クレアの痴態から目を逸らす。
いったい、どうなっているの。

マリアはこの状況を理解する事ができないでいた。わかっている事は、捕らわれているという事実のみ。

自分にできる事は少ないが、とにかくクレアを助けてこの場から逃れようと考えを巡らしはじめた。

その時、目の前に人の気配を感じた。

目を開くと、そこには別の男がマリアに覆い被さる様にして見ているのが映った。

マリアはクレアの痴態を思い起こし、男から逃れようと身を擦る。しかし、体はピクリとも動いてくれなかった。

(……いやっ、動いて……犯される……)

必死にもかくも体は言う事を聞かない。

隣ではクレアの叫びにも似た到達の音が響き渡り、マリアの心に絶望感を与える。男はマリアの体に覆い被さるとその体を抱き締めた。

(……や、やめて……)

声を出そうと口を開いた途端、男の顔がゆっくりと近づく。

マリアはわずかに動く首を横に振って抵抗する。しかし、男はマリアの顔を両手で押さえると強引に唇を合わせてきた。マリアは唇を閉じて口内に侵入しようとする舌を拒む。

男は必死の抵抗をみせるマリアから唇を離し身を起こす。そして、おもむろに拳を振り上げると彼女の腹部を強打した。

「——うぐっ！　かはっ、はっ、はっ……」

マリアは一瞬息ができなくなり、苦痛に身を振りながら荒い息をつく。男は再びマリアに覆い被さると今度は鼻をつまむ。

「——ぶはっ、はっ、はっ……んっ！」

息苦しさから口を開いたマリアの唇を塞ぎ舌を差し込む。侵入した舌は口内で暴れ回り、逃れようとするマリアの舌を捕らえ激しく絡みついた。それと同時に男はマリアの体に手を這わせ、その肉を堪能しはじめる。

隣で狂った様に喘ぐクレアの姿に自分の未来を重ね、マリアは絶望を感じた。

身動きを封じられたせいで五感はやえ渡り、思いとは裏腹におぞましい感触を感じ取ってしまう。そのため、意識を閉ざして責め苦をやり過ごす事が出来ない。

(……た、助けて……リーク……)

マリアは心の中で何度もリークに呼びかける。それが無駄な足掻きであると知っていても、逃れられない現実から少しでも意識を離

そうと彼女は必死にそれに縋りつく。

たとえこの身が悦楽に溺れてしまっても、心までは溺れてしまわない様に。

マリアはその責め苦に耐えようと覚悟を決め、心を強く持とうとリークへの呼びかけを何度も繰り返した――。

……男達に陵辱の限りを尽くされたマリアは、先に囚われていたクレア、その後に連れ去られて来た女達ともに十日後に解放された。彼女達は皆、意識を失ったまま全裸で通りの真ん中に投げ捨てられていた。

発見した冒険者はすぐに彼女達を大きな宿に搬送し、容態の安否確認とその仲間への報告を行う。

連絡を受け駆けつけた仲間達は、彼女達の変わり果てた姿に安堵し、また犯行に関わった者への憎しみをたぎらせた。仲間達は皆、被害者の恋人や夫だったため、その憎悪は凄まじく意趣返しを心に誓い、彼女達の回復を待つて相手の正体を強く問いただす。

――彼女達は知っていた。忌まわしい行為が終わり、男達が衣服を身に着けた時に彼等の正体を知ったのである。

彼等の身に着けた鎧にローラントの紋章が刻まれていた事、さらには彼等が自分達にした非道な仕打ちを涙ながらに訴える。

悲しみに沈む彼女達の悲痛な思いに、彼等はローラント騎士団への憎悪を増幅させる。いくら対立が深刻でも騎士団は踏み込んではいならない“領域”に手を出してしまったのだ。

『戦友は己の命に相当する無形の至宝』

冒険者にとって、旅を共にする仲間は掛け替えのないものだ。それが愛する者なら、まさに命よりも大切なものとなる。

騎士団は、その掛け替えのない仲間を汚したのだ。

被害を受けた者の中には、その苛烈な責め苦に精神が崩壊した者や快楽に堕ち性に狂った者も多くいる……。

そんな彼女達の姿に騎士団の行った非道な仕打ちは容易に想像できた。

憎しみの感情に囚われた彼等は酒場にいた冒険者達にローラント騎士団への復讐を宣言、激しく燃え盛る憎悪は酒場にいた冒険者達の心に次々と伝播し騎士団への復讐に賛同した。さらにこの事件はザインの冒険者達に広まり、同情した多くの者がローラント軍への復讐に参加する事となった。

——ローラントへの報復は、不幸にも成功してしまう。

奇襲された宿舎にいたローラントの騎士達は皆殺しに遭い、さらに憎しみが納まらない被害者の恋人達の手でその死体を磔にされたり肉片になるまで細切れにされた――。

この事件により、騎士団と冒険者達の間で血で血を洗う戦闘が始まる。

もはや、ノーマンケル襲撃や領地防衛どころでは無くなったのだ。ザインの街は瞬く間に惨劇の舞台と化し、人々は負の思念に晒され、その心を変質させていったのである……。

気づいた者

ザインでの戦闘は、日に日にその激しさを増していった……。

関所を押さえているローラント騎士団は、冒険者はもとよりザインの住人の通行を禁じ、さらに外出禁止令まで発令する。関所は完全に封鎖され誰一人として出入りする事が出来ない状態となった。ザインの街の外周に駐留するローラント騎士団は部隊を編成し、ほとんどの冒険者達が滞在している裏通りを中心とした一帯に襲撃をかける。この襲撃による被害は双方共に相当なものとなり、しかもその中にはザインの住人も多数含まれるという極めて深刻な事態となる。

この騎士団の暴挙にザインの住人達はローラントに対する不信を募らせ、ついには住人をも戦闘に巻き込む事態にまで発展していく。

——ザインの街の中央に建つ教会。その建物の中心部にそびえ立つ石柱の頂上に一人の女が佇んでいる。

漆黒の長髪を吹き荒む風になびかせ、燃え上がる様な紅い瞳は、肉眼では捉える事の出来ないモノを見通していた。

眼下に広がる負の思念に女―アゼリ―は細く笑む。

「……想像以上の効果だな……それにしても昔とは違い、人間の魂はずいぶんと脆弱になったものだな……」

さもつまらなそうに呟くと髪を結わえる様に指で絡める。

——騎士団と冒険者達の溝は、埋める事が出来ない程に広がっていた。

それはアゼリの目論見通りの展開である。しかし、あまりにも思い通りに事が進みすぎたためにアゼリは物足りなさを感じてならな

かったのだ――。

「……無限の可能性を秘めた人間……私は彼等の本来の“力”を知っている。この街には“力”を持つ者や目覚める者はいない、という事なのか……」

何の手応えも無く望み通りの結果になった事にアゼリは失望にも似た気持ちを感じる。

ジード・バロムの命を受け、自らザインの街に乗り込んだのに人間達はあっさりと策に引かかる。その愚かさにアゼリは自身の負の欲求を存分に満たす事ができなかったからだ。

一部の例外を除いて、上位の悪魔や魔物は強大な力を持つ故により多くの負の思念を吸収する必要がある。それは、本来住んでいる魔界とは違い、妖気の薄い地上界では長時間その身を留める事ができないためだ。

妖気の薄い地上界では不浄の気は拡散してしまう。そのため“妖気の塊”といっても過言ではない悪魔や魔物達は、常に妖気やそれに代わる負の思念を吸収しないと自身の妖気が拡散されてしまい、最悪の場合枯渇してしまつて消滅するのである。

上位になればなるほど必要とする妖気の摂取量が増える……アゼリもその例に漏れず大量の妖気が必要とする身なので、できるだけ長い時間をかけて負の思念を生み出してもらいたかったのが本音だった。

それなのに人間達は負の思念を熟成させる事無く暴力に走り、早期決着に踏み切ったのである。本来の目的の他に地上に負の思念を蔓延させる狙いもあったので、アゼリはすぐに暴力に訴えた人間の愚かさに不満を抱いたのだ。

――風が運ぶ不浄の気。その純度は、アゼリの望むまでに高まつてはいない。

負の思念を熟成させる新たな手段を講じなければ。それにはやはり自ら行動を起こさねばならない。

この内戦状態を長引かせるため、アゼリは自ら出向いて魂を墮落させる事にした。そして、遠くに視線を向け人々の集まる場所を探しはじめる。

ある地点に目を止めた。比較的純度の高い負の思念を発見したのだ。

次の瞬間、アゼリは石柱から姿を消す。それと同時に石柱は音を立てて崩れ出した……。

——裏通りを歩く者がいた。

足音ひとつ立てず黙々と歩き続ける影。しかし、その歩みは尋常でない速さだった。

その姿は完全に闇に紛れており、暗視能力を持つ者でなければ何ひとつ特徴は掴めないだろう。

——影は、先日ローラントの部隊に焼き討ちされ廃墟になった屋敷に飛び込んだ。

闇に包まれた室内は焼け焦げた臭いが充滿している。鼻の利く者なら、その中に人間の焼けた臭いも感じた事だろう。

常人なら、思わず吐き気を覚えるであろう強烈な臭い。

影はその中を颯爽と進んで行く。暗視能力でも備えているのか、闇の中をまるで何事もなかったの如く進む。そして、室内を奥へ移動すると地下へと続く階段を降りていった。

地下に降りると影は通路の奥へ歩いていく。その突き当たりで立ち止まると目の前の扉を無造作に開けて中に入って行った。

室内はテーブルとベッドがあるだけの飾り気のない造りだった。テーブルの上に置かれた小さなランタンに火をつけ部屋に明かりを灯す。

——闇に紛れていた影の姿が明かりに照らされる。

その身を包む外套は、森林を思わせる緑を基調とした目立たぬ迷

彩柄。その彩色は創られた黒よりも闇に紛れる。

その外套に取り付けられたフードも同じ迷彩色で、それを被る事によって、より一層闇に溶け込む事を可能にしていた。

フードを取ると、その者は精悍な顔つきの男である事が伺い知れた。さらに外套を脱ぎさるとその下からは均整の整った引き締まった筋肉が現れる。見るからに造り込まれた屈強な肉体だった。

男は腰に手を伸ばすとベルトに取り付けた金属で造られたであろう奇妙な形状の“モノ”を、それを保護する革製の入れ物ごと外した。

——この金属で出来た奇妙な形状のモノは、クロムワイズの七大陸の一つモルゲン大陸で製造された“銃”と呼ばれる携帯式の飛び道具である。

魔法の力を一切使わず技術だけで生み出された“銃”は、その精製に熟練の技を必要とするため、モルゲン大陸でもごく限られた数しか生産されていない希少価値の高い謎に満ちた射撃武器だ。

射撃武器といっても発射されるのは矢ではなく金属の小さな弾であり、しかもその殺傷能力は極めて高い。高速で放たれる弾丸の威力は凄まじく、盾や鎧、さらには人体をも難なく突き抜ける非常に優れた貫通力を持ち、たとえ急所を外しても十分に致命傷を負わせる事ができた。

それに加え長弓をはるかに越える飛距離を誇り、なおかつ弓の様に矢をつがえる動作がいらす“銃”の引き金を引くだけで連射も出来るという弓よりも高い速射能力をも持っている――。

その“銃”を慣れた手つきで分解する。複雑な構造の金属の組み合わせ。熟練の技術無くばとても触れる事はできないであろう“それ”を手際よく解体しては手入れしていく。

精密な動作でわずかに原型を残すだけとなった金属の塊。今度はそれを時間を巻き戻したかの様に組み立てていく。

……あつという間に手入れを終えた“銃”を革製の入れ物―ホルスターと呼ぶ―に収めると男はそれらを持ってベッドに横になった。

目を瞑り、日夜繰り広げられるザインの争いを思い起こす。その異様なまでに憎しみ合う両者の異常な姿に、男は何か引つかかるものを感じてならないでいた。

このまま争い続けたら取り返しが付かない事態になる……様々な戦場で生き抜いてきた男の勘がザインの現状に強い危機感を抱かせるのだった。

男は、内戦状態になってから冒険者などのザインの住人達から距離を置く様になっていた。何故か妙な胸騒ぎを感じ、情勢を見る事に徹したのである。

——その行動が、男にザインの異変に気づかせる。

それは、ザインの住人達から距離を置く事により、負の思念の影響を受けずに済んだからであつた。

男は、事件の始まりから現在までの状況の変化を事細かに分析、そして極秘に調査を進めた結果、不審な点が幾つも浮かび上がったのである――。

ローラントの騎士による女性冒険者への連続暴行事件。

その被害者の多くが恋人または夫婦の關係を持った冒険者であつた事。しかも全ての被害者が暴行を受けただけで体には傷ひとつ負わず、さらには相手の正体をすっかり覚えていた事だ。

騎士団側からしてみれば、いかに冒険者達との折り合いが悪くとも、厳しい戒律により婦女子に対しての暴行などあつてはならない事で、騎士団全体の責任問題にも発展しかねない重大な規律違反にあたる背徳行為である。

もし、これが騎士団の仕業だとしてもその正体が知れる様な事態は避けるはず。間違つても被害者を解放するはずは無く、しかも見

せつける様に鎧を身に着けたなどまずしないだろう。それを『騎士団の犯行です』と言わんばかりの、まるで騎士団が冒険者達に対して宣戦布告するかの如く不可解な行動……男からすれば、両者を争わせるための何者かの計略としか思えないのだ。

さらに冒険者側の動向にも不審な点が見られる。

——それは、ローラント騎士団宿营地への襲撃計画だ。

後にその全容を知った男の視点から見ると、とても自軍の被害無く敵を全滅させるだけの緻密さや精確さとは無縁な怒りの感情に任せた計画性の無いただの暴動にしか見えず、密かに何者かの助力——例えば騎士団側の手引き——が無ければ返り討ちに遭った可能性が高いとはつきりと断言できるぐらいずさんな代物であつたからだ。

これらの状況を踏まえて鑑みれば、明らかにザインの混乱をもくろむ“何者かの策略”と推測する事ができる。しかし、確固たる証拠が得られないので男は両者の争いから距離を置き、ただ静観する事に留まる。

(……この時期に両者が争って利する者……魔導士か？ いや、それは違うな。

魔導士が噂に聞く力を持つなら、直接叩きに来れば済む事でこの様な策を労する必要など無い。とはいえ、いくらなんでもジード・バロムがザインに直接乗り込むとは考えにくい……なら、その配下か？ ノーマンケルへの侵攻を防ぐ事とローラントへの不信を煽るための間者か……可能性としては低くないな)

あらゆる可能性を想定し、ザインの情勢を見る。この争いにおける今後の展開を読む事により、自身のすべき行動を見極めるためだ。

男は、ギルドの懸けた賞金に惹かれ単身アルカディアに乗り込んで来た冒険者である。故に魔導士と直接関わりのない今回の争いに余計な労力を消耗するわけにはいかなかった。

——クロムワイズ史上類をみない“魔導士討伐”……アルカディ

アの国々が復活してきた《古の魔導士》に為す術も無く蹂躪され、冒険者ギルドから全大陸に“依頼”という形で援軍の要請が来た今回の討伐における《古の魔導士》に懸けられたその賞金は、大変莫大なもので二千億ゴールドという途方も無い金額となっている。

これは、近年終結したばかりのクロムワイズ最強の戦闘民族の巢窟・ティア・レステア大陸の軍事宗教国家・ジエグ・スクアル帝国が起こした《龍神戦争》時の龍神教会所属の“龍天女”ティアリート・セイレンに懸けられた三千億ゴールドに次ぐ史上二番目の金額であり、その数十年前に終結した同じくティア・レステア大陸を三度揺るがした《悪魔戦争》の首謀者・大悪魔“マジック・ダイヴ”フェイト・メレイスに懸けられた一千億ゴールドを遥かに凌ぐものだった。

彼等に懸けられた金額は、他の賞金首とは桁が三つも四つも違い、その危険度は計り知れない。だが、傭兵として各大陸の戦場を駆け抜けた男は、一見無謀にも受け取れる“単身による任務遂行”を本気で成し遂げようとしていた――。

無論、男はそれなりの勝算があつて“魔導士討伐”に参加している。裏社会の情報にかなり精通している彼は魔導士に関する知識のある程度得ていたのだ。

――“大悪魔”と呼ばれ、その名に恥じぬ戦いを見せてはティア・レステア大陸を征服の一手手前まで一人で導いた“マジック・ダイヴ”や“無限の技―インフィニティ・スキル―”を極め、結局は傷ひとつ付ける事すら適わず龍神レステアの暗示を解く事でなんとか和解した“龍天女”に比べ、《古の魔導士》は入手した当時の文献を紐解けば付け入る隙が十分にある事が判明したのである。

しかもその文献の信憑性はかなり正しいと判断できる裏付けも取れているのだ。故に男はこの“魔導士討伐”の依頼を受け、ここザインの街で機会を伺っていたのだった――。

ザインの情勢は極めて悪い。

あまり広いとは言えないザインの街での戦闘は、日に日に激しさを増し両者ともに甚大な被害を被っていた。

この内戦がローラントの威信を著しく損ねるのは誰の目にも明らかであり、いくら騎士団が関所を封鎖していても情報が外に漏れる事は必至といえよう。

もし、この惨状が敵に知れたら……ノーマンケルからのローラント侵攻の機会に手を貸す事になる。しかも戦争が始まって以来、民の信頼を逸してきた騎士団への不満はさらに拡大、内乱の恐れも出てくるだろう。そうすれば国防衛に奔走するローラント王国は自滅への道を歩む事になるのは確実である。

男にとって、正直ローラントの滅亡など興味がない。しかし、“魔導士討伐”を掲げ、その中心となる討伐軍の拠点があるローラント王国が戦火に巻き込まれる事態を避けたいのもまた事実だった。何故なら辛くも魔導士達敵軍を三国で包囲している事により均衡を保っている現実があるからであって、またそれにより魔導士の行動範囲を狭め、一撃必殺の威力を持つ“銃”による狙撃を行う機を得るためにも現状維持は必要不可欠だったのだ。

よって、万が一その均衡が崩れ魔導士の行動範囲を広げる事となれば、男がもくろむ“魔導士暗殺”の実行が非常に困難になる。

——男がこの治安の崩壊したザインに留まるのもすべては魔導士を倒すため。あくまで魔導士を葬るに必要なから内情を調べているのであって、決して善意からザインの混乱を防ぐためではない。

それなのに魔導士が関わっているとは到底思えない一連の争いに何故か目を離せない。魂の内側にある“何か”が警鐘をけたたましく鳴らして止まないのだ。

男は、その内なる声に導かれる様にザインの混乱の元凶を探ろうとしている。

それが、歴史の裏側に潜む《禁忌》に触れるとは知らず……。

——ザインに暗躍する災厄の種。

——歴史の闇に足を踏み入れる者。

決して交わる事の無い影が《運命》の名の下に導かれようとして
いる……。

動かぬ騎士団

ザインで冒険者とローラント騎士団の戦闘が始まってから丸一週間が経過した。

元から両者の間には相容れぬものがあり、以前より度々衝突していた事からも今回の事態はまったく予測できないものではなかった。特にローラント軍は、ザイン西部の要所であるウル地区の防備には以前より力を入れており、今回の戦争前から様々な事態に備え精鋭の主力部隊を配置していた。

このウル地区はノーマンケルとの国境より近い事から、ジータ・バロムが戦争を起こす以前より軍に徴発され、対ノーマンケルの要所としてザインに置かれた宿营地の中でも最大規模の軍事拠点である。ザインとノーマンケルの国境沿いは平原地帯となっており、アルカディアで唯一大軍をもって侵攻できる地であるという経緯もあってローラントの主力部隊である“聖槍騎兵団”がその拠点として利用していたのだ。

これはノーマンケルとの国家間の関係の問題というよりも過去の“魔導大戦”により各国境付近の地形は常軌を逸した難所と化していたがローラントとノーマンケルの国境地帯は他の国境と違って地形をねじ曲げられる事がなかったためである。ただ、両国間に跨る平原が平坦かというところではなく大型の古代鳥獣の生息地となっており、その危険性は計り知れない。それでも危険は伴うとはいえ、人の行き来が出来るだけ他の国境地帯に比べればまだマシといえた。これらの経緯もあり、今回の事件においてもローラント軍はすぐに態勢を立て直して軍内部の混乱を收拾し、大きな被害が出たのにも関わらず組織の瓦解を未然に防ぐ事ができたのだった。

——ウル地区にあるローラント軍の本営。ここにザインにおける司令部が置かれていた。

現在、ローラント軍は人員の少ない宿営地を放棄し、このウル地区に集結している。そして、ザインの混乱を鎮めるための幹部会議が行われていた。

「——現在、我が軍の被害は東部のギザ地区にある二つの宿営地で死傷者は確認できるところで三十人ほどであります。ギザ地区は現在も包囲されており、残された騎士が約五十人ほど居て防戦している模様です」

凜とした声で騎士は報告する。鎧の胸部に刻まれたローラントの紋章は煤け、至る所傷んでいた。

——それは奇襲の生き残りの証である。

彼は見回りの任務で宿営地に居なかつたため、奇襲による部隊の混乱を避け窮地に一生を得る事ができたのだった。

ギザ地区での戦闘は辛酸を極めた……警備の目をかい潜った冒険者達の行動は迅速で、宿営地に居た騎士達は体勢を整える暇も無く一方的に攻撃を受け多くの犠牲者を出すに至る。しかもこの時の奇襲が最初だった事から、騎士の多くは混乱に陥り同士討ちの悲劇も生み出したのだった。

その過酷な状況の中、彼は事態の深刻さを瞬時に悟り、戦場から逃れウル地区の本営に駆け込んだのである。

一見すると冷静に被害状況を報告する彼の表情の裏側に仲間を見捨てた後悔と為す術も無く襲撃を許した恥辱が伺える。そして、恭しく一例すると見えざる悲痛の思いを含む言葉を紡いだ。

「……一刻も早い援軍が必要かと思えます。騎士の多くは混乱から立ち直っておらず、おそらくは防戦一方になっているはず。他を攻める兵の一部を回し、脱出の機会を与えるべきかと……」

その言葉に幕内の重鎮達は皆一様に眉をひそめ、お互いに顔を見合わせた。その表情には焦燥感にも似た感情が見え隠れしている。

だが、誰も騎士の言葉に答えようとしなかった。心情としては仲

間を救うべきだと思っ
ていても、答えを返せば自分の部隊を死地に派遣せねばならない。それが黙殺という形で現れ、幕内は静寂に包んだのだろう。

「友軍の援護が無くば、とても持ちこたえる事などできません……
……もしや、仲間を見捨てるおつもりなのですか……」

幕内の静けさに騎士の表情は険しいものに変わった。それは重鎮達の思惑を悟ったからである。

彼等は、私兵の消耗を抑え自勢力の温存を図り権力争いで他より優位に立とうとしているのだ。

——それでも騎士か。彼はここ数年のローラントにおける騎士団に対する不信の噂を思い出す。

これでは民の声が正しいと納得せざるを得ない。そう思うと彼の心に騎士団に対する失望が生まれた。

国を、民を守るべき務めを果たせずして何が騎士なのだろう。彼等の心には富と権力しか頭にないのか。そう思うと悲しい様な、情けない様な気持ちになった。

「……わかりました。もう何も申し上げません。自分はこれから彼等を救う者を募りギザへ向かいます……失礼します」

男は重鎮達に一礼すると足早に去って行く。その背に悲愴感を漂わせ、見る者の心に無言の非難を浴びせる。

しかし、それでも幕内は静寂に包まれていた。彼の行動に称賛も非難もせず、ただ黙して座するだけだった。

——騎士団にとつて、仲間の危機を救うよりもこの不祥事の揉み消し、また団内の権力を向上させる方が大事なのである。

狂気に染まる戦士

「――固まるな！ 魔法がくるぞ！」

突然の大声に騎士達は互いに距離を取り物陰に避難した。直後、騎士達のいた場所で轟音が響き渡り一帯が炎に包まれる。

激しく燃え盛る火柱。騎士達は危うく難を逃れた事に安堵のため息を漏らした。

「まだ安心するには早いぞ！ 肝心の魔術師を見つけるんだ！」

騎士達に向かって男は大声で騎士達に注意を促す。先ほどの忠告も彼がしたのだろう。

その男の鎧は所々煤け、見るからに傷みもひどかった。頭部にいたっては兜すら身に付けていないし剣も抜き身で鞘も無くなっていた。

物質も無く味方の援護も無い戦場に身を置けば、その痛ましい姿も納得できよう。ここギザ地区は、いまだに激しい戦闘が続いていたのだから。

安堵する間も無く物陰から剣を構えた戦士風の男達が現れ、騎士達に向かって一斉に襲いかかってくる。騎士達は即座に隊列を組むと休む間も無くそれに応戦した……。

――ギザ地区の戦闘はいまだに続いていた。

奇襲攻撃により騎士団はほぼ全滅に近い状態だったが、かろうじて生き残った騎士達はこの戦場で一縷の望みを賭けて戦い続けているのである。

当初から冒険者達の攻撃は至って単純なものだった。しかし、事前に魔法による煙幕を張っていたのか、騎士達は何故かその気配を察知する事ができず瞬く間に被害を拡大させていく。

捕らえた冒険者の話によれば、ギザ地区の騎士団はすでに全滅していると言われており本営からの援軍は期待できない状況になっていた。それでも冒険者達はわずかに生き残った騎士の掃討作戦を執拗に継続、彼等を皆殺しにするまで引かない、という異様とも取れる頑な姿勢を貫き現在に至っている。

その事実を知ったギザ地区の騎士達に残された道は、冒険者達を撤退させるか討ち死にするかの二つに一つ。降伏する事は許されず、どちらかが力尽きるまで戦いに明け暮れるしかなかった。

現在、ギザ地区に生存するローラントの騎士はわずか八人。それに引きかえ冒険者の数は三十人を越えている。しかも魔法を使えぬ騎士と違い、冒険者の中には魔術師が複数おりその戦力の差は大きく開いていた。

——通常、市街戦においては味方を巻き込む恐れのある魔法は不利と言われている。しかし、それは敵兵と住民が入り乱れた混戦に限定されるものでしかなく、ただ単純に攻撃魔法の制限があるなどという安直な意見を語るは魔術師の本質を根本的に見誤っていると言わざるを得ないだろう。

建物などの障害物が多い市街地において、補助的な役割に徹した魔術師の存在は森の中のレンジャー並みに恐ろしい存在として市街戦を経験した兵士達の間では認識されている。

無論、逃げ場の制限される市街地での攻撃魔法は脅威となる。だが、一番恐ろしいのは直接的なものではなく、魔法により足音や気配を断った伏兵が味方の間隙を突いて来る事だった。攻撃魔法で牽制し、補助魔法で敵を強化する魔術師……戦う身としてこれほど厄介な存在はいないのだ。

「——炎よ来たれ、眼前の敵を打ち払う炎塊の鞭となれ！」

声とともに死角から炎の鞭が騎士の一人を捕らえた。足に絡みついた炎の枷がブーツを焼き、熱と痛みに騎士の動きが一瞬止まる。

そのわずかな隙が命取りになる……対峙した戦士は剣を叩きつけ

る様にして騎士の頭上へ振り下ろした。

「——がつ！」

鮮血とともに騎士は声も無く前のめりに倒れる。

「魔術師を探せ！」

多勢に囲まれた状態で魔法の援護があつたのではとてもかなわない。だが、乱戦の中周りに気を配る余裕などない。

「——風よ、扇げ！　かの者を包み制約を軽減せよ！」

また別の声が響き渡る。すると、戦士達の動きは鋭くなり、騎士達はその剣戟を食い止めるので手一杯になる。

「——地に潜む奈落の使者よ、眼前の敵に緩やかな時を与えたまえ！」

さらに別の声がする……そして、それまで敵の攻撃をなんとか食い止めていた騎士達の動きが鈍くなつていった。

剣を振るうたびにその切れは色褪せ、かわすたびに体が重くなつていく。それとは対照的に敵の動きは徐々に鋭さを増し、騎士達はどんどん追い詰められていった。

——応戦せずに逃げればよかった。

騎士達は不意を突かれ、なし崩し的に応戦してしまつた事を後悔する。しかし、時は戻ってくれない。

鈍くなる体に気力体力ともに激しく消耗する。状勢は極めて深刻だ。魔法の偉大さと同時にその脅威を身を持って思い知らされる。だが、その教訓を後日生かす事はできないだろう。

騎士達は皆一様に気力を無くしていく。そして、弱気な心は伝播し気が挫いた者から次々に敵の刃にかかつていった——。

……目の前に無残な姿を晒す屍達。周りを見渡せば、焼け落ちた家屋と荒れ果てた大地が視界に入る。

その戦場の跡に、漆黒の髪をなびかせ溢れ出る妖気を惜しげもなく放出させたアゼリが現れ、冒険者達の刃に倒れた騎士達を見下ろ

す。

彼女の策謀の犠牲となった彼等の死に顔は、そのどれもがこの世の未練と大いなる絶望、そして見捨てた事で惨めな最期を与えた仲間達に対する憎悪に満ちている。

この地を漂う負の思念は実に濃密だ。アゼリはその不浄の地に身を置き、自身の妖気にすべく吸収する。

意識を集中させるとまだ冒険者達の気配を感じられる。だが、彼女は構わず久方ぶりの美味を堪能していた。

(……悪くはない。だが、少し物足りぬ。もっと純度の高い邪気が欲しいな……)

暴力により生成される邪気はアゼリの好むところだ。しかし、そういった気というのはすぐさま拡散してしまう欠点があった。

持続性のある邪気……精神的な苦痛による熟成を幾度も隔て生成される高純度のもの。アゼリはその様な邪気を欲していた。

彼女は腕組みをし、さらなる邪気を得る方法を思索する。

(……こうも中途半端な血を見せられると余計に満たしたくなるな……体が疼いて仕方ない……)

まだ近くにいる冒険者達の気を感じる。それ故に手っ取り早く彼等から摂取しようか、と思わず短絡的に考えてしまう。

悪魔としての本能が無意識に彼等の動きを追わせていた。

……その邪気はまだ熟成が足りない。アゼリを満足させるにはもっと純度を高める必要がある。

(……いや、駄目だ。種の本能のままに動いては、悟られ警戒されてしまう恐れがある。せつかくここまで来たのだ。慎重に事を進めねばならぬ……)

アゼリは溢れ出る欲望を押さえ込む様に自身の体を抱き締める。

今は摂取できる気を吸収するに留めよう。アゼリは満たされぬ負の欲求を抑え、熟成しつつある彼等の邪気を食するのを堪えた。

(……この気は……)

自身を戒め、冒険者達の気に再び意識を向けると一際邪気を発す

る者の存在に気づく。

その邪気には覚えがある。少し前に見つけ出した比較的純度の高い邪気を持つ者の気だ。

（……ほお、人間にしては成長の度合いが良いな……あまり期待はしてなかったが、この調子で邪念を抱き続ければ良い下僕にできるな……）

アゼリはその邪気の持ち主がどのような変貌を遂げるのか興味を覚える。

そう思ったのも束の間、彼女はその者のいる場所を目指し歩きはじめた――。

ギザ地区には、至る所に戦闘の傷跡が生々しく残っている。

倒壊した家屋。おそらく魔法によるものと思われる焼け焦げた柱に瓦礫の山。かるうじて元の形を残すのみの哀れな姿を晒していた。大地は争って形跡が色濃く現れており、その戦いがいかに壮絶であつたかを物語っている。地は抉れ流れ出た血が大地を汚す。

辺りには焼けた匂いが漂う。それは肉の焼け焦げた独特の匂いと血の腐った吐き気を誘う臭気で満たされており、常人では正気を保つのも困難な地獄と化していた。

……この世の地獄を体現したかの様な戦場を一人の男が荒れ狂う亡霊のごとく彷徨う。

その握り締めた剣は血塗られており、元の光沢を無くしドス黒い殺戮の刃と化していた。磨き上げられた銀色の鎧は返り血に染まり殺人鬼の装いを呈する。その表情は悪鬼のごとく醜く歪み、双眸に宿った光は負の情念で漲っていた。

狂気のオーラを撒き散らしながら、次なる獲物を狩るべく彼は荒廃の地を歩き続ける。

彼の心には止めどなく湧き出る激情で溢れんばかりだった。

――愛する者を守れなかった自身への怒り。

——愛する者の心に耐え難き深い傷を与えた者達に対する憎悪。それらを抑えようとせず感情のままに敵を葬り、己が理性を徐々に崩壊させていく。

「……どこだ……どこにいる……」

血走った眼に狂気を宿らせ、彼ははまだ見つけれぬ怨敵を探す。最愛の恋人に絶望と恐怖を刻んだ男達。彼はその憎き者共を見つけて出し、生きながらに地獄を見せようと休む事なく探し続ける。

殺しても殺し足りない憎しみ……彼は彼女の事を想うたびに負の感情を際限なく生み出していた。

彼女は心配かけぬよう気丈に振る舞い、その忌まわしき記憶を必死に封じ込めようとしていた。しかし、夜な夜な悪夢にうなされるその悲痛な寝顔に彼は彼女の心に刻まれた苦しみと悲しみがいかに大きいかを、また自分では到底癒やす事の出来ない無力さを思い知らされる。

たとえ憎き者共を捕らえ八つ裂きにしても彼女の苦しみは癒せない。そして、彼女の心からの微笑みを見る事も叶わぬ夢であると……。

二度と取り戻せない日々。そのささやかな幸せを奪った男達が許せない。

その身から発する憎しみのオーラは、もはや人の域を越えていた。

「——憎しみが消えぬか」

突然の声に男の動きが止まる。それと同時に後ろから気が溢れ出る。

振り返るとそこには不敵な笑みを浮かべた女性の姿があった。

「……貴様、騎士ではないな……」

男はそう呟くと背を向ける。

騎士以外に興味は無い。男は突然の出来事にも動じず自身の狂気に導かれるがまま再び歩き出した。

無視された格好のアゼリはその態度に口元を弛ませる。

（……どうやら自我が崩壊しかけている様だ。これは、とんだ拾

いものやもしれぬ……)

彼の魂は狂気に駆逐されつつある。憎しみと嘆き、それらの感情が彼の精神のより深い部分で大きく膨れ上がり、その負の力が暴走を始めようとしている事をアゼリは感じ取った。

彼の魂は《混沌の海》を漂い、その邪念に染まる。

そこには他者への恐怖や興味は無い。ただあるのは己が目的を果たす執念しか存在しない。

それは、己が自我と引き換えに達する魔の境地だ。

——彼は、もうじき狂戦士と化す。

自身を含め、すべてを破滅へ導く狂気の使者。それこそがアゼリの望む姿だった。それが目の前に存在する。

離れゆく男の後ろ姿をアゼリは満足げに眺める。そのうち、こみ上げてくる感情を抑えられなくなり声を上げて笑い出した。

彼の行く末は自身の破滅。利用する間も無く自滅していくだろう。しかし、彼の遺す負の遺産はそれを補って有り余るからだ。

もはやザインの未来は決したも同然。誰も彼を止める事は出来ず、またその邪念の影響を受けザインは暴力の都と化するのだ——。

殺戮の宴・前日

——ウル地区に程近いザイン住民の居住区。

この地区は騎士団と冒険者の争いが始まってから両者との関わりを拒絶し、避難所を設けて被害に遭った住民達を受け入れていた。この争いが終わるまで両者を頼らず住民達だけで自衛する道を選んだのである。

ザインの住人の多くは戦う術を知らぬごく一般的な者達だったが、過去にローラントに仕えていた騎士や術者達が被害者の増加を防ぐために立ち上がり居住区の中で比較的広いこの地に集まったのだ。

ザインの住人達は街を巻き込んだこの争いそのものに異を唱え始めており、関所を封鎖され逃げ場を失った多くの住人達がこの居住区に足を運んでいる。

後の関係を考えれば、さすがにザインの住人に手を出すわけにもいかなかったので両者はその自衛行為を黙認し居住区周辺での争いは避ける様になる。

それ故に争いを避けた冒険者や民を蔑ろにする騎士団に見切りをつけた騎士なども密かにこの居住区に身を寄せていた……。

「——アゼリ様、例の騎士達が参りました」

恭しく頭を下げながら“奇怪な者”は窓越しに外を見下ろすアゼリに声を掛けた。

声からして男。だが、その姿はまさに奇怪だった。

顔の部分には何も無く、体全体が灰色の艶やかな光沢を発していた。それはまるで出来損ないの人形を連想させる。

——明らかに人外の者。彼は、アゼリに召喚されし魔界の住人だった。

アゼリは居住区の宿に身を潜めていた。冒険者達のエリアに身を

置いてもよかったのだが、従者となった騎士達を呼び出せないのもこの地にアジトを移していたのだった。

アゼリは振り返ると“奇怪な従者”とその後ろに控えた三人の騎士達に目を向ける。騎士達は皆、顔色が悪く憔悴し切った表情をしており生気の欠片も感じさせなかった。

「……お前達を呼び出したのは他でもない。時は来た。我が命に従い、その与えし力を以てザインに混沌をもたらすのだ」

アゼリの言葉に“奇怪な者”は体を震わせる。おそらく喜びに打ち震えているのだろう。

一方、騎士達は深々と頭を下げるのみだった。

主の命に逆らえず彼等はこれまでの間冒険者狩りを続けており、端から見ても騎士達の消耗は激しく見て取れる。しかし、魂に植え付けられた欲望が彼等に一時の活力を与え休まる時を奪っていた。

もはや彼等の枯死は免れない。

それでも“契約”により縛られた彼等はすでに理性を失いアゼリの操り人形と化していたので、朽ち果てるまで道具として利用される運命を辿る事となる。

——それが、悪魔との契約の重い代償なのだ。

「下がれ」

生気を失い、ただ人形の様な反応しか出来なくなった騎士達に利用価値は無きに等しい。アゼリは彼等に興味を失い、命を下すとすぐに下がらせた。

「……アゼリ様、あやつらをどうなさるおつもりです？ もはや何の利用価値も見出せませんが……」

騎士達が立ち去ると“奇怪な者”はアゼリに問い掛けた。

「……我等だけで事は成るでしょう。他に何か策でもありますか？」
怪しげに体をくねらせながら疑問をぶつける。その声はわずかだが不満の色が見て取れた。

“彼”にして見れば彼等はただの足手まといでしか無く、久方の地上を満喫するにその存在が足枷にしかない。思う存分に暴れ

られると期待していただけに上位であるアゼリの言葉でも納得がいかなかったのである。

「――不満なのか？」

その言葉に不満を感じ取ったアゼリは、目を細め“奇怪な者”に射抜く様な視線を向ける。その目に一瞬だけ殺気めいた色が露わになり“奇怪な者”の動きが止まった。

「……遠慮はいらぬ。言いたい事があつたらはつきりと申せ。従えぬなら他を当たるまでだ」

従わぬなら消す。彼女の言葉には寛容に見えて有無を言わさぬ響きがあつた。

“奇怪な者”は全体が凍りついたかの様な錯覚に見舞われる。そして、上位には決して逆らえない絶対的な魔の掟を改めて思い知らされた。

「地上に上がったからといって掟に逆らう事は許されぬ。異を唱えるなら《力》でねじ伏せるのだ。それが出来ぬならおとなしく我が命に従え」

冷たく言い放つとアゼリは“奇怪な者”に背を向ける。

まるで、試しにかかってくるかと言わんばかりにわざと無防備な姿を晒したのだ。

（……くつ、その手に掛かるものか……）

負の思念を存分に得られる、という滅多に無い好機を与えてくれるのだ。“奇怪な者”に逆らう気など毛頭無い。

ただ単に騎士達の存在が目障りなだけだったのだ。

「……その気などありませぬ」

“奇怪な者”は恭しく平伏し恭順の意志を示す。

（……力を得る好機を逃すものか。我を利用するつもりだろうが、我がお前を利用し《力》を手に入れてやる……）

“奇怪な者”はその邪心を悟られぬ様アゼリに向かって頭を下げ続ける。

「お前にとつても悪い話ではない。この地に蔓延する負の力を共

に得るのだ。《力》さえ得れば、もしかすると我を越え、従わせる事もできるやもしれんぞ？」

振り返ったアゼリは“奇怪な者”の心を見透かす様にそう言うように低く笑いだした。

「……ふふふつ、久しく《力》を奮ってないからな、せめて力を蓄え我を楽しませておくれよ……」

アゼリは楽しげに笑みを浮かべながら“奇怪な者”の内なる企みを賞賛する。

“奇怪な者”はその言葉に頷くと、表情こそなかったがアゼリへの脅威とそれを超えようとする野心を漲らせた。

「……我等は互いを利用するのみ。我はお前を駒として使い、お前はそれを利用し《力》を得れば良いのだ。わかったら行け。明晩、宴を決行する。それまで身を潜めておけ」

アゼリはそう言うと言を震わせ不気味な笑みを浮かべる。見る者を凍りつかせる邪悪な表情に“奇怪な者”は狂気を感じ取り、一礼すると足早に部屋を立ち去って行った。

一人残されたアゼリは壁際に設置したソファに座ると肘掛けに頬杖をついてドアに目を向ける。

（……所詮、お前もただの道具にしかねんよ。せいぜい足掻けば良い……あの男の凶暴化の糧になるまでな）

ギザ地区で会ったあの男―リーク―が凶暴化すればザインは破滅する。そのためにローラントの騎士である人間が必要であり、凶暴化した男に負の力と際限無き邪心を与えるために手頃な悪魔が必要だった。

新たな道具を見つけた以上、他の撒き餌はいらぬ。まとめて処分するに越した事はないのだ。

……すべてはアゼリの手の内にある。

だが、あの男の出現により彼女ですら想像も付かぬ暴威が巻き起こるであろう事は必至だ。

古来より恐れられた狂戦士の誕生。

アゼリは思わぬ拾い物に永らく感じる事のなかった胸の高鳴りに身を震わせた――。

殺戮の宴・前夜

アゼリが宿泊している宿屋の向かいにある酒場兼宿屋“グリースの宝亭”には、元冒険者や密かに潜入した冒険者達が屯していた。

店の主人グリースは元冒険者でアルカディアのみならずリンデンやティアレステアにも足を運んだ強者だった。そのせいかローラントの冒険者ギルドにもいまだ顔の利く。

彼は幼い頃から料理人になる夢を持っていて、その店の資金を稼ぐために幾多の戦場を駆け抜け、引退後、ここザインに店を構えるに至る。

長年に渡る冒険者生活により彼の嗅覚は恐ろしく磨き上げられていた。それ故に酒場を賑わせる者の多くがザインの住人でない事を一目で見抜いている。だが、戦いを避けて来た彼等をむげに追い出す気にはなれない。

誰も好きで戦っているわけではない。それをただ冒険者だからと告発する気にはどうしてもなれないのだ。

カウンター越しに店内を見渡すと、実に様々な者達がいた。

特に彼の目を引いたのは店の一番奥の壁際のテーブルに座る一人の男。一際異彩を放つその男にグリースは興味を覚えた。

グリースは酒のボトルと二人分のグラス、それにつまみの入った皿をトレイに乗せ、給仕の娘にカウンターにいる事を命じるとその男の元へ向かった。

「——頼んだ覚えはないが？」

男はグリースを一瞥すると店内に目を移した。

明らかに拒絶の空気を露わにしている。しかしグリースは構わず向かいの席に腰掛けるとグラスに酒を注ぎ男の前に置く。

「俺の奢りだ。遠慮せずに飲んでくれ」

そう言つてグリースは自分のグラスに酒を注ぐと口にする。喉を鳴らしながら一気に飲み干すと空になったグラスに酒を注ぎ、つまみを頼張った。

「——かぁ、うんめえなあ！ 仕事中の酒がこんなに旨いとは思わなかったぜ。ちなみにこのエール、自家製なんだよ」

グリースはグラスを片手に自家製のエールを絶賛した。

「……まさか酒の自慢に来たわけではあるまい。情報でも売りに来たのか？」

男はグラスを手にして一口だけ飲む。だが、その目はグリースに向けられたままだった。

そんな男の態度にグリースは頭を掻いて苦笑いする。

「いやいや、売るネタなんぞ無いよ……そうだなあ、強いて言えば元冒険者の勘がこうさせてるってところだな。そう神経を尖らせないでくれ。そんなんじや酒も旨くなかろう？」

グリースは少し大袈裟な素振りでグラスを掲げ、大地の恵みに感謝しながら口に運ぶ。

グリースの言葉や仕草に怪しげな気配は感じられない。どうやら興味本位で来ただけの様だ。

男はひとまず警戒を解き、その純朴な好意を受ける事にする。

「いい飲みっぷりじゃねえか！ あんた、相当イケる口だな？」

空になったグラスに酒を注ぎながらグリースは男に向かって歯を見せて笑いかけた。

「どうだ、旨いだろう？ つまみも最高だ、食ってくれ」

そう言つて皿を差し出しグラスを傾ける。

「——ひとつだけ聞かせてくれないか？」

勧めに応じつまみに手を付けるも男はまだどこか腑に落ちない部分を感じグリースに声を掛けた。

「なんだ？ 遠慮なく聞いてくれ」

飲みかけのグラスを置いてグリースは赤みを帯びてきた顔を向ける。その顔は酔いが回っている様にしか見えない。

——しかし、どこがおかしい。

それが何なのか男にはわからない。別に自身の不利益なる事はないだろうが、その不可解な面がグリースに対して興味を抱かせた。

「あんた、全然酔ってないだろう？ そんなに観察されては気になつて酒が不味くなる……」

男はつまみを手に取りグリースの顔を正面から見据える。だが、その表情は険しくない。

グリースは頭を掻いて自分のグラスに酒を注ぐとテーブルの端に手をつき勢いよく頭を下げた。

「すまんかった！ 昔のクセでな、つい見回してた。せつかくの酒が不味くなっちゃあ、出した意味がねえ。別に他意があつて来たわけじゃねえんだ。これからは気を付けるよ、だから気を悪くしないでくれ」

誤魔化す素振りを一切見せず平謝りするグリース。その滑稽な姿に男は頬を弛め、手にしていたつまみを口に入れる。

悪い男ではなさそうだ。

グリースの気さくな態度に男は張り詰めていた緊張を解くと初めて表情を表に出した。

「いや、いいんだ。ザインが乱れてから俺も少し神経質になつていた様だ。主人の好意、有り難く頂戴する」

男はグラスに入つた酒を飲み干しボトルを手にした。

「主人、このエールはザインで飲んだ酒で一番旨い。今宵は少し酔わせてもらふとするか」

「おお、嬉しいこと言つてくれるじゃないか！ じゃあ、もう一本追加しよう……それとつまみも足りんな。ちよつと待つてくれ」

男の反応にすっかり気を良くしたグリースは上機嫌で調理場へ戻つて行く。その意気揚々とした足取りに男は単純だな、と思いつつも久方の酒に酔いしれる事にした。

夜が更けると酒場にはほとんど人が居なくなる。この一帯は不戦

地帯となっていたが、さすがに遅くまで外出するのを控えていたからだ。

給仕の娘が後片付けのため店内を忙しく動き回ってはいるが、客足は途絶えグリースと男が酒を酌み交わしているだけの開店休業状態である。

テーブルは料理の皿で埋め尽くされており、給仕の娘が時折振り返っては空になった皿を下げに来る。

「——そう言えばまだ名前を聞いてなかったな……よかったら教えてくれよ？」

グリースはつまみを口に運ぶと静かにグラスを傾け酒を嗜む男に向かって口を開いた。

酒が回っているのだろう。顔は真っ赤になっており、グラスを持つ手もどこかおぼつかない。あれから休みなく飲み続けていたのだからそれは仕方の無い事だ。

給仕の娘はそんな店主の姿に呆れ顔になる。端から見てもグリースの酔いは明らかで、とても意志の疎通ができる状態には見えない。しかし、男は特に酔った様子も見せずグラスを手にしてグリースの問いに答える。

「……ああ、まだ言っていなかったな……名前はスニッフ、故あってこの街に来ている」

男は名乗るとグラスを傾けた。そして平然とした顔で空になったグラスに酒を注ぐ。グリースはもとより給仕の娘もその酒豪ぶりに驚きの表情を浮かべる。

スニッフは敢えて冒険者である事は伝えなかった。知って来たのだからわざわざ説明する必要も無い……というよりもグリースの様子を見れば意味がなかった。

「うーん」

大きな息を一つ吐くとグリースはとうとうイスの背もたれに仰け反る。どうやら限界に達した様だ。

「……あらあら、マスターが酔いつぶれるなんて珍しいわね」

給仕の娘は酔いつぶれた店主の元へ来ると空になった皿をトレイに乗せる。そしてボトルを手にとると軽く振って中身を確認めた。「もう一本追加しましょうか？　まだまだイケるのでしょうか？」スニフフに向かってボトルを振りながら給仕の娘は笑顔で言う。「……いや、遠慮しておこう。十分に堪能させてもらった。それに店主はもう飲めない様だし、深酒しては明日に残してしまう。俺もそろそろ休ませてもらうよ」

スニフフは残りの酒をグラスに注ぐと一気にそれを煽り、席を立つとしっかりした足取りで二階の部屋へ戻って行く。足音ひとつ立てず颯爽と歩く後ろ姿。給仕の娘はそれを見て彼が酒にまったく酔っていない事を知り啞然とした表情で黙って見送った――。

部屋に戻ったスニフフは真つ暗であるにも関わらず素面の時と変わらぬ動きで身に着けた服を脱ぎはじめ。

露わになった半身は程良く引き締まった筋肉で覆われていた。見る者が見れば、かなり造り込んでいる事が窺える。

スニフフは脱いだ服を投げ捨て下着のままベッドに潜り込む。

投げ捨てられた服の所々が破けたりほつれている。その屈強の肉体を包むには服の強度が足りなかった様だ。それは普段身に着けているものと違い、一般的な材質の軽装故のご愛嬌だろう。

ベッド脇の小さなテーブルに置かれたランプに火を灯し、スニフフは静かに天井を見つめ今後の行動を思索しはじめた。

ザインの街全体を覆う殺伐とした空気。そして、人々の心は常に不安定で感情的になりやすくなっていた。この酒場の主人グリースと酒を酌み交わし、それを強く感じる。

（……今宵は久々に“人間”と接した気がする……）

ローラント騎士団と冒険者達が武力衝突して以来、ザイン住人の心は一樣に荒んでいく一方だったので、グリースとのささやかな時

間が彼に心地よさを与えていた。その心地よさに身を委ね、明日に備えて休もうと目を閉じる。

だが次の瞬間、ドアの向こうに気配を感じたスニフフは、突如ベツドから跳ね起きてドアに向かって跳んだ。

——ベツドからドアまで距離があるにも関わらず助走も無くドアまで到達し、しかも空中で体勢を変えドアの取っ手を掴むと開きざまにその向こう側に飛び込む。そして、そのまま気配の主に覆い被さる様に組み敷いた。

「——きゃあ！」

組み敷いた相手に拳を振り下ろそうとした途端、甲高い声が響き渡る。

「……お前、給仕の娘じゃないか……」

振り上げた拳を止め、スニフフは呆れた表情で怯えた娘を見下ろす。

突然ドアが開いたかと思ったら人が飛んできて押さえつけられ、さらに殴られそうになったのだ。娘の顔面は蒼白で目に涙を溜め身を震わせていた。

スニフフは娘の上から起きてその腕を掴み立たせる。しかし、あまりの恐怖に腰が抜けたのだろう。娘はスニフフの体にしがみつく様にして身を崩した。

「やれやれ……」

とても一人では歩けそうにない様子を見てスニフフは心底呆れた表情を浮かべながら娘を軽々と抱きかかえ、部屋の中へ連れて行くとベツドに寝かせる。それから投げ捨てた上着を脇に抱えベツドの横にイスを置くと座り、袖を通してながらまだ体を震わせる娘に声を掛けた。

「いったい何しに来たんだ？ まったく人騒がせな奴だ……」

よほど衝撃を受けたのか、娘はスニフフに目を向けるも口をパクパクと動かすだけで言葉が出ない。

「……しょうがない奴だな……今回は手を出さずに済んだが次は

その保証が出来ない。今度からは下手に忍び足で来ないでくれよ」
しばらく話ができない様なのでスニフフは問いただすの諦め、腕組みをして娘が動ける様になるまで待つ事にした。

その夜は静かに過ぎていった。

結局、娘はそのまま寝てしまったのでスニフフはイスで眠る事となる。しかし、不思議と疲れは残っていなかった。良い酒と他愛のない話が彼の心身を十二分に癒やしてくれたのだろう。

スニフフは身支度を整えると娘を起こし一階の酒場へ向かった。カウンターにはニヤケ顔のグリースが待ち構えており、イスに座ると水の入ったグラスを差し出しながら声を掛けてくる。

「おはよう。昨夜はぐっすり眠れたかい？ それとも逆に疲れちまつたかな？」

そう言つてグリースは歯を見せて豪快に笑い出した。

「……なんだ、主人は昨夜の戯れ事を知つてたのか？ 酔いつぶれたんじゃないのか？」

「おいおい、ドアを蹴破つてそれは無いだろう……俺も冒険者だつたんだぜ。物音ひとつすりゃあ、酔いも覚めるつてもんだ」

グリースは少し諦めた表情で返すと洗い終わったグラスを丹念に拭きながら階段に目を向ける。

「——セリカ、ずいぶんと遅かったじゃないか。そんなに旦那に可愛がつてもらつたのか？」

降りて来た娘に向かって冷やかしの言葉を浴びせ、エプロンの前掛けで両手を拭くグリース。

娘はバツの悪そうな表情を浮かべると首を振つてカウンターの中へ入つていった。そして、スニフフを軽く睨みながら口を開いた。

「……何にもなかったわよ！ この人ったら、私を賊か何かと勘違いして襲つてきたのよ。私、びっくりして腰抜かしちゃったわよ……」

セリカと呼ばれた給仕の娘は不満を露わに言葉を続ける。

「……せっかく夜這いに来たのに……」

セリカは荒々しくエプロンを身につけるとそのまま調理場へと消えて行った。

「はっはっはっ、夜這いを奇襲と勘違いしたのか？ まあ、それもしようがないな。セリカもああ見えて冒険者だったからなあ。あいつな、元盗賊だったんだよ……足洗ってからだいぶ経つから腕は落ちちまったけどな」

グリースは娘の後ろ姿を見送りながらスニッフに小声で話した。

（……なるほど。どおりで気配の消し方が中途半端だったのか……）

グリースの話の聞いて昨夜の出来事を反芻し、素人にしてはドアの前まではうまく来れたわけを知った。

「あいつ、あんたを相当気に入ったみたいだからな。つい忍び足で来たんだろう。どうかセリカを許してやってくれ」

グリースはスニッフに向き直ると頭を下げる。

「別に気にしてない。これからは堂々と来てくれればいいだけだ

……」

そう言うとスニッフはグリースに向かって笑いかけた。その意図を知ったグリースは腹を抱えて笑いだす。

「……はっはっはっはっ、ずいぶんとシャレた事言ってくれるぜ。セリカも厄介な男に惚れたな！」

調理場まで聞こえる様にわざと大声で言うと二人して声を立てて笑い出した。

「——うるさいっ！」

調理場から怒気のはらんだ娘の声が返ってくる。だが、二人はそれに構わず笑い続けた――。

……ザイン崩壊の日は、こうして幕を開けた。

この安らぎの時間はしばらくは味わえないだろう。いや、もしかしたら二度と来ないかもしれない――。

ザインの惨劇・狂戦士の誕生

「……うつつ、おお……」

窓から差し込む朝日に顔を照らされ、リークは呻きに似た声を漏らし目をそつと開いた。

気だるさが残る体を起こし、隣のベッドで安らかな寝息を立てる最愛の人マリアに目を向ける。

するとリークは激しい自己嫌悪に襲われる。両手で頭を抱えながら必死に苦痛を堪えた。

自分の苦しむ姿をマリアに見せたくない。

ほんのわずかだけ残っている理性を奮い立たせ、リークは心の底から湧き出る狂気を抑えつけるとベッドから出て傷だらけの鎧を身に着けはじめた。

その間、マリアは夢の中を浮遊していた。毎夜の悪夢に身も心も疲れ切っていたため、彼女の朝はいつも遅いのだ。

いかに冒険者として様々な苦境を乗り越えてきた彼女も、無抵抗のまま弄ばれ尚且つ女としてではなく“ただの遊具”として扱われたあげくに体だけでなく心も屈伏させられた事が、その自尊心を大いに傷つけ彼女の心にいまだに拭えぬ暗い影を落としていたのである。

リークの前では気丈に振る舞うものの……いや、その無理をした態度が逆にリークの心を締め付けていた。

——鎧を身に着け腰に剣を吊す。そして、返り血で赤黒く染まった兜を被ると静かに寝息を立てるマリアに一瞬だけ寂しそうな目を向けた。

（……マリア、こんな事をしてもお前の笑顔はもう見れないんだよな。それでも俺はこうしてないと自分を保てないんだ……だけど、

もうそれも抑えられそうもない……マリア、さよならだ……)

リークは兜の目の部分を覆う可動式の眼帯を下げるとゆつくりとドアに向かって歩き出す。

彼自身、自我が保たない事を無意識のうちに悟っていたのだ。

心の中で最愛の人に別れを告げると静かに宿を後にする。

外に出たリークは朝日の照らす道に眩しそうに目を細め、在りし日のマリアの笑顔を思い起こす。だが、その表情もすぐ苦痛に歪みリークの心を黒く染め上げる。

「……うおおお……」

闇がリークの心を支配する。それと同時にリークの体から人間のものとは思えない妖気が溢れ出た――。

道行く者は誰一人それに気付く事なく、静かな朝をいつもの様に迎えたのだった……。

――アゼリの下僕と化した騎士達は、ローラント騎士団と冒険者の両者が小競り合いを続けるザインの中心部にいた。主の命を受け、来るべき“敵”を迎え撃つために。

騎士達は皆、顔を晒し決められた口上を授けられて日が昇る前からこの地で“敵”を待ち構えいた。

周辺には誰一人おらず、この地が戦場である事を忘れさせる静寂に包まれている。しかし、血塗られた大地を照らす日差しが血の匂いを呼び起こす。

騎士達は血の匂いに意識を尖らせる。

……その時、前方から妖気にも似た負の思念を撒き散らしながらこちらに向かって来る気配を感じた。

血に染まった鎧を身に着けた者が、ゆつくりと近付いて来る。そして騎士達の前でその歩みを止めた。

《――奴が“敵”だ。我が命を実行せよ》

騎士達の頭の中に“声”が響き渡る。思わず頭を抱えそうになるほどの強烈な思念に騎士達は体が痺れる様な錯覚に見舞われた。

「……貴様等、ローラントの騎士だな……」

血塗られた鎧に包まれた者は静かに口を開くと腰に吊した剣に手を掛けた。

それに呼応する様に騎士達も剣を抜き放ち、構えを取るといやらしく顔を歪めながら授けられた口上を口にしはじめた。

「——お前が探していた騎士は俺達だ……」

「お前の女は、俺達がたつぷりと愉しませてもらったぞ……」

「自ら腰を振って悶えてたっけな」

「それにじゃぶるのが好きで、くわえるとなかなか離してくれなかったよ」

「あの女はよく覚えてるぞ。尻を突かれるのが好きな変態女だ」

「ああ、とんだ淫乱女だ」

「あれからどうだ？ 激しく求められて大変だったんじゃないか？」

「なんなら俺達がまた可愛がってもいいんだぜ？」

「案外、俺達に抱かれたいと思ってんじゃないか」

「——はっはっはっ」

「——はっはっはっ」

「——はっはっはっ」

騎士達は次々と侮蔑の言葉を口にすると揃って笑い出した。

彼等の言葉がリークの頭にこびりついて繰り返し鳴り響く。そのあまりにマリアを侮辱した態度にリークの心の闇は一気に膨れ上がった。

「——き、貴様等！」

騎士達を睨む目には狂気が宿り、周辺を歪ませるほどの妖気がリークの全身から溢れ出る。

「……そう言えば、お前よりも俺達の方がいいって言ってたぞ！」

「お前、下手なんじゃないのか！」

「満足させられないからあんなに乱れたんだな！」

構わず騎士達はリークを焚き付ける。

屈辱的な言葉の数々。こんな奴等にマリアは汚されたのか。

言いたい放題侮蔑の言葉を口にする騎士達にリークの“何か”が音を立てて崩れ落ちていった……。

「——オオオオオオオオ……」

——地の底から鳴り響く様な低い呻き。

その身から発する気は“力”を視る能力のない騎士達でもはつきりと認識できるほどの妖気と化す。

リークの心はすでに闇に捉われていたが、溢れ出る狂気が“それ”をも完全に駆逐した——。

騎士達はその異変に身を竦める。

目の前の男に本能は激しく警鐘を鳴らす。しかし、騎士達はまるで金縛りにあつたかの様に身動きひとつ出来なくなる。そして、操られるが如く勝手に体が動き出した……。

——それはまるで遊戯。初心者でも相手に出来る程度のお粗末な動きだった。

そんな騎士達はリンデンの《統一戦争》を生き抜いたリークの敵ではない。

かわし様の一撃で騎士達は呆気なく絶命する。

だが、もし操られてなくとも騎士達に勝ち目はあつただろうか。

リークの一撃はそう思わせるほどの威力だった。

その剣圧は、騎士達を真つ二つにした上に地を大きく引き裂いていたのだ——。

ザインの惨劇・闇の力

——狂気の果てに辿り着く境地。

混沌の扉を自ら開き、その自我と引き換えに“力”を掴み取った破滅の使者。

古来より“狂戦士”と呼ばれ恐れられてきた混沌の戦士と化したリーク。憎しみの対象だった者が呆気なく手に掛かった事で湧き上がる負の奔流は行き場を無くし、その憎しみの矛先は自然とローラントの騎士全体に向けられる。

“狂戦士”にとって憎しみの対象は徐々に拡大されていく。

まずは直接の敵。次にそれに連なる者。それから次第に敵の区別が無くなっていき、最終的には生ける者すべてが殺戮の対象となる。狂気に支配されたリークの心はすでにその片鱗を垣間見せはじめており、その心には次なる獲物が定まっていた。

憎き騎士達が所属していたローラント騎士団だ。

リークは抜き身の剣を手にしたまま視線だけを騎士団領へ向ける。目に宿る狂気の色は混濁したものへと変貌し、その身から溢れ出る負の力は人の域を越え魔物の雰囲気醸し出していた。

「……ふうつつ……」

息を一つ吐くとリークは騎士団領へ歩きはじめる。

その足取りは速い。まるで鎧を身に着けていないかの様だ。

……ここから近いローラント宿営地まで半刻足らず。そこに住む者達は破滅の使者の出現にまだ気付かないでいる。

——ローラント騎士団の本営があるザイン西部のウル地区。

この地区の広場に《赤》を基調とした鎧に身を包んだ騎兵が軍馬

に跨り隊列を組んでいた。

彼等はここに配備されていたローラント騎士団の主力部隊《聖槍騎兵団》の騎兵だ。ついに彼等が冒険者との戦いに投入される事となったのだ。

これまでは“国を守るための部隊”という位置付けのため内乱に出動する事がなかったのだが、冒険者との争いは一向に収まらず被害だけが拡大、騎士団の戦力低下が著しくなった事が出動する大きな要因となる。

この部隊、主な戦果は反乱の鎮圧や賊退治といったものしか無いのだが、選り抜かれた精鋭の集まりであるため、その戦力は他の騎士団とは一線を画していた。騎兵特有の長槍による一斉攻撃もさることながら、鎧に施された魔法耐性処理による防御効果や独自の精神鍛錬法により多少の魔法攻撃にも耐えうる強固な魔法防御力・精神力が彼等の強みとなっている。

彼等は魔法を巧みに扱う冒険者達に対する“切り札”として実戦に投入されたのだ――。

……その《聖槍騎兵団》がウル地区を発ち、領内は静けさを取り戻す。

ザインにおけるローラント騎士団の本営が置かれているだけあって、この地の守りは固く敵の侵入はいまだに許していない。入り口は大きな通用門が一カ所あるだけで周りは壁で覆われている上、騎士達の宿舎がその壁際に並ぶ様に建てられているので部外者の侵入はほぼ不可能となっていた。

——その侵入不可能なはずの領内に場違いな格好の侵入者がいた。アゼリである。

その格好はいたって軽装だった。胸元を金属で補強しただけの皮鎧。しかも一般のものと違い、露出部分がやたら多く防御力に不安の残る造りとなっている。頭には

髪をまとめるためのバンダナが巻かれているだけでとても敵地に乗り込む姿には見えない。

アゼリは騒ぎにならない様、警護にあたる騎士達を避けつつ宿舍の奥へ向かって移動する。気を感じできる彼女にとって警護の騎士達を避けて通るのは容易い。

そのまま奥に侵入すると一際大きな建物が姿を現した。

それはローラントの首都マドラから派遣されたザイン駐留軍の各部隊の長達の宿舎である。

ザインにはローラント騎士団から三つの部隊が派遣されており、それぞれの長が共同でザインの防衛にあたっている。それ故、それぞれの部隊ごとに宿舎があり、しかも自分達の権威を誇示するため個性豊かな造りをしている。

《聖槍騎兵団》の宿舎の外壁には部隊の象徴たる“槍”を模した模様が施されており、《北部師団》の宿舎には戦いのレリーフが至る所に刻まれていた。また《西部第二連隊》の宿舎にいたっては外周に堀を作って水を引き、さらに外壁に石垣を築き上げ、まるで小さな要塞と言っても良い程の補強を施したりしている。

……これらの独自性を持たせているのは部隊間での単なる自己主張に過ぎない。それでも防衛の面から見れば必ずしもただの見栄の張り合いによるものとは断言できない。彼等にとって宿舎や宿营地は国から与えられた“領土”と同じくらいの価値があるので多少大げさに扱うのも致し方ないのだ。

外壁部と比べ、巡回する騎士の数や質も格段に違う。この事からもこの地はウル地区の中でも重要な土地といえよう。

……まだ朝の賑わいも迎えていないにも関わらず日差しは徐々に強さを増していた。外を歩く人の影は地面に色濃く映り、その光と影の力強さを見事に表している。

軍幹部の宿舍が並ぶ中央部にも光と影が交錯しており、その狭間に身を隠しながら一人の侵入者が建物の影まで侵入する事に成功していた。

その侵入者アゼリは難なくここまで来ると壁に手を当てて何かしらの言葉を呟く。すると、アゼリの体は壁の中に溶け込む様に吸い込まれていった。

……無事《北部師団》の宿舍に忍び込んだアゼリは周囲の“気”を探りながら廊下を歩き出す。

外の嚴重さに比べ建物内の警備は甘かった。建物への侵入を防ぐのが最大の任務なのだから内よりも外に目が行くのは仕方ないだろう。

軍の宿舍といっても元は屋敷だ。建物の構造上、幹部のいる部屋の位置は見当がついている。アゼリは廊下の突き当たりまで歩くと迷わず階段を上る階に上がって行った。

（……人間の構造物は単純だな。わざわざ歩いて行く必要もなかったかな）

アゼリは心の中でそう言いながらも階段を上り、ゆっくりと廊下を歩いて行く。

突き当たりの部屋の前まで歩くとアゼリは止まると扉に身を寄せると耳を当てて室内の“気”を探った。

（……中央から窓側に座ってる人間が一人。そのそばで立つ者が一人……）

室内に二人の気配を感じ取ったアゼリは扉をノックすると静かにドアを開いて室内へ入って行った。

「――何者だ」

アゼリが室内に足を踏み入れた瞬間、やけに高圧的な口調の声が響き渡る。声の主はちょうどアゼリの正面に位置する場所に座っていた。

短く切り揃えられた赤茶色の髪に指を通し、茶色がかった赤い目が鋭くアゼリを捉える。その不敵な眼光には己の権威に対する自信

が漲っていた。

(……彼がこの部隊の長か。脇に立つ男は副官といったところか……)

視線が絡みついた一瞬でアゼリは相手を分析する。人間の場合、こういった場面では大概椅子に腰掛けてる者が上位でそれに付き従う様に立つ者が下位である——これはアゼリが抱く人間世界においての階級社会の印象だ。そして、その考えは当たらずも遠くはなかった。

「答えられぬか……まあ、よい。見た目からして騎士ではないな。しかし、よくぞ単身ここまで乗り込んで来れたな？」

椅子の男は明らかに自分よりも下位の者に対する態度で問い掛ける。一方、脇に佇む男は突然の侵入者に戸惑いを覚え、アゼリに視線を向けるも身動き一つできず立ち尽くすのみだった。

(……よほど肝が座っているのか、それともこの姿に騙されてるだけのただの欲呆けなのか……面白いじゃないか)

アゼリは余裕綽々の表情で自分を見つめる男の態度にわずかながら興味を覚える。

どちらにしても利用価値が下がるわけではない。道具として利用する分に相手の性格など関係ないのだから。

ただ支配し操るのは芸がない。少し弄んでその自尊心をなぶり負の思念を得るのも悪くないとアゼリは考えた。

(……さて、どうしたものか。力の一端を見せつけて恐怖を煽ろうか。それとも精神に入り込み内部から侵食し魂を凍り付かせようか……どちらにせよ甘美な負の思念が得られそうだな)

アゼリは妖しげな笑みを浮かべながら紅い目を光らす。

——しかし、椅子の男はアゼリの視線を浴びても動じる気配を見せない。ただ鈍いのか精神力が強いのか、男は高圧的な態度を崩さず真っ向からその視線を受け止める。

常人なら恐怖に苛まされるであろう悪魔の眼光に耐えるその姿にアゼリは内心感嘆した。

（……ただの見掛け倒しではない、という事か。なかなか骨のある人間ではないか……それでこそ蹂躪のしがいもあるというものだ）
精神を蝕む悪魔の眼力は決して侮る事はできない。

それを証明するかの如く正面から眼力を受け止める男とは対照的に、その脇で身動き一つ取れない副官の男はアゼリの眼力の余波をまともに受け顔面蒼白状態になっていた。その事からも周囲の精神に影響を与える力の凄まじさは伺えるというもの。

それを意外な人物が耐えるのだからアゼリは細く笑むのだった。

「——何がおかしい。単身乗り込んで来た度胸は誉めてやるがそのまま無事に帰れるとは思わぬ事だ」

アゼリの余裕の表情に若干語気を荒げ睨み付ける。その眼光は鋭く、常人なら思わず身を引いてしまうほどの迫力があつた。

「……いや、感心していたのだ。悪魔の視線に耐える人間がこの地にいた事をな……」

睨み合いは平行線を辿るだけ。アゼリは事態を進展させようと自らの正体を明かす。

その言葉に副官の男は目を見開き驚愕する。アゼリの眼力に精神を蝕まれつつある彼は、自分たちが絶望的な状況に置かれている事を悟り更なる恐怖に苛まされた。

そして。

その言葉に椅子の男の顔色は一変した。

「——貴様、ジード・バロムの手先か？　ここへ何しに……はっ！　そうか、貴様がザインを乱したのだな！？」

余裕の表情は怒りへ変わり、勢いよく立ち上がると剣を抜き放つた。それと同時に男の全身から闘気が満ち溢れる。

そこには、先ほどまでの高圧的な姿はなかった。

（……こやつ、正体を隠していたのか。なかなかの闘気じゃないか）

アゼリは目の前の男が本物であると即座に認め、間合いを取り戦闘態勢に入る。先ほどまでの態度から一転した男の気質に引き

締め、その動きに細心の注意を払いながら構えた。

男はアゼリに鋭い眼光を浴びせつつ部屋の中央へ移動する。机や椅子が思わぬ障害になるのを避けるためだ。

「……名を聞いておこう」

男の眼光を受け流しアゼリは問い掛ける。

その身にまといし妖気は目に見えるほど密度が濃くなっていた。

副官の男はその場にうずくまり、部屋を満たすほど放出された邪気に身悶えする。

「——我が名はユーザック・ベアーズ……悪魔よ、貴様の名は聞かぬぞ。我が剣で灰となれ！」

名乗ると同時に男―ユーザック―はアゼリに向かって切りかかった。

その不意を突いた攻撃にアゼリはかわし切れず、気迫のこもった一撃が肩口に食い込む。

「——むむっ!？」

ユーザックの渾身の一撃はアゼリの肩口をわずかに切っただけだった。アゼリは肩に食い込む剣を掴みユーザックの動きを止める。

剣を引こうにも固まったかの様に微動だにしない。その光景にユーザックは我が目を疑い、呻きにも似た声を漏らした。

素手―しかも片手―で刃を握り締めているのにも関わらず傷ひとつ付けられない。おそらく溢れ出る妖気はその身を強固なものにしているのだろう。

「どうした？ 返してほしいのか？」

懸命に剣を引き抜こうとするユーザックに向かってアゼリは余裕の笑みを浮かべ囁きかけた。

「——くっ！」

予想外の事態にユーザックは冷静さを失ってしまう。

動きを封じられたこの状況を打破するためには不利を承知で剣を一旦預け、身を退いて体勢を整えなければならぬものにも関わらずそのまま力で引き抜こうとしてしまったのだ。しかし、いくら渾身

の力で引いてもアゼリの手から剣を抜き取る事はできない。

ユーザックの焦りを感じ取ったアゼリの目に妖しげな光が宿る。邪気で漲るその視線を受け、ユーザックの背筋に冷たいものが走った。

——危険を察知したユーザックはすかさず身を引こうと後ろに跳ぶ……だが、わずかに反応が遅れアゼリの開いた方の手がユーザックの胸元を捉える。

次の瞬間、圧縮された魔力の塊が放たれ、それをまともに受けたユーザックの体は凄まじい勢いで窓を突き破り外へと吹き飛ばされていった……。

その場に残された副官の男は凍り付いた表情で主の敗北を見届ける。

永遠に思えた戦闘も気がつけば一瞬の出来事。男は自身の命運が尽きた事を悟った。

アゼリはユーザックの剣を放り投げると男に視線を向ける。そして、妖艶な笑みを浮かべながらゆっくりと近づく。

「……いかな、殺すつもりはなかったが思わず吹き飛ばしてしまった。お前は副官なのだろう？ 死んだ団長の身代わりとなつてもらおう」

アゼリは冷たく言い放つと紅い双眸を光らせ、精神を蝕む邪気を浴びせた。

「うっっ」

副官の男は呻きを漏らすと頭を両手で押さえうずくまる。

「——！！」

邪気にさらされた体は痙攣した様に波打ち、声にならない苦悶の叫びを上げはじめる。邪悪な意志が精神に侵入し自我を崩壊させているのだ。

アゼリは悶え苦しむ男の額に指を当て、追い討ちをかける様に邪気を埋め込む。

「——汝が内なる邪惡な意志よ……その無為の枷を解放し、秘めたる野望を手にするのだ……」

アゼリの指が光り副官の男の体を包み込み、その光が吸収され消えると副官の男は大きく体を震わせ糸が切れた様にうなだれた。

「さあ、立ち上がれ。今や邪魔な者はいない。すべての権限を掌握し“ザインを乱す不届きな輩”を討ち滅ぼせ……」

耳元に唇を寄せ副官の男に囁きかけるアゼリ。邪惡な意志に屈した心はその言葉に反応し、力無く頷くとよるめきながら立ち上がる。アゼリはその様子を満足げに見つめ、副官の男をユーザックのいた団長の椅子に座らせる。

「今からお前が北部師団の団長だ。騎士の務めを果たせ……ローラントに仇なす冒険者共を討ち滅ぼすのだ。一刻の猶予もならん。すぐさま兵を率いてローラント騎士団の威厳を取り戻すのだ……」
邪惡な意志に心が支配された副官の男は、その言葉に邪氣を含んだ目を光らせた。

——北部師団に激震が走った。団長であるユーザックが冒険者に暗殺されたという情報が騎士団を駆け巡ったのだ。

団長を暗殺された事に騎士達は激しい怒りを露わにする。

副官の男はその騎士達の感情に乗じて団長代行としての権限を利用し、全軍を集結させると他の騎士団長の制止を振り切り冒険者の拠点に攻め込む命令を下した——。

……目的を果たしたアゼリは宿舍を離れ、狂戦士と化したリークの妖氣を探る。

次なる一手、悪魔の邪氣を注ぎ込むために。

ノーマンケルへの拠点・ザインを壊滅させ、さらにローラント騎士団への不信を強めるに十分な策を講じたアゼリは、騎士団にも蔓

延しつつある負の思念に狂気じみた笑みを浮かべながら進軍する北部師団を遠くから眺めた……。

ザインの惨劇・内戦激化

……ザインの街は大混乱に陥った。

ザイン南部の街にローラント騎士団の精鋭“聖槍騎兵团”が攻め込んだのである。

街は、突然の襲撃に為す術も無く蹂躪されていく。

白兵戦においては奇襲に対する対抗手段を持つ冒険者も駆け回る騎兵との戦闘には順応しておらず、その進軍を食い止める事ができなかった。しかも聖槍騎兵团はこれまでの戦闘から術者の脅威を学んでおり、弓による射撃で魔術師らを狙い撃ちにし戦闘の補助を無きものとする。

集団戦における兵法を汲まなく駆使した聖槍騎兵团の前に街は瞬く間に蹂躪され、その場にいた冒険者達は次々と倒されていった――。

ウル地区に程近い居住区。

ここは騎士団と冒険者の争いから逃れるために集まったザイン住人の避難所的な地区で、両者の争いを非難、どちらにも関わらない旨を公言し中立の立場を取る事でこの醜い争いに巻き込まれるのを避けた自治区である。だが、戦乱時においてその様な中庸的立場が長く通じるわけがなかった。

邪気に支配され暴走する指揮官の扇動を受けた《北部師団》が街に進軍してきたのである。

「――皆、通りに出てはダメ！ 騎士達が待ち構えているわ！裏通りから逃げるのよ！」

街の至る所に火を放たれ、炎に煽られ逃げ惑う住人達。突然の出来事に混乱し、燃え盛る炎から逃れようと無防備に通りへ出る。

騎士達はそんな彼らを容赦なく切り刻み大地を血の色に染め上げた。

買い出しに出掛けていたセリカは逃げ惑う住人達に必死に呼びかける。しかし、恐慌をきたした住人達にその声は届かず次々と無情の刃に掛かっていった。

これ以上、この場に居ては自分の命も危うい。

セリカは断末魔の響く通りに背を向けると全力で走り出した。

（ごめん……）

走りながら見殺しにした事を懺悔する。だが、今は急いで宿に戻らねばならない。

攻め込んで来たばかりだから、今から呼びかければ他の住人達は助けられる。

セリカは心の中で騎士達が宿のある場所に攻め入る時間を計算し、せめて彼らだけでも逃そうと考えたのだ。

「……セリカの奴、遅いな」

グリースはコップを拭きながらカウンター越しに賑わいを見せ始めた店内を見渡す。他の給仕達が忙しなく動き回る様子に思わず愚痴がこぼれる。

「猫の手も借りたい状況なのに、セリカの奴は何道草食ってた」
その健脚を見込んで買い出しに行かせたのに。店一番の働き手を外に出した事をグリースは後悔し始めた。

「——大変よ！ 騎士団が、騎士団が攻めて来たのよ！」

突然、大声が店内に響き渡る。その声に店内にいる者は振り返った。

酒場の扉を勢いよく開け放ち、血相を変えたセリカが大声で叫ぶ。あまりの必死な叫びに店内は一瞬静まり返る。

「騎士団が攻め込んで来たのよ！ 街に火を放ち、見境無く住人

達に襲いかかっているの！ みんな、早く逃げて！ あいつら、私達を皆殺しにするつもりよ！」

反応の鈍さにセリ力は怒鳴る様に叫んだ。

「なんだって？」

言ってる事をようやく飲み込めたグリースは拭いたコップを棚に置く。その表情はいつもと変わらない。

「マスター！ 何冷静になってんのよ！」

二人の掛け合いに店内にいる者達もざわめき出す。

「セリ力、本当なのか！？」

「この街は中立だろ！ なんて騎士団が攻めてくるんだよ！？」

「とにかく逃げようぜ！」

セリ力の言葉に店内は混乱する。そして、我先にと出口に向かうと立ち上がった。

「静まれ！！」

危険な状況にグリースは一喝する。

まるで落雷にあつたかの様に店内は静まり返り、立ち上がった者達は金縛りになった様に動きを止めた。

「慌てるな！ まだ時間はある。ここで冷静さを失ったら敵の思う壺だぞ！ 今すぐ攻め込んでくるわけじゃないんだ。まずは他の住人達にこの事を伝え、きちんと逃げる準備をするんだ！ 大丈夫、武装した奴らがここに来るまで一刻はある。こういう時こそ冷静に、みんなで協力し合って行動するんだ！」

グリースは言い聞かせる様に説明する。

「俺はこんな状況には慣れている。」

だから信用してくれ。

我先にと行動すれば、逆に足の引つ張り合いとなって犠牲者が増えるだけだ。軍隊ってやつは、そんなに進軍速度が早いわけじゃないんだ。その場所を完全に制圧してからじゃないと進軍して来ない。皆殺しにするつもりなら尚更だ。だから、落ち着いて行動するんだ。でないと、俺達は本当に皆殺しになってしまうぞ！」

非常事態において、一番危険なのは住人の混乱だ。統制の無い行動による足を引っ張りが逃亡を妨げ犠牲者を増大させる。

グリースは冒険者時代にティアレステア大陸の《龍神戦争》で同じ状況に置かれた事があったため、軍隊の進軍速度・また敵地への包囲網などがある程度予想する事ができた。

その経験から時間に余裕があり、冷静に対処すれば最小限の犠牲で逃亡する事ができると踏んでいる。

「――まずはみんなに騎士団の侵攻を伝えるんだ。そして、各自バラバラに逃げるのではなく小さな組になって役割分担をする。こうする事で連携が取れて、ひいては行動の迅速化に繋がるんだ。忘れるな！ 敵も馬鹿じゃない、しっかり連携を取って行動せねば犠牲になる！ わかったな？ じゃあ、皆に伝えるんだ！」

言い終えて店内を見渡すと騒然とした物々しい空気は収まっており、皆の表情は真剣なものへと変わっていた。それを見たグリースはすべての者に伝わった事を肌で感じ取る。

「よし、手分けしてみんなに伝えよう！」

「注意を促すのを忘れるな！」

「荷物もあまり持たせない様に伝える！」

グリースの言葉に事態の深刻さを理解した住人達は、素直にそれに従い他の住人達に伝えるべく酒場を出て行く。

出入り口で押し黙った表情でその様子を見ていたセリカは、足早に通り過ぎる彼らを見送るとカウンターへ駆け寄った。

「マスター、私たちも早く逃げる準備しましょう。武器はまだ部屋に置いてあるんでしょ？ 私も準備してくるからマスターも急いでね！」

全力で走って来た割にはあまり息を切らずにいるセリカは、グリースにそれだけ言う段階を駆け上がって行く。

「やれやれ、まったく困ったもんだ。どうやら、俺は戦いから逃れられない定めにあるらしいな……」

セリカの後ろ姿を見ながらグリースは自嘲気味な笑みをこぼし、

エプロンを取ると綺麗に折りたたんでカウンター脇の棚にそつと置いた。

「……また着れたらいいな」

誰に言うでもなく呟きを漏らすと、グリースは特に急ぐ素振りも無く自分の部屋へ向かった……。

「――まずい事になったな」

炎に包まれ、身を踊らせる様にもがき苦しむ者。
為す術も無く放心状態で騎士に捕縛される者。

我先にと押し合い、結局は騎士の刃に掛かる者。
それらを見ながらスニフフは低く呟いた。

騎士達は捕らえた住人達を一カ所に集め、弓を一齐に放ち射殺していく。矢は火矢になっており、住人達の服に燃え移ると肉の焼ける匂いとともに致命傷を受けなかった者達の悲痛な叫びがこだまする。

（……異常だな。いったい何をどうすればあんな所業を行えるのだ）

狂気にとりつかれたとしか言いようの無い殺戮。

彼らの動きから察するに、この街を灰塵と化すまで徹底的に破壊し尽くす意志がはつきりと見て取れる。

常人としての感覚が欠落したとしか考えられない所業の数々……
これ以上の観察は危険だ。

スニフフはその場から立ち去る事にする。騎士達の目を逃れる様に建物や炎を背に風の如く速さで駆けていった。

胸元を金属で補強した皮鎧を身に着け、手の甲から肘までを覆う形の小手、膝が隠れるほどのすね当てが付いたブーツを装着したセリ力は羽の装飾が施されたバンダナを額に巻いて肩にかかる長髪を

一つに束ねる。そして、枕の下に隠してある短剣を取り出すとベルトに鞘ごと差し込んだ。

——鏡に映る自分の姿にため息をひとつこぼし、セリカは何一つ得るものがなかった盗賊時代に思いを馳せる。

「……この格好になるなんて思いもなかったわ。でも、やっと手に入れた平凡な暮らしを終わらせるわけにはいかない……戦うしかないわよね」

ただ逃げるだけじゃいけない。戦う術を知る自分達が住人達を逃がすための盾にならなければ。グリースもそう考えているはず。

セリカは自分に言い聞かせる様に気持ちを切り替えようと何度も深く息を吸い込んだ。

住人達だけではとても逃げ切れないだろう。騎士団が包囲網を敷かずには攻め入るわけがないのだから。

彼らを引き付けておかなければ住人の犠牲を最小限に抑える事は不可能なのだ。

恐怖に屈しないためには覚悟が必要だ。そのためには雑念を振り払わねばならない。

セリカはその覚悟を決めるために心を落ち着け、意志を強く保ちつつ神経を研ぎ澄ます。

「——よしつ、行こう！」

両手で頬を軽く叩き、気合いの声を上げて部屋を出て行く。

——階段を降りるとグリースはカウンターの椅子に腰掛けて悠然と佇んでいた。

セリカの目にその姿はとても頼もしく映る。

青白い光をほのかに放つチェインメイルに身を包み、純白の兜を被った戦士がそこにいたから。腰に吊された長剣は使い込まれているせいか、まるで同化したかの様に馴染んでいる。

「セリカ、準備は出来たか？」

グリースは静かに口を開くと立ち上がり、セリカの格好をまじまじと見つめニカツと歯を見せて笑みを浮かべた。

「ずいぶん気合い入ってんな？　まるで戦いにも行きそうな勢いだぞ。別に正面切って戦うわけじゃない。身を守るための装備だ、これは。セリカ、変な勘違いするなよ」

冗談交じりにそう言うのとグリースはセリカの肩を軽く叩く。

「……俺達は、ただみんなを誘導するだけだ。まあ、殿につくかもしれないがな」

「でもマスター、きつと戦闘になっちゃうでしょ？」

セリカは真剣な眼差しで問い返す。

この状況で逃げ切れるとは到底思えない。セリカは、住人達の盾になり彼らが安全な場所まで逃げ切るまでの囷になる覚悟を決めて来たのだ。だから、グリースの冗談に付き合えるほど気持ちに余裕などない。

「大丈夫、こう見えても多少は剣も使えるのよ。私も冒険者の端くれ、マスターにばかり負担は掛けられないわ」

時間があるといっても大軍から逃れる時間があるだけで包囲されていた場合はやはり戦わなければならないのだ。

セリカはすでにその事を想定している。安易な言葉はいらないのだ。

その強い気持ちにグリースは苦笑を漏らす。

「すまん。だが、まだ早まらなくていい。包囲陣には必ず“穴”があるんだ。そこをうまく突ければ、その短剣を使わずに済むさ」

今度はグリースも真面目に言葉を返すと、もう一度肩を叩き外に向かつて歩き出した。

……街の至る所に放たれた炎は、徐々にその勢いを増し範囲を広げていく。

それとともに狂気じみた殺戮を繰り広げる《北部師団》の行軍速度も増していった。

街の半分は呆気なくローラント騎士団の手に落ちたが、もう半分

はいまだに無事である。つまり、戦える者もまだまだ健在という事を意味していた。

故に両者の激突は免れない。

悲劇はまた新たな悲劇を生み出す。

その事にまだ誰も気付いていない……。

ザインの惨劇・捕食者

広場に集まった住人達は、普段の陽気な姿しか見せないグリースとは違う姿を目の当たりにして彼が元冒険者だった事実を直感的に悟った。

身にまとう雰囲気物語る無言の迫力。疑っていたわけではないが、それが彼の言った言葉に強い信憑性を与えてくれる。その事が気持ちを一つにまとめるに十分役立ってくれた。

——この瞬間、皆グリースの意見に従おうと決めたのである。

「……みんな、よく聞いてくれ。」

これから我々は東に進路を取り、ザイン北東のミレア地区に入る。西から攻めて来る騎士団も東部にまで十分な兵をまわせないと踏んでの逃走経路だ。これは騎士団が迫って来ても南に抜ける道があるからという事はもちろん、万が一散り散りになっても行き先の特定が容易である事から各人の不安を軽減させるのも考慮している。だから、慌てる事はない。逃げる事だけに集中してくれ」

特に大声で話したわけではなかったが、その言葉は広場にいた全員の心にしっかりと刻まれた。皆静かに頷くとグリースの言葉を真剣な表情で噛み締める。

「——では、ある程度まとまって行動を開始してくれ。俺は街を一回りしてから行く。みんな、ミレアで会おう！」

グリースは号令をかけると傍らで緊張した面持ちで住人達を眺めるセリカの背中を軽く叩いた。

「お前、どうしたんだ？ 緊張しているのか？」

先ほどの態度とは打って変わって陽気な表情。まるで久々の戦を心待ちにしている様な、そんな雰囲気が漂っている。

気を緩めれば、今にも震えそうになる自分とはあまりにも違った姿にセリ力は返す言葉が見つからない。

これが戦い慣れた者とそうでない者との違いなのか。強がりと言ったとしてもすぐに見抜かれるだけだろう。そう思うと彼女は黙って頷く事しかできなかった……。

住人達は驚くほど迅速に逃走を開始した。百人は下らないであろう人数がひとつにまとまり、大きな混乱も無く足早に街から出て行く。

グリースとセリカ、そして数人の冒険者達だけが街に残り、逃げ遅れた住人がいないかの確認をし建物に潜んで騎士団の侵入を見張る。

張り詰めた空気の中、長い様で短い時を経た先に……ついに彼等の姿を捉えた。遠目からも狂気じみた暴威を振り撒くのが見て取れる。

「……あの進軍速度なら、住人達もなんとか逃げ切れそうだな」
建物に向かって一斉に火矢を放つ彼等の行動に、グリースは独り言の様に淡々とした口調で呟いた。

火矢を放った騎士達は住人達が炙り出されるのを待ち構えている。その身から発する殺気を抑えようとせす剣を構える姿には、確実に住人達を葬るという意志がありありと伺えた。

グリースの言葉にセリカは安堵のため息を漏らす。

戦闘を回避できるならそれに越した事はない。殿で敵を牽制しつつ逃走するのは困難極まりないのだから、グリースの言葉が正しければ逃げる事に集中できる。

盗賊だった彼女は戦闘経験が乏しかったので、正直なところ戦いを避けられるという希望が出ただけでも安堵せずにはいらなかったのだった。

——住人達はグリースの言に従い、いくつかの少人数パーティーを編成しミレア地区を目指して歩を進めていた。

彼らの大半は旅慣れた者ではなかったが、比較的平坦な道だった事と荷物を最低限のものだけにしたおかげで一定の速度を保つ事に成功する。その一系乱れぬ隊列はさながら統制の取れた軍隊顔負けの見事な行軍をみせていた。

まっすぐ進んで行くと街道の両脇に林が見える。ミレア地区までは小さな林をいくつか抜けて行かなければならなかった。南に抜ける道は至る所にあり、理論上は途中で騎士団に遭遇してもそう簡単に追い詰められるものではない。

住人達は皆、不安を抱きつつもグリースら街に残った冒険者達が後ろに控えてくれるという事が支えとなり、追われる重圧や慣れぬ行軍に疲労を感じても誰ひとり愚痴をこぼす事なく黙々と目的地までの道のりを進んで行った。

焦る気持ちを抑え一步一步前へ進む。

列を乱さぬ様、互いに協力し合いながら歩く姿に悲壮感は見られない。

もしかしたら、このまま何事もなく目的地へ辿り着けるかもしれない。

住人達の心に希望にも似た思いが広がりはじめていた。

「……ん？ 誰かいるぞ？」

先頭を歩く戦士風の男が道の真ん中で立ち尽くす人の姿を見つける。彼は先導役としてミレア地区へ逃走する住人達を守る役目を担っていた。そのため、先頭に立ち皆の安全を確保せねばならない。敵か味方か。彼は前方に佇む者の正体を見極めようと目を凝らした。

——見たところ騎士には見えない。もしかしたら先に逃れた住人かもしれない、と彼は警戒を解き近付くと声を掛けた。

「——どうした？ 具合でも悪いのか？」

近くで見ると、道の真ん中で立ち尽くす者は年端のいかない少年

だった。

少年はその声に反応せず虚空を眺める。

表情の無い顔。目はどこか虚ろで覇気が無い。まるで人形の様に生気の乏しい姿が男に不信感を与える。

（……怪しい。だが、もし敵の間者だとしてもすぐに捕らえられそうだ）

見るからに怪しいが、戦士の自分が少年に遅れを取るわけがないとタカを括り、鳴り出した心の警鐘を無視して無造作に距離を詰めさせる。

その無防備な姿に少年の目の色が変わる。だが、男はそれを認識する事は出来なかった。

次の瞬間、男の首は胴から離れる――。

もしこの場にグリースがいたら、その様な無謀な行為は決してしなかっただろう。男のわずかな慢心が予想だにしない悲劇を生み出す結果となった……。

手刀による斬撃が男の首を跳ね、真っ赤な鮮血が胴から溢れ出る。住人達は一瞬その光景に思考が停止する。

少年は何事もなかったかの如く手を振って血を飛ばすと、怪しげな光を宿した目を住人達に向けた。

「……擬態に惑わされるとは愚かな人間共め。せいぜい恐怖を撒き散らし、我が糧となるがよい」

地の底から響く様な声。覇気の無い先ほどの姿からは想像もできない変化に住人達はただ戸惑うばかりだった。

その動揺がわずかに残された脱出の機を閉ざす。少年は邪悪な意志を撒き散らしながら住人達に向かって駆け出した。

正面から駆け寄り、すれ違い様に手刀を浴びせる。斬撃は寸分違わず急所をとらえ、噴き出す鮮血により瞬時にして地を血の海に染めた。

しかし、血しぶきを上げ苦痛の叫びを上げながら倒れ込むも、ど

れも致命傷にはなっておらず誰一人絶命する者はいなかった。

少年は構わず住人達の列に突っ込み次々と襲いかかる。常軌を逸した動きに住人達は反応する事ができず、為すがままに切り刻まれていく。その尋常でない光景に住人達は恐怖と絶望に支配され……ある者は恐慌に陥り、またある者はこの現実から逃れようと放心状態になる。

「——くくくつ」

少年は恐怖の念を振り撒く住人達の苦痛に悶える姿に顔を歪めて嘲笑する。

無抵抗な者をなぶる快感に酔いしれ、この場を満たす負の思念に力を漲らせた。

「くくくつ、良いぞ。濃密な思念だ……力が漲ってゆくぞ。さあ、もつと発するのだ！ 我に力を！ 我が糧となれ！」

狂気をはらんだ目で凶行を続ける少年。いつしか、顔は崩れ何も無い“球体”へと変化していく。

人とは異なる者。その正体を露わにし、さらなる恐怖と絶望を与えた……。

不可視なものを視る事のできる者なら、この場に漂う負の思念に吐き気を覚えた事だろう。それくらい濃密な邪気が辺りを支配していた。

地上では見受けられぬほど不浄の気が漂う空間で、その身に負の思念を食らわんが如く両手を広げ少年だった者は不敵な笑みを浮かべ佇む。

「……アゼリの策とは少々違ったが構わぬか。どの道こやつらは葬られるのだ、誰が殺そうが構わんだろう……」

打ち捨てられた屍の山を見下ろし、誰に言うまでもなく少年だった者は呟きを漏らした。

——林の奥から、殺気を漲らせた軍気が近づいてくる。街を包囲

した騎士団が迫って来ているのだ。

本来なら林に進入した住人達を討ち取り、街の制圧を果たすだけだった。

しかし、彼らは知らない。

討ち取るべき住人達はすでにこの世の者ではない事を。そして、待ち受ける者が人外の“力”を持った魔性の者である事を。

宴はまだ始まったばかり。ザインはさらに凄惨な地獄絵図を描く事となる。

ザインの惨劇・氷解

ザインの街は、ローラント騎士団による大規模な侵攻に晒され各地で戦火に巻き込まれていた。しかも不意を突かれた冒険者達は反撃の態勢が整わぬままローラント王国が誇る精鋭部隊と戦わなければならなくなる。

頼みの綱である魔術師らは弓兵の射撃や騎兵の突撃に実力を出せずに次々と葬られ、それによって連携の取れた戦術を封じられた冒険者達は騎士団の得意とする白兵戦を余儀なくされ、その戦況は一方的なものとなっていた。

戦闘は凄惨を極めつつある。

破壊衝動に駆られた騎士達は、ただ制圧するだけに飽き足らず住人達や冒険者を必要以上に血祭りに上げていく。

ザインに漂う負の思念が、彼らの心の歪みを増大させた結果だった。

建物に火を放ち、執拗なまでに住人を炙り出そうとする騎士達の行動にグリースは妙な違和感を覚えた。

何かに取り憑かれたかの様な形相、疲労を忘れたかの様な一心不乱に動き回る姿。それらの行動にグリースは過去の忌まわしい記憶を蘇らせる。

—— 狂気にも似た信仰心が招いた殺戮の宴。人が人である事を放棄した果てに行き着く魂の変質……混沌の海を漂う生きし骸“狂戦士”と化した者達の姿が、グリースの脳裏に鮮やかに浮かび上がったのだった。

その瞬間、背筋に冷たいものが走る。

心を失い、生ける者すべてに憎悪し破滅へと突き進む狂乱の使者。

いかに歴戦の戦士だった 그리스 でさえ、かの者を葬るのは困難を極めた。

もし彼ら―騎士達―がその様な変貌を遂げたら……ザインはもとよりローラント王国もただではすまない。そう思うと 그리스 は居ても立つてもいられなくなった。

「――マスター、どうしたの？　ボーっとして」

厳しい表情で固まる 그리스 にセリカは声を掛けた。

額に汗を滲ませ、顔色も悪く見える。

幾多の戦場を駆け抜けた彼をして不安にさせる“何か”があるのか。実戦経験に乏しいセリカにとって、 그리스 の一挙手一投足が頼りなのだ。

それではいけない、と思いつつもセリカは 그리스 の態度に自身の不安を募らせていく。

「……マスター、そろそろこの場を離れた方がいいんじゃないかしら？」

グリースの耳元で囁く様に問い掛ける。弱気なだけかもしれないが、セリカも騎士達の行動に妙な胸騒ぎがしてならなかったのだ。

この彼女の勘は当たっていた。 그리스 に至ってはさらに恐ろしい確信を得る。

一連の事件に至る経緯と冒険者達の暴走、そして騎士団の暴挙を多角的な視点で整理し、そこに“狂戦士”の出現を加えて見つめ直した結果、ザインにおける不可解な部分が一気に氷解したのだ。

――これは間違いなく“悪魔”が絡んでいる、と。

《龍神戦争》においても“悪魔”の所業としか言えない様な惨劇を見てきたグリースは、もはや疑う余地は無いとばかりに皆に振り返ると声を荒げて言い放った。

「――みんな、謎はすべて解けた！　俺とした事が……一番想定しなければならぬ事態を失念していた！　ザインにおける一連の事件はすべて“悪魔”の策略だったんだ！　魔導士達は本気でアルカ

ディアを破滅に導く気なのだ。くそっ！ 住人達を先に逃亡させたのは失敗だった……まんまとしてやられた！」

グリースは唇を噛みしめ、街を破壊する騎士達の姿から背を向けると退避する旨を伝える。

「みんな、逃げるんだ！ そうだな……北だ。北なら待ち伏せもなかるう。騎士団と遭遇する恐れはあるが、悪魔と鉢合わせになるよりはマシだろう……」

グリースの言葉に皆何を返せばいいのかわからず、ただ立ち尽くすだけだった。しかし、曲がりなりにも冒険者である彼らはその言葉を受け入れ、わからぬまでも黙々と逃走の準備を始める。

「みんな、すまない。俺がもっと早く気づいていれば……」

逃走の準備を終えた冒険者達にグリースは頭を下げた。

「グリースさんよお、頭を上げてくれ。別にあんたのせいじゃないこれもまた“運命”ってやつさ、気にしないでくれ」

「そうさ、気にするな。どうせ俺たちや戦うしか能がないんだ。悪魔と遭遇したとて、あんたを恨んだりせんよ」

「さあ、急ごう。もたもたしていると騎士団に捕まっちゃうぜ」

準備を終えた彼らはグリースにそう声を掛けると思い思いに逃亡を開始した。

グリースとセリカも足早にその場を立ち去る。

騎士団が本格的に動き出した時点で、悪魔の策略は半ば達成されただろう。グリースはもう逃げ場のない事を覚悟した。

——だが、セリカにはまだ言わないでおく事にした。

決して幸福とは言えない人生を歩んできた彼女に、この残酷な現実を突き付ける非情さをグリースは持ち合わせていなかったのだ。

これが親心なのか。

もし生き残れたら考えよう。

グリースは己の腕がまだ錆び付いていない事を祈りながら、あてもなく街を駆け抜けて行った……。

ザインの惨劇・遭遇

——負の思念が渦巻く様に“彼”の体に吸い込まれていく。

声にならない呻きを漏らし、憎悪で漲る目を光らせると取り囲む騎士達に向かって走り出した。

血に染まった剣を無造作に振るう。騎士は盾で防ごうとするが、紙を引き裂く様に盾ごと騎士は斬り捨てられる。

その光景に騎士達は驚愕の声を漏らすも盾を構え慎重に間合いを詰めた。

——目に映るローラントの紋章。その紋章が“彼”の憎悪を増大させ、内なる力を引き出させる。

ローラントの紋章を持つ者は何人たりとも生かしておけぬ。その思いが“彼”の心を狂気へ駆り立てる。

“狂戦士”と化したリークにとって、ローラントの騎士は殺しても殺し足りない憎しみの対象だ。

湧き上がる憎悪が力に転化され、漂う邪気を吸収し体力を補う。それによって無限の力を得たかの様に痛みも疲労も無く“狂戦士”

リークは戦い抜く事ができたのである。

騎士達はその正体に気づけず果敢に挑んでいく。そして、さらなる憎悪を彼に植え付け無残な最期を遂げる事となった……。

セリカは凍りついた様に身動きひとつできなかった。

一瞬、まさに一瞬の出来事。先に行くグリースと街を駆け抜け、なんとか北の端に辿り着いた時だった。

目の前に少年が突然現れ、グリースに襲いかかったのである。

子供とは思えぬ一撃にグリースの体は宙を舞う。

セリカは動かぬ体を奮い立たせグリースの元へ行こうともがく。しかし、突然の恐怖に固まった体は彼女の意に反してピクリとも動こうとはしなかった。

「……おやおや、まだ生きてたか」

少年は邪悪な笑みを浮かべ、立ち上がろうとするグリースを見下ろす。

体を震わせながらグリースは立ち上がるも鎧には大きな穴が開いており、しかもそこからは夥しい出血がみられる。

誰が見ても致命傷。セリカはその傷口を見て目眩を覚えた。

「……せ、セリカ……逃げろ。こいつは、あ、あく……ま、だ。逃げ……ろ……」

少年の一撃を受けたグリースは息も絶え絶えにセリカに向かって声を上げる。

腹部に受けたダメージはかなり深刻なものだった。声を出すだけでもかなりの激痛が走る。

それでもなおグリースはセリカの身を案じる。だが、その悲痛の叫びでさえ彼女の体を動かすには至らなかった。

少年―悪魔―は邪気に満ちた笑みを浮かべグリースの元へゆつくりと近づく。

苦痛に顔を歪めながらもグリースは立ち上がり、おぼつかない動作で腰に吊した剣を抜き放ち傷口を庇う様に構えを取った。

「……ん？ まさか抵抗するつもりなのか？ おとなしく手を下された方が楽になれるぞ？」

少年は目を細めて息も絶え絶えなグリースの様子を眺める。

さて、どのようにいたぶろうか。少年は目の前で無駄な抵抗しようとする戦士を弄ぶ手段を思索した。

固まったまま動けぬ女などいつでも葬れる。それならまずはこの愚かな戦士を葬る事で湧き上がる狂気を満たし、その後で女の恐怖と絶望の念を味わおうと思ったのだ。

致命的な傷を抱えて悪魔と戦えるか。せめてセリカが逃げ切るまで止めなければ。

グリースは気の遠くなりそうな激痛になんとか堪えつつ機を探る。この傷だ。敵は油断しているはず。渾身の一撃を与え、怯ませる事はできるかもしれない。

出血により意識も保てなくなっていたグリースに、凍りついた様に微動だにしないセリカの状態を知る余裕すらない。

柄を握る手に力を込め、敵との間合いを計る。

目の前に靄がかかる。もはや一刻の猶予も無い。

——グリースは弾かれた様に地を蹴り、一気に間合いを詰めると少年に向かって剣を振り下ろした！

不意を突いた一撃。

立っているだけで精一杯なはずの致命傷を受けた体にその様な芸当ができるとは……予想外の踏み込みに身をかわす事ができず、渾身の一撃をともに浴びてしまう。

「——ああっ！」

セリカは悲痛な叫びを上げる。

肩口に食い込む刃。だが、悲しいかな力が足りなかった。

皮一枚切っただけでダメージを与える事ができなかったのだ。

少年はすかさず刀身を掴むとグリースの腹部を蹴り上げる。

「うつ！」

グリースは苦痛に顔を歪めその場に倒れ込む。追い討ちをかける様に少年は容赦なく傷口を何度となく踏みつけた。

「ああ……」

セリカは己の無力感に苛まされながらも必死に身を擦る。

絶望に支配されそうな心を奮い立たせ、一刻も早くグリースを助けようともがき続けた。

「……無駄だよ、無駄。人間ごときが噛みつくんじゃない！」

少年の目に狂気を宿し、怒りに任せてグリースをなぶる。力尽き地に伏せたグリースに反撃する体力はない。

それでも少年は執拗なまでに傷口を踏みつけ苦痛に歪む表情を堪能する。

「――ふははっ！ 良いぞ！ 怒りと憎しみ、悲しみと絶望……負の思念をもつと撒き散らすが良い！ 脆弱なる人間よ、我が糧となるがいい！」

グリースの抱く無力感、セリカの抱く焦燥感……それらの思いをも歪んだかたちに変化させていく。少年は顔を醜く歪ませ溢れ出る負の感情を吸収する。

街を覆う邪気が、憎しみや絶望を増幅させるのだ。

乱撃にさらされるグリースは己の死を見つめていた。

自身の死は免れぬ。だが、セリ力を巻き込んでしまった事が悔いとなり、薄れゆく意識を手放す事を頑なに拒ませていた。

――辺りを漂う邪気を払うかの様に一陣の風がグリースの頭上を吹き抜ける――。

繰り返された乱撃の嵐は鎮まり、驚愕の声を漏らすセリカの歓喜に満ちた声と……明らかに狼狽した少年の呻きがグリースの耳に入ってきた。

（……助けが、来たのか……）

朦朧とする意識の中、グリースは状況が一変した事を確信する。

（……誰でもいい……彼女を、救ってやってくれ……）

声にならない言葉を思い浮かべると、グリースの意識は深い闇に閉ざされていった……。

それは、一瞬の出来事だった。

何らかの気配を感じ取った瞬間、凄まじい衝撃を受けた少年は急激な景色の変化と全身を襲う激痛に戸惑いの声を上げる。

それは、剣圧による衝撃。剣圧が突風となって少年に襲いかかったのだ。

何故、視界に空が広がっている。

少年は一瞬混乱したがすぐさまその原因に気づくと新たな敵の出現に怒りの表情を露わにして立ち上がった。

——その身を覆う外套は、装飾のためとは思えぬ彩色が施されていた。

深緑を基調とした迷彩色。見る者が見れば闇に紛れるための工夫が凝らされている事が伺える。

その身が発する気は静かなる闘志で漲っており一分の隙も見せていない。怒りで殺気立つ少年もその様子に飛びかかりそうになる衝動を抑えざるを得なかった。

長年、裏の世界に身を置いてきたセリ力はその者の本質を直感的に悟る。

この者は“裏”に属する本物の強者である事を。そして、絶望に陥りそうな自分たちを救ってくれるという希望を抱かせる存在であると……。

無言で佇む姿。手に握られるは淡い光を放つ短刀だった。

その一振りに跳ね飛ばされた事に少年は屈辱と憎悪を膨らませる。攻め入る隙を見出せずに苛立ちが募っていく。

「人間ごときに不覚を取るとは……我を本気にさせた事を悔やむが……いっ！」

少年はこの地に蔓延する邪気を吸収し、さらに自身の発した負の感情をも《力》に変換する。辺りに満ちた濃密な妖気が渦巻く様に少年の体に吸収されていく。

見た目は変わらないのに、セリ力は本能的な恐怖で気を失いそうになった。これは、人外の者の持つ“闇の力”が常人の精神力を著しく消耗させるためである。

その妖気に晒されながらも外套の者は何事もなかったかの様に間合いを詰めていく。

いったい、何が起きようとしているのか。セリ力は闘気と妖気が

渦巻く中、ひとり取り残された様にただ決着を見守るしかできなかった……。

ザインの惨劇・脱出

ザインに蔓延する不浄の気が少年を中心に渦を巻き、辺りは地獄を思わせる妖気で満たされていった。

離れた位置にいるセリカは目眩にも似た感覚に襲われ、頭の中に靄がかかった状態になる。そして、込み上げる吐き気とともに全身が麻痺した様に小刻みに震え出した。

——それは、魔の波動に体が蝕まれる前兆だった。

外套の者は、そんなセリカの様子を一瞥すると仰向けに倒れたグリースに顔を向ける。

「……現役を離れたせいで勘が戻っていなかったのか。そうでなければ、不意の一撃など受けなかっただろうな」

低く、感情の無い声が漏れる。まるで油断がなければ少年の一撃など食らわなかった、と言わんばかりに。

明らかに少年を挑発した物言いに少年は激しい怒りと憎しみを抱く。

「——貴様っ！」

自身の怒りや憎しみも《力》と化し、抑えきれないほどの妖気が空間を歪める。

それでも外套の者は平然と構える。余裕にも取れる態度に少年の心は今にも煮えくり返りそうになった。

「人間ごときが、悪魔にかなうと思うな！」

叫ぶと同時に少年の周囲に光の塊が無数に出現する。その一つ一つが途轍もない魔力を秘めている。

「消え失せろっ！」

光の塊が一齐に外套の者目掛けて襲いかかっていった。

——閃光とともに轟音が鳴り響く。土埃が舞い上がり、外套の者

の姿が見えなくなる。それでも少年は次々と光の塊を出現させては狂った様に乱れ撃つ。

凄まじい閃光と轟音にセリカは目を閉じて身を強ばらせる。そして、外套の者の命運が尽きた事に絶望を覚えた。

執拗なまでに魔力弾を放った少年は、もはや肉片ひとつ残っていないであろう事を確信し、狂気に顔を歪め声を立てて笑い出した。

「――ふはははっ！　口ほどにもない！　愚かな人間めっ！　人間ごときが悪魔にかなうなど、決して有り得ないのだよ！　ふはははっ……な、なんだとっ！？」

少年の笑い声が驚きのものに変わる。

絶望に苛まされるセリカもその変化に閉じた目を開く。

「――な、何故だ！？　何故生きている！？」

到底信じがたい状況に少年の声は裏返る。

それもそのはず、無数の魔力弾にさらされた体には傷ひとつ付いていなかったのだ。

外套の者は何事もなかったかの様に埃を手で払い、目深に被ったフードを下げると再び構えを取った。

「――スニッフ！」

フードの下顔にセリカは思わず叫び声を上げる。

ただ者ではないと思っていたが、まさか悪魔と戦えるほどの者とは……セリカは信じられない様な、しかし彼なら倒してのけるのではないか、そんな複雑な心境になった。

「……時間が惜しい。すぐに終わらせるからおとなしく待っててくれ」

スニッフはセリカにそう言うつとすぐに少年に向き直り、手にした短刀に気を込めた。

刀身が淡く光る。

身を少し屈めたかと思うと地を蹴り、一気に間合いを詰めると驚愕の表情で固まる少年の胸を薙いだ――。

「ぐあっ！」

隙を突かれ、まともに斬られた少年は飛び退く様にしてスニッフから距離を取る。

——腹部に走る鋭い痛みは、動きを鈍らせるには十分だった。さらに精神の集中も妨げてくれる効果もあり、大掛かりな魔法を放つ事を困難なものにする。

少年は激痛に耐えながらもスニッフに向かって魔力弾を放つ。しかし、スニッフは向かってくる魔力弾を紙一重でかわし、最短距離をまっすぐ駆けてくると短刀で斬りつけた。

「くそ！」

少年は魔力弾をかわされた瞬間に後ろに下がり、辛うじてそれかわすと手刀を繰り出す。だが、下がったせいで動作が遅れ易々と見切られてしまう。

「チイツ！」

人間相手に苦戦する事は屈辱以外の何物でもない。少年は思う様に動けず舌打ちする。

（くそつ、集中し切れんから魔力弾の威力が落ちている。隙を作らねば……ん？）

その時、少年の視界に固まったまま身動きひとつできないでいるセリカの姿が飛び込んだ。

（……あつたぞ、隙が……）

少年はスニッフから大きく間合いを取るとセリカに向けて魔力弾を放った。

その威力は抑えたものだが、動けずにいるセリカを絶命させるには十分すぎる代物だった。

「——いかん！」

スニッフはすぐさまセリカに向かって駆け出す。はじめから一向に動く素振りを見せなかった事から、セリカの体が恐怖で固まっている事を知っていたのだ。

そのおかげでスニッフは間一髪、魔力弾が命中する前にセリカを突き飛ばす事ができた。だが、それも少年がわざと間に合う様にし

たためだ。

セリ力を突き飛ばしてすぐにスニフフは体勢を整えるも、すでに少年は目の前まで来ていた……。

「——もらったあつ！」

渾身の力を込めた手刀が脇腹目掛けて飛んできる。鈍い音を立てスニフフの体は浮き上がり、腕を振り抜くと同時に遠くに跳ね飛ばされていった。

「……くっ」

渾身の力を込めたため腹部の裂傷に激痛が走る。痛みが体の感覚を麻痺させ、少年は思わず膝をつく。

吹き飛ばされたスニフフはすぐに立ち上がる事ができずにいた。少年はそのわずかな時間で辺りに漂う妖気を吸収し消耗した魔力を補う。

（……思ったよりダメージが大きい。蓄えた《力》が抜けていく。奴より早く回復せねば……）

油断が招いた代償は大きかった。隙を見つけれなければ苦戦は免れなかっただろう。地に伏せるセリ力に一瞥し、この女を生かしておいた幸運に少年は安堵せずにはいらなかった。

手応えは十分にあつた。少年はまだ動く気配を見せないスニフフに己の勝利を確信する。

蔓延する邪気に覆われた地の利がある。少年は辺りに漂う妖気を吸収する事で裂傷を塞ぎ、痛覚を麻痺させると立ち上がり両手を掲げる様にして光の塊を出現させた。

辺りに漂う妖気が塊へ集束されていき、大きな球体へと変化していく。

「——これで終わりだ」

少年は止めの一撃となる妖気の塊をスニフフに向けて解き放った。
「ああっ！」

セリ力は短い叫びを上げると顔を背ける。
炸裂した轟音と衝撃が地面を揺るがす。目を瞑っていても手に取

る様に惨状が脳裏に浮かぶ。

やはり、人間では悪魔を倒す事はできないのか。わずかに抱いた希望を打ち碎かれたセリカはがつくりとうなだれた。

（何故、このような悲劇が起きなくちゃいけないの……）

込み上げる悲しみが心を挫く。

もはや、そんな彼女にできる事はない。ただ静かに最期の時を待つ事しかできなかった。

「……な、なぬっ!？」

呻きにも似た声を漏らし、少年の目が驚愕の色に染まっていく。

そこには、身を覆う外套は跡形もなく引き裂かれていたが二本の足で立つ男の姿があった。

——晒された肉体には傷一つ負っていない。

腰に巻き付けたホルスターがその身を守ったのであろう。つなぎ目の一部が破損してただけで他の部分に損傷はまったく付いていない。

スニフフはボロボロになった外套を剥ぎ取るとホルスター部分に装着された金属製の武器を手でぞつた。

「ふむ、どうやらホルスターに命中したおかげで事なきを得た様だな」

スニフフは特に変わった様子もなく埃を払う。そして、手にした短刀を持ち直し少年に向かって歩き出した。

「——えっ」

その声にうなだれていたセリカは顔を見上げた。

視界に飛び込むスニフフはたいしたダメージを受けていない様に見える。その姿にセリカはただ啞然とするばかりで、少年に至ってははその光景に追撃の手が出なかった。

渾身の力を込めた魔力弾は、たとえ致命傷にならなくともとてもすぐに起き上がれる様な生半可な代物ではない。仮に打撃や魔法に対する強い耐性があつたとしても、まったくの無傷で防ぐ事など不可能に近い。

少年は今まで出会ったどの敵にも当てはまらない異質なものをこの男から感じ取った。

(……まさか、こいつ“無限の技”を……)

自身より遥かに上位のアゼリが警戒して止まない人間の持つ無限の可能性。そう遠くない過去に魔界を揺るがした“あの技”をこの男は身につけているのか。

もしそうだとしたら、この状況も十分に考えられる。

(……まさか龍天女に連なる者か？ いや、それならアゼリ自身ザインに来る事は決していないはずだ。単なる偶然か？ たまたまザインにいただけか？ どちらにしても“あれ”はやバすぎる。限りなく可能性が低いとしても、神殺しの技を持つかもしれない者と戦う愚は犯せん……ここは一旦引くしかないか？)

思案しつつスニフフの動きに合わせ詰める分だけ下がる。少年は距離を詰めていくスニフフとの間合いを一定以上取りながら様子を見た。

(万が一、という事は十分にあり得る。そうでなくともこの男の実力は未知数……だが、他の人間とは明らかに“質”が違う。しかし、一向に攻める気配を見せないのは接近しなければ手出しができないという事ではないだろうか？ ……うむ、おそらくそうかもしれない。少し時間を稼いでみるか……)

少年は、この事態を打開するためなら多少の時間を費やしても構わないと思い始めていた。それと同時に間合いを大きく取った事による安心感が心の中に芽生える。

距離を保つ限り不覚を取る事はまず無い。

この思い込みにも似た錯覚に少年は、先ほどの強い警戒心を自然と弛ませていった……。

少年の思いとは裏腹に、スニフフはまったく別の事を考えていた。彼にしてみれば、戦いに敗れるという考えは微塵も抱いていない。というよりもまともに戦えば間違っても不覚を取る事は無いと確信

している。

魔導士に比べれば悪魔など赤子を捻るくらいでなければ話にならない。実際に戦ってみて、その思いはさらに強いものへと変化していた。

その背景もあつてか、スニフフは少年との戦闘よりもセリカとグリースの安全をどう確保しようか、この点に対して頭を悩ませていたのだった。

——少しずつ近付く事により二人を戦闘圏外へ離していく。本来の実力を隠す事によつて少年の警戒心を煽り、自分にだけ意識を集中させる事で二人に対する苦し紛れの攻撃を防ぐ事を試みたのだ。

少年は距離を取らされている事に気付かない。見えない重圧に晒され、己の安全に気を取られ周りが見えていないのだった。

二人との距離を十分に離され、徐々に窮地に追い込まれている現実を読めていない少年は、次第に膠着した状況に警戒心を麻痺させていく。

そして――。

再び擡げた破壊衝動が少年を攻撃へと走らせた。

瞬時に間合いを詰めさせない様に威力を抑えた魔力弾で牽制し、その時にできた死角を突いて一気に間合いを縮めると手刀を繰り出した。

魔力弾をかわし体勢を整える一瞬の隙を突いた一撃。しかし、その攻撃は完全に読まれていた。

魔力弾をかわすと同時に短刀を振りかぶる様に構え、必殺の一撃を放つ少年の腕に向けて振り下ろす。

「――くっ！」

この一撃で軌道が逸らされ、少年の手刀は脇をかすめ皮一枚を斬るだけに留まる。

スニフフは腕に食い込んだ短刀を素早く抜き取り、少年の胴目掛けて無数の突きを放つ。

飛び退く間もなく打ち込まれる刃。

腕を刺された、と思った次の瞬間には灼ける様な鋭い痛みが無数に走る。

幾度となく繰り出される鋭い突きに少年は為す術もなかった……。時間にすれば一瞬の出来事だったが、まるで永遠と思えるほどの猛攻に晒された少年は目を見開いたまま動きを止める。もはや辺りに立ち込める妖気を吸収する事も無く、少年の時間が止まったかの様に微動だにしない。

「……な、なぜ……」

振り絞る様に一言だけ漏らすと、少年の体は徐々に石と化していった。

スニフフは短刀を鞘に収め懷にしまうと吐き捨てる様に呟く。

「……魔導士を倒そうというのに、悪魔ごときに手こずってなんかいられんだろう」

そう言うつと腰に巻き付けたホルスター越しに銃を握り締めた。

（……そう、悪魔ごときに“これ”を使っては魔導士にはとてもかなわない……）

心の中で自分に言い聞かせる。

どんなに苦しい状況に置かれても“銃”の存在を知られてはならない。たとえ仲間が窮地に立たされても、己が窮地に立たされても、だ。

スニフフは自分を戒めながらグリースの元へ行く。

顔は蒼白で生気のかけらも感じさせず、ほのかに光を放つ鎧は見るも無残な状態になっていた。特に腹部の傷は手遅れに近い状態だった。

「……ん？」

スニフフはグリースの体がわずかに上下しているのを目にした。

「……まさか」

手遅れにしか見えない致命傷を負ったにも関わらず、まだ息をしているとは……スニフフは頑強と呼ぶにはあまりにも強靱な生命力

に感嘆の声を漏らした。

「セリカ！ グリースは無事だ！ 助かるかもしれん！ 手当てをするから手伝ってくれ！」

スニフフの言葉にセリカの体は解き放たれた様に自由を取り戻す。そして、すぐさまグリースの元に駆け寄ると荷袋から薬と包帯を取り出し手際よく応急処置を施していく。

「……持ってくれよ」

スニフフは祈る様な気持ちでグリースの容態を見守る。

——辺りに立ち込める妖気が薄れてゆくにしたが、グリースの顔色も徐々に赤みを増していく。

（……そうか、妖気が回復を遅らせているのか……）

このままではグリースの体が保たない。ひとまずこの場を離れてから治療に専念した方が良くかもしれない。

「セリカ、妖気が回復の妨げになっている様だ。多少危険を伴うが、グリースをこの場から離れた方が良くかもしれない」

妖気が回復の妨げになっていると見たスニフフはセリカにその事を伝える。

一瞬、セリカはグリースの体を動かす事に抵抗を感じた。しかし、肌で感じられるほどの妖気にさらされては回復が遅くなるというスニフフの意見にすぐに納得した。

セリカは黙って頷くと薬や包帯などを荷袋に詰め込み、スニフフと二人でグリースの体を持ち上げる。そして、二人はグリースの体に衝撃が伝わらない様に気を配りつつも早足でザインから離れていった――。

妖気にさらされた地に近付く者はいない。本能的に危険を感じ取り無意識のうちに避けるのだ。

まさに不幸中の幸い。

スニフフ達は、この妖気のおかげで一人の敵に遭遇する事なくザインから逃れる事に成功したのだった……。

——スニッフ達がザインから離れた直後だった。

住人を斬殺し、街を徹底的に破壊する《北部師団》の前に一人の戦士が現れた。

全身が返り血に染まり、およそ人間とは思えぬ形相で騎士達を睨みつける。

凄まじい殺気を撒き散らす戦士の出現に本能的な危険を察知した騎士達はその周りを一斉に取り囲む。

その様子に戦士は憎悪の炎をたぎらせた。そして、湧き上がる狂気に身を任せると地の底から響く様な唸りを上げながら騎士達に向かって駆け出す。

——剣を振るうたびに絶叫がこだました。

剥き出しの狂気に晒された騎士達の心は、瞬時にして死の恐怖に支配される。

狂気をまとう戦士・リークの憎しみは凄まじく、狂気に染まりかけた彼らの心を正気に戻したのだった。

破壊の限りを尽くされ、炎に包まれた街は逃走を困難なものにしていた。

正気に戻った騎士達はその中を逃げ惑うも、人間とは思えぬ素早さで駆け回るリークからは逃れる事ができず、もはや斬殺されるか自ら炎の中に飛び込むしか選択の余地は残されていなかった……。

視界に入るすべての者を斬り捨てたリークは、さらなる血を求め騎士団の本拠地であるウル地区に向かって歩き出した。

ザインの惨劇・秩序崩壊

——夥しい量の血が大地を赤く染め上げていた。家屋は倒壊もしくは炎上しており、至る所に死屍類々の山が築かれている。

肉の焼ける音に焦げた匂い、乾ききっていない血の香り。どこにいてもそれらの“死の芳香”に晒される。

それだけでもこの地における戦闘の激しさが手に取る様に窺えるというもの。

辺りは怨念にも似た邪気で漲っていた。

絶望、恐怖、憎悪、憤怒、悲哀。およそ負に属する感情の念がこの一帯に渦巻いている。

「——純度の高い気だ」

漆黒の髪を掻き上げながらアゼリは揺らぐ炎を映す紅い瞳を細める。

立ち込める負の思念が彼女を中心に渦を巻いて吸い上げられていく。常人では到底耐えられぬであろう負の奔流が彼女の魂を揺るがす。だが、アゼリはそれを心地よさげに喰らい尽くした。

「……完璧だ。これだけの邪気を見事精製してくれた。あやつ、狂気をつまぐ飼ひ慣らししている様だな」

妖艶な笑みを浮かべながら目を光らせる。拾い物が想像以上に役立つてくれる事にアゼリは満足げな表情で精製された邪念を心ゆくまで堪能する。

自身を縛る『制約』さえ無ければ、手段を選ぶ事無くより多くの気を摂取できるのだが、無作為に人を殺めたり狂わせる事は魔導士や老魔術師の目論見に反するので、湧き上がる“食への衝動”を抑え目立たぬ様にしなければならなかった。

それにより内心ザインへの派遣を面白く思わなかったアゼリだっ

だが、この地で予想外の収穫を得た事で溜飲を大いに下げる事となり、彼女は知らず知らずのうちに老魔術師の思惑通りに動く事となる。

互いに利用し合う関係がここまでうまく行っている事は、アルカディアの民にとってみれば“不幸”以外の何物でもない。

ザインでの謀略は彼らの思惑通りに進む事はもはや避けられなかった――。

ウル地区に残った部隊は《西部第二連隊》しかなかった。ローラント西部を拠点に活動する彼らは、外敵に対する防衛策を講じる情報収集を主な任務としており、部隊としての戦闘力はもとより個々の戦力も秀でている。

ところが、今この地区は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

たった一人の戦士が、誉れ高きローラントの騎士に恐怖と絶望を与えたのだ……。

人間とは思えぬ素早さで領内を駆け巡り、すれ違い様に騎士達は次々と切り刻まれ倒れていく。その身から発する狂気は見る者を萎縮させ、彼らの動きの精彩を鈍らせる。

《西部第二連隊》の隊長マイケル・キャリバーは、たった一人の戦士により自身の築き上げてきた栄光と実績を瞬時に無に帰すのを目の当たりにし、その自尊心を完全に破壊され狂気の叫びを上げながら戦士に飛びかかり、一足先に旅立った同胞のいる死地へと旅立って行った。

――屍が次々と築き上げられ、領内には生ける者は誰ひとりとしていなくなった。

リークは血塗れになった剣を一振りし、血で染め上げられた大地にさらなる赤を散らす。

殺しても殺しても、騎士に対する憎しみは晴れずに心は狂気で満たされる。

この苦しみを晴らす術はどこにも無いのか。リークのわずかに残る理性は自身の魂を解放してくれる術を探す。

（……この苦しみの元凶を断つしかない……）

狂気に染まったリークの心に、愛しき人の姿が思い描かれる。

（……もはや、生きる事に喜びを見出す事はないだろう。それなら、せめてこの手で……）

それが自身の魂を救う。狂気に染まったリークは、湧き上がる破壊衝動に突き動かされる様にきびきを返すとマリアのいる宿に向かって駆け出して行った……。

ザインの惨劇・終幕

ウル地区での惨劇はローラント騎士団にとって大きな損失となった。

しかし、三部隊あるうちの二部隊はすでに前線に投入されていたため対冒険者戦においての戦況に影響を及ぼす事はなかった。

《北部師団》は後にリークによって全滅させられたとはいえ、それまでに行われた猛攻は激しく冒険者達の健闘むなしく次々と領地を制圧されていったのである。

限られた場所での局地戦では冒険者達の方に分はあったが、さすがに一国の防衛を担う騎士団だけあってすぐに対応されてしまったのだ。

ザインの領地は、そのほとんどがローラント騎士団の手に落ちたといっても過言ではなかった……。

ローラントの騎士に追われ、廃墟と化した街へ辿り着いた冒険者達がいた。騎士団の包囲網によりザイン脱出を阻まれ、逃げ場を無くした彼らはここで騎士達をやり過ごそうと思つて来たのである。

荒れ果てた地に隠れ家となる場所は無い様に見える。だが、彼らはわずかに原型を留めた建物に身を潜めザイン脱出の機会を悲痛な覚悟で伺っていた。

——皆の表情は一樣に暗い。

生きてザインを出られるか。その事ばかりが頭を巡っては、やはり捕らわれるのではないかと不安を募らせていたのだ。

その中でも一際恐れを抱く者がいた。部屋の隅で膝を抱え、端から見てもわかるほど身を震わせる女性の姿があった。

本来の青く澄み切った瞳は怯えの色に染まり、絶えず揺れ動いては焦点が定かではない。いかにも焦燥し切った表情はまるで生気の

失せた人形を思わせる。

彼女―マリア―はこの危機的状況に置かれた事により、忌まわしき記憶が鮮明に浮かび上がり、己の運命に絶望を感じていたのだった。

「……リーク……」

マリアは姿を消したリークの名前を呪文の様に呟き続ける。

彼は今どこにいるのか？

騎士団と戦っているのか、それとも捕らわれてしまったのか。

マリアは彼の内なる怒りの感情に気付いていたので、無謀な行動を起こしてはいないか不安になる。

（……リーク、どこにいるの……私を独りにしないで……）

震える体を両腕で抑えながらマリアは心の中でリークに呼びかけ続けた。その内なる声が彼に届く様、一心不乱に唱える。

――その瞬間、辺りを支配していた静けさが突如かき消された。

剣戟の音に喚声が響き渡り、轟音とともに地響きがする。

この地で戦闘が始まったのだ。

それを悟った冒険者達の表情は一瞬にして厳しいものへと変化する。そして、一人の戦士風の男が腰に差した剣に手を添えながら建物の外へ出て行った。

「……な、なんだ……」

男は目に飛び込んできた光景に二の句が告げなかった。何故なら、ローラント騎士団がたつた一人の女に翻弄されていたのだから。

そのにわかには信じ難い光景に男は我が目を疑いつつも吸い込まれる様に見入ってしまう。

漆黒の長い髪をなびかせ、踊る様に騎士達の斬撃をかわし手にした細身の剣で反撃する。さらに距離が離れると魔法弾を放ち騎士達を次々と葬っていく。

圧倒的な戦闘力の差を見せつけるその姿は、華麗と呼ぶにはあまりにも凄惨だった。

「……ふふふ……」

妖艶な笑みを浮かべながら女は騎士達の攻撃をあしらう。だが、決して本気で戦っている様には見えない。

——あの女、悪魔だ。

男は直感的に女の正体を看破する。

騎士達の攻撃を軽々とかわしながら呪文詠唱無しに魔法弾を放つなど人間の限界を超えている。

「……そうか、そういう事か」

何故、悪魔がこの地にいるのか。その存在をザインにおける不可解な面に当てはめてみると、すべての謎が一気に氷解していった。

（……あれをやり過ぎればザインから脱出できる。ここは身を潜めた方が無難だな……）

男は気配を抑えつつ皆のところへ戻り、ザインで起こった一連の事件について伝える事にした。

騎士達は瞬く間に倒されていった。逃げ場を失い、恐怖に駆られてただ無謀な突撃を繰り返す騎士達を葬る事などアゼリにとって容易い事だ。

騎士達の絶望と恐怖を思う存分堪能したアゼリは、近くに複数の気配を感じつつもこれ以上の負の力は欲してなかったので敢えて見逃す事にする。

当初の目的は達成され、今後のローラントの混乱に避けられない状態にしたのだ。たとえ自分の正体が見破られたとしても、ローラント騎士団がザインを制圧した事実は変わらない。

この地から派生した負の連鎖を食い止める事など、もはや出来るはずもないのだ。

（……思った以上に収穫があった。騎士団に対する不信感を植え付け、しかも《力》を蓄える事に成功した。さらに“狂戦士”まで手の中に納める事ができたのだから、ジータ・バロムも満足するだろう……）

横たわる騎士達の屍を見下ろし、今後のローラントの混乱を想像

するとアゼリは込み上げてくる感情を抑え切れず肩を震わせる。
その表情は見る者を震い上がらせる邪気に満ちていた――。

ザインでの事件は、アルカディアを震撼させるには十分だった。
だが、王国側はあくまでも非を認めようとせず、冒険者達の反乱を
主張し事態の沈静化を図る。

しかし、この声明が王国の立場をさらに悪いものへと誘ってしま
う。

《魔導士討伐》における消極的な王国への不信感は相当強かった
のだ。

強制的な徴兵に重い重税、討伐軍に対する対応などによる国民の
不満は頂点に達する事になる。

そして。

生き延びた冒険者達の証言が国民の怒りに火をつけ、ついにロー
ラント王国に対する大規模な反乱が勃発してしまう……。

――これにより、アルカディアは更なる混乱に見舞われる事にな
る――

魔法陣

突き当たった先に金属質の扉が見える。人が利用するには少し大きすぎるくらいがあり、まるで行く手を塞ぐかの様な雰囲気を感じさせた。

この先に何かがある事は確かだろう。しかし、これまでの経緯から見てここにも何かしらの仕掛けがあるのではないかと思わずにいられない。募る警戒感から決して思慮深くないラムダでさえ思わず取っ手を握るのを躊躇ってしまう。

(……何をしてるんだ。もう開き直るしかないだろう！)

ラムダは高まる不安を抑える様に首を振って肩を激しく上下させる。体を動かす事で少しでも緊張を和らげようとしている様だった。アルベリヒの目にはその様子が精神的にかなり追い詰められている様に映る。滅多に見られないラムダの姿にアルベリヒは妙な胸騒ぎを覚えた。

(……精神的な疲労が蓄積しているみたいですね。ヤケになって無茶をしなければよいのですが……)

ここでは冷静さを失ってはならない。精神的な動揺を誘う仕掛けが随所に施されたこの遺跡で生き残るには、何事にも動じない胆力と強靱な精神力が必要不可欠なのだ。

アルベリヒは“敵”の術中に嵌りそうになっているラムダに歩み寄り、体を揺さぶるラムダの肩に触れながらアルベリヒは諭す様に優しく声をかけた。

「ラムダ、あまり考え込んでも仕方ないですよ。少し落ち着いてください」

自分の心を見透かした様なアルベリヒの言葉にラムダは思わずハッとする。

あまりにも変化の無い状況がラムダに精神的な疲労を蓄積させていた。強い警戒感を抱きつつも精神的な重圧から逃れようと無意識のうちに状況の変化を求め、それが気持ちを逸らせては思考を単純化させている事に気づいたのだ。

——もし、その状態で戦闘に突入してしまったら自身の力を十分に発揮する事は出来ないだろう。

何度もそれを戒めているのにも関わらず、一向にその正体を表さない遺跡にラムダの集中力は疲弊していた。

これこそが、この遺跡の真の罠なのかもしれない。

わかっていても術中に嵌ってしまう恐ろしく狡猾な罠だ、ラムダはひとつ呼吸を深く吸うと両手で頬を叩いた。

「……こんな状況が続けば、誰だって精神力が削られるわよ。わずかな隙が即致命的な状況に追い込むだろうこの遺跡では、一瞬たりとも気を抜く事なんて出来ないものね。しかし、これだけ精神的な重圧をかけ続けられたら、いざという時に何も出来なくなってしまう……それを認識していても、ここまでしつこいと頭がおかしくなっちゃうわ」

メレイは、ラムダの焦りにも似た心境を理解する事ができた。

以前、この遺跡を訪れた時はすぐに遺跡の番人の襲撃を受けたため、ここまで精神的に追い詰められる事はなかった。それなのに今回は番人の姿どころか“魔導”を連想させる脅威がない。まるで侵入者ごとにその姿を変えているかの様に、構造も仕掛けも著しく変化している。

もしかしたら、この遺跡は侵入者の“何か”に応じてその性質を変えているのかもしれない。ともすれば前回と今回の違いも納得できる。

メレイは遺跡の脅威を改めて感じた。

(……でも不思議ね。さっきまではあんなに恐怖に怯えていたのに、今は気にならなくなっている。極度の緊張に晒され続けたから、感覚が麻痺しちゃったのかしら?)

考えても答えなど出ない。メレイは目の前の事態に意識を戻した。アルベリヒに諭され正気を取り戻したラムダは、気を取り直して取っ手に手を伸ばすと意を決した様に勢いよく扉を開いて中へ飛び込んで行った。

——中に入ると、そこは広い造りになっていた。部屋全体が銀色の鈍い輝きを放っている。見たところ部屋を覆っているのは金属質のものの様だ。

少し奥にある床には魔法陣らしき紋様が刻まれており、おそらくそこが部屋の中央と思われる。

ラムダは今までとは違う雰囲気以身構える。後から入ってきたアルルも魔法陣を見て警戒感を強めた。

人の侵入を察知したからか、魔法陣は淡い光を発する。そして、誘う様にゆつくりと点滅しはじめた。

「……あれは転移魔法陣だ。しかし、あれから魔法力でない別の力も感じ取れる。これは“魔導”の力だ」

《古の魔導士》と対峙した時に感じた意志の力。アルルは魔法陣から感じる魔導の力に気を引き締める。

「あの先にリツシュがいるってわけか」

アルルの言葉にラムダはリツシュが近いところにいる事を確信し、剣を構えたまま魔法陣に近付く。

「おそらく、リツシュ殿はあの魔法陣でどこかへ移動しただろう」

…ラムダ、あまり近付いてはならん！ 転移してしまうぞ！
「え？」

そんな馬鹿な。魔法陣までまだ十歩以上離れているのだ。魔法陣に足を踏み入れていないのに転移魔法が発動するわけがない。

その考えがラムダの反応を遅らせた。

「まずい！ “力”が発動する！」

アルルは立ち止まるラムダに駆け出す。しかし、当のラムダはもちろんのことアルベリヒやメレイもアルルの言わんとする事が一瞬

理解できずにいた。

アルルがラムダの腕を掴んだ瞬間、魔法陣は急激に光を放つと二人の体を包み込み炸裂する様に弾け飛んだ……。

強烈な閃光が部屋全体に広がり、アルベリヒとメレイは一瞬にして視界を失いその場にしゃがみ込んでしまう。

しばらくして視界が戻った二人の先に、ラムダとアルルの姿は消えていた。

魔法陣から発せられていた光は消え失せ、部屋全体を覆う金属質の銀色の光だけが鈍い輝きを放っている。

「……非常にまずい事になりましたね……」

一瞬にして戦力を分断されてしまった。

何故、離れた位置から転移魔法が発動し二人を連れ去ったのか。現代の魔法技術では到底理解出来ない現象だった。

だが、この状況がいかに致命的であるかは十二分に理解できる。

二人は顔を見合わせるとこれこそが“罠”であると直感した。

突如、後方から邪悪な気配が発生する。

恐る恐る振り向くと、そこには人型の黒い霧が目をギラつかせていた――。

読み解く力

人の形を取った黒い靄状のものが漂う様に浮遊していた。

怨念にも似た邪気を撒き散らし、異様な輝きを宿した目がアルベリヒとメレイを捉える。

それは、まさに亡霊。悠久の時を経て蘇りし古代の賢人のなれ果てた姿がそこに在った。

殺意というよりも混沌とした狂気に染まっている様に見える。そのためか、絶望的といっても過言でない状況に晒されたにもかかわらずアルベリヒは冷静さを失わずに済んでいた。

（困りましたね……ここで“番人”が現れるなんて。しかし、殺気がないのは何故だ？ 侵入者を排除するのが役目じゃないのか？）

主の眠りを妨げる者である自分たちを前にして行動を止める“番人”にアルベリヒは不可解なものを感じる。

主の命を受け悠久の時を守護に費やしてきた彼ら。これまでに幾多の侵入者を排除してきたであろう。

その“番人”が侵入者を目の前にしてただ浮遊している事にアルベリヒは何らかの意図を感じてならなかった。

（——もしかして、魔導士が眠りから醒めたのか？ リツシュ？

……いや、操られているだろうリツシュにその様な事が出来るとは思えない。いったい、何が起こっているというのだろうか？）

アルベリヒは自分たちの置かれた状況を整理するも、何かに導かれる様にして魔導に関わっていく現実を理解が及ばない。

事態は思いも寄らない方向へ進んでいるのかもしれない。

そう思うとアルベリヒは不思議な事にこの絶望的な状況を客観的に見る事ができた。

「……ああ、どうすればいいの……」

隣で身を震わせながらメレイは嘆きを漏らす。

同じ魔術の使い手ゆえにその力量の差が彼女から希望を奪っていたのだ。

ギラギラと目を光らせ周囲を見回す。それに動向を探る様に見られない。

これまでの状況から考えてみて、彼らの目論見通りに動かされている。

ここにきて詰めを誤るとは思えない。やはり、遺跡内で何らかの動きがあったと判断せざるを得ないだろう。

アルベリヒはメレイの手を握ると自分の方へ引き寄せた。そして、“番人”に視線を向けたまま小さな声でメレイに耳打ちする。

「……メレイさん、諦めるのはまだ早いかもしれませんよ。どうやら状況は変わった様です。ここは下手に動かず静観した方が良いでしょう」

冷静な声がメレイの耳に入ってくる。その声にメレイは現実へ引き戻された。

「アルベリヒ」

握る手から伝わる自信。それが彼女の不安をかき消してくれる。

何らかの確証を得たのだろうか。

メレイはアルベリヒの腕にしがみつき、彼にすべてを委ねてみる事にした。

「メレイさん、大丈夫ですよ。“番人”が手出しする事はありません。もし攻撃する意志があったら私たちはすでに灰にされているはず……それが無いという事から、ある答えに辿り着く事が出来ます」
アルベリヒは断言する様な口調で言うとメレイに微笑みかける。
その笑みの真意がわからずメレイは困惑する。

しかし、この冷静沈着な男が何の根拠も無く憶測だけで語る人物では無いはず。これまでも彼は冷静な判断力で私たちを助けてくれたのだ。

信じよう。

メレイはアルベリヒの言葉に頷くと気を奮い立たせ、宙に漂う“番人”の動向を静かに見守った。

アルベリヒはこれまでに起きた事象をひとつずつ整理していた。以前と変わった遺跡の構造。

戦力を分散させる不可解な壁。

過去の犠牲者の出現。

精神状態を麻痺させる生きた罫。

想定外の範囲から発動する魔法陣。

どれを取っても精神に多大な影響を与えるものばかり。意識の外からくる現実にも誰かが影響を受け術中に嵌っている。

しかも危険に対して柔軟な対応力のある冒険者たちが、だ。

二重三重にも張り巡らせた罫。心の死角を突く事象の数々……あまりにも巧妙な罫を常に変化する状況に合わせて設置する事が出来るのか。

その人外の脅威を肌で感じる事の出来るラムダたちなら納得できるかもしれない。しかし、冒険者でないアルベリヒには魔導士と言えども未来を完全に予測する事が出来るとは到底思えなかった。

（私の想像が正しければ、魔導士はひとつの罫しか設置していないいや、これは罫ですらない！）

アルベリヒの中で確信に似た答えが導き出される。

おそらく、誰も思いつかない答え。

侵入者を防ぐという観点から考えるとこの罫はまったく意味を為さないものだったのだ。

（わかってみて、魔導士の偉大さが理解できた。この遺跡を作った者は“強き者の心理”をよく理解している）

アルベリヒは魔導士の真意を理解し、その叡智に畏敬の念を抱く。そして、メレイの耳元に顔を寄せて導き出した答えを囁いた……。

「……え？」

メレイはアルベリヒから告げられた答えに耳を疑った。

その言葉はあまりにも突拍子も無く、また現実として受け入れられるものではなかったのだ。

常人では思いつく事の出来ない答え。

常識では計り知れない魔導士の思惑にメレイは意識が混濁しそうになっていた。

（そんな……では、私たちが遺跡で襲われたのも、自分自身の弱さが招いた事だつていうの？）

アルベリヒの言葉が真実だとすれば、遺跡で起きたすべての事象は自分たちが招いた事となる。

到底納得できるものではないが、アルベリヒの語る魔導の力が本当ならばこれ以上の畏は無い。

仕掛けられている事に気付く事はおろか、遺跡に足を踏み入れた時点で術中に嵌っているなど想像できるはずもない。

“この遺跡の中では我々の無意識の意志を具現化できる様になっている”

アルベリヒのいう魔導の力とは“意志の具現化”だという。

その具現化能力を遺跡全体に付与したというのだ。

無意識に思った事が現実になる——遺跡、それも魔導士の遺跡な

ら無意識に脅威を感じる。そして、その脅威が現実になる事で更なる恐怖と絶望を生み出し自滅へと誘うという仕組みだ。

（無意識の意志だなんて、誰も対応できるわけないわ！ 不安を与えれば勝手に自滅する……これほど万人に対して有効な罠は無いわ）
恐るべきは無意識、本能的な部分に着目したところだ。

無限の可能性を秘める潜在的な部分を利用する事で、敵に一切の負荷を掛ける事無く己の力を付与、しかも万人に付与する事で事象の原因の特定を隠し内面に意識がいくのを防いでいる。

まさか自分が魔導の力を行使しているなど誰が思うというのだ。

（絶対的な意志力が無ければ、このカラクリに捕らわれる。この遺跡は己の意志力を試されるもの。魔導に触れる資格のある者だけがここを通り抜ける事が出来る様になっている）

メレイはこの遺跡を造った魔導士の真意を理解した。

（魔導とは決して触れてはならないもの。意志の具現化とは、世界を破滅させる両刃の剣なんだ。負の側面も持つ人間にはとても扱えるものじゃない。だから、彼らは姿を隠し歴史から魔導を消したのよ）

彼女の中で芽生えた魔導に対する危機感。常に己を律し続けなければ魔に取り込まれる両刃の剣を身を持って体感した事でメレイは自分たちが犯した罪の重さを悟った。

（あの時、父の遺跡探索を止めていれば……魔術師としての探求心に捕らわれ、私たちはすべてを手に入れた気になっていた。あの時に私だけが助かったのは父が私を救おうと強く願ったから……どうして、私はこの事を考えなかったのだろう。奇跡という一言で片付け、私は与えられた答えから目を背けてしまったんだ）

メレイは自分自身の心の弱さに胸を痛める。

あの時に自分自身と向き合えば、何もかも失わずに済んだかもしれない。村人たちも里を離れずに済んだかもしれない。

そう思うとメレイは申し訳ない気持ちで心が挫けそうになった。

「……メレイさん、そんなに悲しい目をしないでください」

アルベリヒはメレイの手を握りしめ、優しく諭す様に囁いた。

「苦しみを乗り越えた先に、希望はあると思います……って説教をする前にこの状況を何とかしましょうか」

笑みを浮かべながらアルベリヒはメレイの手を離し、一步前に踏み出すと両手を広げ“番人”に向かって口を開いた。

「救われぬ魂を持つ者よ、私の言葉を聞いてください。私たちは、あなたにもこの遺跡の主にも手出ししようとは思っていません。私たちはただ、ここに迷い込んでしまった仲間を助け出したいだけです。魔導の脅威は理解しました。この遺跡のカラクリも理解しました。ですから、ここは一旦引いてもらえないでしょうか。私たちは無駄な争いはしたくないのです」

アルベリヒは無防備とも取れる体勢で“番人”に訴えた。その姿にメレイは疑問を抱く。

何の根拠も無い説得。侵入者を排除する役目を持った“番人”が黙って引き下がるのだろうか。

しかし、この遺跡のカラクリを看破した頭腦の持ち主である彼が無謀な賭けに出るとは思えない。きっと何らかの考えがあって行っているのだろう。

メレイはアルベリヒの動向を静かに見守る事にした。

目の前を浮遊する“番人”は、床に降りる様に下降していくとそのまま床に染み入る様に溶け込んでいった。

「あつ」

メレイは突然の出来事に驚く。

まさか、アルベリヒの説得が成功するとは。

いったい何をしたのか。メレイには想像もつかなかった。

「アルベリヒ、いったい何をしたの？」

メレイは疑問を口にする。

侵入者を排除する役目を担う“番人”がこうもあっさりと引き下

がるのか。

この出来事は彼女の理解の範疇を超えていたのだ。

「簡単な事ですよ」

アルベリヒは振り返ると笑みを浮かべたまま言葉を続けた。

「私たちは、無意識の意志が具現化する事を知ったのですよ。ですから、戦いになれば私たちの助かりたいという意志が“番人”を追い払ってくれます。それを理解した“番人”は私たちが魔導を行使できる“訪問者”と認識したのです」

アルベリヒはメレイの手を取ると真剣な眼差しに変わる。

その瞳の奥に宿る慈愛の光がメレイの不安を掻き消してくれる。

「さあ、魔法陣の先に行ったラムダたちを追いましょう。彼らはまだ遺跡のカラクリに気付いていません」

メレイはアルベリヒの手を握りしめ、力強く頷くとラムダたちが転移した魔法陣へ歩を進める。

近づく魔法陣は光を放ち二人を包み込む。そして、光が炸裂する様に弾けると二人の姿は消えていた。

衝撃の光景

光に捕らわれ、体が浮遊する様な感覚に包まれた瞬間、視界が一気に弾け飛び風景が一変した。

先ほどの無機質な空間とは違い、壁は神秘的な光の輝きを放ち絵画の類が掛けられている。さらに室内の所々に今にも動き出しそうなほど細部まで彫り込まれた彫刻や透き通るほど高純度の白鉱石で造られた柱が設置されていた。

まるで宮殿の広間の様な豪華さ。王と呼ばれる者が所有を許される荘厳な佇まいを醸し出している。

ラムダはその圧倒的な雰囲気飲まれ、ただただ辺りを見回し感嘆の声を漏らしていた。

「ラムダ、大丈夫か？」

アルルは掴んだ手を引きラムダを自分の方へ引き寄せる。

ラムダは不意に現実に戻され己の不明を恥じ頭を掻いた。

「す、すいません」

バツの悪そうな表情で頭を下げるとすぐさま気を取り直し剣に手を伸ばす。そして、何があっても対処できる様に神経を集中する。

視界に映るものは絵画や彫刻といった美術品ばかり。豪華さだけが際立つこの部屋に心がざわめく。

「ラムダ、あそこにある鏡を見てみる！何か映っているぞ！」

アルルの緊迫した声に振り返るラムダ。

彼女の後方に視線を向けると、奥の壁に立て掛けられた大きな鏡が淡い光を放ち何かしらの情景を映し出していた。

——鏡に戦いの光景が映し出される。

一人の戦士が騎士と思われる者たちを次々と葬っている。

戦うというよりも虐殺といった方が正しいかもしれない。戦士がひと振りする事に騎士は断末魔の叫びを上げ血の海に沈む。

その形相は凄まじく、瞳に宿る狂気が直に伝わってきそうなほど怒りに満ちていた。

「ああっ」

ラムダは切り捨てられる騎士を見て悲鳴に似た声を上げる。

「なんてことだ……」

ラムダは目を固く閉じ、歯を食いしばり握り拳を震わせた。

その様子にアルルは悟る。

（あれはローラントの騎士だったのか）

おそらくローラントの騎士たちが敵と戦っているのだろう。だが、敵の圧倒的な戦闘力に為す術も無く葬られていた。

（……あれは悪魔ではなさそうだ。人間？ いや、あれが人間とは思えない。いったい何が起きているというのだ）

アルルは鏡に映る光景に奇妙な感覚を覚える。

何故か戦地に見覚えがあったのだ。

しかし、そこが戦闘に巻き込まれるとは思えない。アルルの記憶が正しければ、そこはローラントでも有数の軍事拠点。ローラント西部で最大の規模を誇るザインの街だったのだから……。

そのザインの街で戦闘が行われているという事は、戦況に大きな動きがあったと考えて間違いないだろう。

鏡に映る光景が現実とものとすれば、ジーダ・バロムの軍勢がローラントへ侵攻を開始、応戦するも苦戦を強いられていると推測できた。

ローラントの軍事力は南部に位置する軍事国家グランディノ帝国のそれに匹敵する。最近では騎士たちの素行や国の防衛重視の方針で国民の支持を失いつつあったが、それでも騎士団の集団戦術の巧みさは以前とさほど変わらなかったはず。

故にアルルはこの光景に目を疑わずにはいられない。しかし、苦悶に耐え目を伏せるラムダの様子から自分の推測は正しいと思わず

るを得なかった。

「ラムダ……」

いたたまれない気持ちで言葉を繋げられない。

仲間を失うのは辛い。しかも眼前でそれを見る事しか出来なければ、その心痛は計り知れないものになる。

マルク「ケラーノで味わった悲しみと無力感が甦る……アルルはラムダの苦しみが痛いほど理解できた。

言葉では癒せない。

アルルはうなだれるラムダの体を力強く抱き寄せる。

「——あつ」

その行動にラムダは短い声を上げ、アルルの方に視線を向ける。

アルルはラムダを抱擁すると優しく頭を撫でた。

包み込む様な優しさがラムダの心に染み込む。彼女の伝えたい思いがラムダの悲しみを溶かしてくれる。

「……ラムダ、悲しい時は泣いた方がいい。無理して我慢しないでいいんだ」

堪えようとするとかえって苦しさが増す。自身の経験から感情を抑える必要は無いと諭した。

——ラムダの肩が震える。

己の無力感、アルルの優しさが感情を解放する。

声にならない嗚咽が未知なる空間に静かに響いた。

「ありがとう」

落ち着きを取り戻したラムダは、アルルの気遣いに感謝するも気恥ずかしさで顔を上げる事が出来ずにいた。

女性の前で涙を流す——男として出してはならぬ弱さを見られた事にラムダは自己嫌悪する。

（こんな時に情けない姿を晒してしまうなんて……）

心の弱さを露呈した事で幻滅されてしまったのではないか。敬愛

する女剣士の顔をしかめる姿を想像し、ラムダはこの場から逃れた
い思いに駆られた。

「恥じる事はない。仲間を失う悲しみは大きいからだ。その涙は、
それだけ仲間を思っていたという証。私はそれを恥ずべきものとは
思わない」

アルルはラムダの不安を取り除こうと断言した。

その純真な思いからくる涙は、決して男の尊厳を傷つけるもので
はない。

逆にラムダの優しさに尊敬の念を覚えるくらいだ。

「ラムダ、私はその正直なところを尊敬する。だから、下を向くな。
前を見るんだ」

そう言っただけでアルルはラムダの頬に両手を挟み顔を持ち上げる。

二人の視線が合う。その瞳に映る顔に生気が戻る。

「——ありがとう」

今度はしっかりと目を見据えて感謝の言葉を口にした。

二人の絆がまたひとつ強くなる。

お互いにそれを感じると自然と笑顔に変わった。

鏡に映し出された光景に再び目を向ける。

遠方の状況を映す鏡は遺跡の外を知る唯一の手段。二人は外の状
況を把握しようと気を取り直して食い入る様に見つめた。

脱出

鏡に映し出された光景は、現実のものとは思えないほどの凄惨さで満ちていた。

打ち壊された家屋の数々。火矢によるものか、燃え盛る炎が空を焦がし辺りを赤く照らす。

黒煙に捲かれ悶え苦しむ住人たちは灼ける空気に喉をかきむしり、火の海から逃れようと息も絶え絶えに血に染まる大地をさまよい歩いていた。

火勢の衰えた場所では、身を焼かれ朽ち果てた住人たちの成れ果てた姿が大地を横たわり、死臭を嗅ぎつけた野鳥や獣がその肉塊を漁っている。

それらはまさしく戦場で見られる光景——破壊の後の不気味な静寂が支配する世界。

生ける者すべてを絶やさんとする暴虐の爪跡であった。

映るものすべてに戦の痕跡があり、ラムダとアルルはその現実を受け入れるしかなかった。

見覚えのある紋章にラムダはザインが壊滅した事実を確信し、混乱しそうな心を必死で抑え敵の脅威を胸に刻む。

ザインに駐留する騎士団の戦力はローラント西部で最大を誇っている。それを瞬く間に打ち破ったその力にラムダはこの戦いの過酷さを改めて知った。

「ザインが落ちるなんて……ジード・バロムの軍勢はこれほどの戦力を保持していたのか。西の拠点を奪われたのは痛いな……」

ラムダはそう言う唇を噛みしめる。

元騎士だった事からザインの敗北による不利が相当のものである

と理解できたからだ。

地理的にローラント王国は中央部に多くの穀倉地帯があり、それを囲む様に小さな街が点在し街道を経て都市に繋がる構造になっていた。

これは単に土地の特性だけを見たわけではなく、防衛時に兵糧を確保しやすくする事で長期戦を優位に進める戦略的観点も考慮されての事である。

そのため、この地を落とされると内部への侵攻を容易なものになってしまう。何故なら穀倉地帯があるため中央部には軍事拠点が無く、また兵糧庫も多数あるため火攻めを受ければ兵糧を失い、大軍を長期に維持できなくなるためだ。

それを防ぐためにザインには三つの騎士団を駐留させ、万が一の事態に遭遇しない様に万全の守備を敷いていたのだ。

この敗北はローラントにとって重大な危機だ。

ただでさえ北のマルク・ケラーノ、南のトルネ・パロを押さえられ戦力を分散しなければならなくなっている。そこに西の拠点であるザインを失えば、ローラントの防衛線はギリギリのところまで後退してしまう恐れが生じてくる。

そうなると分散された戦力が孤立する危険が出てきて、侵攻してくる敵の進軍を防ぐ事が出来なくなり、その結果ローラント王国はジード・バロムの軍門に降るしかなくなる。

もしそうなってしまうとリンデン大陸からの援助も無くなり、また援軍の上陸も防がれアルカディアは完全に孤立する事になる。

すなわち、アルカディアの征服が決まってしまう事を意味するのだ。

悪い思考がラムダの頭を埋め尽くす。

思慮深くないラムダでさえ容易に想像できる暗い未来。

隣で思案に耽るアルルも同じ答えを導き出していた。

（このままではローラントは滅びてしまう。一刻も早くリズレンに行かなければ……あの千年王国なら、きっとこの状況を打開する術を持っているはず。その力をどうにかして借りねば……）

魔導大戦を生き抜いたリズレン皇国。リザードマンの支配するこの千年王国には必ず魔導に対抗する術があるはず。

自国防衛にのみ軍を動かさず、最低限の交易しか許さぬ閉ざされた未知なる国。

かの国の協力を得なければアルカディアの未来は無い。

「ラムダ、もう行こう。早くリツシュ殿を見つけ出しリズレンに向かおう」

アルルは鏡に背を向けラムダを促す。

「あ、そうだった！ 早くリツシュを探さなくてはっ」

鏡に映し出された光景にラムダは遺跡に來た目的を忘れそうになっていた。

両手で頬を叩き、気を引き締めるとラムダはアルルの方に向き直る。

「さあ、行きましょう」

そう言ってラムダは鏡とは逆の方向へ歩き出した。アルルもその後が続く。

豪華な調度品の数々を尻目に突き進むと突き当たりに金属質の扉を発見する。

「この向こう側にリツシュはいるのか？」

誰に言うでもなく独り言を呟くとラムダは取っ手に手を伸ばす。

冷たい金属の感触に一瞬躊躇いを覚えるも意を決して取っ手を捻ると静かに扉を開いた。

——広い部屋の奥に座り込む何者かの姿を捉えた。

ローブを身にまとい微動だにせず宙を眺めるその表情は心ここに

在らずといった様相である。

「リッシュ！」

「リッシュ殿！」

二人は佇む者の正体に気づきその名を叫んだ。そして、辺りを警戒しつつもリッシュの元へ駆けつける。

「リッシュ、大丈夫か！？ リッ——ええっ！？」

ラムダはリッシュの変化に驚きの声を上げる。

その目は虚ろで何も映していなかった。口をだらしく開き涎を垂らし宙を見つめる。

まるで生きた屍の様に無機質な表情。

いったい何があったのだ。余程の“何か”があったのか？

二人は顔を見合わせると何の反応も見せないリッシュの両脇を抱え、ゆっくり立ち上がらせるとその場を一旦離れる事にした。

「——ラムダ！」

リッシュの脇を抱え歩いていると法衣をまとった青年が駆けつけてきた。その後をローブの女が続く。

アルベリヒとメレイだった。

「二人とも無事だったか！」

ラムダは二人を確認すると笑顔で迎える。

「リッシュさんが見つかったんですね」

アルベリヒはリッシュの姿を見て安堵の表情を浮かべる。

「ん？」

しかし、リッシュの態度を見てすぐに表情を固くした。メレイもその異様な雰囲気顔に顔を曇らせる。

まだ素直に喜べる状況には程遠い事を悟ったのだ。

「——というわけで私たちは難を逃れたのです。ですから、もう“

番人”に狙われる事はありません」

離れてからの経緯を説明すると、アルベリヒはリツシュに目を向ける。

「おそらく、リツシュさんは魔導士と遭遇してしまったのではないのでしょうか？　それで記憶を消され、あの場所に放置されたのでは……」

リツシュの様子からアルベリヒはその変貌の原因を推測する。

自我を失い赤子の様な姿に成り果てたリツシュ。精神や人格を崩壊させるには相当の手段と時間が必要になる。

それを短い時間で行ったのだから自ずとその答えに辿り着く。

「そうだな」

その答えにアルルは頷く。

（やはり魔導士の仕業か）

精神の崩壊というよりも完全な記憶の消去。今のリツシュは赤子に近い状態だった。

これ以上この旅にリツシュを連れて行くわけにはいかない。

精神や記憶の回復自体は高位の神聖魔法で治癒する事ができる。

ただ完全に回復させるには長い年月を要するのだが。

それ故にアルルはリツシュの事よりも他にも魔導士が存在するという事実の方が深刻な問題に思えた。

（ジータ・バロムと組む魔導士とは違うだろう。だが、我々の味方であるとは考えられない。敵にならない事を祈るしかないか……）

考えるだけ無駄かもしれない。

彼らの思惑は常人では及びもつかないものだ。

とにかく今はこの遺跡から脱出し、一刻も早くリズレンへ向かわねばならない。

アルルは迫り来る危機を乗り越えるため、危険が迫ろうとも前に突き進まなければならぬと己に言い聞かせた。

アルベリヒの言う通り、行く手を阻むものは何もなかった。

今まで散々苦しめられてきた精神的な重圧や障害も無く、リッシユを連れた一行は来た時の半分以上の時間で出口に辿り着いた。

再出発

遺跡を出ると緩やかな風が疲れた体を優しく撫でた。日の光が辺りを照らし、澄み渡る空の青さが皆に開放感を与える。

少し離れた場所に待機していた石の巨人が一行に気づき、巨体を揺らしながら近づき出迎えてくれた。

「シーマ、リツシュを乗せてあげて」

メレイは石の巨人に命じるとラムダとアルルに支えられたリツシュに目を向ける。

石の巨人は虚空を見つめるリツシュに手を伸ばすと丁寧に体を持ち上げ掌に乗せた。

「アルベリヒも乗るといいわ。体、きついでしょう？」

疲労困憊の様子アルベリヒにメレイは救いの声をかける。

「……ありがとうございます」

アルベリヒはその気遣いに感謝すると開いている掌に乗り込む。実際に戦闘に参加したわけではなかったが、非戦闘員であるアルベリヒにとって今回の遺跡侵入は肉体的にかなり辛いものだった。

それもそのはず、遺跡や迷宮などといった場所では、未知なるものへの警戒・精神的な重圧により時間の感覚が完全に麻痺してしまう。これは常に緊張を強いられるため、体内時計が狂ってしまうからだ。

今回の遺跡侵入も、感覚的には半日ぐらいの探索だったが実際には三日も経っていた。

つまり、一行は三日間不眠不休で探索し続けていた事になる。

メレイはアルベリヒの疲労具合を察し、その軟弱さを非難する事なく石の巨人に乗る様勧めたのだった。

集落に着いた頃、日が落ち星が瞬きはじめていた。

リツシュを空き家のベッドへ寝かせた後、四人は広場に集まり焚き火を囲って暖をとる。

「——リツシュは麓の村に連れて行った方がいいわね。旅を続ける事も出来ないし、かと言ってローラントへ戻る事も出来ないわ……」
メレイは木の枝で地面をいじりながら言葉を続ける。

「それに、あそこなら大きな街にも近いし教会もある。そこで治療に専念するといいわね」

そう言うともレイは焚き火に木の枝を放り投げた。

皆、その言葉に頷く。

リツシュを旅に連れて行く事は出来ない。

戦力の低下は免れないが、この状態のまま連れて行っても足手まといにしなければ危険が増すだけだ。

一刻も早くリズレンへ向かわねばならない一行にとって選択肢は一つしかなかった。

リツシュはメレイの提案に従い麓の村で治療する事になった。里から下りた住人たちも居るのでリツシュの状態に疑いの目を向ける事は無いだろう。

そこで体力を回復させ大きな街へ移動すればリツシュの安全は確保できる。

「……じゃあ、リツシュは私が責任を持って麓の村に連れて行くから、みんなは心配しないで目的地へ向かってね」

メレイは焚き火に木の枝を足し、勢いを増す炎の揺らめきに視線を向けたまま言葉を続けた。

「短い間だったけど、あなたたちのおかげで“番人”の脅威から逃れる術を知る事ができた。これで里を下りた者も戻って来てくれる

わ……本当にありがとう。故郷を捨てずに済んで……本当に、本当によかった——」

心の底から安堵した表情。張り詰めた気が抜けたのか、メレイの目元にはうつすらと光るものが滲み出てくる。

ラムダはそれを感慨深い表情で見つめ、里の復興を心から願った。

翌朝。

久しぶりの睡眠をとった一行は、陽の光が昇る前に旅支度を済ませリズレンを目指し歩を進めた。

ほんの短い付き合いだった仲間に別れを告げ、自らに課した使命を果たすべく先の見えない道を行く。

その行動が本当に正しいのか。また間に合うのか。

それは誰も知らない。

その時にならなければ、その答えは出ないのだ。

心に潜む疑念は一抹の不安を生じさせる。しかし、彼らにとってそれ自体は些細な問題だ。

自らの手で切り開かなければ、未来を紡ぐ事が出来ないのだから。故に彼らは愚直なまでに己を信じ突き進むのだった——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2216a/>

クロムワイズ物語～アルカディアの光と影～

2010年10月8日13時03分発行